

茨城県教育財団文化財調査報告第334集

上野古屋敷遺跡 4

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ

平成 22 年 3 月

独立行政法人都市再生機構茨城地域支社
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第334集

うえ の ふる や しき
上野古屋敷遺跡 4

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ

平成 22 年 3 月

独立行政法人都市再生機構茨城地域支社
財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、つくば市を日本における科学技術の研究開発の中核都市として、さらには国際交流の拠点としてふさわしい街にすることを目指して整備を進めております。

この新しい街づくりの一環として、つくば市と独立行政法人都市再生機構茨城地域支社では、市と首都圏を直結する「つくばエクスプレス」の整備とその沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業を計画的に推進しています。

しかしながら、この事業地内には埋蔵文化財包蔵地である上野古屋敷遺跡が所在することから、これを記録保存の方法により保護する必要があるため、当財団が独立行政法人都市再生機構茨城地域支社から開発区域内における埋蔵文化財発掘調査事業の委託を受け、平成12年度から平成13年度に上野古屋敷遺跡1区、平成18年度に2～4区、平成19年度に5区及び6区の一部の発掘調査を実施しました。その成果は既に『文化財調査報告』第285・307・324集として刊行したところです。

本書は、平成19・20年度に調査を実施した上野古屋敷遺跡6区の成果を収録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査の実施から本書の刊行に至るまで、委託者であります独立行政法人都市再生機構茨城地域支社から多大なご協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、ご協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成22年3月

財団法人茨城県教育財団
理事長 稲葉 節生

例 言

1 本書は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成19年9月1日から12月31日、平成20年11月1日から12月31日まで発掘調査を実施した、茨城県つくば市大字上野字西久保439番地ほかに所在する上野古屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調 査 平成19年9月1日～12月31日

平成20年11月1日～12月31日

整 理 平成21年4月1日～7月31日

3 当遺跡の発掘調査は、平成19年度が調査課長瓦吹堅、平成20年度が調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。

平成19年度

首席調査員兼班長	三谷 正	平成19年9月1日～12月31日
主任調査員	寺内久永	平成19年9月1日～11月30日
主任調査員	柴山正広	平成19年10月1日～12月31日
主任調査員	花見勝博	平成19年12月1日～12月31日
副主任調査員	櫻井完介	平成19年9月1日～9月30日
調査員	菊池直哉	平成19年9月1日～9月30日
調査員	中村博子	平成19年10月1日～12月31日

平成20年度

首席調査員兼班長	三谷 正	平成20年11月1日～12月31日
主任調査員	市村俊英	平成20年12月1日～12月31日
主任調査員	櫻井完介	平成20年11月1日～12月31日
調査員	鹿島直樹	平成20年11月1日～12月31日

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、以下の者が担当した。

主任調査員 櫻井完介

調査員 江原美奈子

5 本書の執筆分担は、下記のとおりである。

櫻井完介 第3章第3・4節

江原美奈子 第1～3章第2節

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし、 $X = +12,880\text{m}$ 、 $Y = +26,080\text{m}$ の交点を基準点(A 1 a1)とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を()を付して併記した。

3 遺構・遺物・土層の実測図、一覧表、遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 S B - 掘立柱建物跡 U P - 地下式坑 S D - 溝跡 S E - 井戸跡

S F - 道路跡 S K - 土坑 P G - ピット群 S A - 柵跡

遺物 P - 土器・陶器・磁器 T P - 拓本記録土器 D P - 土製品 Q - 石器・石製品 M - 金属製品

B - 馬歯

土層 K - 攪乱

4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

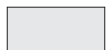
5 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

6 遺構・遺物実測図の縮尺は、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1・800分の1、遺構実測図は原則として60分の1で掲載した。

(2) 遺物実測図は原則として3分の1で掲載した。種類や大きさにより異なる場合があり、それらについては個々に縮尺を表示した。

(3) 遺構及び遺物の実測図中の表示は次のとおりである。



施釉・焼土



繊維土器断面



煤・油煙

●土器・陶器

7 遺物観察表及び遺構一覧表の作成方法は、次のとおりである。

(1) 遺物番号は通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

(2) 計測値の単位はcm及びgで示した。

(3) 遺物観察表及び遺構一覧表とも()は現存値、[]は推定値であることを示している。

(4) 備考欄には、土器の現存率及び写真図版番号を記した。

8 「主軸」については、地下式坑は竪坑と主室を通した軸線、火葬土坑は開口部の長軸、その他の遺構については長軸(径)を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。

9 遺構番号については、各遺構毎に既調査時の最終番号の次から付した。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	4
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	13
1 縄文時代の遺構と遺物	13
陥し穴	13
2 中世の遺構と遺物	16
(1) 掘立柱建物跡	16
(2) 地下式坑	22
(3) 井戸跡	31
(4) 火葬土坑	33
(5) 土坑	34
(6) 溝跡	44
(7) 堀跡	60
(8) 道路跡	64
(9) 柵跡	68
3 その他の遺構と遺物	68
(1) 井戸跡	69
(2) 土坑	70
(3) 溝跡	85
(4) ピット群	87
(5) 畝状遺構	99
(6) 埋没谷	99
(7) 遺構外出土遺物	100
第4節 まとめ	103
写真図版	PL 1 ~ PL18
抄 録	

うえのふるやしきいせき がいよう 上野古屋敷遺跡の概要



遺跡の位置と調査の目的

上野古屋敷遺跡は、つくば市と土浦市の境を流れる桜川右岸の台地上に位置している旧石器時代から近世までの複合遺跡です。今回は「つくばエクスプレス」沿線開発関連の土地区画整理事業にともない、遺跡の内容を記録して保存するため、茨城県教育財団が発掘調査を行いました。

調査の内容

今回の調査区は遺跡全体からみると南東部にあたり、縄文時代の陥し穴5基のほか、15・16世紀代の掘立柱建物跡5棟、地下式坑9基、井戸跡1基、火葬土坑1基、土坑15基、溝跡13条、堀跡1条などが確認できました。

堀は台地を横切るように長大で、中央部では、土を掘り残した土橋が確認できました。また、堀の北東側では、畑作地であったとみられる畝状遺構が確認されました。

出土遺物は、中世に使われていた瓶や灯明皿、香炉などが見つかりました。これらの遺物から、花を供え、火をともし、香を焚くというような仏教とのかかわりが推定され、「堂ノ前」や「勢至前」という今も残る小字名からも仏堂があったことが考えられます。



北東方向から遺跡を望む



古銭が出土しています。中国のお金で、道路跡や地下式坑から4点みつけられました。



電気がなかった時代は、絵のように、油やろうソクに火をつけて明かりをともしました。



現在のお墓、または倉庫と考えられている地下室です。



昔の人々が行き来した道路跡です。道路の表面は、農家の土間のように硬く踏みしめられています。

調査の成果

遺跡の北東部は、縄文時代から平安時代に集落が営まれていた区域であることが確認できました。中央部は、溝で区画され、戦国時代に佐竹氏・多賀谷氏・真壁氏や越後の上杉謙信、小田原の北条氏らと抗争を繰り返した小田氏との関係が深い武士たちの屋敷域であり、周辺には墓域が3か所あることが分かりました。第1号堀跡より南側では、生活の跡があまり見られないことから、中世の集落の南側を区画した可能性があります。今回の調査で、中世には南西部が墓域や耕作地として利用されていた様子を明らかにすることができました。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

つくば市は、世界に開かれた国際交流の中心、世界の科学技術をリードする研究開発の拠点として、21世紀の新しい街づくりを進めている。その一環として取り組んでいるのが、2005年8月に開業した「つくばエクスプレス」に伴う沿線の開発である。中根・金田台地区については、住宅・都市整備公団つくば開発局（平成9年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に、平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に、平成16年7月から独立行政法人都市再生機構茨城地域支社に名称を変更）を事業主体として、土地区画整理事業を進めている。

平成6年11月18日、住宅・都市整備公団つくば開発局長から茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。これを受けて茨城県教育委員会は平成7年度に現地踏査を実施した。さらに、平成11年8月10～12日、9月30日、11月26・29・30日、12月1・15日、平成12年1月14・17～19日に試掘調査をそれぞれ実施し、遺跡の所在を確認した。平成12年2月15日、茨城県教育委員会教育長は、都市基盤整備公団茨城地域支社長あてに、事業地内に上野古屋敷遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成12年3月21日、都市基盤整備公団茨城地域支社長から茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3の第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘についての通知が提出された。茨城県教育委員会教育長は、計画変更による現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、都市基盤整備公団茨城地域支社長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成12年3月23日、都市基盤整備公団茨城地域支社長から、茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書が提出された。平成12年3月24日、茨城県教育委員会教育長は、都市基盤整備公団茨城地域支社長あてに上野古屋敷遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、都市基盤整備公団茨城地域支社長から上野古屋敷遺跡埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成12年7月1日から10月31日まで第1次調査、平成13年4月1日から平成14年3月31日まで第2次調査を実施した。

平成16年6月28日、茨城県教育委員会は上野古屋敷遺跡の試掘調査を再度実施した。平成16年7月5日、茨城県教育委員会教育長は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに事業地内に上野古屋敷遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成18年2月24日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書が提出された。平成18年2月24日、茨城県教育委員会教育長は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに上野古屋敷遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から埋蔵文化財発掘調査事業につい

て委託を受け、平成18年9月1日から平成19年3月31日まで第3次調査、平成19年9月1日から平成19年12月31日まで第4次調査、平成20年11月1日から平成20年12月31日まで第5次調査を実施した。なお、当遺跡の遺構が調査区南東部側に延びていることが確認されたため、茨城県教育委員会は平成21年1月7～21日まで補足調査を行った。

第2節 調査経過

上野古屋敷遺跡の調査は、第4次調査が4か月、第5次調査が2か月、延べ6か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

期間 工程	平成19年	10月	11月	12月
	9月			
調査準備 表土除去 遺構確認	■			
遺構調査	■			
遺物洗浄 注記作業 写真整理	■			
補足調査 撤 収				■

期間 工程	平成20年	12月
	11月	
調査準備 表土除去 遺構確認	■	
遺構調査	■	
遺物洗浄 注記作業 写真整理	■	
補足調査 撤 収		■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

上野古屋敷遺跡は茨城県つくば市大字上野字西久保439番地ほかに所在している。

つくば市は茨城県の南西部に位置し、東方約5kmには霞ヶ浦、北端には筑波山がある。つくば市域の地勢は、筑波山の南西麓を南下する桜川の低地と、市の西側を南下する小貝川の低地及びそれらに挟まれた標高25～26mのほぼ平坦な筑波・稲敷台地からなっている。この台地には、花室川、蓮沼川、東谷田川、西谷田川など中小河川が南流して、台地縁部を樹枝状に開析している。そのため、谷津や低地が南北に細長く発達し（第1図）、北から南に細長く延びる舌状台地が形成されている。桜川によって大きく開析された流域には、標高約5mの沖積低地が形成され、台地との標高差は約20mである。

筑波・稲敷台地は、千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部であり、地質的には、新生代第四紀洪積世に形成された地層が堆積している。下層は成田層及び竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体をなし、その上部に板橋層または常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層、さらにその上部に関東ローム層が堆積し、最上部は腐植土層となっている¹⁾。関東ローム層は、新期ロームに属し、武蔵野ローム、立川ロームに比定され、軽石層の分布をみると、富士・箱根火山群の活動に由来するものと考えられる。

当遺跡は、つくば市の東部（旧新治郡桜村）、桜川右岸の標高25～28mの舌状台地上に立地している。台地は長さ500m、幅250mで、北西側と東側に幅の狭い支谷が入り込み、その低位面との比高は約10mである。支谷を挟んだ約100m北西の台地上には上野陣場遺跡、約1km南西の台地上には柴崎遺跡が所在している。

当遺跡とその周辺の土地利用の現状は、台地縁辺部の一部が雑木林・杉林のほか、台地上は主に畑地として利用されている。また、遺跡の位置する舌状台地を挟むように入り込む支谷は水田または休耕田であり、桜川流域の低地は水田として利用されている。

第2節 歴史的環境

上野古屋敷遺跡は縄文時代前期、古墳時代前・中期及び中世・近世を中心とした旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。ここでは、桜川と花室川流域の同時代の遺跡を中心に分布の概要について述べる。

旧石器時代の遺跡数は他の時代と比べて極めて少ない。10か所の石器集中地点が確認され、3か所の石器集中地点からナイフ形石器、搔器、楔形石器、尖頭器、石核、石刃などが多数出土した花室川左岸の東岡中原遺跡²⁾〈57〉のほか、花室川左岸の柴崎遺跡³⁾〈2〉、蓮沼川左岸の荻間神田遺跡⁴⁾などからナイフ形石器や尖頭器が出土している。

縄文時代の遺跡は、多数確認されている。桜川右岸では柴崎遺跡（早期～前期、後期）、上野天神遺跡（中期）〈5〉、花室遺跡（中期～晩期）〈50〉、金田西坪B遺跡（中期～晩期）〈59〉、上境旭台貝塚（後期～晩期）〈74〉、中根中谷津遺跡⁵⁾（後期～晩期）〈73〉などがあり、下流域には国指定史跡の土浦市上高津貝塚がある⁶⁾。

弥生時代の遺跡は他の時代と比べて少なく、隣接する上野陣場遺跡⁷⁾〈4〉や、北西1.5kmに位置している玉取向山遺跡⁸⁾で集落跡が確認されているほか数か所である。

古墳時代の遺跡は、当流域では61遺跡が確認されている。桜川右岸では、当遺跡と谷津を挟んで北西に位置

している上野陣場遺跡で、前期の小集落と後期の大集落が確認されている。また、後期の集落が確認されている柴崎遺跡、中期の集落跡が確認されている東岡中原遺跡のほか、栗原中台遺跡〈14〉、栗原大山遺跡〈10〉、上境作ノ内遺跡〈80〉などの包蔵地が数多く存在している。古墳は、当遺跡の北西に当地域最大の全長80mの前方後円墳である上野天神塚古墳〈6〉や上野定使古墳群〈7〉が存在している。この他、栗原愛宕塚古墳〈11〉、栗原十日塚古墳〈9〉をはじめ、桜川右岸台地縁辺部に玉取古墳群、円筒埴輪・人物埴輪・動物埴輪が出土した上境滝ノ台古墳群〈77〉、埴輪片・石棺破片が確認された横町古墳群〈72〉、前方後円墳2基・円墳1基から構成される松塚古墳群〈36〉などが知られている⁹⁾。これらの古墳のうち上野天神塚古墳が前期古墳である以外は、いずれも後期古墳である。

奈良・平安時代の当該地は、河内郡菅田郷に属し、北は筑波郡に接している。12世紀には田中の庄に属していた。菅田郷の郷域は、『新編常陸国誌』によれば、現在のつくば市松塚を東端とし、横町、中根、金田、上野、上境、柴崎、東岡、妻木、さらに花室川を越えて学園都市の中央部である吾妻、天久保を経て、荊間、大橋、新井、柳橋と蓮沼川に沿って南西へ広がり、大白裕、小白裕を西限とした地域に比定している¹⁰⁾。この地域における奈良・平安時代の遺跡は41か所確認されているが、蓮沼川流域は希薄で、桜川と花室川に挟まれた中根、金田を中心とする台地上に集中している。すなわち、当遺跡の南約2kmに位置し、国指定史跡である金田官衙遺跡(金田西遺跡〈63〉・金田西坪A遺跡〈60〉・金田西坪B遺跡)、九重東岡廃寺〈61〉を中心として、約4km四方に密集している。金田西坪A遺跡は従来から河内郡衙の正倉跡と推定されていたが、平成14年に金田西・金田西坪B遺跡及び九重東岡廃寺の確認調査を実施したところ、多数の掘立柱建物跡等が確認され、河内郡家の郡庁院、正倉院及び関連建物群であることが明らかになった¹¹⁾。九重東岡廃寺は、礎石、瓦塔、瓦、蔵骨器などが出土しており、確認調査で基壇の一部と溝、堂宇と想定される掘立柱建物跡が検出されているが、寺域や伽藍配置等については不明である¹²⁾。

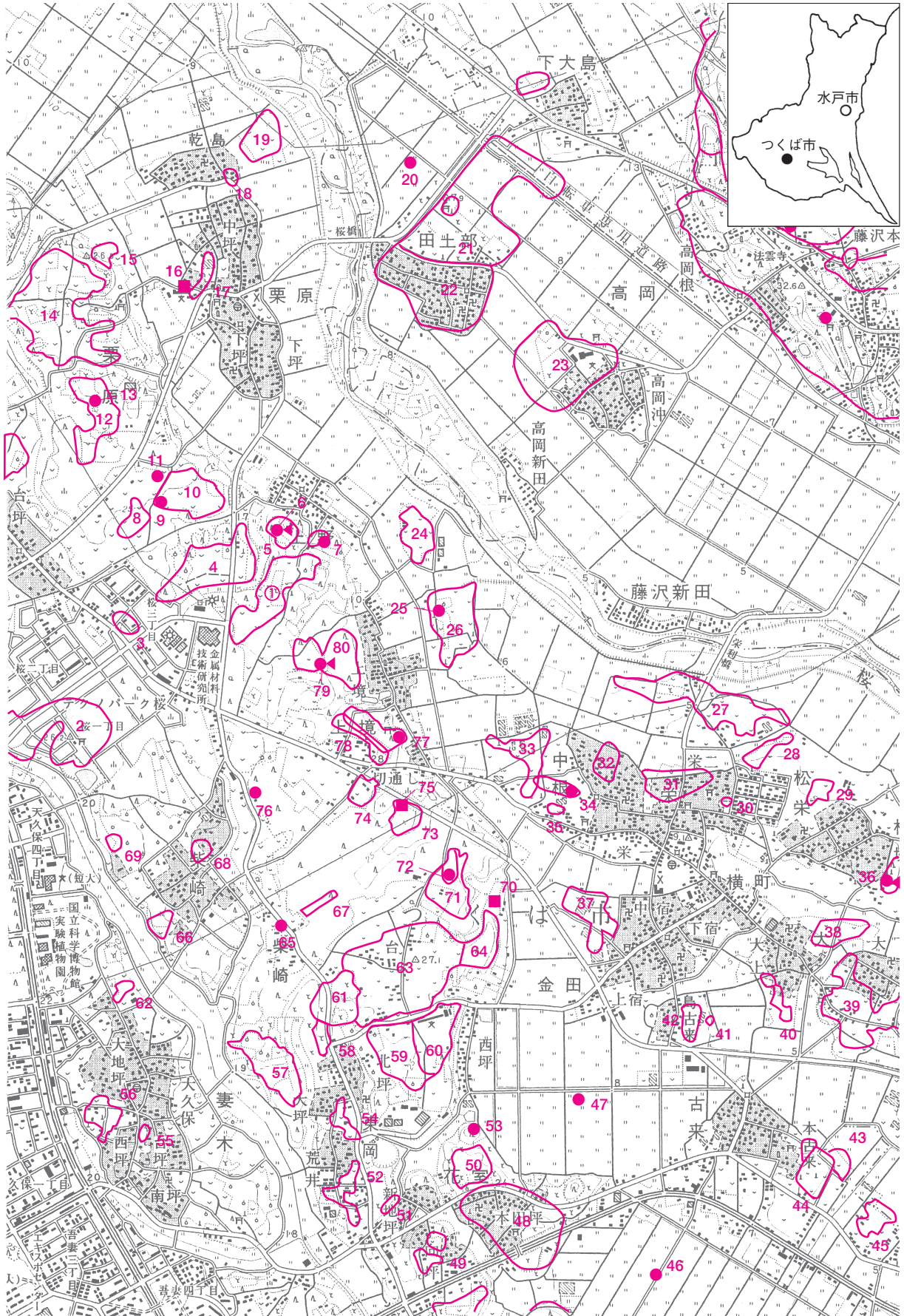
中世・近世以降の遺跡は、数多く確認され、中世は54遺跡、近世は50遺跡に及んでいる¹³⁾。当遺跡の南西約1kmに位置している柴崎遺跡では、12～13世紀の方形堅穴遺構が95基確認され、中世の集落跡と想定されている。また、栗原古塚遺跡〈17〉、栗原沼向遺跡〈19〉、栗原白旗遺跡、栄土器屋遺跡〈31〉などの包蔵地も確認されており、栄土器屋遺跡の試掘調査では13～16世紀に渡る土師質土器が多数出土している¹⁴⁾。これら以外に城館跡も多く、桜川右岸には方穂故城跡、柴崎片岡上館跡〈68〉、金田城跡〈64〉、花室城跡〈48〉、上ノ室城跡があり、桜川左岸には小田氏の居城であった国指定史跡小田城跡、田土部館跡〈22〉などが位置している。仏教関連遺跡としては、筑波山の南、三村山麓一帯に中世寺院群が存在しており、つくば市三村山清冷院極楽寺跡には、13世紀半ば、大和の高僧忍性が来住して、布教に努めたと伝えられている¹⁵⁾。当地域は鎌倉時代から室町時代にかけては小田氏、戦国時代においては小田氏と佐竹氏の支配下となり、中世末まで上野地区は上境・中根・土器屋・松塚・横町・柴崎地区で一郷を構成し、筑波郡と境を接することから境郷とも呼ばれていた。江戸時代は上野・栗原地区は堀氏玉取藩の知行地であったが、旧桜村の多くは土浦藩に属することになり、明治4年(1871年)の廃藩置県に至っている。

当該地は当遺跡の名称「上野古屋敷」が示すように、現在のつくば市大字上野地区の集落が中世後半に所在したと言われている故地であり、遺跡内に小字で「古屋敷」の地番が残るところである。この上野地区の南東に隣接する上境地区にも、桜川沿いの微高地に小字で「古屋敷」の地名が残る区域があり、上境古屋敷遺跡〈26〉として『茨城県遺跡地図』¹⁶⁾に登録されている。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1中の該当遺跡番号と同じである。なお、本章は、財団報告第307集を基にし、若干加筆したものである。

註

- 1) 大森昌衛・蜂須紀夫「茨城の地質をめぐって」『日曜の地学』8 築地書館 1979年9月
- 2) a 成島一也「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 中原遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第155集 2000年3月
b 成島一也・宮田和男「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 中原遺跡2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第159集 2000年3月
c 白田正子・高野節夫・仲村浩一郎・島田和宏「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 中原遺跡3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集 2001年3月
d 駒澤悦郎「東岡中原遺跡4 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第252集 2004年3月
- 3) a 土生朗治「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ) 柴崎遺跡Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第72集 1992年3月
b 萩野谷悟「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ) 柴崎遺跡Ⅱ区・Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第93集 1994年9月
- 4) a 成島一也「(仮称)葛城築特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 神田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第121集 1997年3月
b 長岡正雄「(仮称)葛城築特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 神田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第134集 1998年3月
- 5) 川村満博「(仮称)中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 中根中谷津遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第139集 1998年9月
- 6) 佐藤孝雄・大内千年編『国指定史跡上高津貝塚A地点-史跡整備に伴う発掘調査報告書-』土浦市教育委員会 1994年3月
- 7) 川上直登・長谷川聡・大塚雅昭「上野陣場遺跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第182集 2002年3月
- 8) a 石橋充・関口友紀「玉取遺跡-火葬場建設に伴う発掘調査報告-」つくば市教育委員会 2000年3月
b 奥沢哲也「玉取向山遺跡 県立つくば養護学校(仮称)整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第263集 2006年3月
- 9) 桜村史編さん委員会『桜村史 上巻・下巻』桜村教育委員会 1982年3月
- 10) 中山信名著 栗田寛補訂『新編常陸国誌』宮崎報恩会版 崙書房 1978年12月
- 11) 白田正子「金田西遺跡 金田西坪B遺跡 九重東岡廃寺 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第209集 2003年3月
- 12) a 九重廃寺遺跡調査団『東岡遺跡-九重廃寺跡調査報告-』桜村教育委員会 1984年3月
b 白田正子『九重東岡廃寺確認調査報告書1』茨城県教育財団 2001年3月
- 13) a つくば市教育委員会『つくば市遺跡分布調査報告書 -谷田部地区・桜地区-』2001年3月
b つくば市教育委員会『つくば市遺跡地図』2001年7月
- 14) つくば市教育委員会『つくば市内遺跡』つくば市 2006年3月
- 15) 筑波町史編纂専門委員会『筑波町史 上巻』つくば市 1991年3月
- 16) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図』2001年3月



第1図 上野古屋敷遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院25,000分の1「上郷」「常陸藤沢」）

表1 上野古屋敷遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中近世
①	上野古屋敷遺跡	○	○	○	○	○	○	41	古来島ノ前塚						○
2	柴崎遺跡				○	○	○	42	古来北ノ崎遺跡					○	○
3	上野中塚遺跡		○			○		43	古来遺跡					○	○
4	上野陣場遺跡		○	○	○	○	○	44	古来館跡					○	○
5	上野天神遺跡		○					45	吉瀬黄金遺跡				○	○	○
6	上野天神塚古墳				○			46	上ノ室条里					○	
7	上野定使古墳群				○			47	金田本田遺跡					○	○
8	栗原大山西遺跡					○		48	花室城跡		○	○	○	○	○
9	栗原十日塚古墳				○			49	花室寺山前遺跡		○			○	○
10	栗原大山遺跡				○	○		50	花室遺跡		○			○	
11	栗原愛宕塚古墳				○			51	花室溝向遺跡					○	
12	栗原五竜遺跡		○		○	○	○	52	東岡天神前遺跡					○	○
13	栗原五龍塚古墳				○			53	花室大日塚古墳				○		
14	栗原中台遺跡		○	○	○	○	○	54	東岡南遺跡					○	○
15	栗原登戸遺跡					○	○	55	妻木宮前遺跡					○	○
16	栗原古塚古墳				○			56	妻木坪内遺跡					○	○
17	栗原古塚遺跡					○	○	57	東岡中原遺跡	○	○		○	○	○
18	栗原遺跡					○	○	58	東岡中畑遺跡					○	
19	栗原沼向遺跡				○	○	○	59	金田西坪B遺跡		○		○	○	
20	稲荷塚古墳				○			60	金田西坪A遺跡					○	
21	広畑遺跡				○	○	○	61	九重東岡廃寺					○	○
22	田土部館跡						○	62	妻木鴻ノ巢遺跡					○	○
23	五斗内遺跡				○	○		63	金田西遺跡		○		○	○	
24	上境北ノ内遺跡					○	○	64	金田城跡						○
25	上境どんどん塚古墳				○			65	柴崎稲荷前古墳					○	
26	上境古屋敷遺跡				○	○	○	66	柴崎南遺跡		○		○	○	○
27	中根遺跡				○	○	○	67	柴崎大堀遺跡						○
28	松塚鷺打遺跡					○	○	68	柴崎片岡上館跡					○	○
29	松塚高畑遺跡				○	○	○	69	柴崎ボツケ遺跡					○	
30	栄屋敷付遺跡					○	○	70	金田古墳					○	
31	栄土器屋遺跡					○	○	71	横町庚申塚遺跡		○		○	○	
32	中根屋敷附館跡					○	○	72	横町古墳群					○	
33	中根不葉拔遺跡		○			○	○	73	中根中谷津遺跡	○	○			○	
34	中根とりおい塚古墳				○			74	上境旭台貝塚		○		○		
35	中根宮ノ前遺跡					○	○	75	中根中谷津古墳					○	
36	松塚古墳群				○			76	柴崎大日古墳					○	○
37	金田竜宮橋遺跡					○	○	77	上境滝ノ台古墳群					○	
38	大白畑遺跡				○	○	○	78	上境滝ノ臺遺跡		○	○			
39	大寺前遺跡				○	○	○	79	上境作ノ内古墳群					○	
40	大南遺跡					○	○	80	上境作ノ内遺跡		○	○	○		



第2図 上野古屋敷遺跡グリッド設定図 (独立行政法人都市再生機構茨城地域支社 中根・金田台地区現況調整土地図2500分の1)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

上野古屋敷遺跡はつくば市の東部に位置し、桜川右岸の標高25～28mの舌状台地上に立地している。遺跡の範囲は東西150m、南北450mと広大なものであるが、平成19年度は2,229㎡（5・6区）、平成20年度は8,958㎡（6区）の調査を行った。

今回報告するのは、平成19・20年度に調査した遺跡南部の6区10,820㎡についてである。当遺跡は平成12・13年度の調査で、旧石器時代から江戸時代までの複合遺跡であることが判明している。平成19年度の調査では、中世の土坑2基、溝跡2条、堀跡1条、時期不明の井戸跡1基、土坑33基、溝跡2条、ピット群2か所を確認した。平成20年度の調査では、縄文時代の陥し穴5基、中世の掘立柱建物跡5棟、地下式坑9基、井戸跡1基、火葬土坑1基、土坑13基、溝跡11条、道路跡4条、柵跡1列、時期不明の井戸跡4基、土坑65基、溝跡18条、ピット群8か所、畝状遺構1か所、埋没谷1か所を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に18箱出土している。主な出土遺物として、土師質土器（小皿、内耳鍋、香炉）、陶器（天目茶碗、甕）、石製品（砥石、石臼、五輪塔）、銭貨などである。

第2節 基本層序

調査区の南西部（P 5e9区）にテストピットを設定して、基本土層の観察を行った（第3図）。

第1層は、黒褐色を呈する現耕作土である。粘性は弱く、締まりは普通で、層厚は21～29cmである。

第2層は、ローム粒子・ガラス質粒子を少量、砂粒・黒色粒子を微量含む、黒褐色を呈する黒色土への漸移層である。粘性・締まりとも普通で、層厚は13～27cmである。

第3層は、ガラス質粒子を少量含む、暗褐色を呈するローム層である。粘性は普通で、締まりは弱く、層厚は19～43cmである。

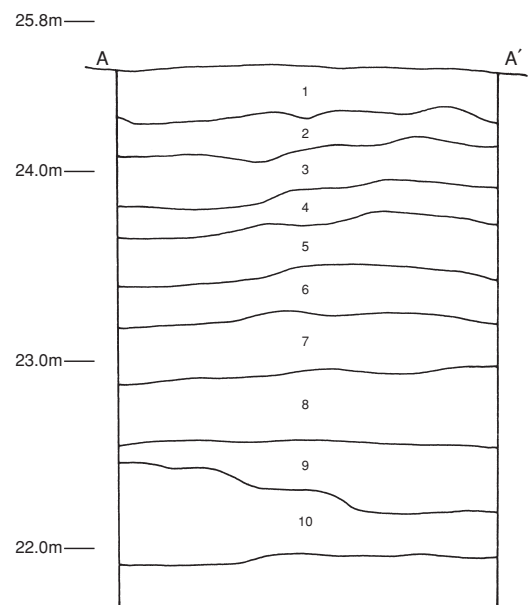
第4層は、暗褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりは普通で、層厚は13～18cmである。

第5層は、ロームブロックを微量含む、褐色を呈するソフトローム層からハードローム層への漸移層である。粘性は強く、締まりは普通で、層厚は22～30cmである。

第6層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりは強く、層厚は18～27cmである。

第7層は、粘土粒子を中量、ローム粒子を微量含む、にぶい黄褐色を呈するハードローム層から粘土層への漸移層である。粘性・締まりは強く、層厚は28～35cmである。

第8層は、砂質粘土粒子・鉄分を少量、ローム粒子を



第3図 基本土層図

微量含む，黄褐色を呈する砂質粘土層である。粘性・締まりは強く，層厚は31～40cmである。

第9層は，砂質粘土粒子を中量，鉄分を少量含む，灰褐色を呈する常総粘土層である。粘性・締まりは強く，層厚は8～38cmである。

第10層は，粘土粒子を多量，鉄分を少量含む，明褐灰色を呈する常総粘土層である。粘性・締まりは強く，層厚は21～55cmである。

遺構は，第3層の上面で確認できた。

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、陥し穴5基が確認されている。これらの遺構は、調査区南西部にあたる標高25mの台地上に位置している。以下、検出した遺構と遺物について記述する。

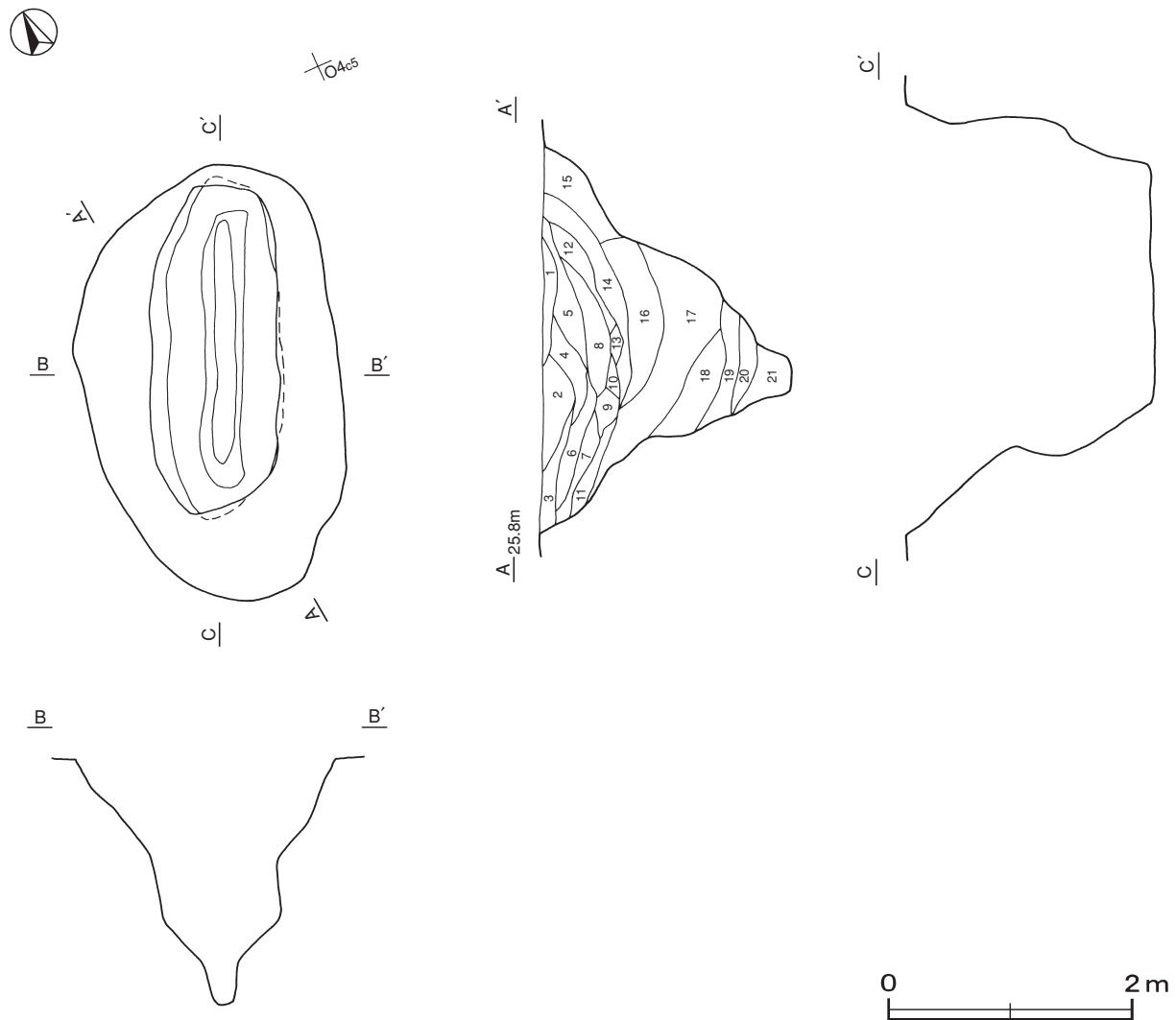
陥し穴

第4号陥し穴（第4図）

位置 調査区南西部のO4c4区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径3.60m、短径2.16mの楕円形である。長径方向はN-25°-Eで、台地の傾斜とほぼ平行である。深さは206cmで、底面は幅狭く溝状である。壁はV字状に外傾して立ち上がっている。

覆土 21層に分層できる。第16~21層が自然堆積したあと、第1~15層がロームブロックを含む土で埋め戻されている。



第4図 第4号陥し穴実測図

土層解説

1 褐 色	ロームブロック中量, 焼土粒子微量	12 黄 褐 色	ロームブロック中量
2 褐 色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量	13 黒 色	ローム粒子極微量
3 褐 色	ロームブロック中量	14 黒 褐 色	ロームブロック少量
4 暗 褐 色	ローム粒子少量, 粘土ブロック微量	15 にぶい黄褐色	ロームブロック中量
5 にぶい黄褐色	ロームブロック少量	16 暗 褐 色	ローム粒子中量
6 黒 褐 色	ロームブロック微量	17 褐 色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
7 褐 色	ロームブロック少量	18 褐 色	ローム粒子中量
8 黒 褐 色	ローム粒子少量	19 褐 色	ロームブロック・粘土粒子中量
9 黒 褐 色	ロームブロック中量	20 暗 褐 色	ローム粒子少量
10 黒 色	ローム粒子微量	21 にぶい褐色	ローム粒子少量
11 黄 褐 色	ロームブロック多量		

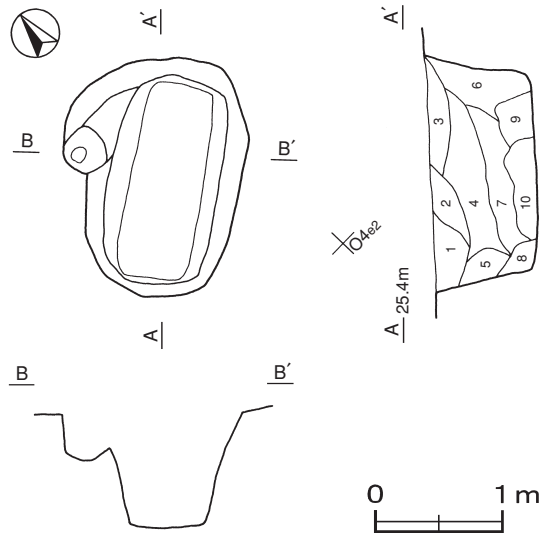
遺物出土状況 混入した土師質土器片1点(不明)が覆土中から出土している。

所見 伴う遺物はないが, 時期は, 形状から縄文時代と考えられる。

第5号陥し穴 (第5図)

位置 調査区南西部のO4d1区で, 標高25mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.90m, 短径1.44mの隅丸長方形である。長径方向はN-57°-Eで, 台地の傾斜に対してほぼ直交している。深さは92cmで, 底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。



覆土 10層に分層できる。ロームブロックを含む土で埋め戻されている。

土層解説

1 にぶい黄褐色	ロームブロック微量
2 黒 褐 色	ロームブロック中量
3 暗 褐 色	ロームブロック少量
4 暗 褐 色	ローム粒子少量
5 にぶい黄褐色	ロームブロック中量
6 にぶい黄褐色	ロームブロック少量
7 黒 褐 色	ローム粒子少量
8 暗 褐 色	ローム粒子少量
9 暗 褐 色	ロームブロック微量
10 黒 褐 色	ローム粒子微量

所見 伴う遺物はないが, 時期は, 形状から縄文時代と考えられる。

第5図 第5号陥し穴実測図

第6号陥し穴 (第6図)

位置 調査区南西部のO3c0区で, 標高25mの台地平坦部に位置している。

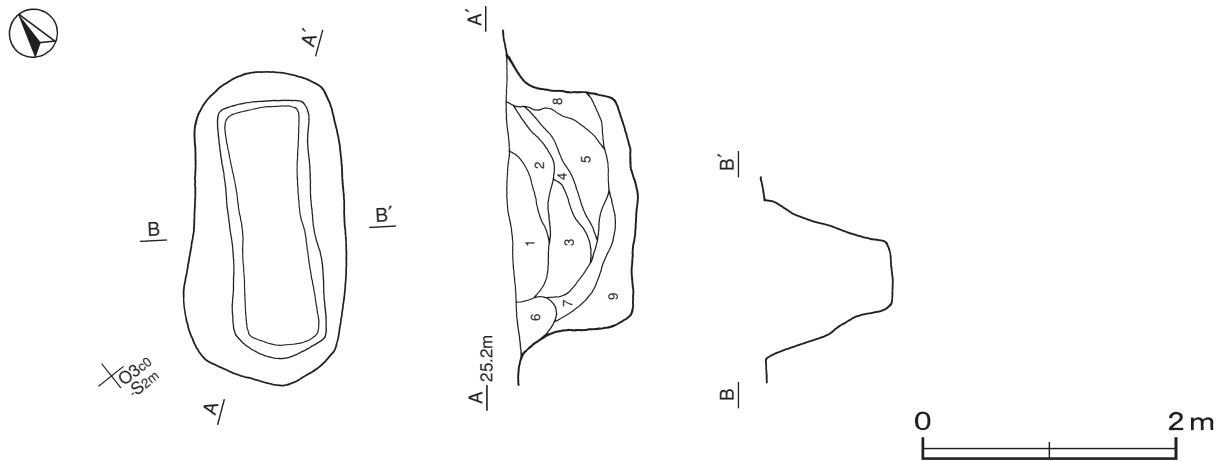
規模と形状 長軸2.45m, 短軸1.27mの隅丸長方形である。長軸方向はN-39°-Eで, 台地の傾斜に対してほぼ直交している。深さは102cmで, 底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 9層に分層できる。ロームブロックを含む土で埋め戻されている。

土層解説

1 黒 褐 色	ロームブロック微量	6 暗 褐 色	ロームブロック中量
2 暗 褐 色	ロームブロック微量	7 灰黄褐色	ロームブロック中量 (7層より明)
3 黒 褐 色	ロームブロック微量 (1層より明)	8 灰黄褐色	ロームブロック中量
4 暗 褐 色	ロームブロック少量	9 褐 色	ロームブロック多量
5 にぶい黄褐色	ロームブロック少量		

所見 伴う遺物はないが, 時期は, 形状から縄文時代と考えられる。



第6図 第6号陥し穴実測図

第7号陥し穴（第7図）

位置 調査区東部のN5i1区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

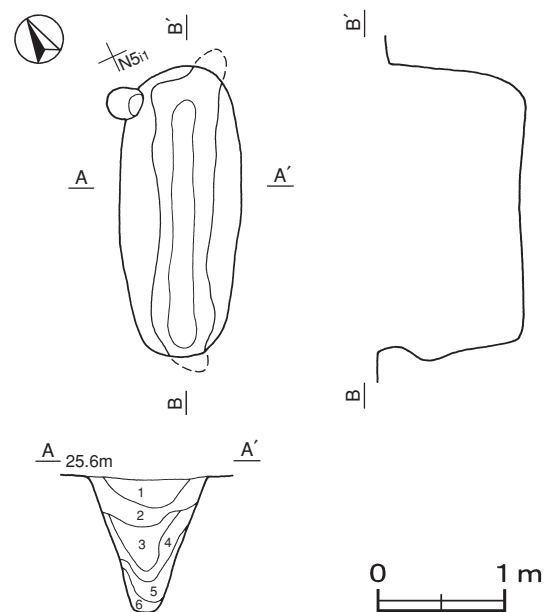
規模と形状 長径2.30m、短径0.98mの楕円形である。長径方向はN-24°-Eで、台地の傾斜に対してほぼ直交している。深さは106cmで、底面は幅狭く溝状である。壁はV字状に外傾して立ち上がっている。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックを含む土で埋め戻されている。

土層解説

- | | | |
|---|--------|-----------|
| 1 | にぶい黄褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 | 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 | にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 | 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 6 | 黒褐色 | ロームブロック少量 |

所見 伴う遺物はないが、時期は、形状から縄文時代と考えられる。



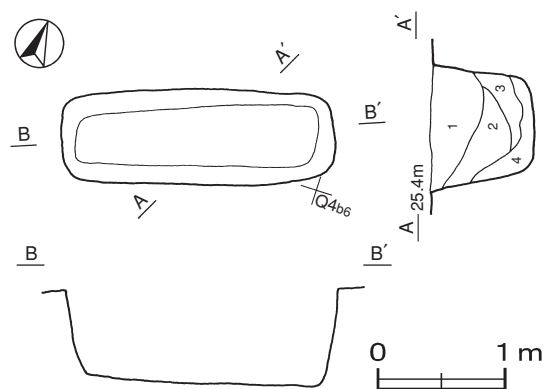
第7図 第7号陥し穴実測図

第8号陥し穴（第8図）

位置 調査区南部のQ4a5区で、標高25mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.16m、短軸0.72mの隅丸長方形である。長軸方向はN-72°-Eで、台地の斜面に対してほぼ直交している。深さは82cmで、底面は平坦である。壁はやや外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックを含む土で埋め戻されている。



第8図 第8号陥し穴実測図

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------|--------|-----------|
| 1 黒 褐色 | ロームブロック少量 | 3 黒 色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒 色 | ロームブロック少量 | 4 黒 褐色 | ロームブロック中量 |

所見 伴う遺物はないが、時期は、形状から縄文時代と考えられる。

表2 縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	平面形	長径(軸)方向	規模 (m, 深さはcm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
4	O 4 c4	楕円形	N-25°-E	3.60×2.16	206	外傾	幅狭く溝状	人為	-	
5	O 4 d1	隅丸長方形	N-57°-E	1.90×1.44	92	外傾	平坦	人為	-	
6	O 3 c0	隅丸長方形	N-39°-E	2.45×1.27	102	外傾	平坦	人為	-	
7	N 5 i1	楕円形	N-24°-E	2.30×0.98	106	外傾	幅狭く溝状	人為	-	
8	Q 4 a5	隅丸長方形	N-72°-E	2.16×0.72	82	外傾	平坦	人為	-	

2 中世・近世の遺構と遺物

当時代の遺構は、掘立柱建物跡5棟、地下式坑9基、井戸跡1基、火葬土坑1基、土坑15基、溝跡13条、堀跡1条、道路跡4条、柵跡1列が確認されている。以下、それらの遺構と遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、台地平坦部の調査区北東部から2棟、南部から3棟確認されている。

第79号掘立柱建物跡 (第9図)

位置 調査区南部のP 5 d2区で、標高25mの台地平坦部に位置している。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向はN-42°-Eである。規模は桁行6.3m、梁行3.9mで、面積は24.57㎡である。柱間寸法は、桁行が1.78~2.54mで、中間部が8尺、両側が6尺としている。梁行は、1.52~2.30mで不揃いである。

柱穴 10か所。確認面からの深さは8~58cmと、不均一である。

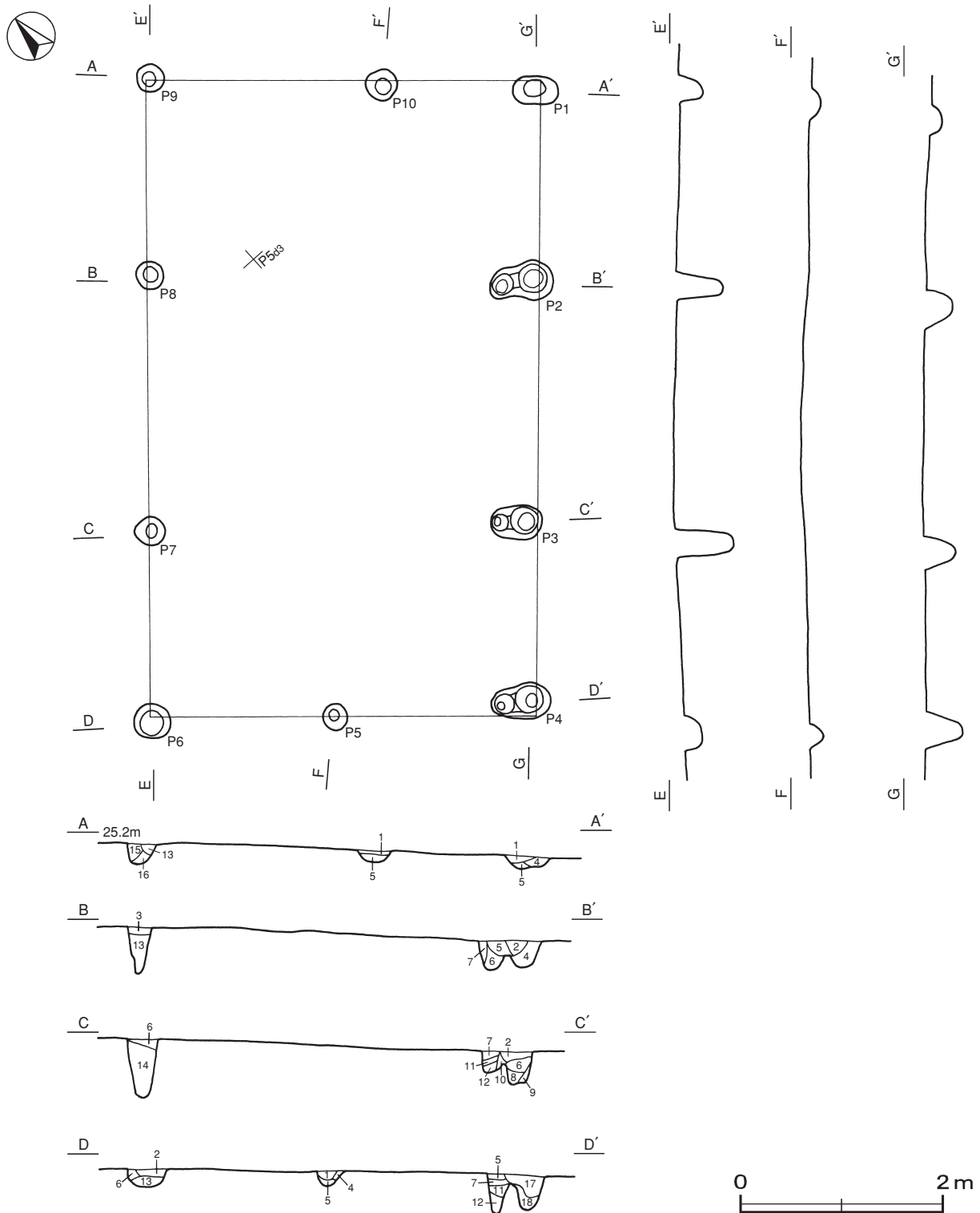
覆土 18層に分層できる。各層とも柱抜き取り後に流れ込んだものである。

土層解説

- | | | | | | |
|--------|-------------------|-------------------------|---------|-------------------|-------------------|
| 1 暗 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 10 褐色 | 色 | ローム粒子中量 | |
| 2 暗 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 11 褐色 | 色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | |
| 3 暗 褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 12 暗 褐色 | 色 | ローム粒子多量 | |
| 4 暗 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 13 黒 褐色 | 色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | |
| 5 褐色 | 色 | ロームブロック中量 (8層より明) | 14 黒 褐色 | 色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 6 暗 褐色 | 色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 15 暗 褐色 | 色 | ロームブロック少量 |
| 7 褐色 | 色 | ロームブロック中量 | 16 褐色 | 色 | ロームブロック中量 |
| 8 褐色 | 色 | ロームブロック中量 | 17 暗 褐色 | 色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 9 暗 褐色 | 色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 (締まり強い) | 18 褐色 | 色 | ロームブロック中量 (締まり強い) |

遺物出土状況 P 7の覆土から土師器片1点(甕)が出土している。

所見 柱穴径は小さく、柱間寸法が不揃いである。前回の調査で確認された第56号掘立柱建物跡と桁行方向がほぼ同じであることから、第56号掘立柱建物跡と同様に倉庫として機能していたものと想定できる。P 2~P 4内側の掘り込みは、それぞれの柱に対しての補助的な役割を果たす柱と考えられる。時期は、伴う遺物はないが、桁行方向を同じくする第56号掘立柱建物跡と同じ16世紀代後半と考えられる。



第9図 第79号掘立柱建物跡実測図

第80号掘立柱建物跡 (第10図)

位置 調査区南部のP 5 d6区で、標高25mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第85号ピット群と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行2間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向はN-45°-Wである。規模は桁行7.2m、梁行2.55

mで、面積は18.36㎡である。柱間寸法は、桁行が3.50～3.80m、梁行が2.52～2.62mと不揃いである。

柱穴 6か所。確認面からの深さは18～34cmと、やや不均一である。

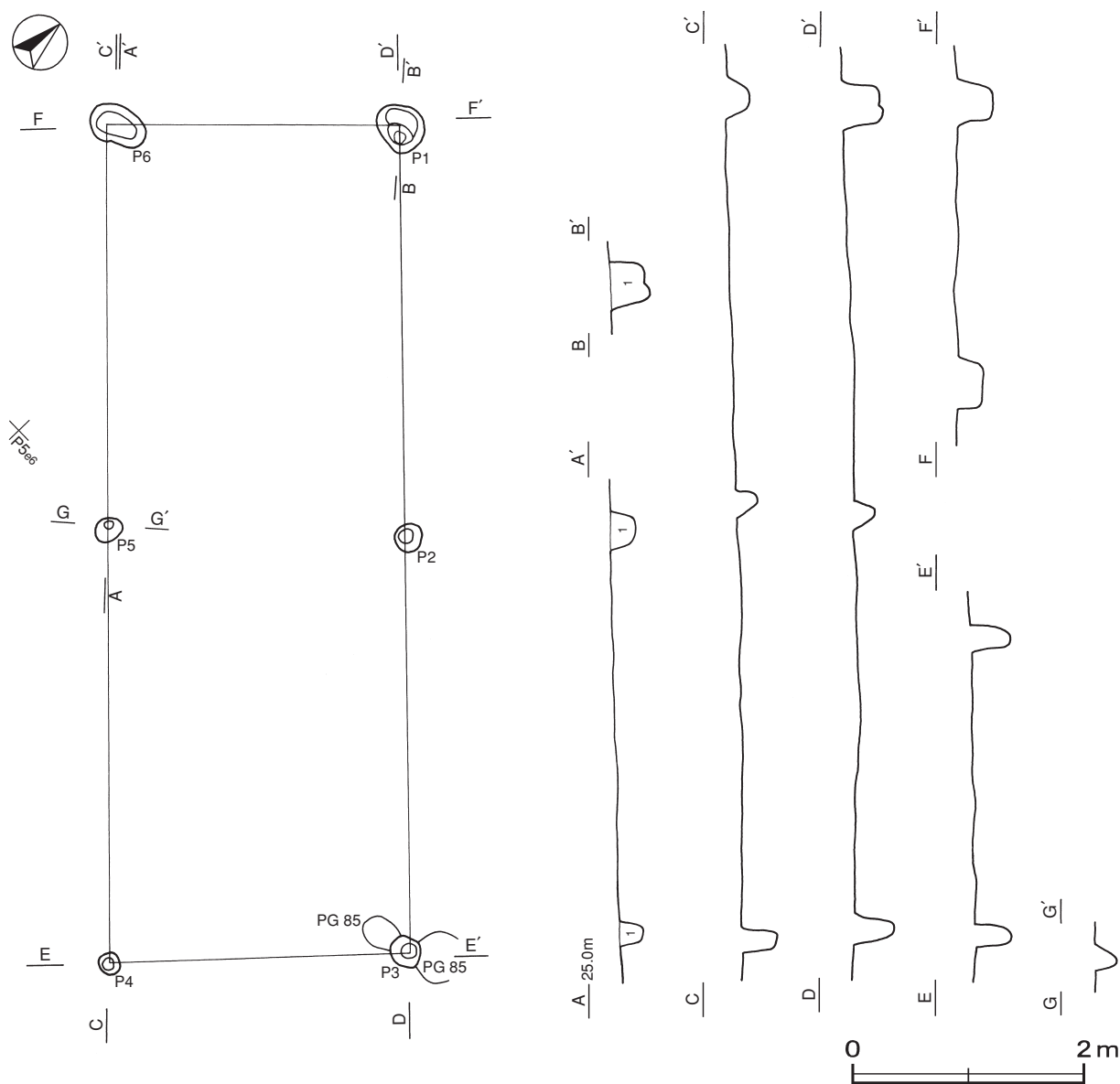
覆土 単一層である。柱抜き取り後に流れ込んだものである。

土層解説

1 黒色 ロームブロック少量

所見 前回の調査で確認された第7・8号掘立柱建物跡と類似し、倉庫として機能していたものと想定できる。

時期は、桁行方向を同じくする第8号掘立柱建物跡と同じ16世紀代と考えられる。



第10図 第80号掘立柱建物跡実測図

第81号掘立柱建物跡 (第11図)

位置 調査区南部のQ4i7区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第84号ピット群と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行3間，梁行1間の側柱建物跡で，桁行方向はN-40°-Wである。規模は桁行5.7m，梁行2.7mで，面積は15.39㎡である。柱間寸法は，桁行が1.60~2.38mで，中間部が8尺，両側が6尺としている。梁行は，2.64~2.73mで不揃いである。

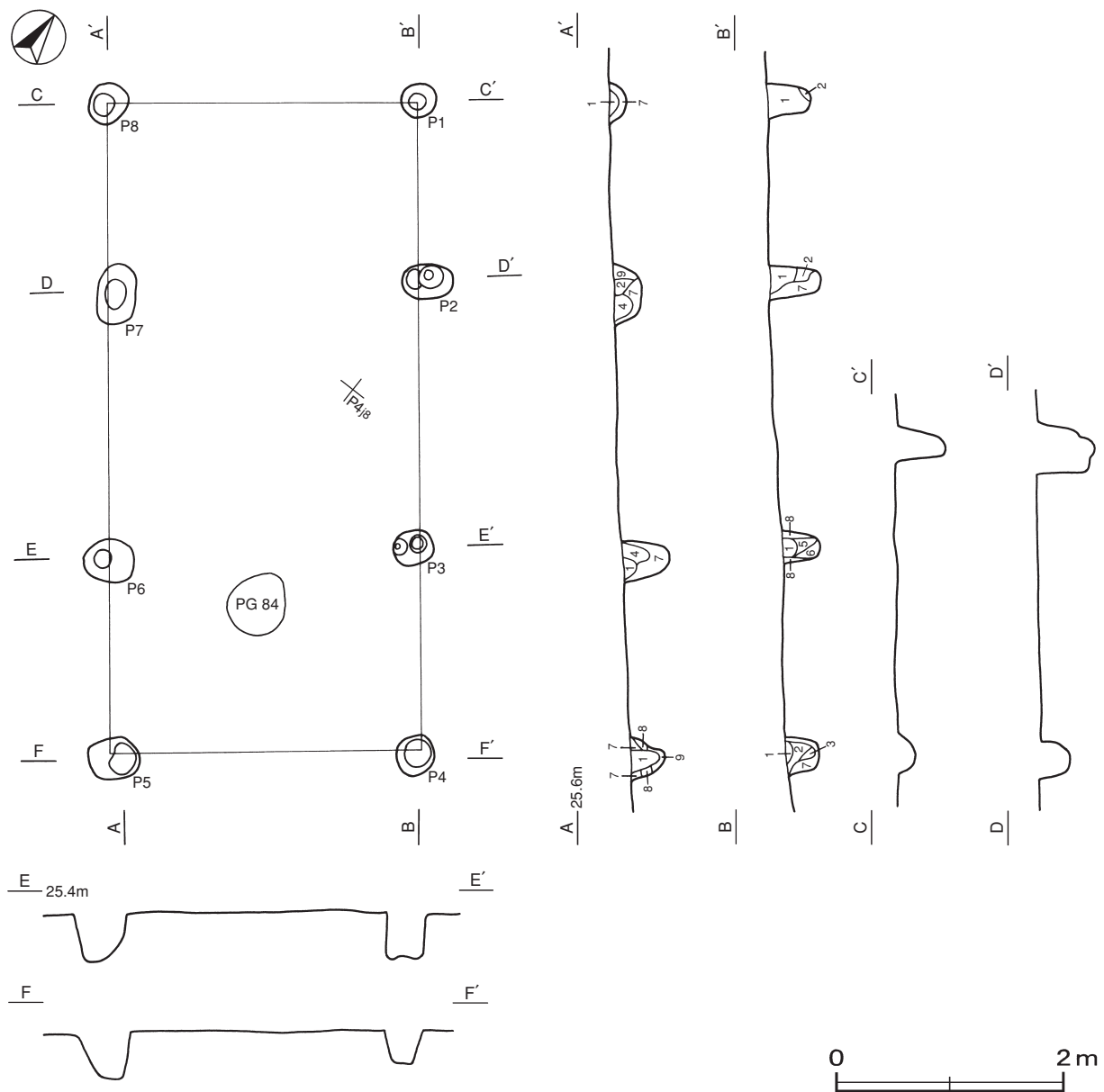
柱穴 8か所。確認面からの深さは14~50cmと，不均一である。

覆土 9層に分層できる。各層とも柱抜き取り後に流れ込んだものである。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 7 暗褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量（9層より明） | 8 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量 | 9 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子中量，炭化粒子微量 | | |

所見 柱穴径が小さく，柱間寸法が不揃いであることから，倉庫として機能していたものと想定できる。時期は，第80号掘立柱建物跡と桁行方向が近いことから，16世紀代と考えられる。



第11図 第81号掘立柱建物跡実測図

第82号掘立柱建物跡（第12図）

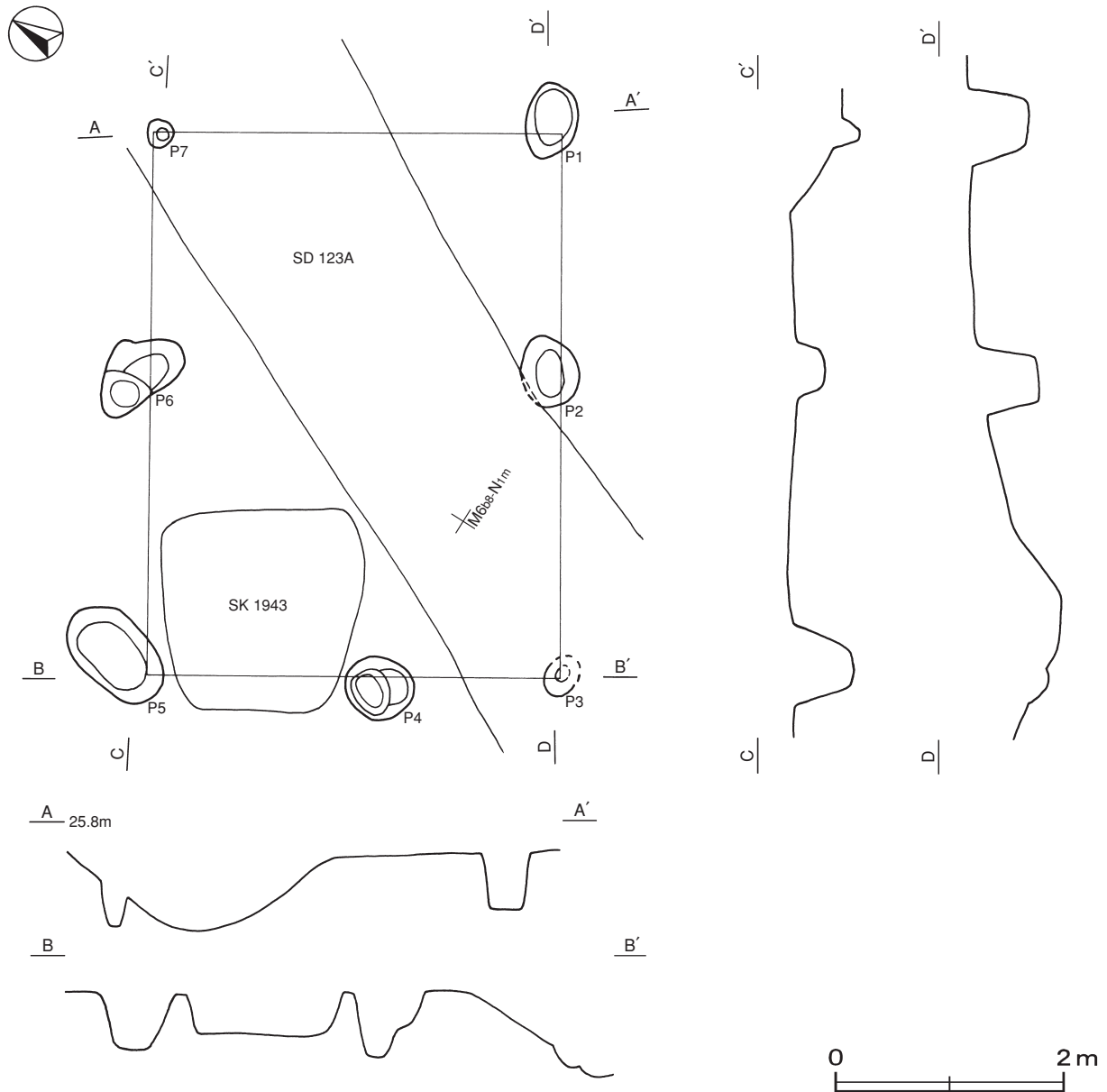
位置 調査区北部のM 6 a7区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1943号土坑、第123A号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向はN-58°-Eである。規模は桁行4.8m、梁行3.6mで、面積は17.28㎡である。柱間寸法は、桁行が2.15~2.69m、梁行が1.65~3.42mと不揃いである。

柱穴 7か所。確認面からの深さは32~58cmと、不均一である。

所見 柱穴径は小さく、柱間寸法が不揃いであることから、倉庫として機能していたものと想定できる。時期は、桁行方向を同じくする第67号掘立柱建物跡と同じ16世紀代と考えられる。



第12図 第82号掘立柱建物跡実測図

第83号掘立柱建物跡（第13図）

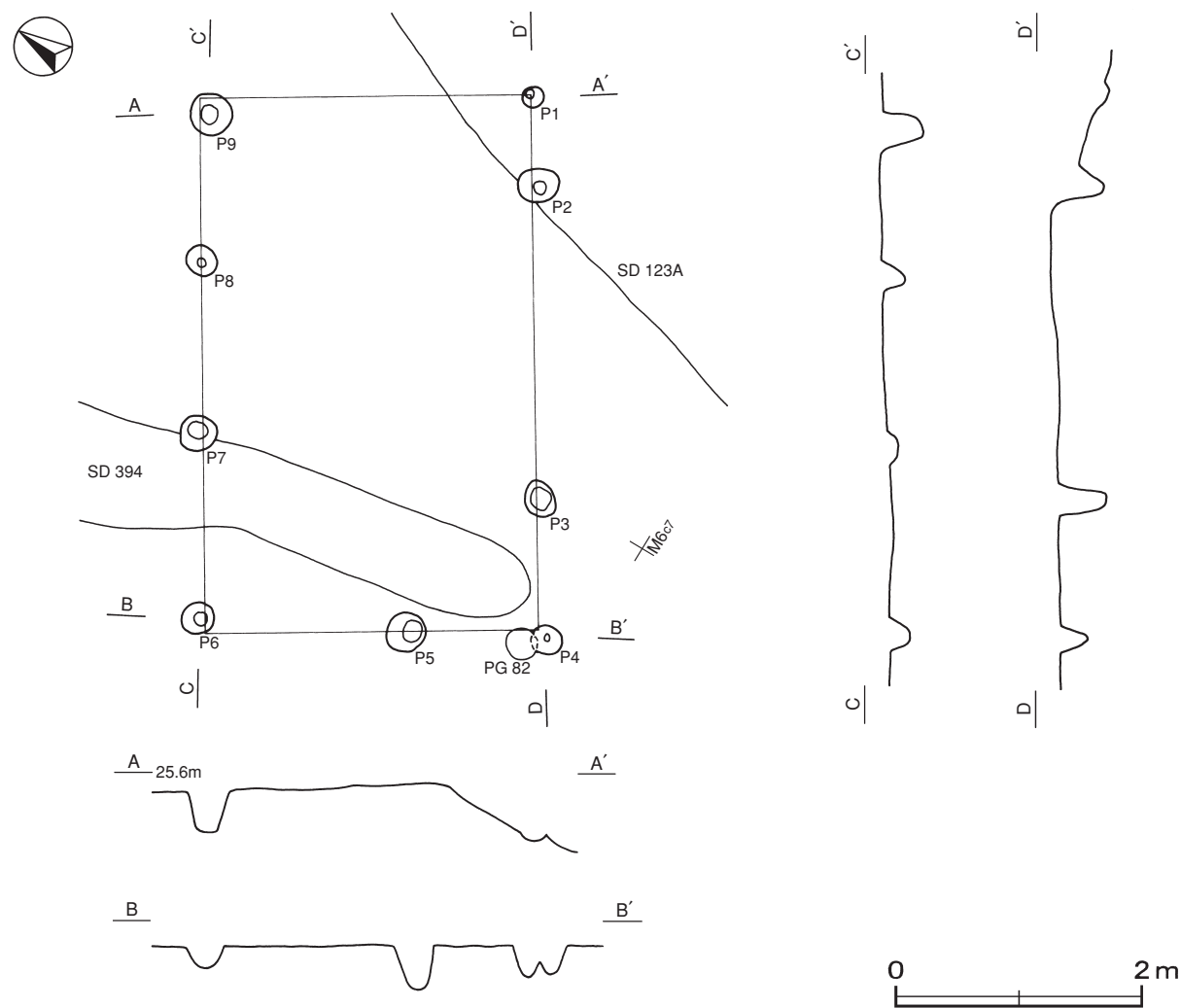
位置 調査区北部のM 6 b6区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第394号溝跡を掘り込んでいる。第123A号溝跡，第82号ピット群と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡で，桁行方向はN-61°-Eである。規模は桁行4.35m，梁行2.7mで，面積は11.75㎡である。柱間寸法は，桁行が0.75~2.55m，梁行が1.11~2.62mと不揃いである。

柱穴 9か所。確認面からの深さは10~40cmと，不均一である。

所見 形態と規模から倉庫として機能していたものと想定できる。時期は，第82号掘立柱建物跡と隣接し，桁行方向が同じであることから，16世紀代と考えられる。



第13図 第83号掘立柱建物跡実測図

表3 中世掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	位置	構造	桁行方向	柱間数		規模 (m)	面積 (㎡)	柱間寸法 (m)		柱穴 (cm)			主な出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
				桁行×梁間	桁行×梁間			桁行	梁間	柱穴数	平面形	深さ		
79	P 5 d2	側柱	N-42°-E	3×2	6.3×3.9	24.57	1.78~2.54	1.52~2.30	10	円・楕円形	8~58	土師器		
80	P 5 d6	側柱	N-45°-W	2×1	7.2×2.55	18.36	3.50~3.80	2.52~2.62	6	円・楕円形	18~34		PG85	
81	Q 4 i7	側柱	N-40°-W	3×1	5.7×2.7	15.39	1.60~2.38	2.64~2.73	8	円・楕円形	14~50		PG84	
82	M 6 a7	側柱	N-58°-E	2×2	4.8×3.6	17.28	2.15~2.69	1.65~3.42	7	円・楕円形	32~58		SK1943・SD123A	
83	M 6 b6	側柱	N-61°-E	3×2	4.35×2.7	11.75	0.75~2.55	1.11~2.62	9	円・楕円形	10~40		SD394→本跡, SD123A・PG82	

(2) 地下式坑

地下式坑は、北西部で9基確認されている。竪坑が北西部と北東部に設けられたもの、及びその他のものに分けられる。

第19号地下式坑（第14図）

位置 調査区北西部のN4c8区で、標高25mの台地平坦部に位置している。

重複関係 西壁部を第1985号土坑に、主室部北壁部から竪坑部を第150、391号溝に掘り込まれている。

軸長・軸方向 確認できた軸長は3.22mで、軸方向はN-62°-Eである。

竪坑 主室の北東側に位置し、確認できたのは奥行1.32m、横幅1.10mで隅丸長方形である。深さは80cmで、壁はやや外傾して立ち上がっている。

主室 奥行1.90m、横幅3.20mの長方形である。底面は竪坑と同じ高さで平坦である。確認面から底面までの深さは84cmで、四周の壁はやや外傾して立ち上がっている。

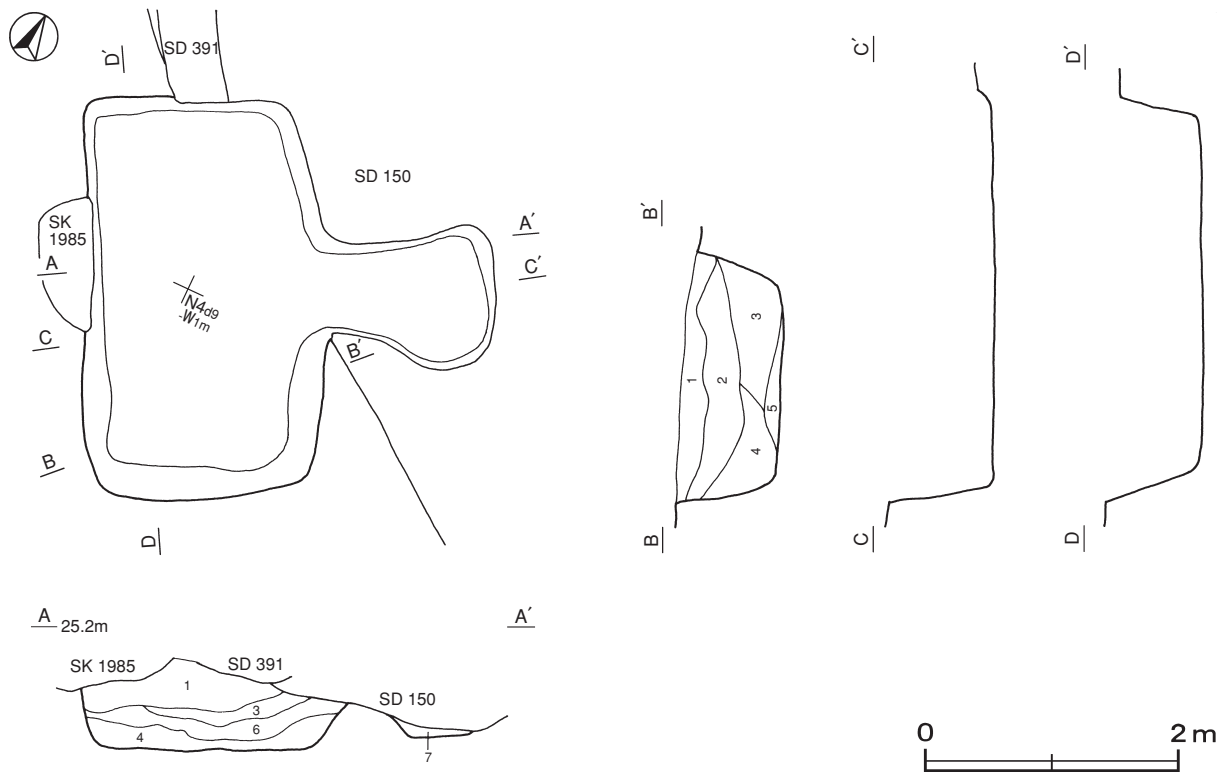
覆土 主室部は、6層に分層できる。竪坑部は第150号溝に削平されているため第7層しか確認できない。主室部は第5層が天井部の崩落層で、第1～4・6層は、堆積状況から埋め戻された層である。

土層解説

- | | | | |
|---------|------------------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量 | 6 灰褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック少量 |
| 3 にぶい褐色 | ロームブロック中量、粘土粒子少量 | 7 褐色 | ロームブロック中量、粘土粒子少量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片1点（内耳鍋）、貝殻片1点が覆土中から出土している。いずれも細片のため図示できないが、埋め戻された際の混入とみられる。

所見 時期は、16世紀代後半に比定される第150号溝に掘り込まれているため、16世紀後半以前と考えられる。



第14図 第19号地下式坑実測図

第20号地下式坑（第15図）

位置 調査区北西部のN 4 f8区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 東壁部を第1954・1988号土坑に掘り込まれている。

軸長・軸方向 軸長は3.80mで、軸方向はN-72°-Wである。

竪坑 主室の北西側に位置し、奥行1.08m、推定横幅1.31mの楕円形である。深さは49cmで、壁はやや外傾して立ち上がっている。底面は主室に向かって緩やかに傾斜している。

主室 奥行2.50m、横幅3.31mの隅丸長方形で、底面は平坦で、確認面から底面までの深さは53cmである。壁はやや外傾して立ち上がっている。

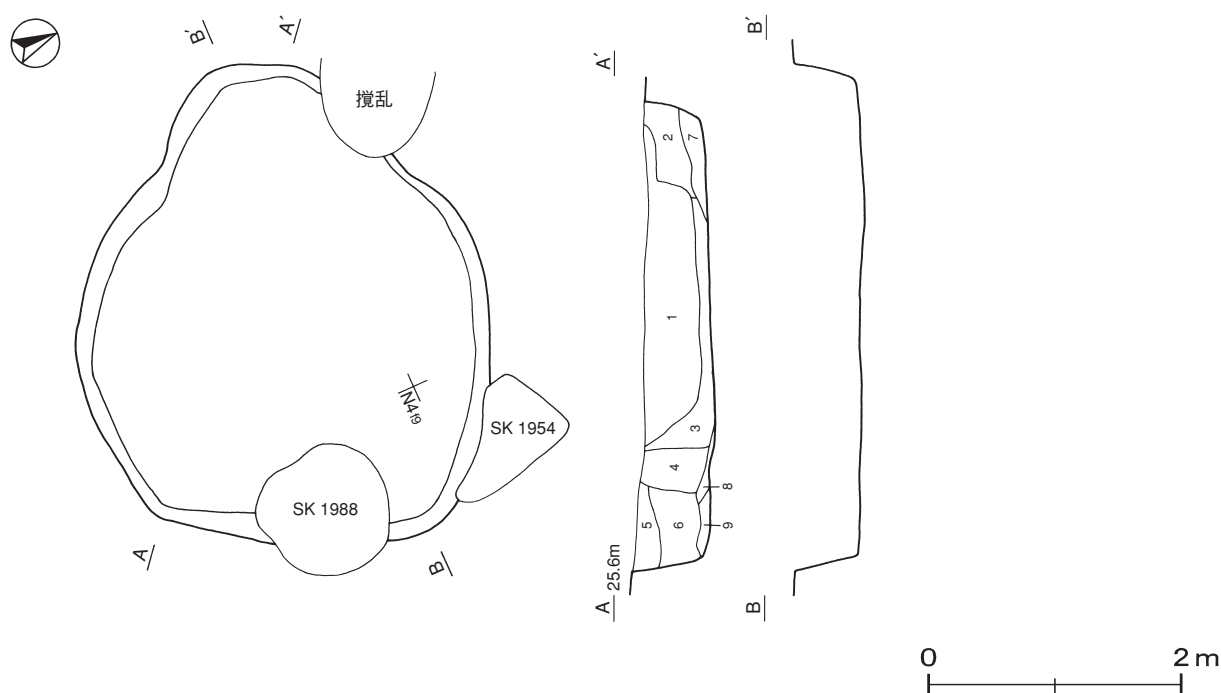
覆土 竪坑部は2層、主室部は7層に分層できる。竪坑部は、堆積状況から一度に埋め戻されている。主室部はローム土を多く含む層で、竪坑部が埋まったあとに埋め戻されている。

土層解説

1	褐色	ローム粒子少量	6	褐色	ロームブロック多量、黒色土ブロック微量
2	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子極微量	7	褐色	ローム粒子中量
3	暗褐色	ロームブロック少量	8	暗褐色	ロームブロック中量
4	暗褐色	ロームブロック多量	9	褐色	ロームブロック多量
5	暗褐色	ローム粒子多量、黒色土ブロック少量			

遺物出土状況 土師質土器片2点（内耳鍋）、陶器片2点（碗）のほか、土師器片1点（甕）、須恵器片1点（甕）が覆土中から出土している。いずれも細片のため図示できないが、埋め戻された際の混入とみられる。

所見 時期は、本跡付近で地下式坑が群を形成していることや形状から16世紀後半以前と考えられる。



第15図 第20号地下式坑実測図

第21号地下式坑（第16図）

位置 調査区北西部のN 4 c6区で、標高25mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1978号土坑を掘り込んでいる。

軸長・軸方向 軸長は3.29mで、軸方向はN-56°-Wである。

竪坑 主室の北西側に位置し、奥行0.84m、横幅1.05mの円形である。深さは75cmで、壁はやや外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。

主室 奥行2.45m、横幅2.09mの楕円形を呈している。天井部は崩落している。底面は平坦で、確認面からの深さは82cmである。壁は外傾して立ち上がっている。

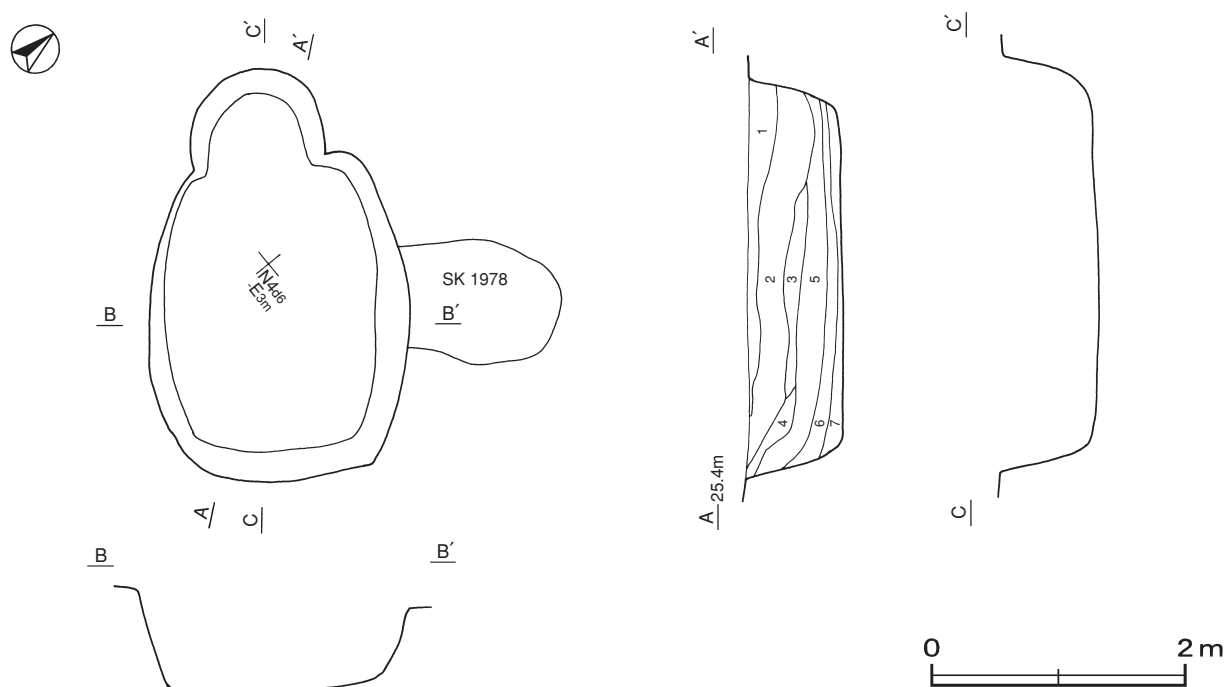
覆土 7層に分層できる。主室部は、第5層が天井部の崩落層で、覆土上層の第1・2層は、堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子極微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量、焼土粒子極微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量（締まり弱い） |
| 3 褐色 | ローム粒子少量 | 7 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片6点（小皿4・内耳鍋2）、陶器片4点（椀2・鉢1・播鉢1）のほか、須恵器片1点（甕）が覆土中から出土している。いずれも細片のため図示できないが、埋め戻された際の混入とみられる。

所見 時期は、本跡付近で地下式坑が群を形成していることや形状から16世紀後半以前と考えられる。



第16図 第21号地下式坑実測図

第22号地下式坑（第17図）

位置 調査区北西部のN 5 f1区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

軸長・軸方向 軸長は3.99mで、軸方向はN-26°-Eである。

竪坑 主室の北東側に位置し、奥行1.64m、横幅1.80mの隅丸長方形である。深さは136cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、主室の底面とは30cmの段差をなしている。

主室 奥行2.35m、横幅3.86mの長方形である。天井部は崩落している。底面は平坦で、確認面からの深さは

172cmで、四周の壁は南東側以外は外傾して立ち上がっている。

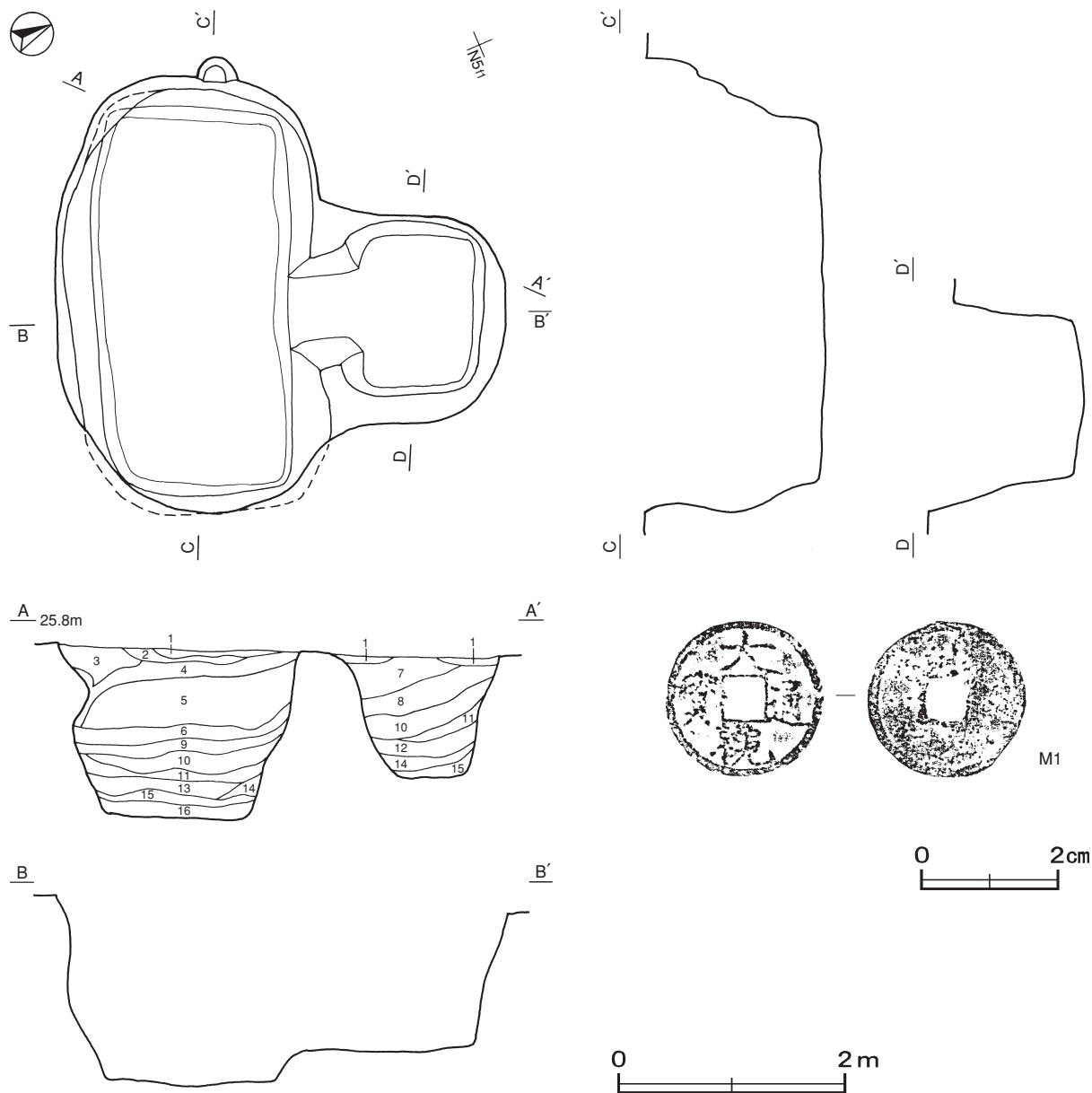
覆土 竪坑部は8層、主室部は13層に分層できる。第10・11・14・15層は竪坑から流れ込んだ層である。第5・6層は、粘土混じりの土で埋め戻された層である。第13層は天井部の崩落層である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
2 褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子多量
3 褐色	ローム粒子多量（縮まり強い）	11 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量（9層より明）
4 暗褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック・炭化粒子微量	12 暗褐色	ローム粒子多量
5 にぶい褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック中量
6 にぶい褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量	14 褐色	ローム粒子多量
7 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	15 黒褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
8 褐色	ロームブロック中量	16 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、粘土ブロック微量

遺物出土状況 土師質土器片10点（焙烙9・内耳鍋1）、陶器片3点（甕）、銭貨1点（大観通寶）のほか、須恵器片3点（甕）が覆土中から出土している。M1は主室覆土中から出土している。

所見 時期は、本跡付近で地下式坑が群を形成していることや形状から16世紀後半以前と考えられる。



第17図 第22号地下式坑・出土遺物実測図

第22号地下式坑出土遺物観察表（第17図）

番号	種別	銭名	径	孔幅	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M1	銭貨	大観通寶	2.38	0.6	2.68	銅	1107年	無背	覆土中	PL18

第23号地下式坑（第18図）

位置 調査区北西部のN4c7区で、標高25mの台地平坦部に位置している。

軸長・軸方向 確認できた軸長は2.26mで、軸方向はN-68°-Eである。

竪坑 主室の東側に位置し、奥行0.26m、横幅0.35mだけ確認された。形状は不明である。

主室 奥行1.95m、確認できた横幅は3.05mで、隅丸長方形と思われる。天井部は崩落している。底面は平坦で、確認面から底面までの深さは126cmである。確認できた三方の壁は外傾して立ち上がっている。

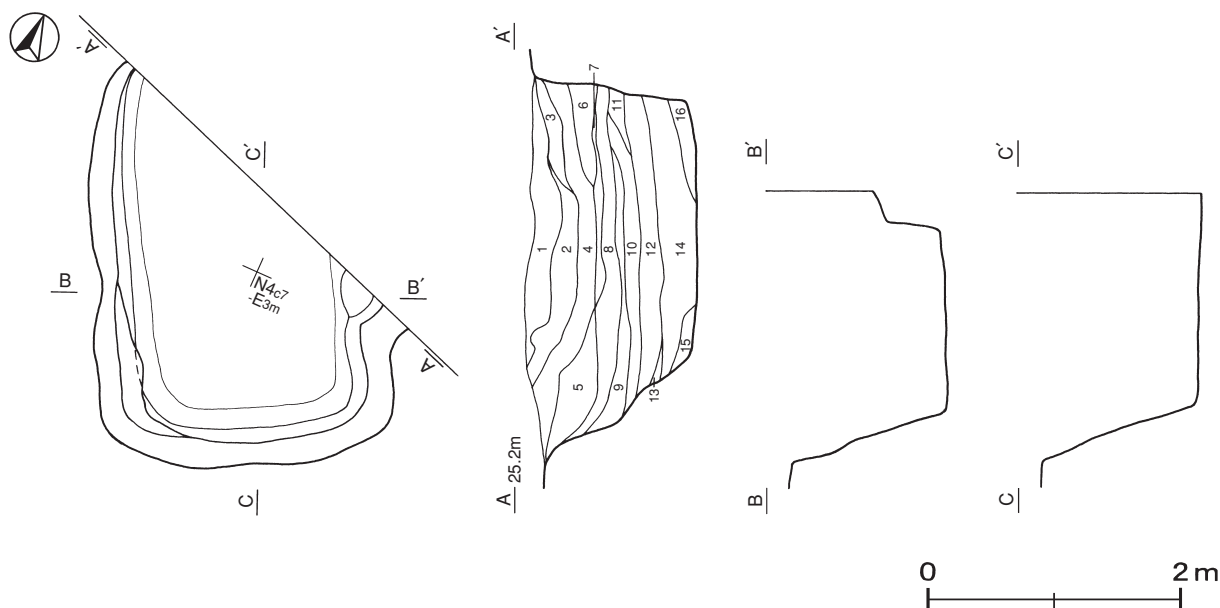
覆土 16層に分層できる。主室部は、第12層が天井部の崩落層である。覆土上層の第1～11層は、堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子極微量 | 9 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒色 | ロームブロック少量、焼土粒子・砂粒微量 | 10 灰褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 11 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子微量 | 12 褐色 | ロームブロック微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック微量（締まり弱い） | 13 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量、砂粒微量 | 14 黒褐色 | ロームブロック少量（3層より明） |
| 7 明黄褐色 | ロームブロック少量 | 15 明褐色 | ローム粒子少量 |
| 8 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 16 明褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師質土器片1点（内耳鍋）が覆土中から出土している。いずれも細片のため図示できないが、埋め戻された際の混入とみられる。

所見 時期は、本跡付近で地下式坑が群を形成していることや、軸方向が第20・26号地下式坑とほぼ一致することから、16世紀後半以前と考えられる。



第18図 第23号地下式坑実測図

第24号地下式坑（第19図）

位置 調査区北西部のN 4 f9区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

軸長・軸方向 確認できた軸長は3.18mで、軸方向はN-62°-Wである。

竪坑 主室の南東側に位置し、奥行0.73m、横幅1.15mの半円形である。深さは44cmで、壁はやや外傾して立ち上がっている。底面は主室に向かって緩やかに傾斜している。

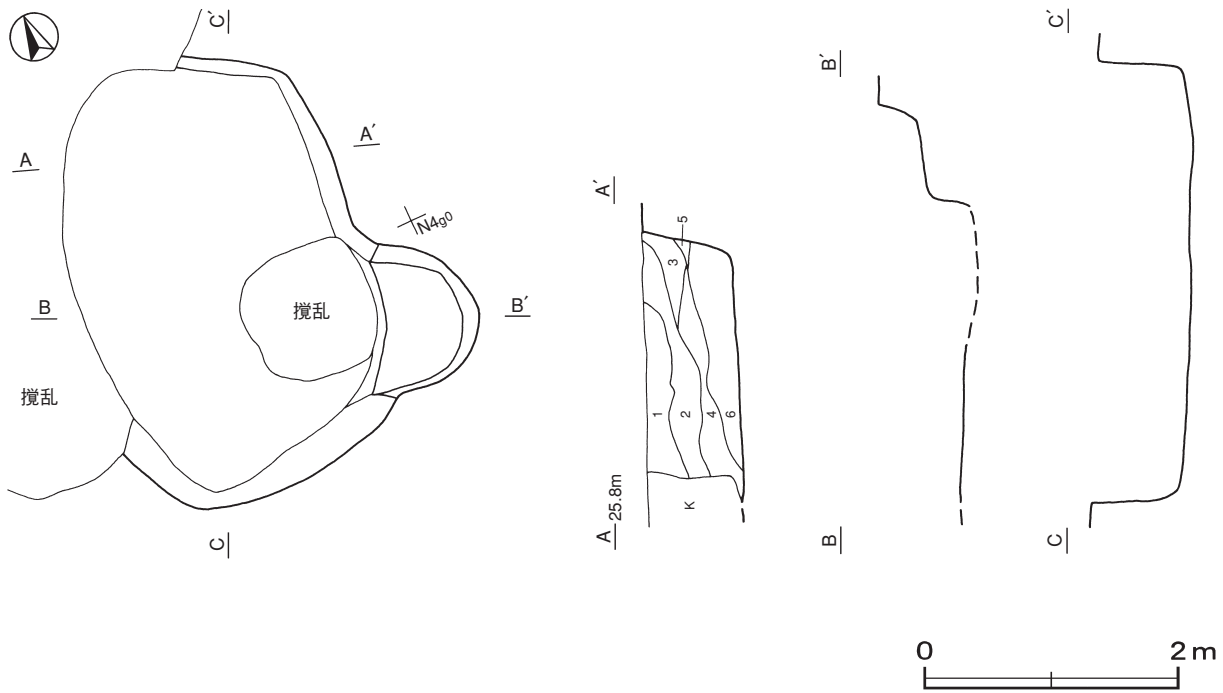
主室 奥行2.26m、横幅3.57mを確認した。形状は北西部が攪乱されているため明確ではないが、隅丸長方形と思われる。天井部は崩落している。底面は平坦で、竪坑との境界付近に攪乱を受けている。確認面から底面までの深さは80cmで、壁はわずかに外傾して立ち上がっている。

覆土 6層に分層できる。主室部は、第6層が天井部の崩落層で、覆土上層の第1～5層は、堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子中量
3 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量（締まり弱い）	6 褐色	ロームブロック中量

所見 時期は、伴う遺物はないものの、本跡付近で地下式坑が群を形成していることや形状から16世紀後半以前と考えられる。



第19図 第24号地下式坑実測図

第25号地下式坑（第20図）

位置 調査区北西部のN 5 f3区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

軸長・軸方向 軸長は3.95mで、軸方向はN-50°-Wである。

竪坑 主室の北西側に位置し、奥行1.48m、横幅1.38mの隅丸方形である。深さは126cmで、壁は直立している。底面は主室に向かって緩やかに傾斜している。

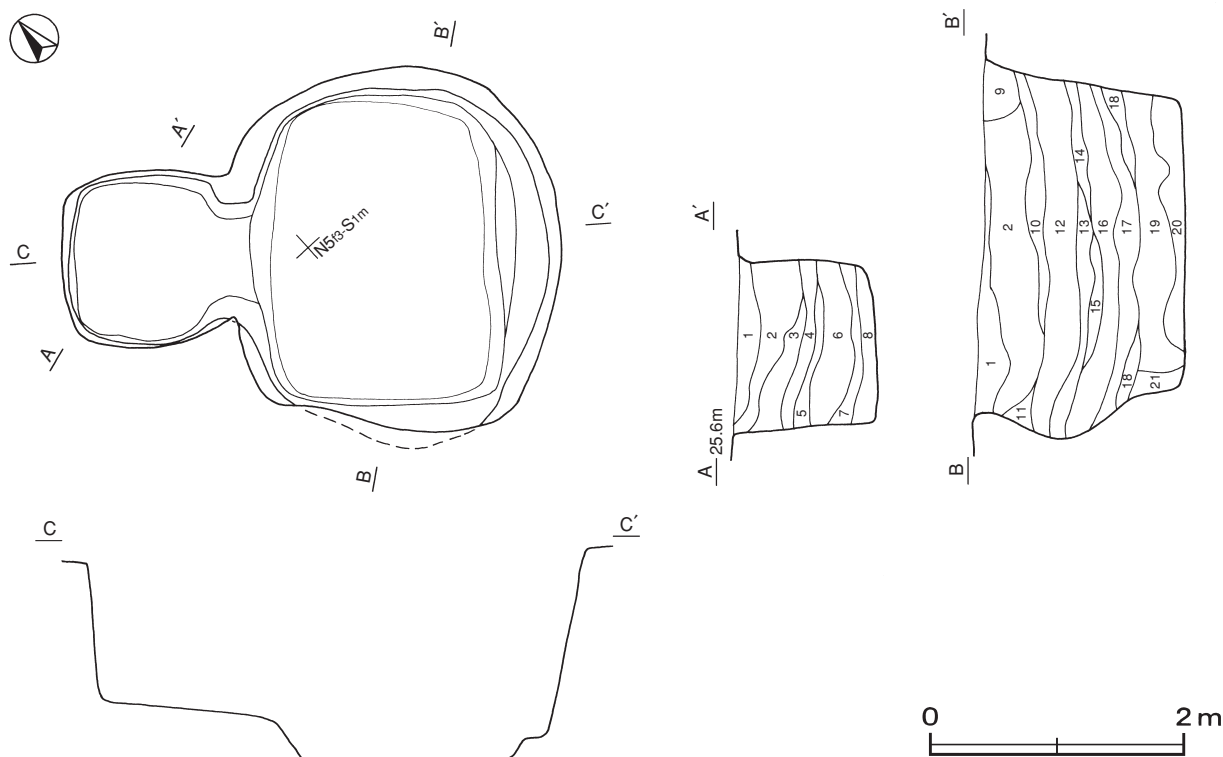
主室 奥行2.47m，横幅2.88mの隅丸長方形である。天井部は崩落している。底面は平坦で，確認面からの深さは163cmである。四周の壁は南西側以外は外傾して立ち上がっている。

覆土 竪坑部は8層，主室部は15層に分層できる。主室部は，天井部（第19層）が崩落した後の窪地へレンズ状に自然堆積したと考えられる。

土層解説

1	にぶい褐色	粘土ブロック・ローム粒子中量	12	暗褐色	ローム粒子中量
2	暗褐色	ロームブロック中量，粘土ブロック微量	13	暗褐色	ロームブロック少量
3	黒褐色	ローム粒子中量，炭化粒子微量	14	暗褐色	ローム粒子中量，粘土粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック中量，炭化粒子微量	15	褐色	ローム粒子多量
5	暗褐色	ロームブロック中量	16	暗褐色	ローム粒子多量
6	暗褐色	ローム粒子多量（締まり弱い）	17	褐色	ロームブロック多量
7	褐色	ロームブロック中量	18	暗褐色	ローム粒子中量，炭化粒子微量（10層より明）
8	褐色	ローム粒子多量（粘性強い）	19	褐色	ロームブロック多量（粘性・締まり強い）
9	褐色	ロームブロック多量（締まり強い）	20	暗褐色	ローム粒子中量，炭化粒子微量（締まり弱い）
10	暗褐色	ローム粒子中量，炭化粒子微量	21	褐色	ローム粒子多量，粘土ブロック微量
11	暗褐色	ローム粒子中量，粘土ブロック少量			

所見 時期は，伴う遺物はないものの，本跡付近で地下式坑が群を形成していることや形状から16世紀後半以前と考えられる。



第20図 第25号地下式坑実測図

第26号地下式坑（第21図）

位置 調査区北西部のN 4 b6区で，標高25mの台地平坦部に位置している。

重複関係 北西壁部を第399号溝，竪坑部を第2011号土坑に掘り込まれ，北壁部で第2016号土坑を掘り込んでいる。

軸長・軸方向 軸長は3.28mで，軸方向はN-75°-Eである。

竪坑 主室の東側に位置し、奥行1.28m、横幅1.00mの隅丸長方形である。深さは58cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は主室との間に段差を持たずに続いている。

主室 奥行2.00m、横幅2.58mの隅丸台形である。天井部は崩落している。底面は竪坑と平坦につながっている。確認面から底面までの深さは62cmで、四周の壁は外傾して立ち上がっている。

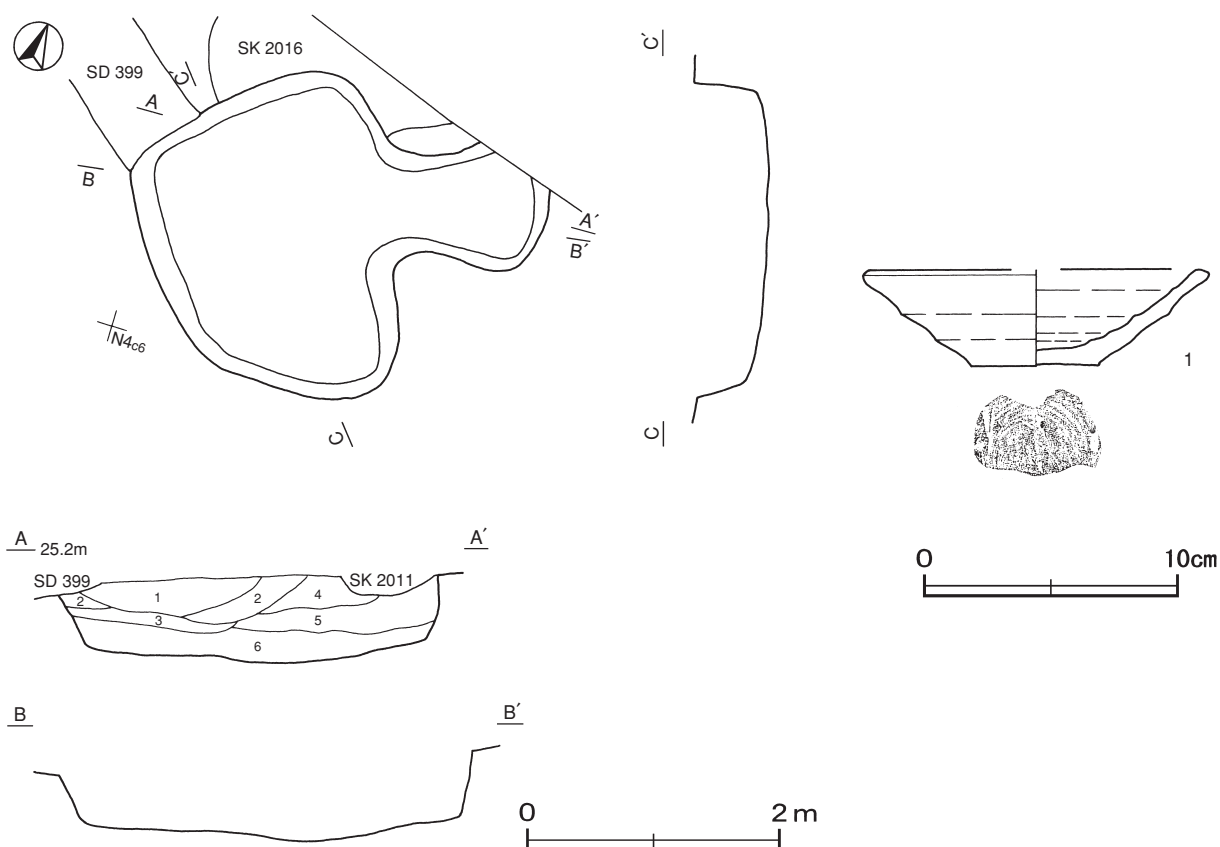
覆土 6層に分層できる。第6層が天井部の崩落層で、覆土上層の第1～5層は、堆積状況から埋め戻された層である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 褐色 | ローム粒子中量(粘性弱い) |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量、焼土粒子・炭化粒子極微量 | 5 極暗褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師質土器片4点(皿1・内耳鍋3)のほか、須恵器片1点(甕)が覆土中から出土している。いずれも埋め戻された際の混入とみられる。

所見 時期は、本跡付近で地下式坑が群を形成していることや、軸方向が第19・23号地下式坑とほぼ一致することから、16世紀後半以前と考えられる。



第21図 第26号地下式坑・出土遺物実測図

第26号地下式坑出土遺物観察表 (第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師質土器	皿	[13.0]	3.8	5.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中	20% PL13

第27号地下式坑（第22図）

位置 調査区北西部のN 4 e9区で、標高25mの台地平坦部に位置している。

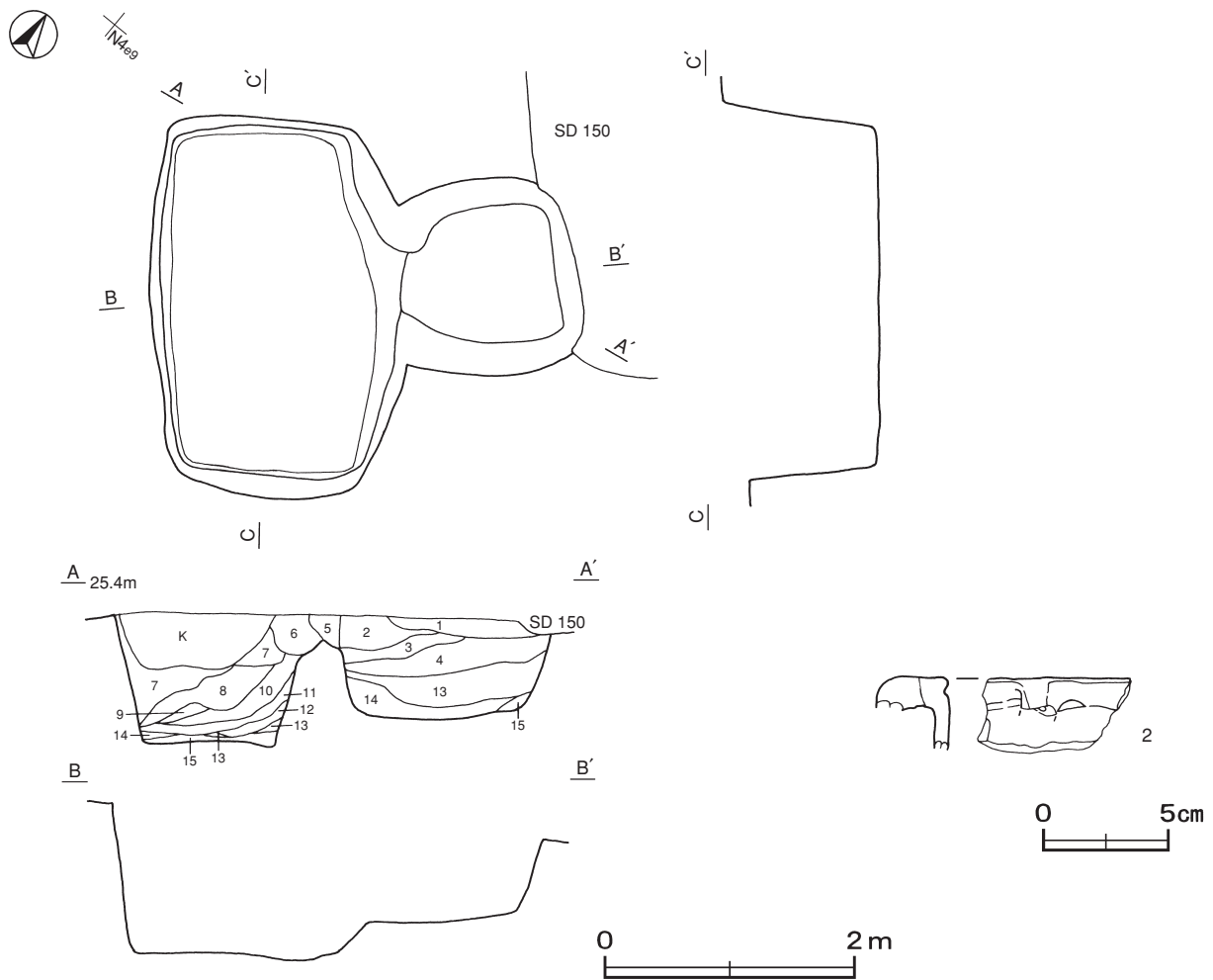
重複関係 竪坑北東壁部の上端を第150号溝に掘り込まれている。

軸長・軸方向 確認できた軸長は3.44mで、軸方向はN-46°-Eである。

竪坑 主室の北東側に位置し、確認された奥行1.45m、横幅1.58mの隅丸方形である。深さは95cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は主室に向かって緩やかに傾斜していて、主室の底面とは30cmの段差をなしている。

主室 奥行2.04m、横幅3.04mの隅丸長方形である。天井部は崩落している。底面は平坦で、確認面から底面までの深さは124cmで、四周の壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 竪坑部は7層、主室部は11層に分層できる。竪坑部は、堆積状況から一度に埋め戻されている。主室部は、第8層が天井部の崩落層で、覆土上層の第5～7層は、堆積状況から埋め戻されている。



第22図 第27号地下式坑・出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|----------|--------------------------|----------|---------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, 粘土ブロック・炭化粒子微量 | 3 におい黄褐色 | 粘土ブロック中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 におい黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 4 褐色 | 粘土粒子多量, ローム粒子中量, 炭化物微量 |

5	褐色	ローム粒子多量, 粘土粒子微量	11	灰黄褐色	砂粒中量, 粘土ブロック・ローム粒子少量
6	褐色	ロームブロック少量	12	灰黄褐色	粘土ブロック・砂粒少量, 粘土ブロック・ローム粒子微量
7	暗褐色	ローム粒子多量, 炭化粒子微量	13	黒褐色	ローム粒子少量, 粘土ブロック・炭化粒子微量
8	褐色	ロームブロック中量	14	褐色	ローム粒子中量, 粘土粒子微量
9	褐色	ローム粒子多量, 砂粒中量	15	褐色	ローム粒子多量
10	暗褐色	砂粒多量, ローム粒子少量, 粘土ブロック・炭化粒子微量			

遺物出土状況 土師質土器片5点（小皿2・内耳鍋3）が覆土中から出土している。いずれも埋め戻された際の混入とみられる。

所見 時期は、本跡付近で地下式坑が群を形成していることや形状から16世紀後半以前と考えられる。

第27号地下式坑出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
2	土師質土器	内耳鍋	-	(2.9)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	耳接合部付近ナデ 外面煤付着	覆土中	5%

表4 中世地下式坑一覧

遺構番号	平面形		軸方向	軸長	主室規模			竪坑規模			覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係（古→新）
	主室	竪坑			奥行	横幅	深さ	奥行	横幅	深さ			
19	長方形	隅丸長方形	N-62°-E	(3.22)	1.90	3.20	84	(1.32)	(1.10)	80	人為	土師質土器・貝殻片	本跡→SK1985・SD150・391
20	隅丸長方形	楕円形	N-72°-W	3.80	2.50	3.31	53	1.08	[1.31]	49	人為	土師器・須恵器・土師質土器・陶器	本跡→SK1954・1988
21	楕円形	円形	N-56°-W	3.29	2.45	2.09	82	0.84	1.05	75	人為	須恵器・土師質土器・陶器	SK1978→本跡
22	長方形	隅丸長方形	N-26°-E	3.99	2.35	3.86	172	1.64	1.80	136	人為	須恵器・土師質土器・陶器・銭貨	
23	[隅丸長方形]	-	N-68°-E	(2.26)	1.95	(3.05)	126	(0.26)	(0.35)	76	人為	土師質土器	
24	[隅丸長方形]	半円形	N-62°-W	(3.18)	(2.26)	3.57	80	0.73	1.15	44	人為		
25	隅丸長方形	隅丸方形	N-50°-W	3.95	2.47	2.88	163	1.48	1.38	126	自然		
26	隅丸台形	隅丸長方形	N-75°-E	3.28	2.00	2.58	62	1.28	1.00	58	人為	須恵器・土師質土器	SK2016→本跡→SK2011・SD399
27	隅丸長方形	隅丸方形	N-46°-E	(3.44)	2.04	3.04	124	(1.45)	1.58	95	人為	土師質土器	本跡→SD150

(3) 井戸跡

第53号井戸跡（第23・24図）

位置 調査区北部のM4j7区で、標高24.5mの台地上に位置している。

重複関係 第143A・404号溝跡を掘り込んでいる。

規模と構造 長径6.30m, 短径5.48mの楕円形で、長径方向はN-9°-Eである。確認面から深さ88cmまで若干漏斗状に、それより下部は径3.2mの円筒状に掘り込まれている。深さ1.20mほどで、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

覆土 13層に分層できる。第3～13層は、ロームブロックや粘土ブロックを含んだ土で埋め戻された層、第1・2層は自然堆積である。

土層解説

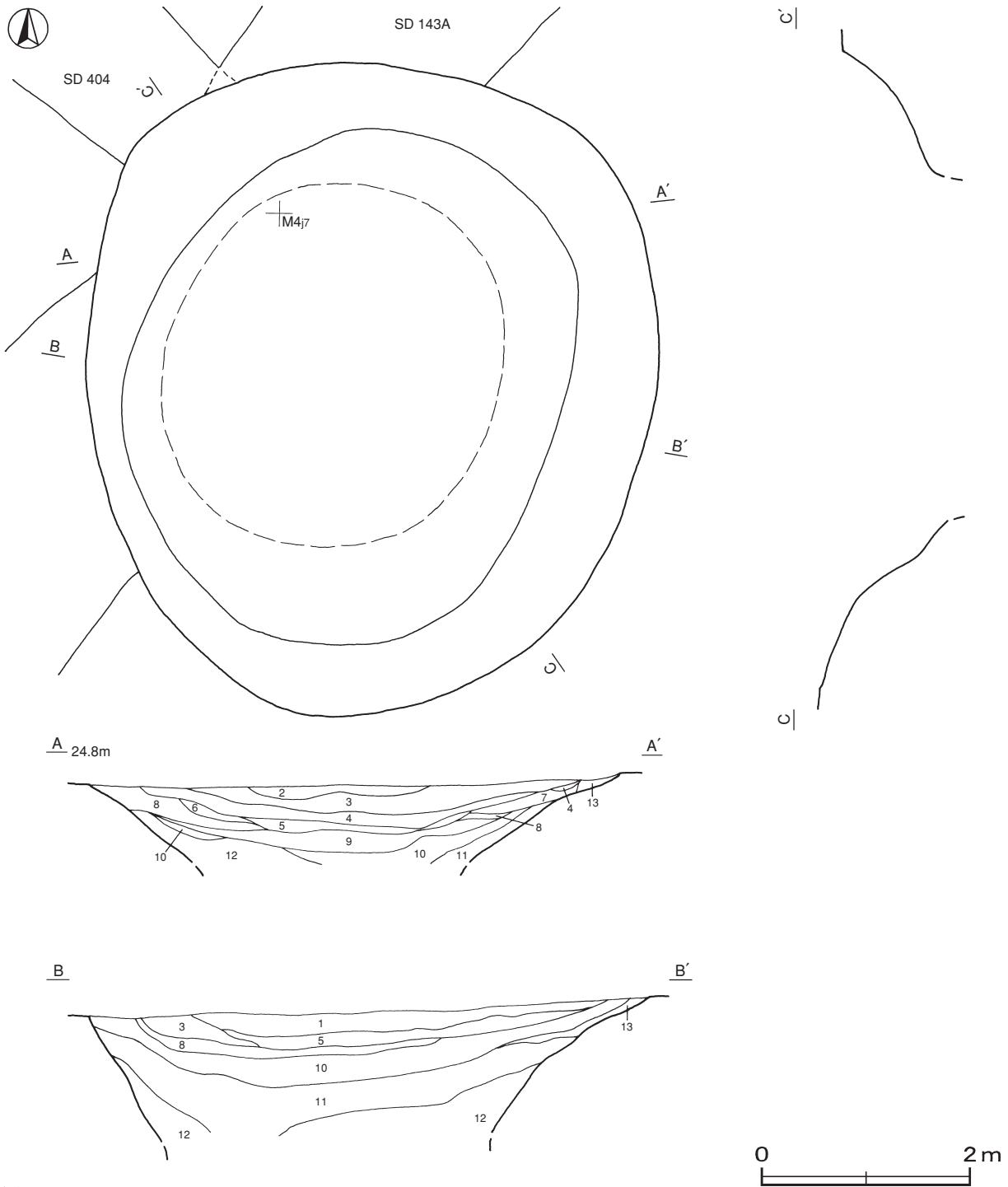
1	黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	6	褐色	ローム粒子中量, 砂粒少量, 粘土ブロック微量
2	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	7	褐色	ローム粒子多量, 粘土粒子少量
3	暗褐色	ローム粒子少量, 炭化物・粘土粒子微量	8	黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	9	暗褐色	ローム粒子中量, 粘土ブロック・炭化粒子・砂粒微量
5	褐色	ローム粒子少量, 粘土ブロック・炭化粒子微量			

10 黒褐色 ローム粒子少量, 粘土ブロック・砂粒微量
 11 褐色 ローム粒子多量, 粘土粒子微量

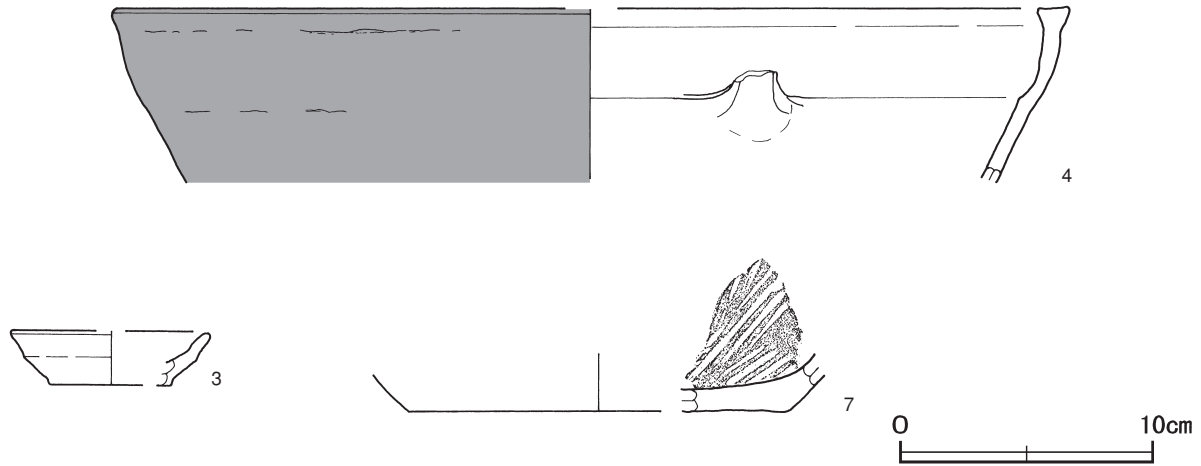
12 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量
 13 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片89点(小皿16・内耳鍋72・播鉢1)のほか, 灰釉陶器片2点(碗・瓶), 石製品1点(砥石)が覆土中から出土している。いずれも埋め戻された際の混入とみられる。

所見 時期は, 重複関係や出土土器から, 16世紀後半以降と考えられる。



第23図 第53号井戸跡実測図



第24図 第53号井戸跡出土遺物実測図

第53号井戸跡出土遺物観察表 (第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
3	土師質土器	小皿	[7.8]	2.1	[4.8]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中	20%
4	土師質土器	内耳鍋	[38.0]	(6.8)	-	長石・石英・雲母	明褐	普通	内面から口縁部外面ナデ 外面煤付着	覆土中	5%
7	土師質土器	播鉢	-	(2.3)	[14.8]	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	4条1単位の播り目 外面ナデ	覆土中	5%

(4) 火葬土坑

火葬土坑の概念及び記述方法については「上野古屋敷1」(『茨城県教育財団文化財調査報告第285集』)を踏襲した。

第7号火葬土坑 (第25図)

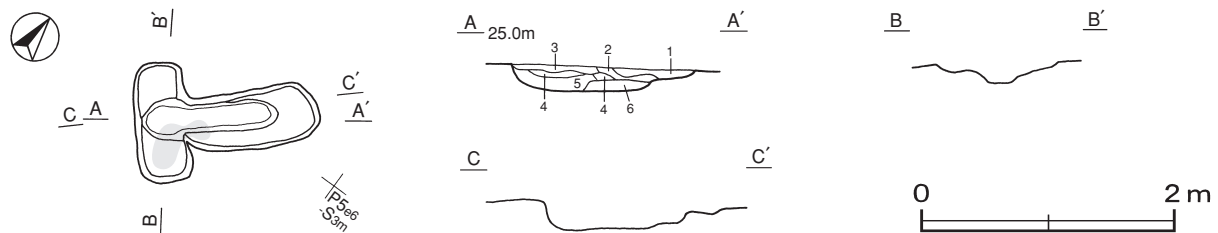
位置 調査区南部のP 5e5区で、標高25mの台地平坦部に位置している。

形状 軸長1.46mで、主軸方向N-53°-EのT字形を呈している。

開口部 東側に位置し、長径1.10m、短径0.48mの楕円形である。深さは8cmで、底面は平坦である。

燃焼部 長径0.96m、短径0.40mの隅丸長方形である。底面には長さ1.10m、上幅0.33m、下幅0.22m、深さ20cmの通気溝が開口部と連結して掘られていて、中央部は赤変硬化している。

覆土 6層に分層できる。不自然な堆積状況から埋め戻されている。第3～5層には骨片や骨粉が含まれている。



第25図 第7号火葬土坑実測図

土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------------|----------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 4 暗赤褐色 | 炭化物・焼土粒子・骨粉少量、ローム粒子微量 |
| 2 にぶい赤褐色 | 炭化物・ローム粒子・焼土粒子少量 | 5 黒褐色 | 炭化物中量、焼土粒子・骨片少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、炭化物・骨粉少量、ローム粒子微量 | 6 にぶい赤褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |

所見 骨片や骨粉のみ検出していることから、拾骨後に残った人骨をそのまま埋めたと想定される。時期は、遺構の形状から中世と考えられる。

(5) 土坑

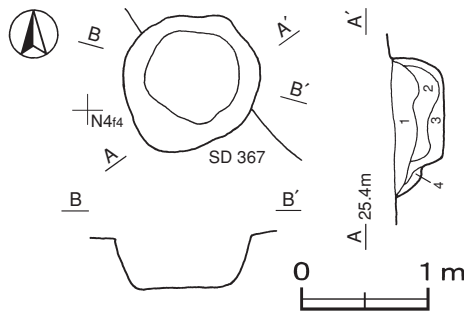
今回の調査で、中世の土坑15基が確認されている。以下、それらの土坑のうち遺物が出土しているものについて説明し、それ以外の土坑については一覧表と実測図を掲載する。

第1904号土坑（第26図）

位置 調査区中央部のN 4 e4区で、標高25mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第367号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.15m、短径1.07mの円形である。深さは41cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。



第26図 第1904号土坑実測図

覆土 4層に分層できる。ロームブロックを含み、堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 磁器片1点（碗）、鉄製品1点（鎌）が覆土中から出土しているが、細片のため図示できない。

所見 時期は、重複関係から16世紀後半と考えられるが性格は不明である。

第1918号土坑（第27図）

位置 調査区中央部のO 4 d0区で、標高26mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第383・402号溝跡、第23号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径3.85m、短径2.36mの楕円形で、長径方向はN-45°-Wである。深さは70cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

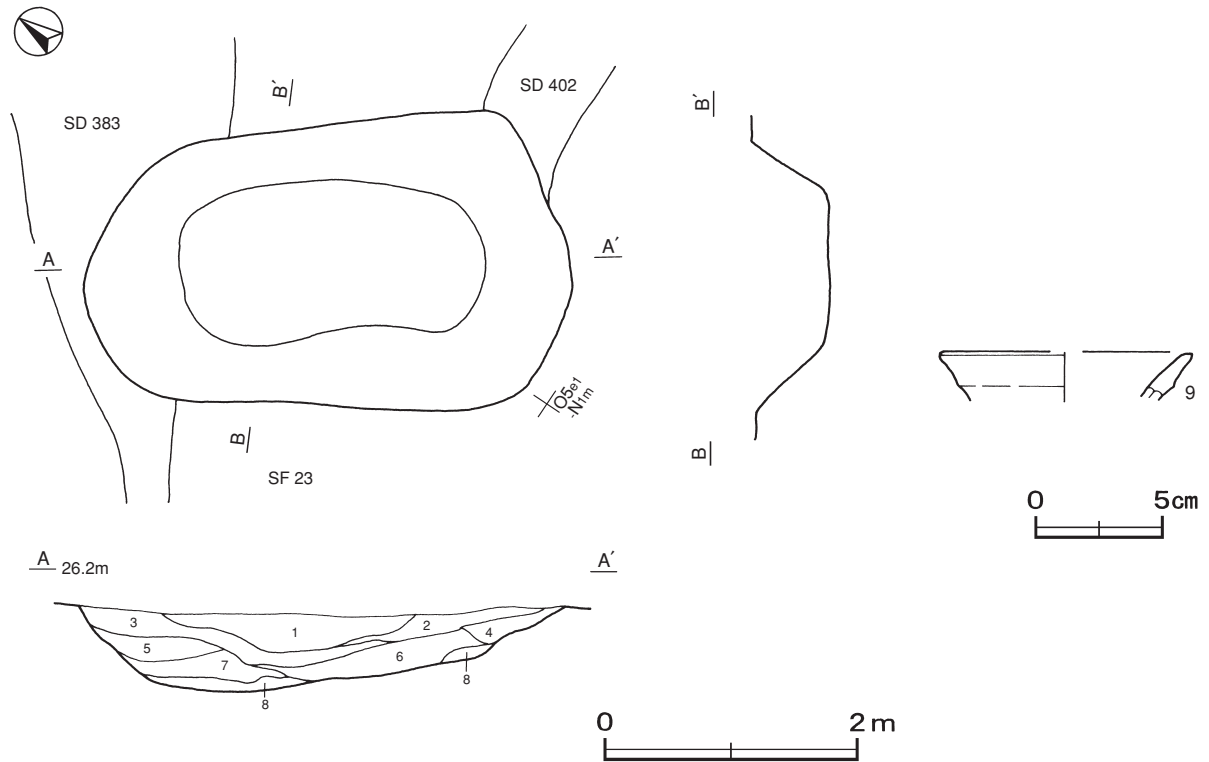
覆土 8層に分層できる。ロームブロックを含み、堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 5 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック多量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師質土器片7点（小皿1・内耳鍋6）が覆土中から出土している。

所見 時期は、重複関係から16世紀後半と考えられるが性格は不明である。



第27図 第1918号土坑・出土遺物実測図

第1918号土坑出土遺物観察表（第27図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
9	土師質土器	小皿	[9.8]	(1.8)	-	長石・石英	橙	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中	5%

第1924号土坑（第28図）

位置 調査区中央部のN 5 d6区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1923号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径2.48m、短径2.22mの楕円形で、長径方向はN-47°-Wである。深さは50cmで、底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

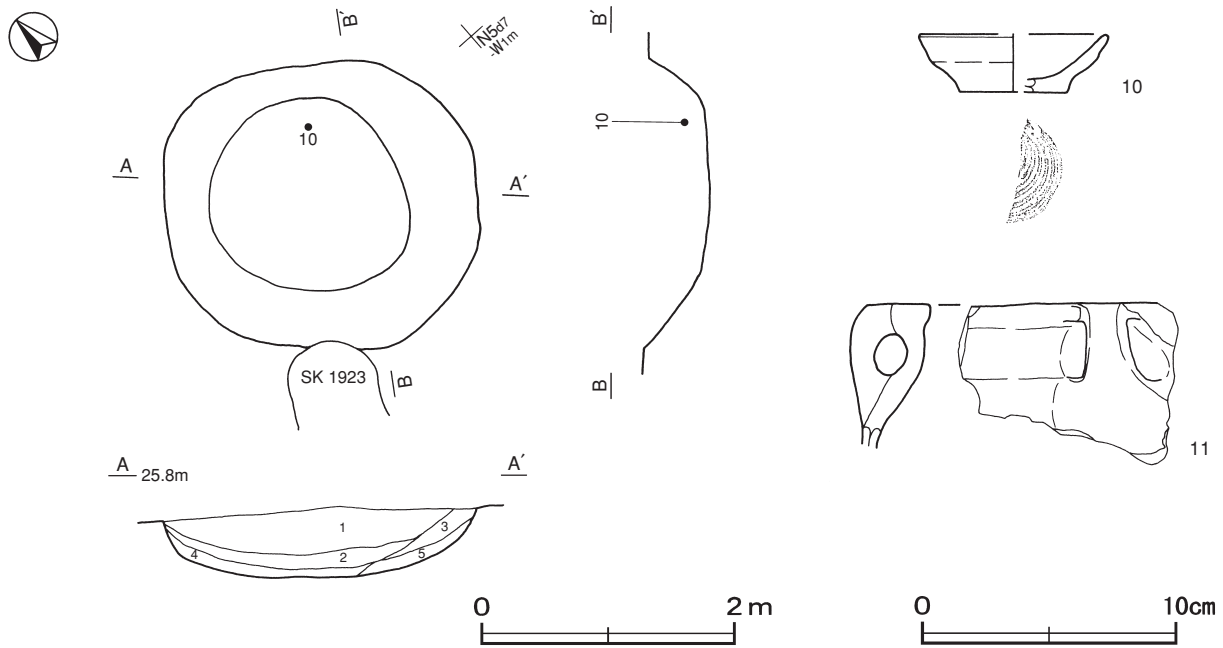
覆土 5層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子極微量	4 暗褐色	ローム粒子中量
2 黒褐色	ローム粒子微量、焼土粒子極微量	5 褐色	ローム粒子中量
3 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子極微量		

遺物出土状況 土師質土器片31点（小皿10・内耳鍋21）、陶器片1点（甕）、石製品9点（砥石1・石臼カ1・五輪塔カ7）のほか、石器1点（打製石斧）、須恵器片2点（坏・甕）が覆土中から出土している。10は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から15世紀代と考えられるが性格は不明である。



第28図 第1924号土坑・出土遺物実測図

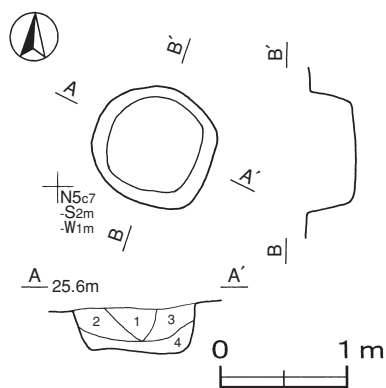
第1924号土坑出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
10	土師質土器	小皿	[7.4]	2.3	[4.2]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土下層	25%
11	土師質土器	内耳鍋	-	(6.4)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	耳接合部付近ナデ 外面煤付着	覆土中	5% PL15

第1926号土坑（第29図）

位置 調査区北部のN 5 c6区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径0.93mの円形である。深さは38cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。



第29図 第1926号土坑実測図

覆土 4層に分層できる。ロームブロックを含み、堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子極微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子極微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師質土器片1点（小皿）、陶器片1点（甕）が覆土中から出土しているが、細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器や位置から中世後半と考えられるが性格は不明である。

第1929号土坑（第30図）

位置 調査区北部のN 5 a9区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.50m，短径0.82mの楕円形で，長径方向はN-28°-Eである。深さは60cmで，底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

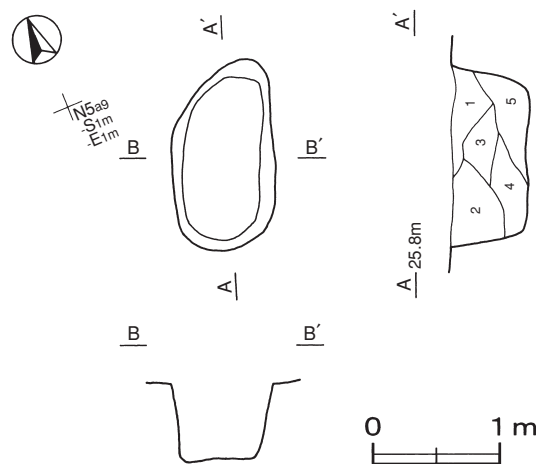
覆土 5層に分層できる。不自然な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量，焼土粒子・炭化粒子極微量
- 4 暗褐色 ロームブロック極微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師質土器片1点（小皿）のほか，磁器片2点（碗）が覆土中から出土しているが，細片のため図示できない。

所見 時期は，出土土器や位置から中世後半と考えられるが性格は不明である。



第30図 第1929号土坑実測図

第1953号土坑（第31図）

位置 調査区北部のN5b7区で，標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第388号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.24m，短軸0.84mの隅丸長方形で，長軸方向はN-53°-Wである。深さは30cmで，底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

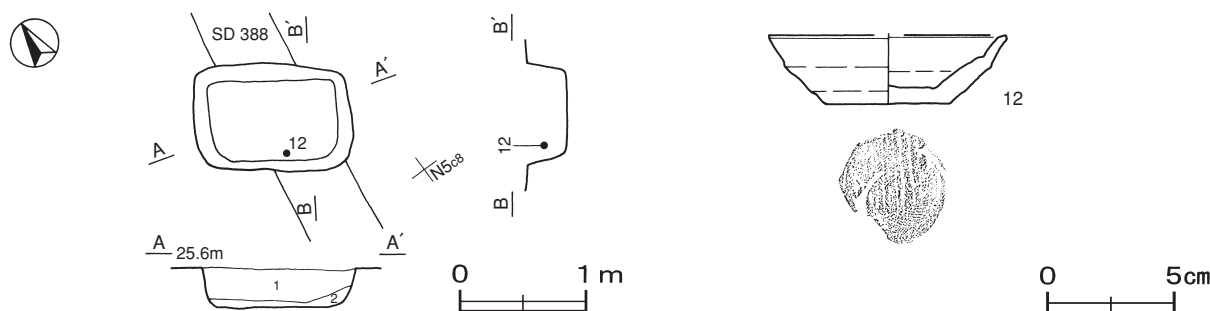
覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含み，堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片1点（小皿）が覆土中から出土している。12は覆土中層から出土している。

所見 時期は，重複関係から16世紀後半と考えられるが性格は不明である。



第31図 第1953号土坑・出土遺物実測図

第1953号土坑出土遺物観察表（第31図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
12	土師質土器	小皿	[9.3]	2.7	[4.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り後スタレ状圧痕	覆土中層	30% PL13

第1956号土坑（第32図）

位置 調査区中央部のN 4 f0区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径3.02m、短径1.74mの不整楕円形で、長径方向はN-56°-Eである。深さは32cmで、底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

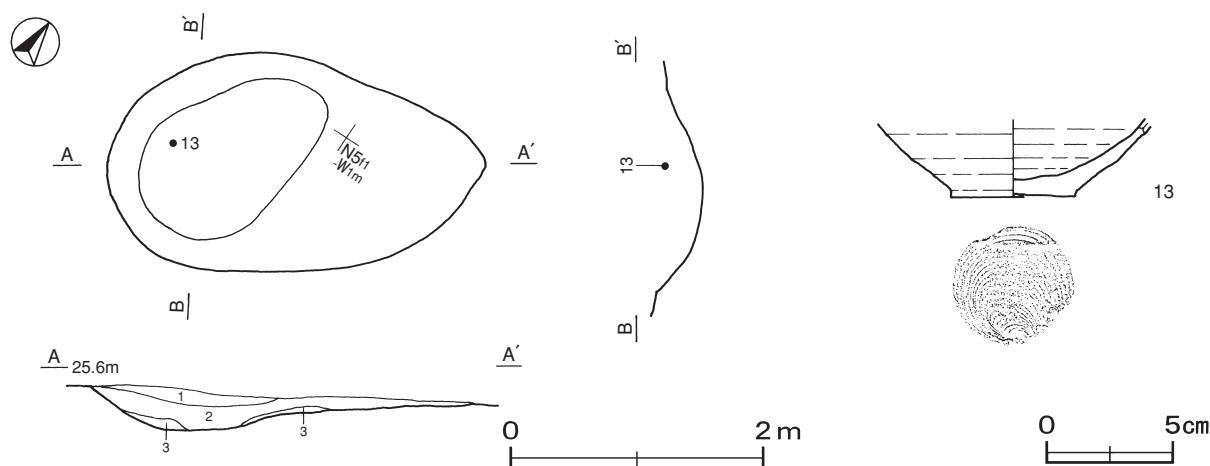
覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|------|---------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子極微量 | 3 褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量、炭化粒子極微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片4点（小皿2・内耳鍋2）のほか、土師器片1点（坏）が覆土中から出土している。13は覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から16世紀代と考えられるが性格は不明である。



第32図 第1956号土坑・出土遺物実測図

第1956号土坑出土遺物観察表（第32図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
13	土師質土器	小皿	-	(3.1)	4.9	赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土上層	30%

第1957号土坑（第33図）

位置 調査区中央部のN 4 c8区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.85m、短径2.38mの楕円形で、長径方向はN-22°-Wである。深さは32cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

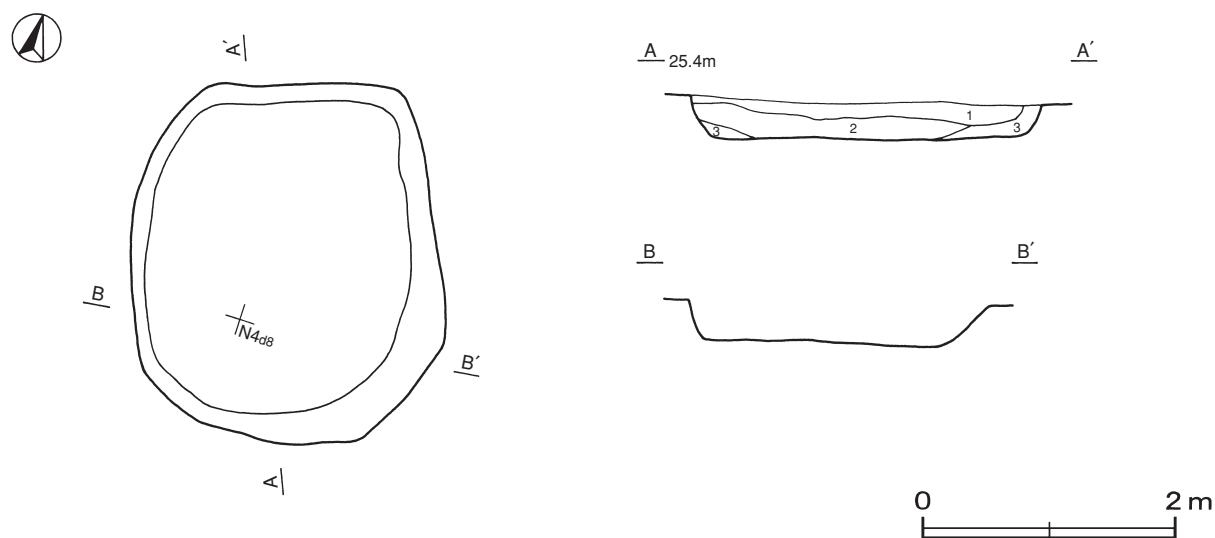
覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量、焼土粒子極微量 | 2 褐色 | ロームブロック少量 |
| | | 3 褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師質土器片1点（小皿）のほか、土師器片1点（甕）が覆土中から出土しているが、細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器から中世後半と考えられるが性格は不明である。



第33図 第1957号土坑実測図

第1966号土坑（第34図）

位置 調査区中央部のM4j8区で、標高24.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.86m、短径0.82mの楕円形で、長径方向はN-41°-Wである。深さは10cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

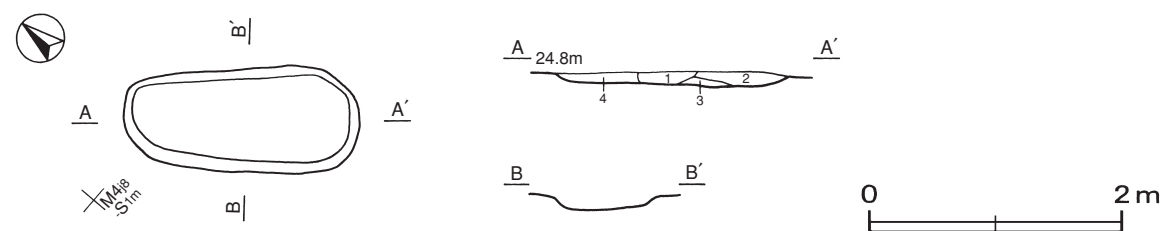
覆土 4層に分層できる。不自然な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|--------|-------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 橙色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量、炭化粒子極微量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック微量、炭化粒子極微量 |

遺物出土状況 土師質土器片5点（小皿1・内耳鍋4）が覆土中から出土しているが、細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器や位置から中世後半と考えられるが性格は不明である。



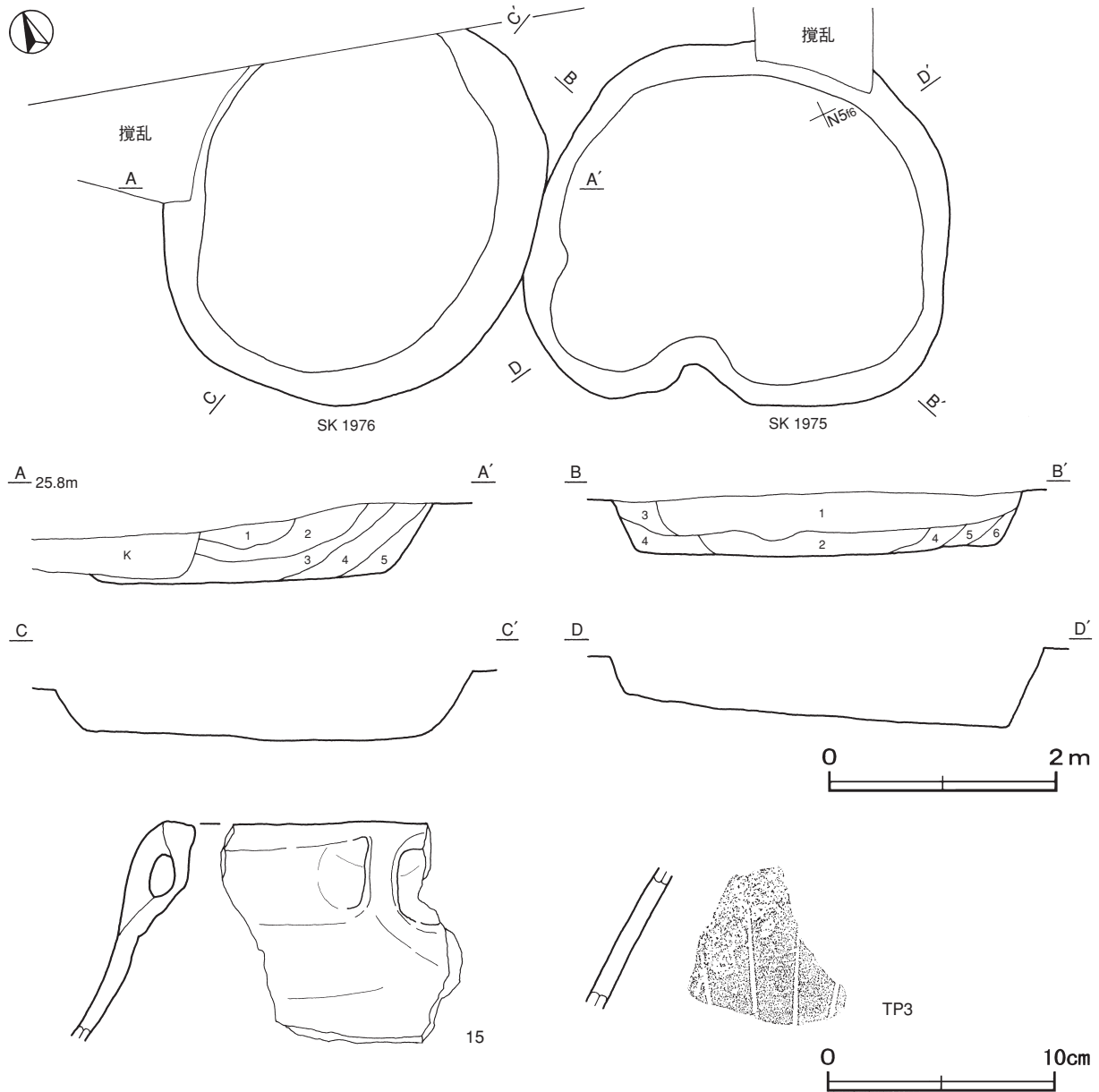
第34図 第1966号土坑実測図

第1970号土坑（第35図）

位置 調査区中央部のN5d1区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1986号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 推定長径2.38m、短径2.08mの楕円形で、長径方向はN-36°-Eである。深さは34cmで、底面は



第36図 第1975・1976号土坑，第1976号土坑出土遺物実測図

第1976号土坑（第36図）

位置 調査区中央部のN 5 e4区で，標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1975号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径3.58m，推定短径3.20mの楕円形と推測できる。長径方向はN-49°-Eである。深さは54cmで，底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 5層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子極微量 | 4 褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量，炭化粒子極微量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片22点（内耳鍋21・播鉢1），石製品1点（砥石）のほか，須恵器片1点（甕）が覆土中から出土している。

所見 時期は，出土土器から中世後半と考えられるが性格は不明である。

第1976号土坑出土遺物観察表（第36図）

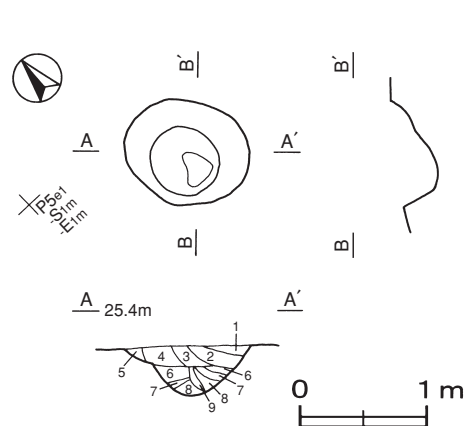
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
15	土師質土器	内耳鍋	-	(9.7)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	耳接合部付近ナア 外面煤付着	覆土中	5% PL15
TP3	土師質土器	播鉢	-	(6.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内面1条1単位の播り目	覆土中	

第1991号土坑（第37図）

位置 調査区南部のP 5 e1区で，標高25.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.00m，短径0.81mの楕円形で，長径方向はN-45°-Wである。深さは29cmで，底面は皿状を呈している。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 9層に分層できる。ロームブロックを含み，堆積状況から埋め戻されている。



遺物出土状況 土師質土器片1点（小皿）が覆土中から出土している。

所見 時期は，第79号掘立柱建物跡との関連が想定されることから，中世と考えられるが性格は不明である。

第37図 第1991号土坑実測図

第2016号土坑（第38図）

位置 調査区中央部のN 4 b6区で，標高25mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第26号地下式坑に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた長軸1.42m，推定短軸1.22mで，隅丸長方形と推測できる。長軸方向はN-57°-Eである。深さは46cmで，底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 5層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子微量，焼土粒子・炭化粒子極微量	4	褐色	ローム粒子中量
2	暗褐色	ロームブロック少量，炭化粒子微量	5	褐色	ロームブロック中量
3	褐色	ロームブロック少量			

遺物出土状況 土師質土器片1点（小皿）が覆土中から出土している。17は覆土下層から出土している。

所見 時期は，重複関係や出土土器から16世紀代と考えられるが性格は不明である。

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m) 長径×短径	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
1918	O 4 d0	N-45°-W	楕円形	3.85×2.36	70	緩斜	平坦	人為	土師質土器	SD383・402・SF23→本跡
1924	N 5 d6	N-47°-W	楕円形	2.48×2.22	50	緩斜	皿状	自然	土師質土器・陶器・石製品	本跡→SK1923
1926	N 5 c6	-	円形	0.93×0.93	38	外傾	平坦	人為	土師質土器・陶器	
1929	N 5 a9	N-28°-E	楕円形	1.50×0.82	60	外傾	平坦	人為	土師質土器・磁器	
1953	N 5 b7	N-53°-W	隅丸長方形	1.24×0.84	30	外傾	平坦	人為	土師質土器	SD388→本跡
1956	N 4 f0	N-56°-E	不整楕円形	3.02×1.74	32	緩斜	皿状	自然	土師質土器・土師器	
1957	N 4 c8	N-22°-W	楕円形	2.85×2.38	32	緩斜	平坦	自然	土師質土器・土師器	
1966	M 4 j8	N-41°-W	楕円形	1.86×0.82	10	緩斜	平坦	人為	土師質土器	
1970	N 5 d1	N-36°-E	[楕円形]	[2.38]×2.08	34	緩斜	皿状	自然	土師質土器	SK1986
1975	N 5 f5	N-60°-W	不整楕円形	3.64×3.20	68	外傾	平坦	人為	土師質土器・陶器	本跡→SK1976
1976	N 5 e4	N-49°-E	[楕円形]	3.58×[3.20]	54	外傾	平坦	自然	土師質土器・石製品	SK1975→本跡
1991	P 5 e1	N-45°-W	楕円形	1.00×0.81	29	緩斜	皿状	人為	土師質土器	
2016	N 4 b6	N-57°-E	[隅丸長方形]	(1.42)×[1.22]	46	緩斜	平坦	自然	土師質土器	本跡→UP26
2021	N 4 c1	-	円形	0.72×0.72	12	緩斜	平坦	自然	土師質土器	

(6) 溝跡

今回の調査で、中世とみられる溝跡13条が確認されている。以下、それらの溝跡について解説する。なお、平面図については遺構配置図(付図1)で掲載するにとどめる。

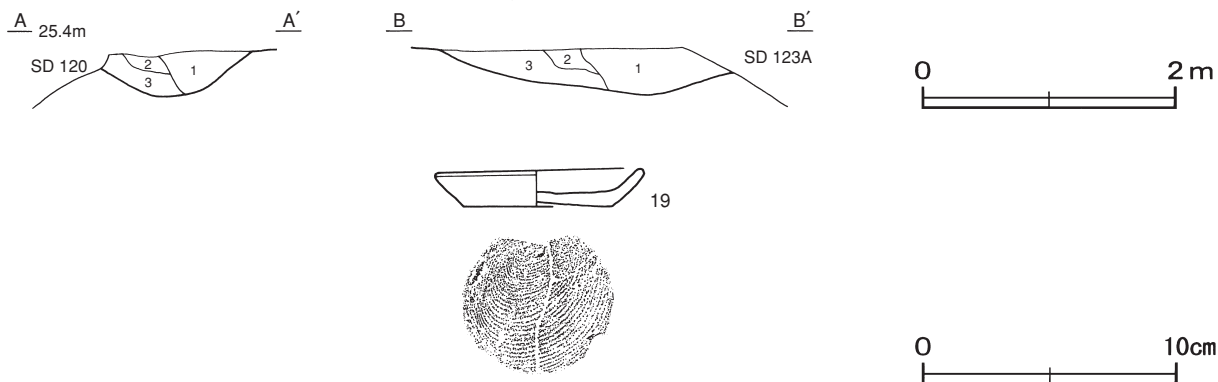
第19B号溝跡(第40図, 付図1)

位置 調査区北東部のM 6 a4~M 6 j0区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第54号井戸跡, 第1974・2032号土坑を掘り込み, 第120・123A・396号溝に掘り込まれている。第395号溝跡とも重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と形状 M 6 j0区付近から北西方向(N-33°-W)へほぼ直線的に延びて, M 6 a4区で調査区域外に至っている。確認された長さは31.6mで, 上幅0.40~1.56m, 下幅0.12~0.68m, 深さは34~36cmである。断面形はU字状で, 底面の標高は南東部がやや高く, 北西部へ行くに従って若干低くなっている。南東端部との比高は12cmである。

覆土 A-A', B-B'とも3層に分層できる。いずれも, 堆積状況からみて埋め戻されている。



第40図 第19B号溝跡・出土遺物実測図

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子極微量
 2 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 3 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師質土器片 8 点（小皿 4・内耳鍋 3・甕 1）のほか、縄文土器片 1 点（深鉢），須恵器片 1 点（甕）が覆土中から出土している。

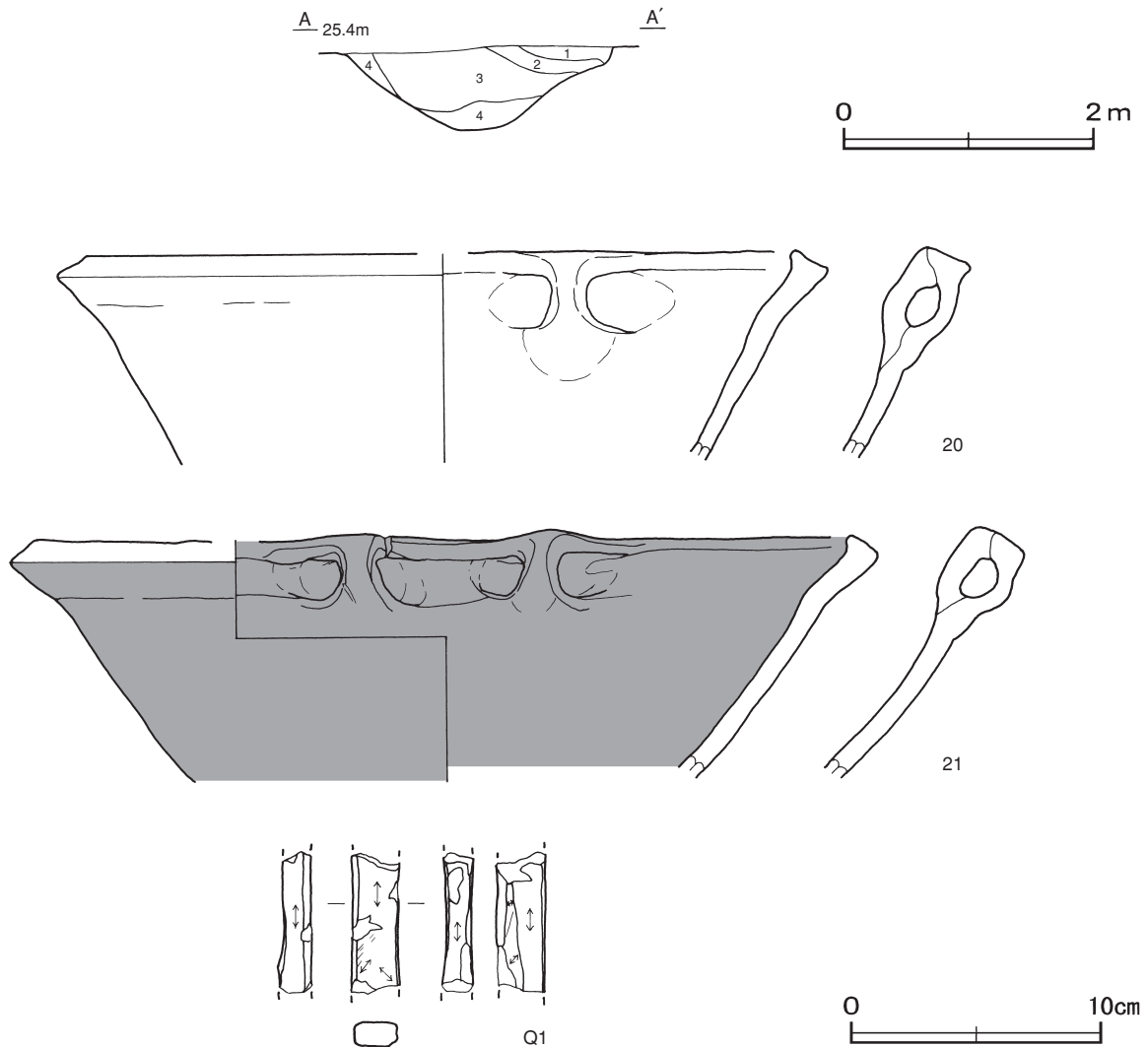
所見 第120・123A号溝からの雨水等を集水し，東方向の谷津に排水する機能を有していたと想定でき，区画としての機能も有していたと考えられる。時期は，重複関係から16世紀後半以前と考えられる。

第19B号溝跡出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
19	土師質土器	小皿	8.1	1.5	5.9	赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中	70% PL13

第120号溝跡（第41図，付図1）

位置 調査区北東部のL 6 h6～M 6 e2区で，標高25mの台地平坦部に位置している。



第41図 第120号溝跡・出土遺物実測図

重複関係 第19B号溝跡を掘り込んでいる。第135・394号溝跡とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 M6e2区付近から北東方向（N-30°-E）へほぼ直線的に延びて、L6h6区で調査区域外に至っている。確認された長さは15.0mで、上幅1.40~1.84m、下幅0.16~0.50m、深さは67cmである。断面形はU字状で、底面の標高は北東部が最も高く、南西部へ行くに従って低くなっている。北東端部との比高は36cmである。

覆土 4層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-----------------------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 3 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 粘土ブロック多量, ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 4 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師質土器片15点（内耳鍋13・播鉢1・甕1）、陶器片1点（甕）、石製品2点（砥石・石臼）、瓦片1点（平瓦）のほか、縄文土器片1点（深鉢）が覆土中から出土している。21は覆土下層から出土している。

所見 東方向には谷津があることから、第19B・135号溝と連結し、雨水を排水していたと考えられる。地境に沿っていることから区画としての機能も有していたと推測できる。時期は、出土土器から16世紀後半と考えられる。

第120号溝跡出土遺物観察表（第41図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
20	土師質土器	内耳鍋	[28.6]	(8.3)	-	長石・石英・雲母・小礫	明褐	普通	耳部貼り付け	覆土中	5% PL14
21	土師質土器	内耳鍋	[33.0]	(10.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	外・内面煤付着 耳部貼り付け	覆土下層	5% PL14

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置	備考
Q1	砥石	(5.7)	1.9	1.4	(23.1)	凝灰岩	6面砥面	覆土中	PL17

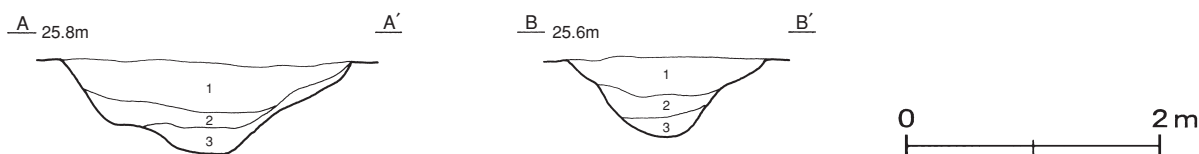
第123A号溝跡（第42図，付図1）

位置 調査区北東部のL6i8~M6g5区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第19B・135・390号溝跡を掘り込んでいる。第82・83号掘立柱建物跡、第395・396号溝跡、第82号ピット群とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 M6g5区付近から北東方向（N-24°-E）へほぼ直線的に延びて、L6i8区で調査区域外に至っている。確認された長さは32.0mで、上幅1.54~2.80m、下幅0.18~0.74m、深さは55~79cmである。断面形はU字状で、底面の標高は北東部が最も高く、南西部へ行くに従って低くなっている。北東端部との比高は37cmである。

覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。



第42図 第123A号溝跡実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

所見 第19B・135号溝と連結し、雨水等を排水していたと考えられる。時期は、今回調査した部分から遺物の出土がないため明確にできないが、『茨城県教育財団文化財調査報告第285集』で出土土器と重複関係から16世紀後半と報告されている。本跡に掘り込まれている第19B号溝跡が16世紀後半以前と考えられるため、重複関係とも一致する。

第135号溝跡（第43～45図，付図1）

位置 調査区北東部のM6e1～M6h6区で、標高25mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第123A号溝に掘り込まれている。第120・390号溝跡とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 M6h6区付近から西方向（N-80°-W）へ直線的に延びて、M6e1区付近で折り返し、再び直線的に延びているU字形の溝である。確認された長さは35.1mで、上幅1.40～2.72m、下幅0.20～0.48m、深さは53～78cmである。断面形はU字形で、底面の標高は西端部が最も高く、東部へ行くに従って低くなっている。西端部との比高は27cmである。

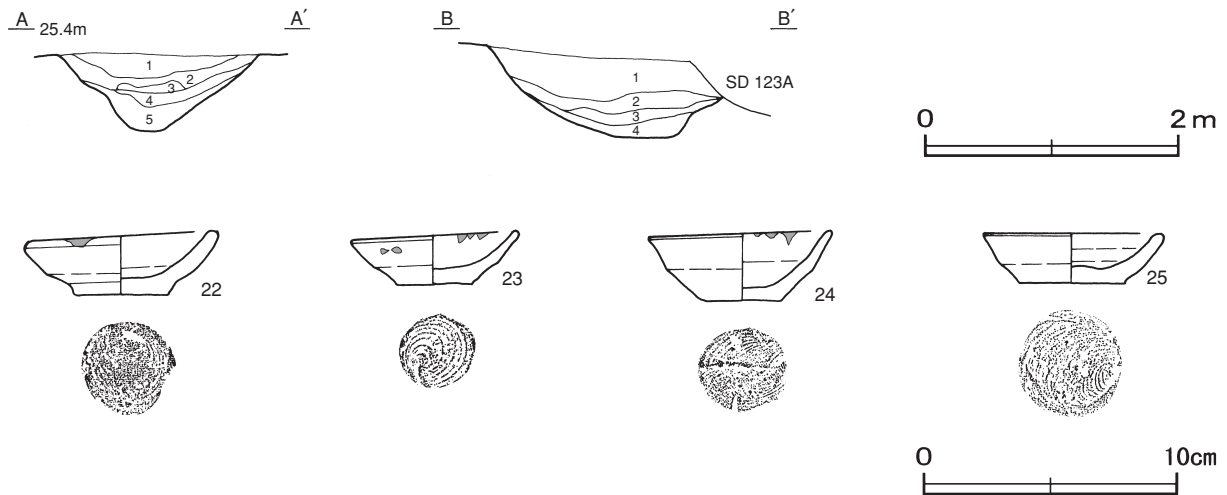
覆土 5層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

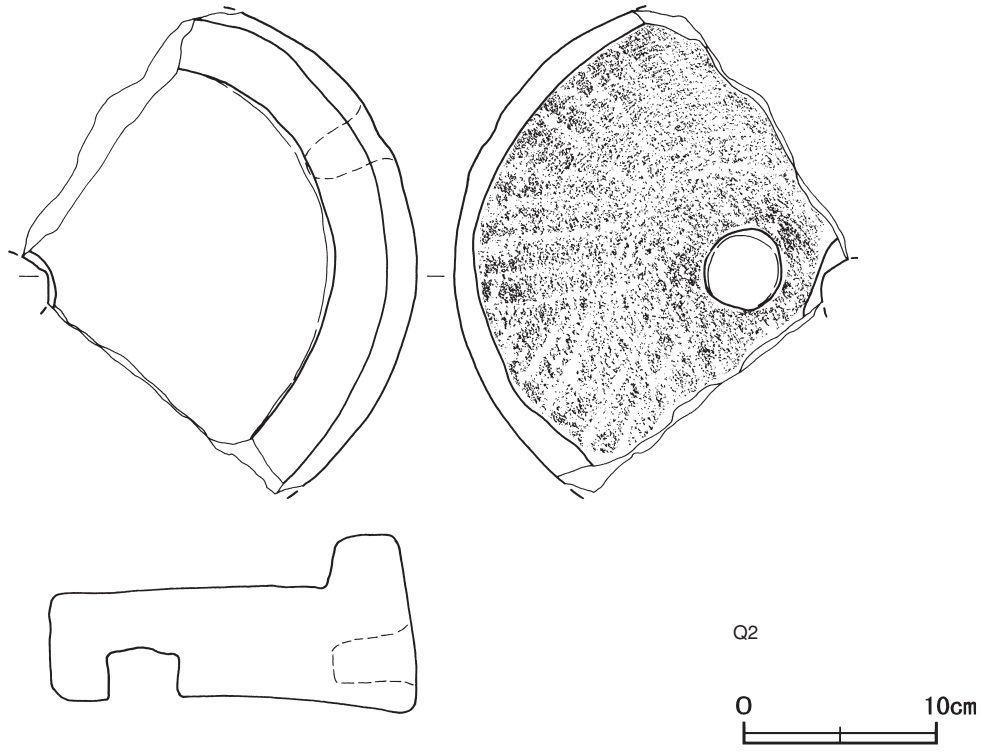
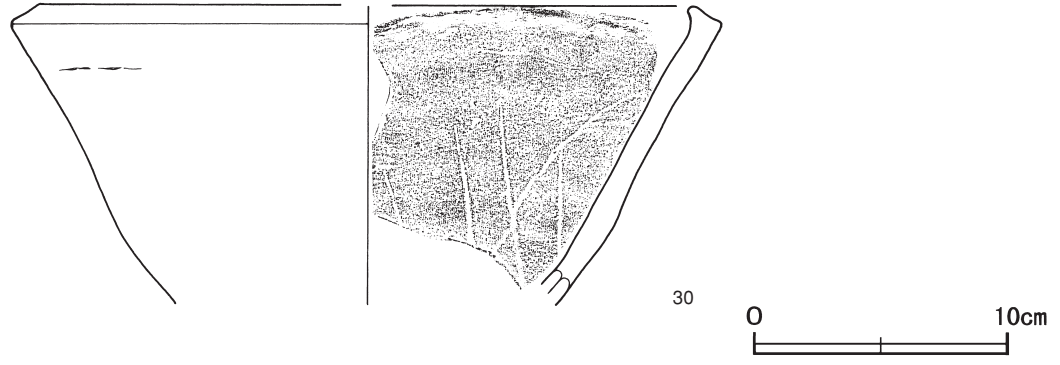
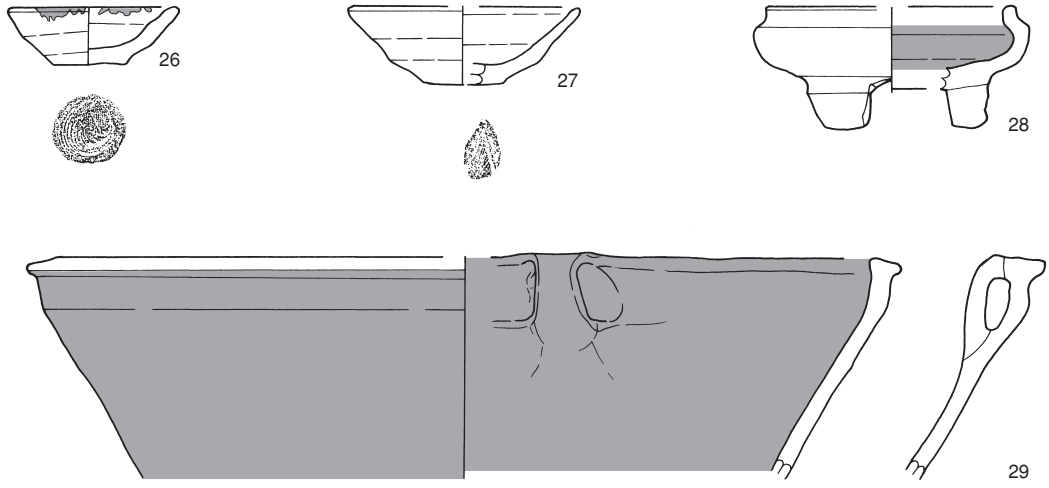
- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 灰白色 粘土粒子多量
- 4 黒褐色 ローム粒子微量
- 5 暗赤褐色 粘土ブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片62点（小皿16・内耳鍋35・甕6・香炉1・挿鉢4）、陶器片4点（甕）、石製品2点（石臼・茶臼）、瓦片3点（平瓦）のほか、縄文土器片1点（深鉢）、土師器片2点（甕）、須恵器片1点（不明）が覆土中から出土している。28～30は覆土上層、22・Q2は覆土中層からそれぞれ出土している。

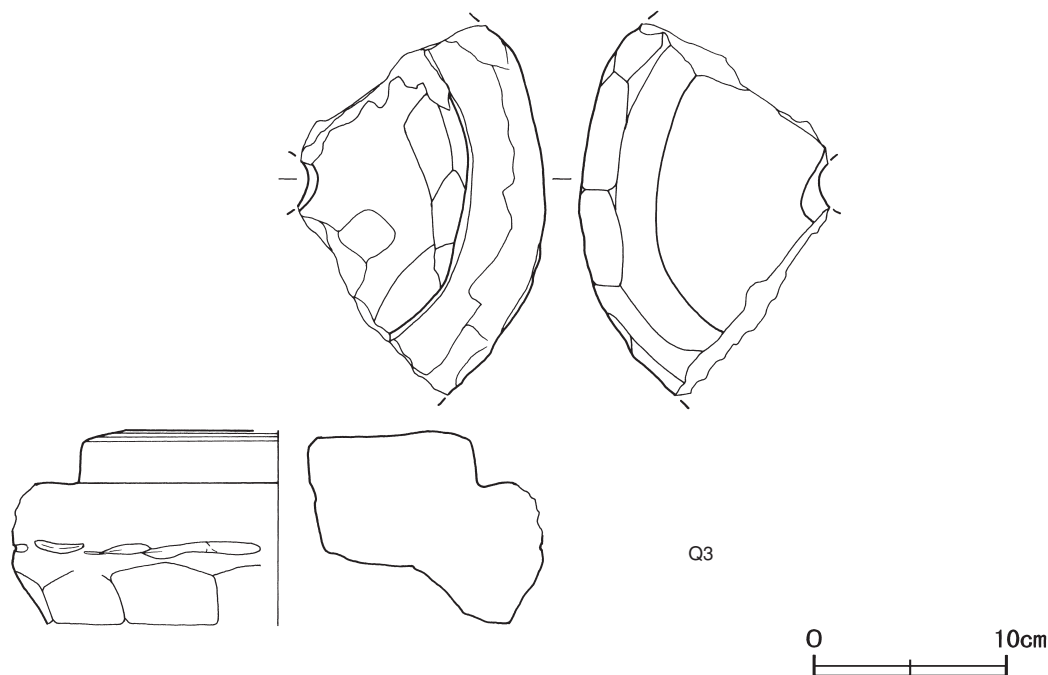
所見 第120号溝と連結し、雨水等を排水していたと考えられる。時期は、『茨城県教育財団文化財調査報告第285集』で出土土器と重複関係から16世紀後半と報告されている。今回の調査で出土した遺物からも、同様に16世紀後半と考えられる。



第43図 第135号溝跡・出土遺物実測図



第44图 第135号溝跡出土遺物実測図(1)



第45図 第135号溝跡出土遺物実測図(2)

第135号溝跡出土遺物観察表 (第44・45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
22	土師質土器	小皿	7.2	2.5	3.6	雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外・内面ロクロナデ 口縁部油煙付着 底部回転糸切り	覆土中層	100% PL13
23	土師質土器	小皿	6.4	2.1	3.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	外・内面ロクロナデ 口縁部・体部外面 油煙付着 底部回転糸切り	覆土中	95% PL13
24	土師質土器	小皿	7.2	2.8	3.2	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面ロクロナデ 口縁部油煙付着 底部回転糸切り	覆土中	95% PL13
25	土師質土器	小皿	6.9	2.0	4.2	長石・赤色粒子	橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中	80% PL13
26	土師質土器	小皿	6.4	2.3	2.8	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面ロクロナデ 口縁部油煙付着 底部回転糸切り	覆土中	80% PL13
27	土師質土器	小皿	[9.0]	3.0	[3.2]	石英・雲母	浅黄橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中	20%
28	土師質土器	香炉	[9.9]	4.9	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外・内面ロクロナデ 内面煤付着 脚部1か所残存 脚部貼り付け	覆土上層	30% PL15
29	土師質土器	内耳鍋	[32.2]	(8.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	外・内面ナデ 外・内面煤付着 耳部貼り付け	覆土上層	5% PL14
30	土師質土器	播鉢	[26.0]	(11.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面1条1単位の播り目	覆土上層	10% PL15

番号	器種	径	孔径	高さ	重量	石材	特徴	出土位置	備考
Q 2	石白(上白)	[28.4]	[4.0]	9.4	(4380)	安山岩	下側に播り目 軸受け横打込孔残存	覆土中層	PL17
Q 3	茶白(下白)	[27.8]	[3.2]	10.2	(2060)	安山岩	下側周縁部のみ残存	覆土中	PL17

第141号溝跡 (第46図, 付図1)

位置 調査区北東部のM 5 h0~N 5 b7区で、標高25mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第388号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 N 5 b7区付近から北東方向 (N-57°-E) へ蛇行しながら延びて、M 5 h0区で調査区域外に至っている。確認された長さは15.2mで、上幅0.76~1.40m, 下幅0.48~0.88m, 深さは8~28cmである。断面形は逆台形状を呈している。底面の標高は南西部が最も高く、北東部へ行くに従って低くなっている。南西部との比高は18cmである。

覆土 3層に分層できる。堆積状況からみて、埋め戻されている。

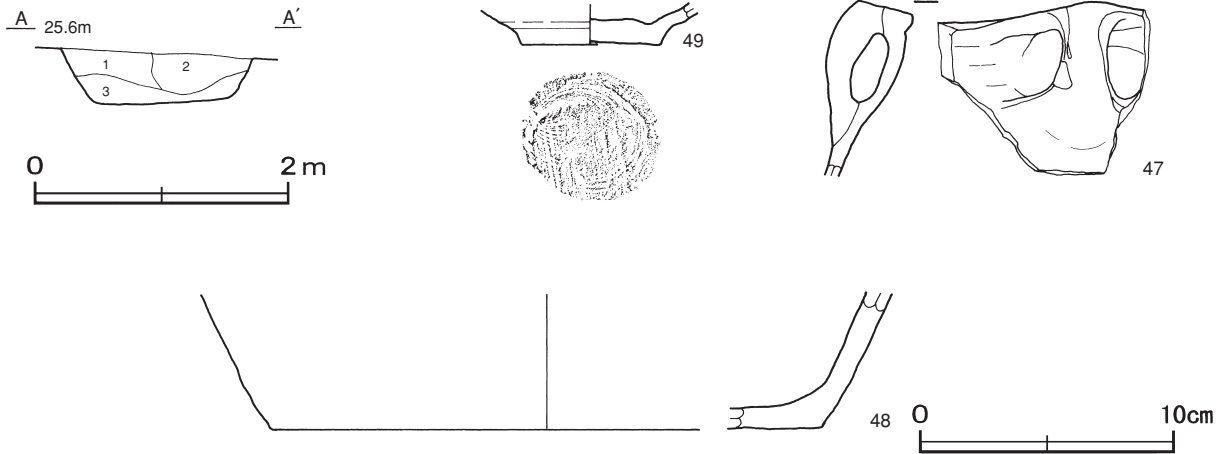
土層解説

1 褐 色 ロームブロック少量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量

3 極暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片27点（小皿2・皿1・内耳鍋24）が覆土中から出土している。

所見 第388号溝と連結し、雨水等を、東方向の谷津に排水していたと推測できる。時期は、出土土器や重複関係から中世後半と考えられる。



第46図 第141号溝跡・出土遺物実測図

第141号溝跡出土遺物観察表（第46図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
49	土師質土器	皿	-	(1.6)	5.5	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	外・内面ロクロナデ後内底面指ナデ 底部回転糸切り後スタレ状圧痕	覆土中	20%
47	土師質土器	内耳鍋	-	(6.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	耳部貼り付け 外面煤付着	覆土中	5% PL15
48	土師質土器	内耳鍋	-	(5.4)	[22.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子・小礫	にぶい赤褐	普通	外・内面ナデ	覆土中	5%

第143A号溝跡（第47図）

位置 調査区中央部のM4h7～N4d3区で、標高25mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第55号井戸跡、第399号溝跡を掘り込み、第53号井戸、第1977号土坑、第392号溝、第24・25号道路に掘り込まれている。第367・404号溝跡とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 N4d3区付近から北東方向（N-57°-E）へ緩やかに蛇行しながら延びて、M4h7区で調査区域外に至っている。確認された長さは12.7mで、上幅0.30～1.20m、下幅0.18～0.44m、深さは20～76cmである。断面形は浅いU字形で段を呈している。底面の標高は南西部が最も高く、北東部へ行くに従って低くなっている。南西部との比高は95cmである。

木橋跡 第53号井戸跡と重複している南西部で確認されている。柱穴は4か所で、深さは10～18cmである。

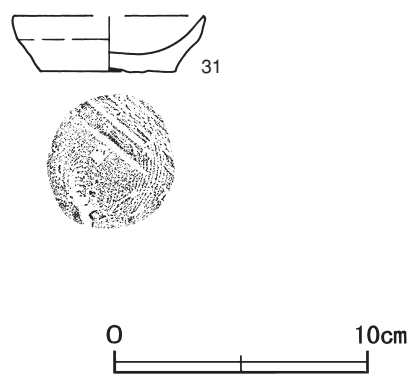
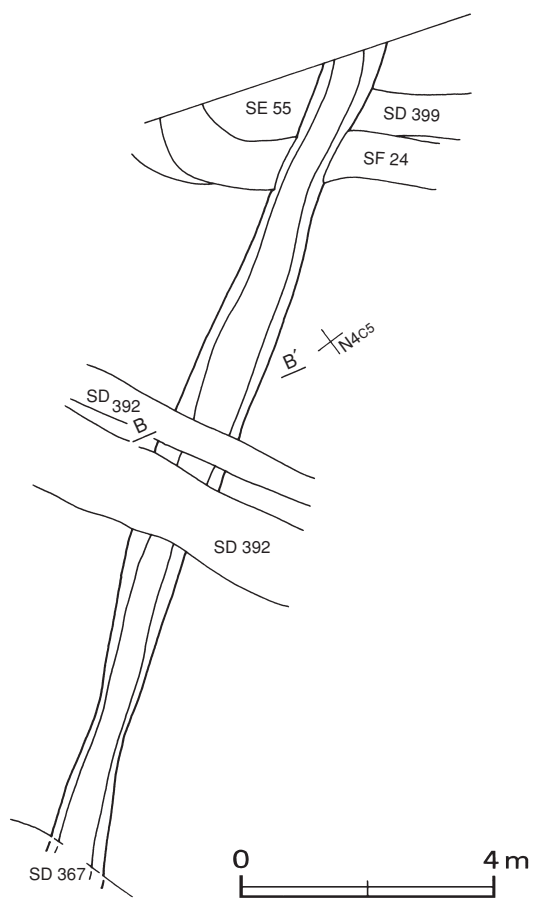
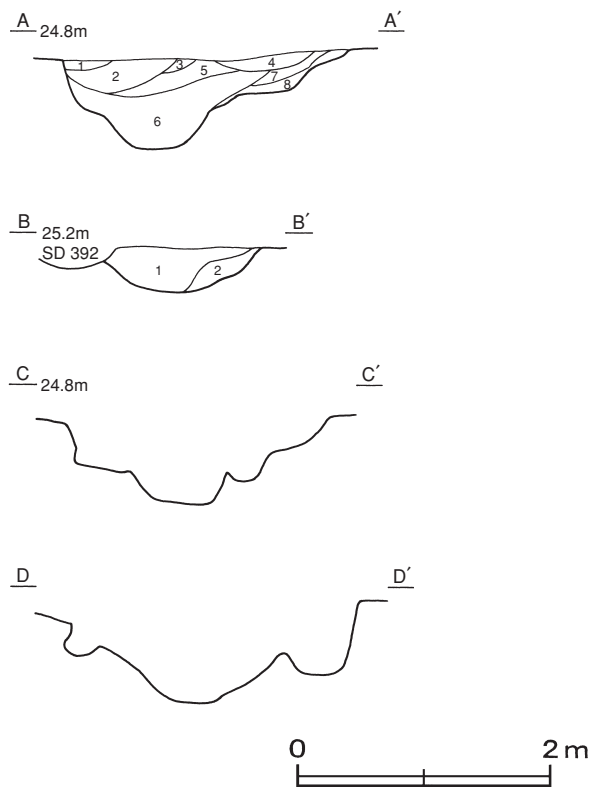
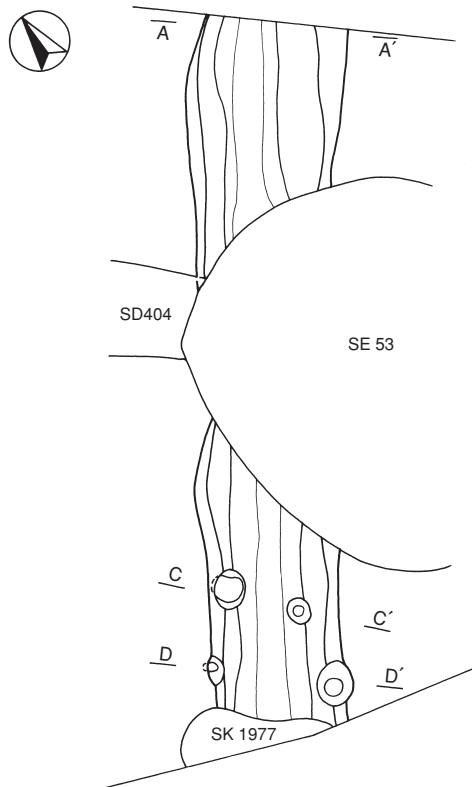
覆土 A-A' は8層、B-B' は2層に分層できる。いずれも、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説（A-A'）

1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
3 明褐色 ロームブロック少量
4 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
5 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
6 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
7 褐色 ローム粒子中量
8 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

土層解説（B-B'）

1 褐色 ローム粒子多量
2 褐色 ローム粒子・粘土粒子多量



第47图 第143A号沟迹・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師質土器片12点（小皿4・皿1・内耳鍋7）のほか、縄文土器片1点（深鉢）が覆土中から出土している。31は覆土中層から出土している。

所見 第367号溝と連結し、雨水を排水していたと考えられる。本跡の南東に地下式坑群が確認できることから、区画としての機能もあったと推測できる。時期は、重複関係から16世紀後半以前と考えられる。

第143A号溝跡出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
31	土師質土器	小皿	[7.6]	2.2	5.4	雲母・赤色粒子	橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り後スグレ状圧痕	覆土中層	60% PL13

第150号溝跡（第48図，付図1）

位置 調査区中央部のN4b8～N4d0区で、標高25mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第19・27号地下式坑を掘り込み、第391号溝に掘り込まれている。

規模と形状 N4d0区付近から北西方向（N-48°-W）へ直線的に延びて、N4c8区で調査区域外に至っている。確認された長さは10.2mで、上幅3.56～4.36m、下幅0.90～1.96m、深さは19～74cmである。断面形は浅いU字形で、底面の標高は南東端部が最も高く、北西部へ行くに従って低くなっている。南東端部との比高は36cmである。

覆土 2層に分層できる。堆積状況から、埋め戻されている。

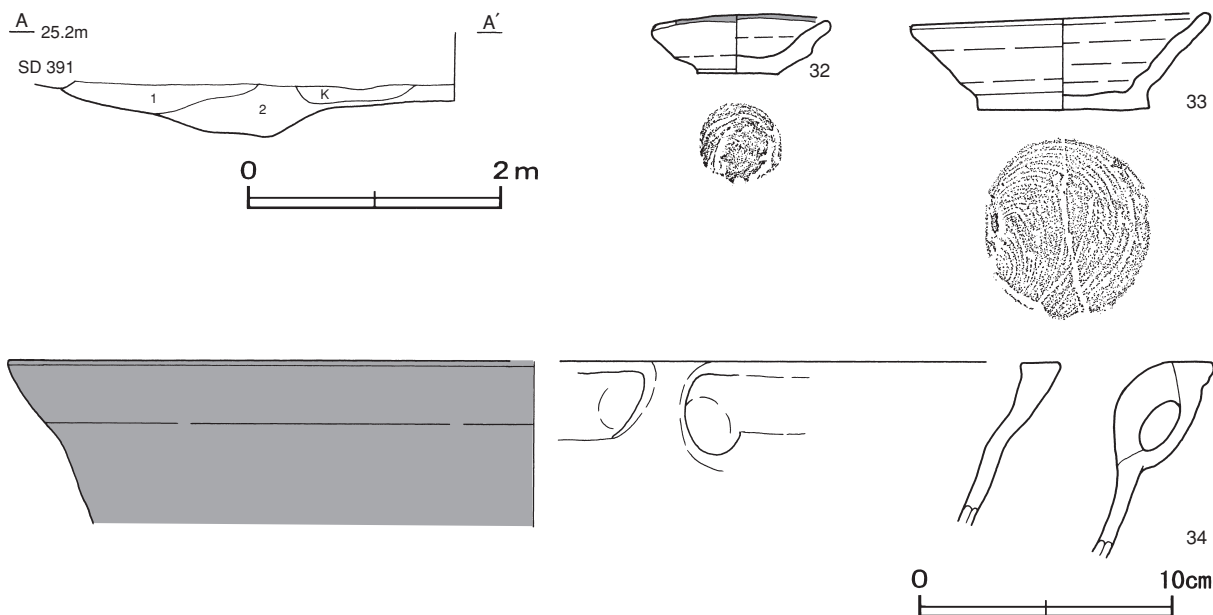
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量（1層より暗）

遺物出土状況 土師質土器片57点（小皿8・内耳鍋48・搦鉢1）のほか、土師器片2点（坏），須恵器片2点（甕）が覆土中から出土している。33・34は、いずれも覆土下層から出土している。

所見 『茨城県教育財団文化財調査報告第285集』で、本跡と同時期と報告されている第139号溝からの雨水等を集水する機能をもっていたものと考えられる。時期は、重複関係から16世紀後半と考えられる。



第48図 第150号溝跡・出土遺物実測図

第150号溝跡出土遺物観察表（第48図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
32	土師質土器	小皿	6.8	2.4	3.2	石英	にぶい橙	普通	外・内面ロクロナデ 口縁部油煙付着 底部回転系切り	覆土中	95% PL13
33	土師質土器	小皿	11.7	3.9	6.7	石英・赤色粒子	橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転系切り	覆土下層	95% PL14
34	土師質土器	内耳鍋	[41.8]	(6.5)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	外・内面ナデ 外面煤付着 耳部貼り付け	覆土下層	5% PL14

第367号溝跡（第49・50図，付図1）

位置 調査区中央部のN 4 b2～O 5 f4区で，標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第383号溝跡，第23号道路跡を掘り込み，第1904・1905号土坑に掘り込まれている。第143A号溝跡とも重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 O 5 f4区付近から西方向（N-71°-W）へ直線的に26.0m延び，M 4 e0区で屈曲して北西方向（N-34°-W）へ緩やかに蛇行しながら39.7m延び，調査区域外に至っている。確認された長さは65.7mで，上幅1.24～3.10m，下幅0.42～1.12m，深さは43～90cmである。断面形はU字形で，底面の標高は南東部が最も高く，北西部へ行くに従って低くなっている。南東部との比高は14cmである。

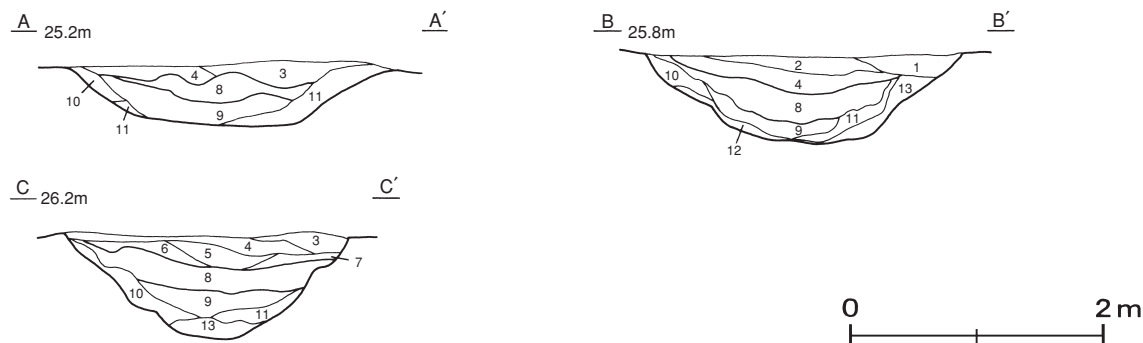
覆土 A-A' は6層，B-B' は9層，C-C' は10層に分層できる。いずれも，レンズ状の堆積状況から自然堆積である。第8・9層上面は硬化しており，道路として使用されていた可能性が高い。

土層解説

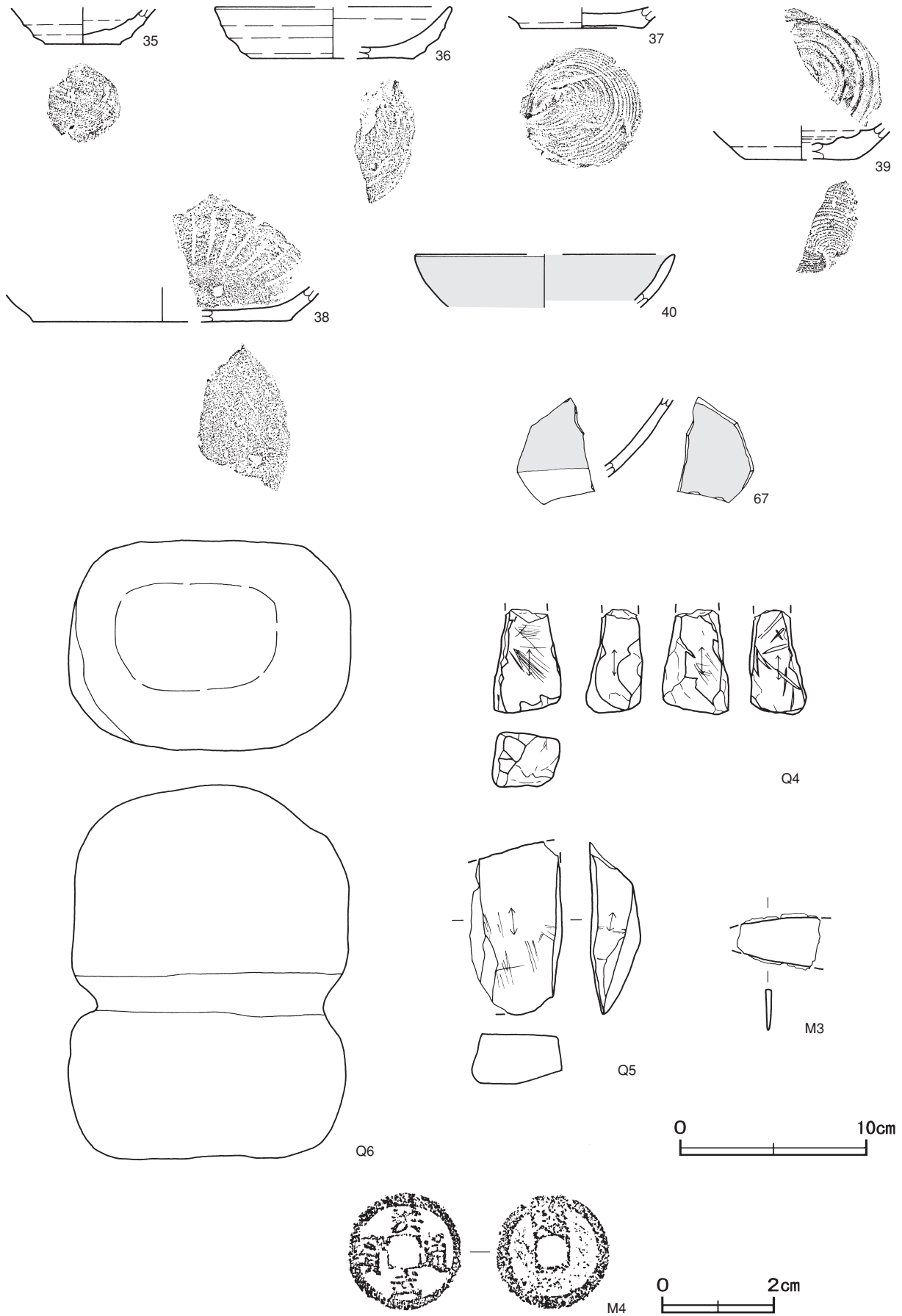
- | | | | |
|-------|-----------------------------|--------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量（縮まり弱い） | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 | 8 黒褐色 | ローム粒子極微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量，粘土粒子・白色粒子微量，焼土粒子極微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子極微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量，焼土粒子極微量 | 10 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 6 黒褐色 | 焼土粒子微量，ローム粒子極微量 | 12 暗褐色 | ローム粒子多量 |
| | | 13 褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師質土器片94点（小皿42・皿1・内耳鍋48・播鉢3），陶器片10点（碗1・平碗1・皿1・灯明皿1・瓶5・甕1），瓦片2点（平瓦），石製品3点（砥石2・五輪塔1），鉄製品1点（鎌），銭貨1点（洪武通寶），のほか，石器1点（打製石斧），縄文土器片1点（深鉢），土師器2点（甕），須恵器片12点（坏3・甕9）が覆土中から出土している。35・39は覆土上層から，37・Q 4～Q 6は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 緩やかに蛇行しながら東方向の谷津に排水する機能をもっていたものと推測できる。また，本跡を境に北東は集落，南西は周辺の耕作地等と遺跡の様相が変わることや，埋没過程で道路として使用されていた可能性が高いことから，区画としての機能もあったと考えられる。出土遺物や重複関係から16世紀後葉には機能が失われ埋没したと考えられる。



第49図 第367号溝跡実測図



第50图 第367号沟迹出土遗物实测图

第367号溝跡出土遺物観察表（第50図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
35	土師質土器	小皿	-	(1.9)	4.0	長石・赤色粒子	にぶい燈	普通	ロクロ成形 内底面指頭ナデ 底部回転糸切り	覆土上層	30%
36	土師質土器	小皿	[12.6]	2.8	[8.8]	石英・赤色粒子	にぶい黄燈	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	覆土中	20%
37	土師質土器	皿	-	(1.1)	6.7	赤色粒子	にぶい燈	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	覆土中層	20%
38	土師質土器	播鉢	-	(1.9)	[14.0]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	外・内面ナデ 内面1条1単位の播り目	覆土中	5%
39	陶器	灯明受皿	-	(1.8)	[6.0]	緻密	にぶい赤褐	普通	ロクロ成形	覆土上層	10%
40	陶器	平碗	[14.0]	(2.8)	-	緻密	にぶい燈	良	外・内面施釉	覆土中	5% PL18
67	陶器	平碗	-	(5.0)	-	緻密	にぶい灰黄褐	普通	ロクロ成形 外・内面施釉 瀬戸	覆土中	5% PL18

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置	備考
Q 4	砥石	(5.6)	3.7	3.1	(73.7)	凝灰岩	砥面4面	覆土中層	PL17
Q 5	砥石	9.3	(5.0)	2.7	(131.1)	凝灰岩	砥面2面	覆土中層	PL17
Q 6	五輪塔	20.2	15.2	11.3	5190	花崗岩	空・風輪	覆土中層	PL17

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置	備考
M 3	鎌	(4.5)	(2.6)	0.3	(10.05)	鉄	刃部欠損	覆土中	

番号	種別	銭名	径	孔幅	重量	材質	初鋳年	特徴	出土位置	備考
M 4	銭貨	洪武通寶	2.12	0.56	3.22	銅	1368年	背一銭	覆土中	PL18

第383号溝跡（第51図，付図1）

位置 調査区中央部のN 5 j3～O 4 j3区で，標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号堀跡を掘り込み，第1906・1918・2019・2029号土坑，第367号溝，第23・26号道路に掘り込まれている。

規模と形状 O 4 j3区付近から北東方向（N-45°-E）へ直線的に延びている。確認された長さは58.1mで，上幅0.24～2.22m，下幅0.16～0.36m，深さは13～42cmである。断面形は逆台形状を呈し，底面の標高は北東端部が最も高く，南西部へ行くに従って低くなっている。南端部との比高は133cmである。

覆土 A-A' は10層，B-B' は6層に分層できる。いずれも，下層は自然堆積であるが，上層は不自然な堆積状況から一部埋め戻されている。

土層解説（A-A'）

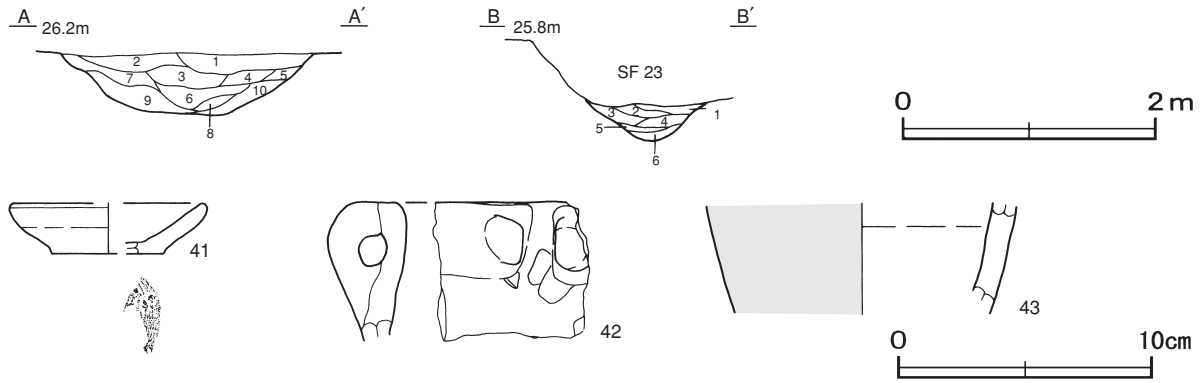
1 褐色	ロームブロック中量	6 暗褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ローム粒子少量	7 黒褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック中量（8層より明）	8 黒褐色	ロームブロック中量
4 黒褐色	ローム粒子中量	9 黒褐色	ロームブロック中量（締まり強い）
5 暗褐色	ロームブロック少量	10 暗赤褐色	ロームブロック少量

土層解説（B-B'）

1 黒褐色	ロームブロック少量	4 暗褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ロームブロック少量（締まり弱い）	5 暗褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ロームブロック微量	6 黄褐色	ロームブロック多量

遺物出土状況 土師質土器片45点（小皿21・皿1・内耳鍋23），陶器片2点（甕・瓶）のほか，縄文土器片1点（深鉢），須恵器片2点（壺）が覆土中から出土している。41・43は，いずれも覆土上層から出土している。

所見 第367号溝からの雨水等を集水していた溝と考えられる。時期は，出土遺物や重複関係から16世紀後半と考えられる。



第51図 第383号溝跡・出土遺物実測図

第383号溝跡出土遺物観察表（第51図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
41	土師質土器	小皿	[7.6]	2.0	[4.4]	石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	覆土上層	20%
42	土師質土器	内耳鍋	-	(5.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	外・内面ナデ 外面煤付着	覆土中	5%
43	陶器	瓶	-	(4.4)	-	緻密	にぶい黄橙	普通	外・内面ロクロナデ	覆土上層	5%

第388号溝跡（第52図，付図1）

位置 調査区中央部のN 5 a7～O 5 c2区で，標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第408号溝跡を掘り込み，第1953・2027号土坑，第141・407号溝，第23号道路に掘り込まれている。

規模と形状 O 5 c2区付近から北東方向（N-36°-E）へ直線的に36m延び，N 5 e7区で屈曲して北方向（N-5°-E）へ直線的に13.5m延びている。確認された長さは49.5mで，上幅0.40～2.70m，下幅0.14～1.80m，深さは31～100cmである。断面形はU字形で，底面の標高は北端部が最も高く，南西部へ行くに従って低くなっている。北端部との比高は26cmである。

覆土 A-A' は2層，B-B'・C-C' は10層に分層できる。いずれも，レンズ状の堆積状況から自然堆積である。第7層上面は硬化しており，道路として使用されていた可能性が高い。

土層解説（A-A'）

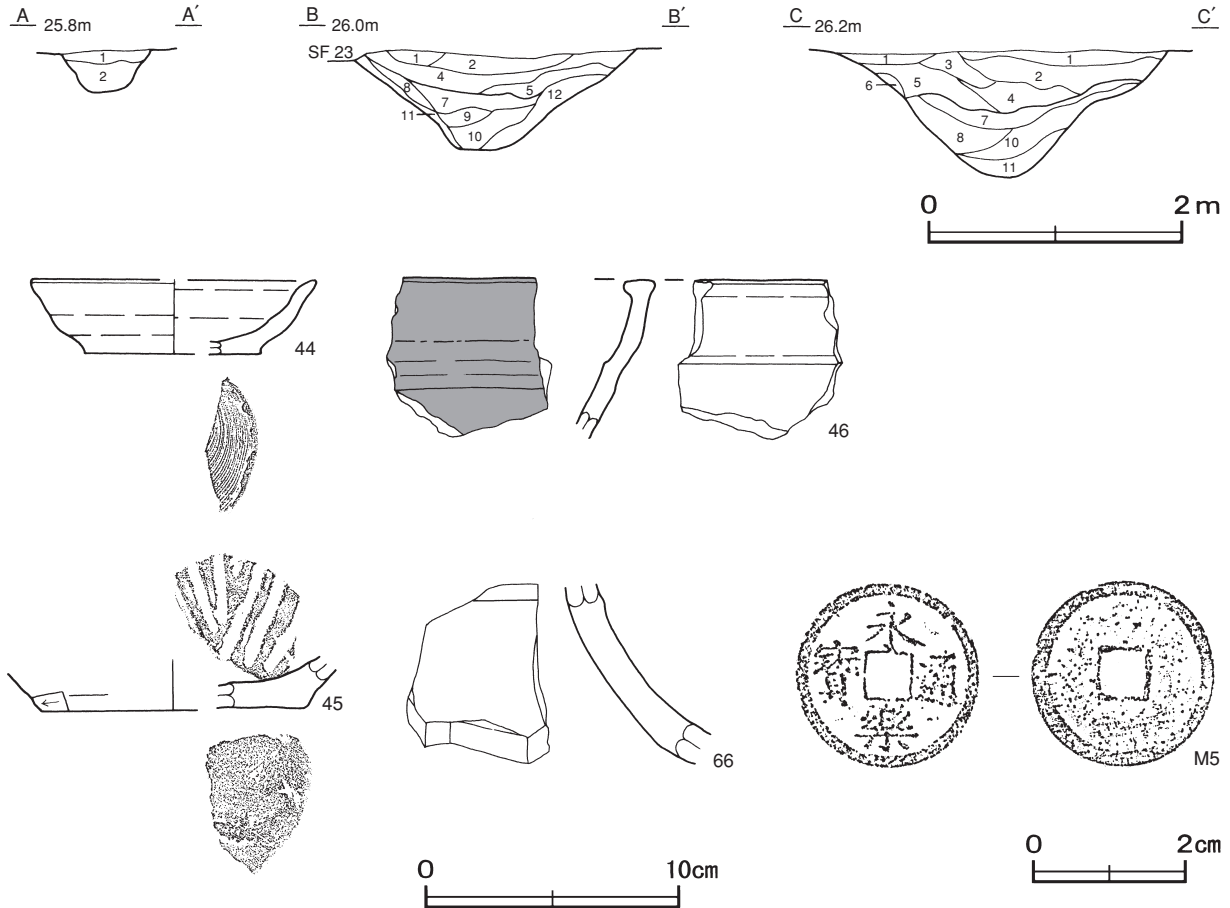
1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 2 褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量

土層解説（B-B'，C-C'）

1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子極微量 7 暗褐色 炭化粒子少量，ロームブロック極微量
 2 褐色 ロームブロック少量 8 暗褐色 ローム粒子少量
 3 褐色 ローム粒子中量 9 暗褐色 炭化粒子少量，ロームブロック微量
 4 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量 10 褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量
 5 褐色 ローム粒子中量，炭化粒子極微量 11 暗褐色 ロームブロック中量，炭化粒子微量
 6 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片30点（小皿2・皿1・内耳鍋24・播鉢3），陶器片9点（碗2・甕7），磁器片2点（碗），銭貨1点（永楽通寶），鉄製品2点（不明）のほか，縄文土器片1点（深鉢）が覆土中から出土している。M5は覆土下層から出土している。

所見 第141号溝からの雨水等を集水し，東方向の谷津に排水するための溝と考える。埋没過程で道路として機能していたことを考慮すると，区画としての機能もあったと推測できる。時期は，出土遺物や重複関係から中世後半と考えられる。



第52図 第388号溝跡・出土遺物実測図

第388号溝跡出土遺物観察表（第52図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
44	土師質土器	小皿	[11.2]	2.9	[7.0]	雲母	燈	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	覆土中	25%
45	土師質土器	播鉢	-	(2.0)	[10.4]	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	外・内面ナデ 底部下端ヘラ削り 内面4条1単位の播り目	覆土中	5%
46	土師質土器	内耳鍋	-	(6.2)	-	長石・石英	にぶい褐	良	外・内面ナデ 外面煤付着	覆土中	5%
66	陶器	甕	-	(7.1)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	外・内面ナデ 常滑	覆土中	5%

番号	種別	銭名	径	孔幅	重量	材質	初鋳年	特徴	出土位置	備考
M5	銭貨	永楽通寶	2.46	0.62	2.36	銅	1408年	無背	覆土下層	PL18

第392号溝跡（第53図，付図1）

位置 調査区中央部のN 4 a3～N 4 i9区で，標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第143A号溝跡を掘り込み，第25号道路に掘り込まれている。

規模と形状 N 4 i9区付近から北西方向（N-37°-W）へ直線的に延びて，N 4 a3区で調査区域外に至っている。確認された長さは19.2mで，上幅0.50～1.04m，下幅0.18～0.30m，深さは52～60cmである。断面形は逆台形状を呈し，底面の標高は南東端部が最も高く，北西部へ行くに従って低くなっている。南東端部との比高は80cmである。

覆土 A-A' は4層，B-B' は5層，C-C' は7層，D-D' は4層に分層できる。いずれも，レンズ

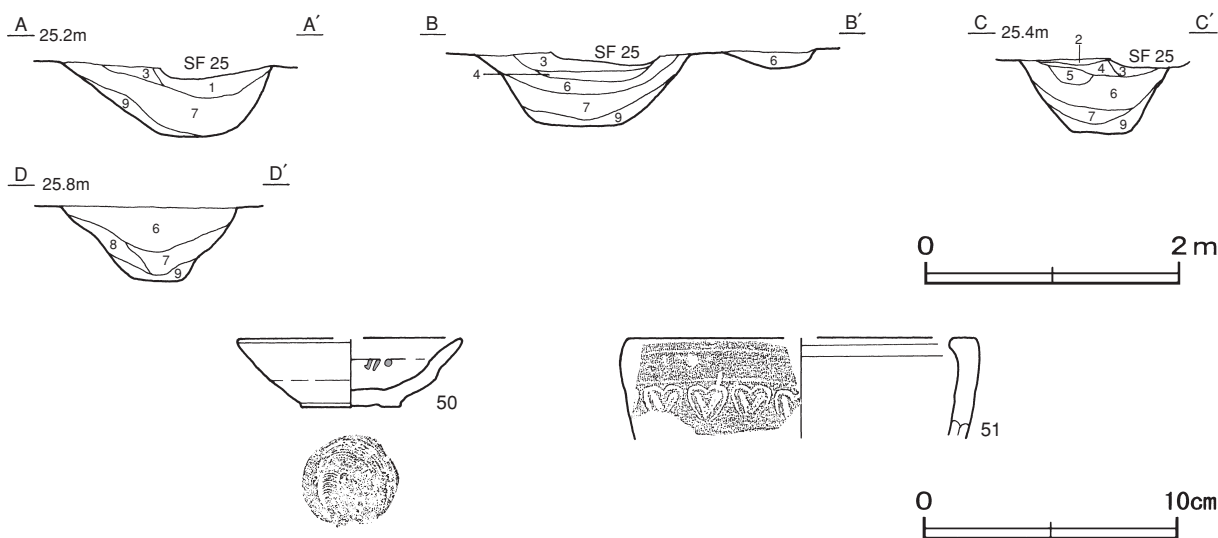
状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------------|--------|----------------------|
| 1 暗褐色 | 粘土ブロック中量，ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 極暗褐色 | ローム粒子極微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量，焼土粒子極微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子微量，焼土粒子・炭化粒子極微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量 | 8 褐色 | ローム粒子中量 |
| | | 9 明褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師質土器片14点（小皿3・内耳鍋9・鉢1・香炉1），陶器片1点（甕）のほか，須恵器片1点（甕），鉄滓1点が覆土中から出土している。50は覆土上層から出土している。

所見 雨水等を，第143A・367号溝を經由し，東方向の谷津に排水していたと想定される。本跡の北東に地下式坑群が確認できることから，区画としての機能もあったと推測できる。時期は，出土土器や重複関係から16世紀後半と考えられる。



第53図 第392号溝跡・出土遺物実測図

第392号溝跡出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
50	土師質土器	小皿	[8.8]	2.7	3.9	赤色粒子	にぶい黄燈	普通	ロクロ成形 内面油煙付着 底部回転糸切り	覆土上層	60% PL13
51	土師質土器	香炉	[14.0]	(3.9)	-	石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	外面スタンプ文	覆土中	5% PL16

第402号溝跡（第54図，付図1）

位置 調査区中央部のO5d1～P5a0区で，標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1918号土坑，第23・25号道路に掘り込まれている。

規模と形状 P5a0区付近から北西方向（N-57°-W）へ緩やかに蛇行しながら延びて，O5d1区で第1918号土坑に切断されている。確認された長さは45.4mで，上幅0.30～1.57m，下幅0.12～1.11m，深さは8～17cmである。断面形は浅いU字形で，底面の標高は北西部が最も高く，南東部へ行くに従って低くなっている。南東部との比高は60cmである。

覆土 A-A'は6層，B-B'は2層に分層できる。いずれも，レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説 (A-A')

1 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
 2 暗褐色 ローム粒子少量
 3 暗褐色 ローム粒子微量

4 褐色 ローム粒子微量, 炭化粒子極微量
 5 褐色 ローム粒子微量
 6 褐色 ロームブロック少量

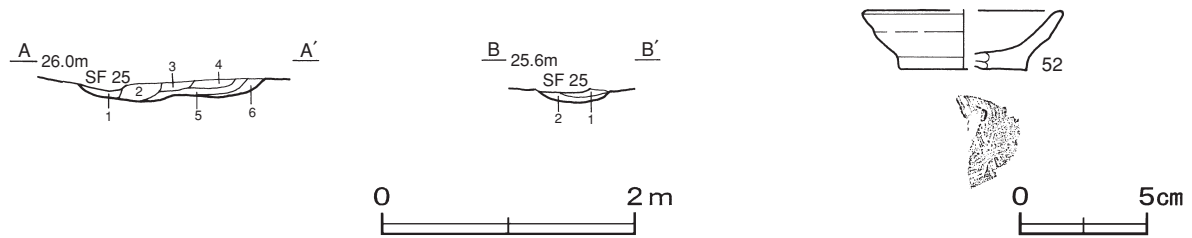
土層解説 (B-B')

1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

2 褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片6点(小皿3・内耳鍋2・焙烙1), 陶器片1点(灯明皿)が覆土中から出土している。

所見 第383号溝からの雨水等を東方向の谷津に排水していたと想定できる。時期は, 出土土器と重複関係から, 16世紀後半と考えられる。



第54図 第402号溝跡・出土遺物実測図

第402号溝跡出土遺物観察表 (第54図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
52	土師質土器	小皿	[7.8]	2.3	[5.0]	石英・赤色粒子	燈	普通	ロクロ成形 内底面ナデ 底部回転糸切り	覆土中	25%

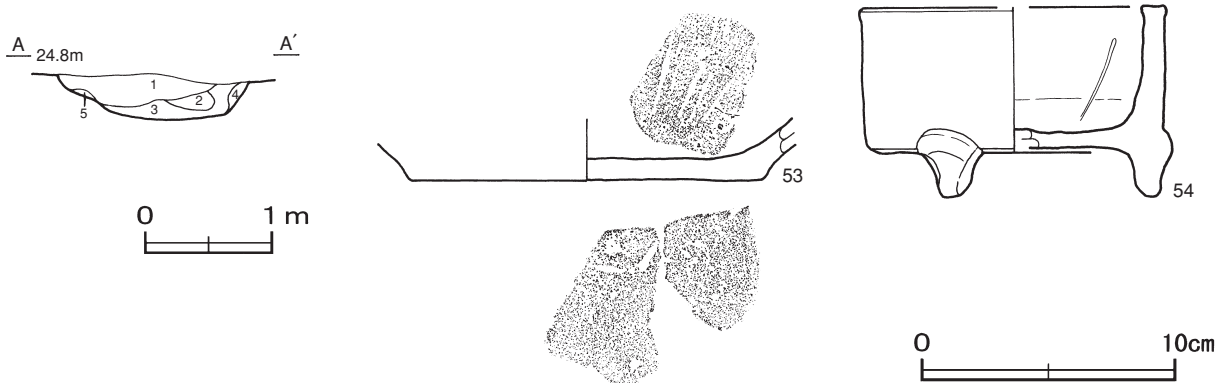
第404号溝跡 (第55図, 付図1)

位置 調査区中央部のM4 i6区で, 標高25mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第53号井戸に掘り込まれている。第143A号溝跡とも重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と形状 M4 i6区付近から北西方向(N-46°-W)へ直線的に1.5m延びて, 調査区域外に至っている。確認された長さは1.5mで, 上幅1.49m, 下幅0.98~1.02m, 深さは45cmである。断面形は浅いU字形で, 底面の標高は24.3mである。

覆土 5層に分層できる。不自然な堆積状況から埋め戻されている。



第55図 第404号溝跡・出土遺物実測図

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック微量
- 2 にぶい褐色 粘土粒子少量, ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 灰褐色 粘土粒子中量, ローム粒子微量
- 5 にぶい褐色 粘土粒子少量, ローム粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片21点（小皿2・内耳鍋15・播鉢3・香炉1）、陶器片2点（甕）、石製品1点（砥石）のほか、須恵器片1点（甕）が覆土中から出土している。

所見 第53号井戸と、その北西部に位置する第43号井戸を繋ぎ、水量調整の機能をもっていたと推測できる。時期は、重複関係から16世紀後半以降と考えられる。

第404号溝跡出土遺物観察表（第55図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
53	土師質土器	播鉢	-	(2.5)	[14.0]	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	内面2本1条の縦位の播り目	覆土中	5%
54	土師質土器	香炉	[12.0]	7.5	-	長石・石英・雲母	にぶい燈	普通	脚部1足残存 脚部貼り付け	覆土中	40% PL15

表6 中世溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 (m, 深さはcm)				断面形	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
				確認長	上幅	下幅	深さ						
19B	M 6 a4~M 6 j0	N-33°-W	直線状	(31.6)	0.40~1.56	0.12~0.68	34~36	U字状	緩斜	平坦	人為	土師質土器	SE54・SK1974・2032→本跡→SD120・123A・396・SD395
120	L 6 h6~M 6 e2	N-30°-E	直線状	(15.0)	1.40~1.84	0.16~0.50	67	U字状	緩斜	皿状	自然	土師質土器, 陶器, 石製品, 瓦	SD19B→本跡, SD135・394
123A	L 6 i8~M 6 g5	N-24°-E	ほぼ直線	(32.0)	1.54~2.80	0.18~0.74	55~79	U字状	緩斜	皿状	自然	土師質土器, 陶器, 石製品, 瓦	SD19B・135・390→本跡, SB82・83・SD395・396・PG82
135	M 6 e1~M 6 h6	N-80°-W N-24°-E	U字状	(35.1)	1.40~2.72	0.20~0.48	53~78	U字状	緩斜	皿状	自然	土師質土器, 陶器, 石製品, 瓦	本跡→SD123A, SD120・390
141	M 5 h0~N 5 b7	N-57°-E	ほぼ直線	(15.2)	0.76~1.40	0.48~0.88	8~28	逆台形	緩斜	平坦	人為	土師質土器	SD388→本跡
143A	M 4 h7~N 4 d3	N-57°-E	ほぼ直線	(12.7)	0.30~1.20	0.18~0.44	20~76	U字状	緩斜	皿状・平坦	自然	土師質土器	SE55・SD399→本跡→SE53・SK1977・SD392・SF24・25, SD367・404
150	N 4 b8~N 4 d0	N-48°-W	直線状	(10.2)	3.56~4.36	0.90~1.96	19~74	U字状	緩斜	皿状・平坦	人為	土師質土器	UP19・27→本跡→SD391
367	N 4 b2~O 5 f4	N-71°-W N-34°-W	緩曲線状	(65.7)	1.24~3.10	0.42~1.12	43~90	U字状	緩斜	皿状	自然	土師質土器, 陶器, 石製品, 鉄製品, 銭貨, 瓦	SD383・SF23→本跡→SK1904・1905, SD143A
383	N 5 j3~O 4 j3	N-45°-E	直線状	(58.1)	0.24~2.22	0.16~0.36	13~42	逆台形	緩斜	皿状	自然・人為	土師質土器, 陶器	堀1→本跡→SK1906・1918・2019・2029, SD367・SF23・26
388	N 5 a7~O 5 c2	N-36°-E N-5°-E	緩曲線状	(49.5)	0.40~2.70	0.14~1.80	31~100	U字状	緩斜	皿状	自然	土師質土器, 陶器, 磁器, 銭貨, 鉄製品	SD408→本跡→SK1953・2027・SD141・407・SF23
392	N 4 a3~N 4 i9	N-37°-W	直線状	(19.2)	0.50~1.04	0.18~0.30	52~60	逆台形	緩斜	平坦	自然	土師質土器, 陶器	SD143A→本跡→SF25
402	O 5 d1~P 5 a0	N-57°-W	ほぼ直線	(45.4)	0.30~1.57	0.12~1.11	8~17	U字状	緩斜	皿状	自然	土師質土器, 陶器	本跡→SK1918・SF23・25
404	M 4 i6	N-46°-W	直線状	(1.5)	1.49	0.98~1.02	45	U字状	緩斜	皿状	人為	土師質土器, 陶器, 石製品	本跡→SE53, SD143A

(7) 堀跡

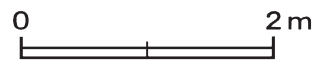
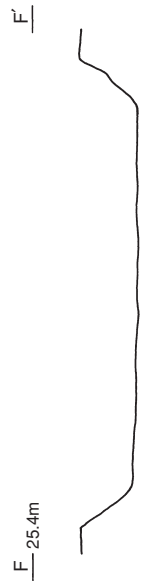
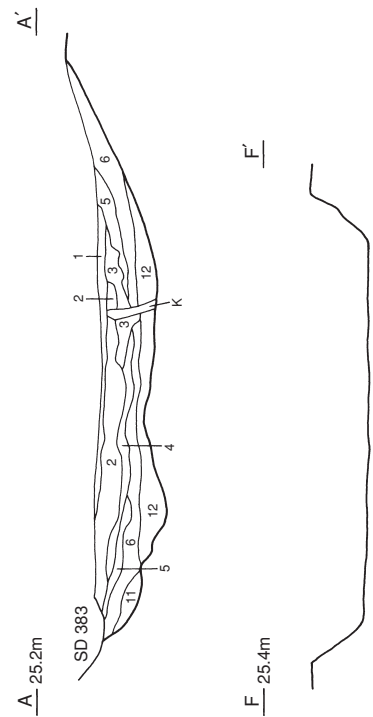
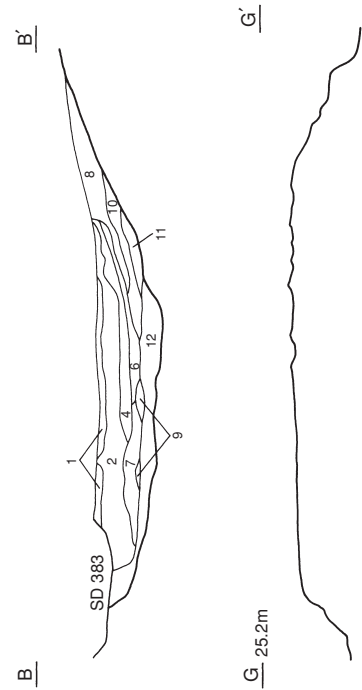
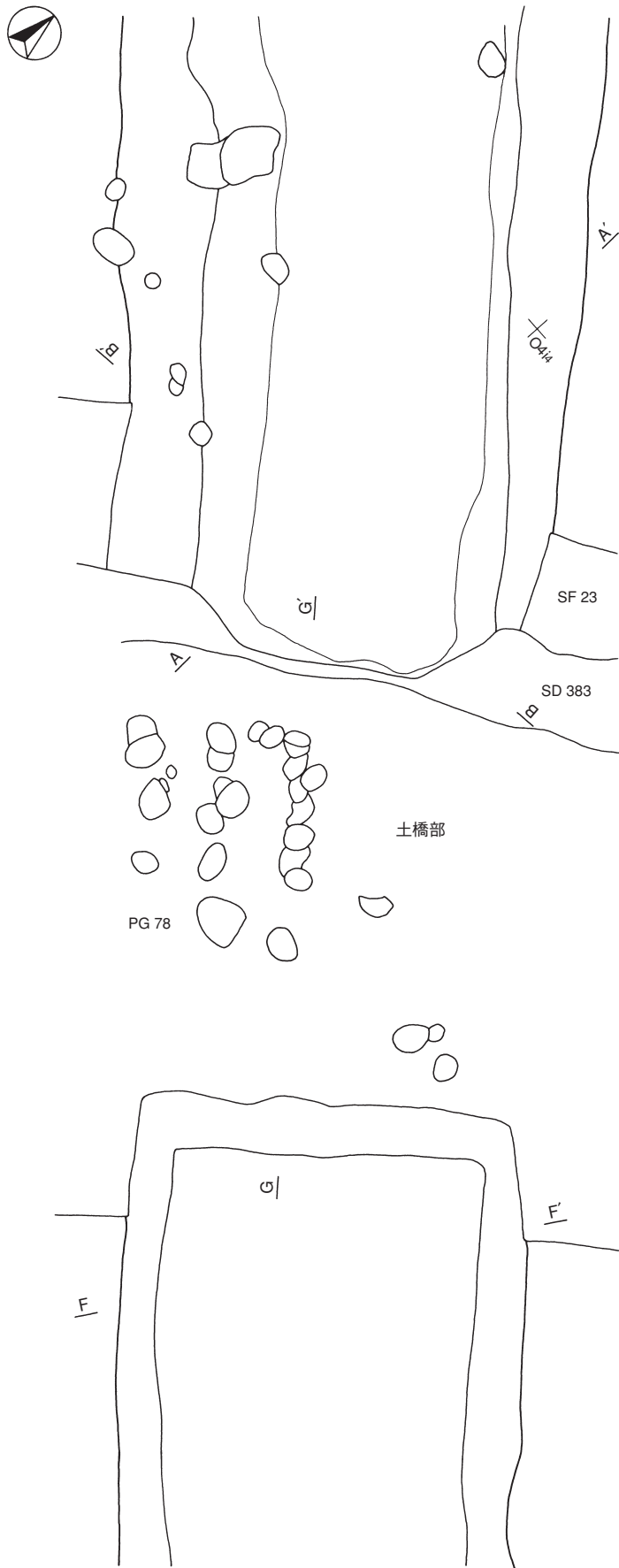
今回の調査で、2区・5区・6区にまたがっている中世とみられる堀跡1条が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。なお、細部の平面図については、今回確認された土橋部のみを掲載し、堀全体は、遺構配置図（付図1）で掲載する。

第1号堀跡（第56~58図, 付図1）

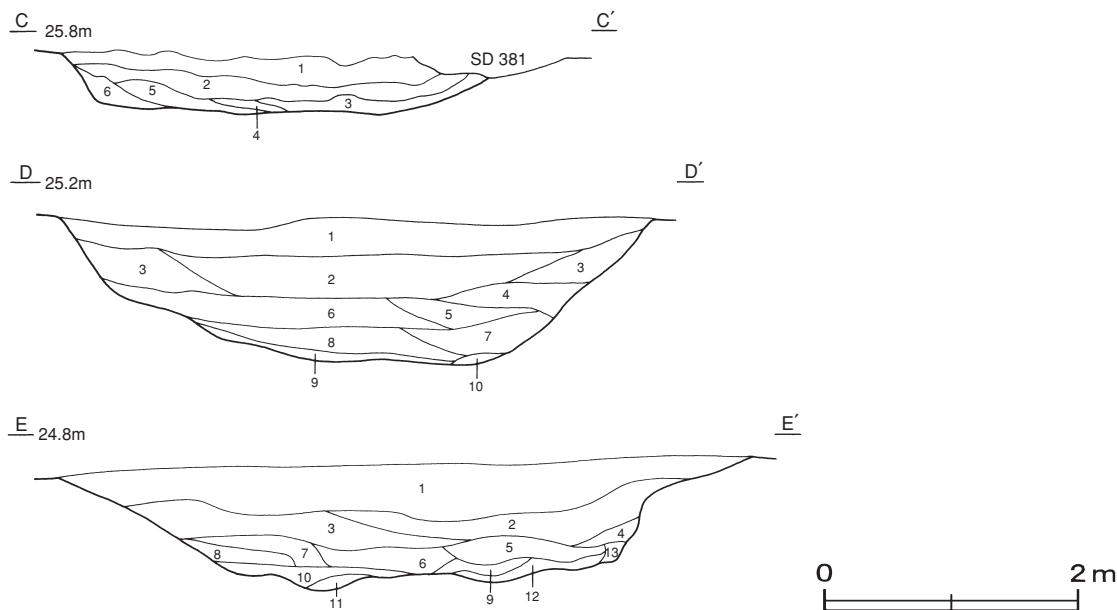
位置 調査5・6区のL 1 j4~R 6 b8区で、標高25.5~24.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第58号井戸跡, 第1916号土坑を掘り込み, 第1915号土坑, 第381・383号溝, 第23号道路に掘り込まれている。また、第77・78号ピット群と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 調査区域外にかかるR 6 b8区から北西方向（N-46°-W）へ直線的に延び、L 1 j4区で調査区



第56图 第1号掘跡土橋部実測図



第57図 第1号堀跡実測図

域外に至っている。今回の調査ではN 3 h3区からR 6 b8区まで157.6mを確認したが、第2・3次調査を加えると、L 1 j4区からR 6 b8区まで総延長240.6mを確認した。O 4 j4区付近では、4.2mほど地山を残した土橋が確認できた。土橋上に掘り込まれたピットから建物跡などの施設は想定できない。北西方と南東方は調査区域外に延びている。上幅3.20～6.60m、下幅1.60～2.70mで、深さは45～110cmである。断面形は逆台形状で、底面の標高は北西部が最も高く、南東部へ行くに従って低くなっている。北西部との比高は160cmである。

覆土 A-A' は8層、B-B' は10層、C-C' は6層、D-D' は10層、E-E' は13層に分層できる。A-A'、B-B'、C-C' は、レンズ状の堆積状況から、自然堆積である。D-D' の第5～10層、E-E' の第2～13層は不自然な堆積状況から埋められているが、他の層は自然堆積である。

土層解説 (A-A', B-B')

- | | | | |
|--------|----------------|---------|------------------------|
| 1 黒 褐色 | ロームブロック微量 | 7 暗 褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒 褐色 | ローム粒子微量 | 8 暗 褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子少量 |
| 3 黒 褐色 | ローム粒子多量 | 9 褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 4 暗 褐色 | ローム粒子微量 | 10 褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子少量 (6層より明) |
| 5 褐色 | ローム粒子多量 | 11 黒 褐色 | 粘土粒子少量 |
| 6 褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子少量 | 12 褐色 | 粘土粒子中量 |

土層解説 (C-C')

- | | | | |
|--------|----------------------|--------|----------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 4 黒 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子極微量 | 5 黒 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 黒 褐色 | ローム粒子微量 | 6 黒 褐色 | ローム粒子中量、黒色粒子少量 |

土層解説 (D-D')

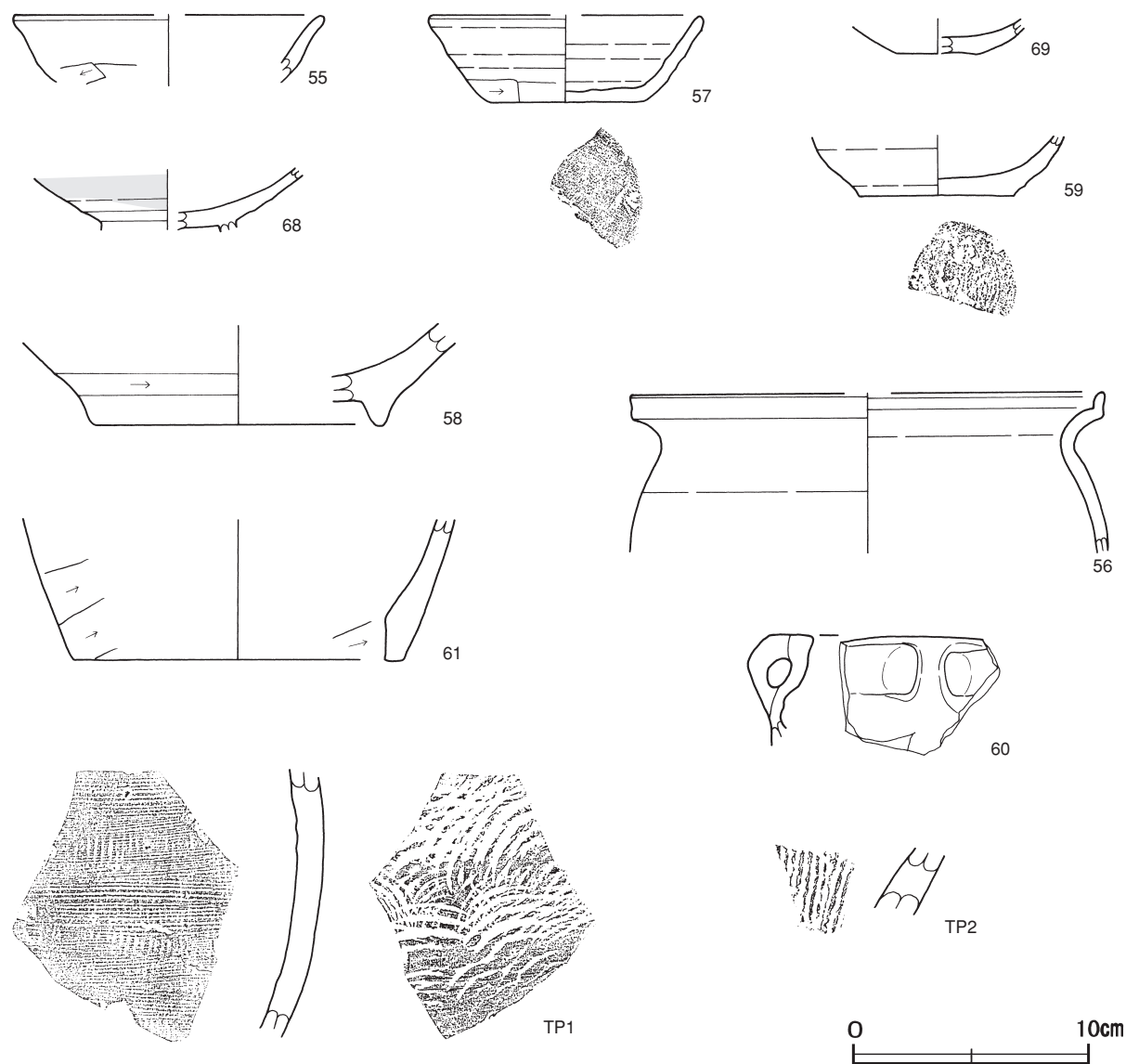
- | | | | |
|--------|--------------------|---------|------------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物微量 | 6 黒 褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子中量 |
| 2 黒 褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック少量 | 7 黒 褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 |
| 3 黒 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 | 8 黒 褐色 | ローム粒子中量、粘土ブロック少量 |
| 4 黒 褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック少量 | 9 黒 褐色 | 粘土ブロック中量 |
| 5 黒 褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 10 黒 褐色 | 粘土ブロック中量 |

土層解説 (E-E')

- | | | | |
|--------|-------------------------|---------|-------------------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子極微量 | 8 黒 褐色 | ローム粒子中量、黄色パミス少量 (7層より明) |
| 2 黒 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子極微量 | 9 黒 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・黄色パミス極微量 |
| 3 黒 褐色 | ローム粒子中量、黄色パミス少量、焼土粒子極微量 | 10 黒 褐色 | 黄色パミス中量、ローム粒子少量、焼土粒子極微量 |
| 4 黒 褐色 | 黄色パミス中量、ローム粒子極微量 | 11 明 褐色 | 黄色パミス・黒褐色粒子少量 |
| 5 黒 褐色 | ローム粒子中量、黄色パミス少量 | 12 黒 褐色 | ローム粒子・黄色パミス極微量 |
| 6 黒 褐色 | ローム粒子・黄色パミス中量 | 13 明 褐色 | 黄色パミス多量 |
| 7 黒 褐色 | ローム粒子中量、黄色パミス少量 (5層より明) | | |

遺物出土状況 土師器片69点（坏24・甕45），須恵器片83点（坏31・盤2・甕48・甌2），土師質土器片18点（小皿14・内耳鍋3・播鉢1），陶器片13点（平碗1・皿1・甕9・播鉢1・不明1），磁器片6点（碗3・皿3），鉄製品1点（不明），瓦片1点（平瓦），馬歯カ（208.9g）のほか，縄文土器片6点（深鉢）が覆土中から出土している。出土土器は時期に幅がある。55・TP2は，いずれも覆土下層から出土している。

所見 調査5区のL1j4区から続く堀であるが，さらに南東の調査区域外へ延びており，全体は確認できない。第1号堀から南西側では，遺構の分布が希薄になることから，堀の北東側を区画していた可能性が高い。9世紀代の土師器・須恵器が比較的多量に出土しているが，陶器播鉢片も覆土下層から出土しており，掘削された上限は9世紀代で，最終的に埋没したのは15世紀前半と考えられる。



第58図 第1号堀跡出土遺物実測図

第1号堀跡出土遺物観察表（第58図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
55	土師器	坏	[13.0]	(28)	-	石英・赤色粒子	にぶい燈	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
56	土師器	甕	[20.0]	(6.8)	-	長石・石英・赤色粒子	燈	普通	内面ヘラナデ	覆土中	5%
57	須恵器	坏	[11.6]	3.7	[6.6]	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	体部下端・底部手持ちヘラ削り	覆土中	20%
58	陶器	鉢	-	(4.3)	[12.4]	長石	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け 内面自然釉	覆土中	5%
59	土師質土器	小皿	-	(2.5)	[6.6]	石英・赤色粒子	燈色	普通	底部回転糸切り	覆土中	20%
60	土師質土器	内耳鍋	-	(5.0)	-	長石・石英・赤色粒子	にふい赤褐	普通	耳付近ナデ 外面煤付着	覆土中	5%
61	須恵器	甗	-	(6.0)	[14.0]	長石・石英・雲母	オリブ黒	普通	外面ヘラ削り 内面下端ヘラ削り	覆土中	5%
68	陶器	平碗	-	(2.6)	-	細砂	灰黄褐	普通	瀬戸	覆土中	5% PL18
69	磁器	皿	-	(1.5)	[3.4]	細砂	灰オリブ	普通	白磁	覆土中	5% PL18
TP1	須恵器	甕	-	(11.4)	-	長石	黄灰	普通	外面叩き後掻き目 内面同心円文の当て 具痕 自然釉	覆土中	
TP2	陶器	播鉢	-	(2.8)	-	長石・石英	灰褐	普通	8条1単位の播り目	覆土中	

(8) 道路跡

第23号道路跡（第59・60図，付図1）

位置 調査区中央部のN5 f7～P3 e8区で，標高26mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2029・2031号土坑，第383・388・400・402・408・410号溝跡，第1号堀跡を掘り込み，第1906・1918号土坑，第367号溝に掘り込まれている。また，第1914・1921・2019号土坑，第78号ピット群と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と構造 P3 e8区付近から北東方向（N-45°-E）へ直線的に延び，P4 a2区でP4 c2区から北方向（N-5°-E）へ9.0m延びている道路跡と結合しているY字形の道路跡である。長さは97.2m，上幅0.68～5.20m，下幅2.28～4.20mで4期にわたって使用面が確認された。第1次面では硬化面の東西に，第3次面では東側に側溝的な機能をもつと思われる掘り込みが確認できた。また，P3 c0～P4 a3区にかけての第3次面では，同幅で連続する円形状の掘り込みが確認された。第59図で示した円形状の掘り込みは，第3次面を掘り込んで構築されている。凹部は，黒褐色土と小石を突き固められている。

覆土 a-a' は27層，b-b' は17層に分層できる。a-a'・b-b' の第2層上面，第1層下部は第1次硬化面，a-a' の第10・13層上面，b-b' の第10層上面は第2次硬化面，a-a' の第14層・第18層上面，b-b' の第34～37層上面，第30～32層下の地山は第3次硬化面，a-a' の第26・27層上面，第25層下の地山，b-b' の第40・41層上面，第36・37層下の地山は第4次硬化面である。

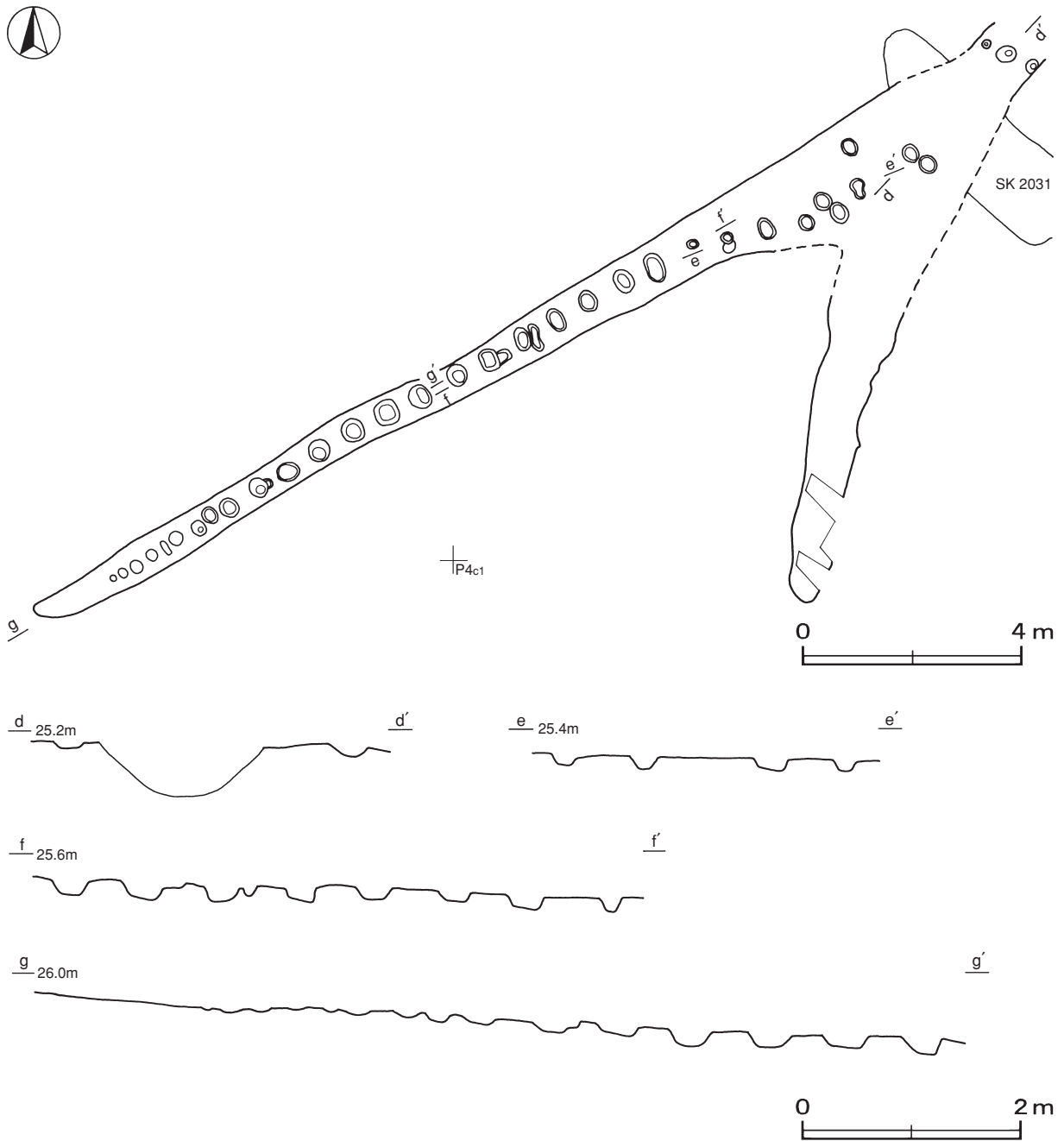
土層解説

1	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量，炭化粒子極微量	19	暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子極微量
2	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量，細砂粒微量	20	黒褐色	ロームブロック少量
3	黒褐色	ローム粒子中量，炭化粒子微量，細砂粒極微量	21	暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子極微量
4	黒褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量，細砂粒極微量（5層より締まり強）	22	暗褐色	ローム粒子微量
5	黒褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量，細砂粒極微量	23	暗褐色	ローム粒子少量，炭化物微量
6	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	24	暗褐色	ロームブロック少量
7	暗褐色	ローム粒子多量，焼土粒子極微量	25	暗褐色	ロームブロック微量
8	黒褐色	ローム粒子微量，焼土粒子極微量	26	暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子極微量
9	黒褐色	ローム粒子中量，焼土粒子少量	27	暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子微量，炭化粒子極微量
10	黒褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量	28	黒褐色	ロームブロック少量（38層より明）
11	黒褐色	ローム粒子少量	29	黒褐色	ロームブロック少量
12	暗褐色	ローム粒子微量，焼土粒子・炭化粒子極微量	30	黒褐色	ロームブロック少量（28層より締まり弱）
13	暗褐色	ローム粒子中量，焼土粒子微量	31	黒褐色	ロームブロック少量（20層より締まり強）
14	灰黄褐色	ローム粒子中量，粘土粒子極微量	32	黒褐色	ロームブロック中量
15	灰黄褐色	赤褐色粒子中量，ローム粒子少量	33	黒褐色	ローム粒子・赤褐色粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
16	暗褐色	ローム粒子少量	34	黒褐色	ローム粒子・赤褐色粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
17	暗褐色	ローム粒子少量，炭化物微量，焼土粒子・炭化粒子極微量	35	褐灰色	赤褐色粒子中量，ローム粒子少量，焼土粒子微量，炭化粒子極微量
18	暗褐色	ロームブロック微量（25層より締まり強）	36	黒褐色	ロームブロック少量，焼土粒子極微量

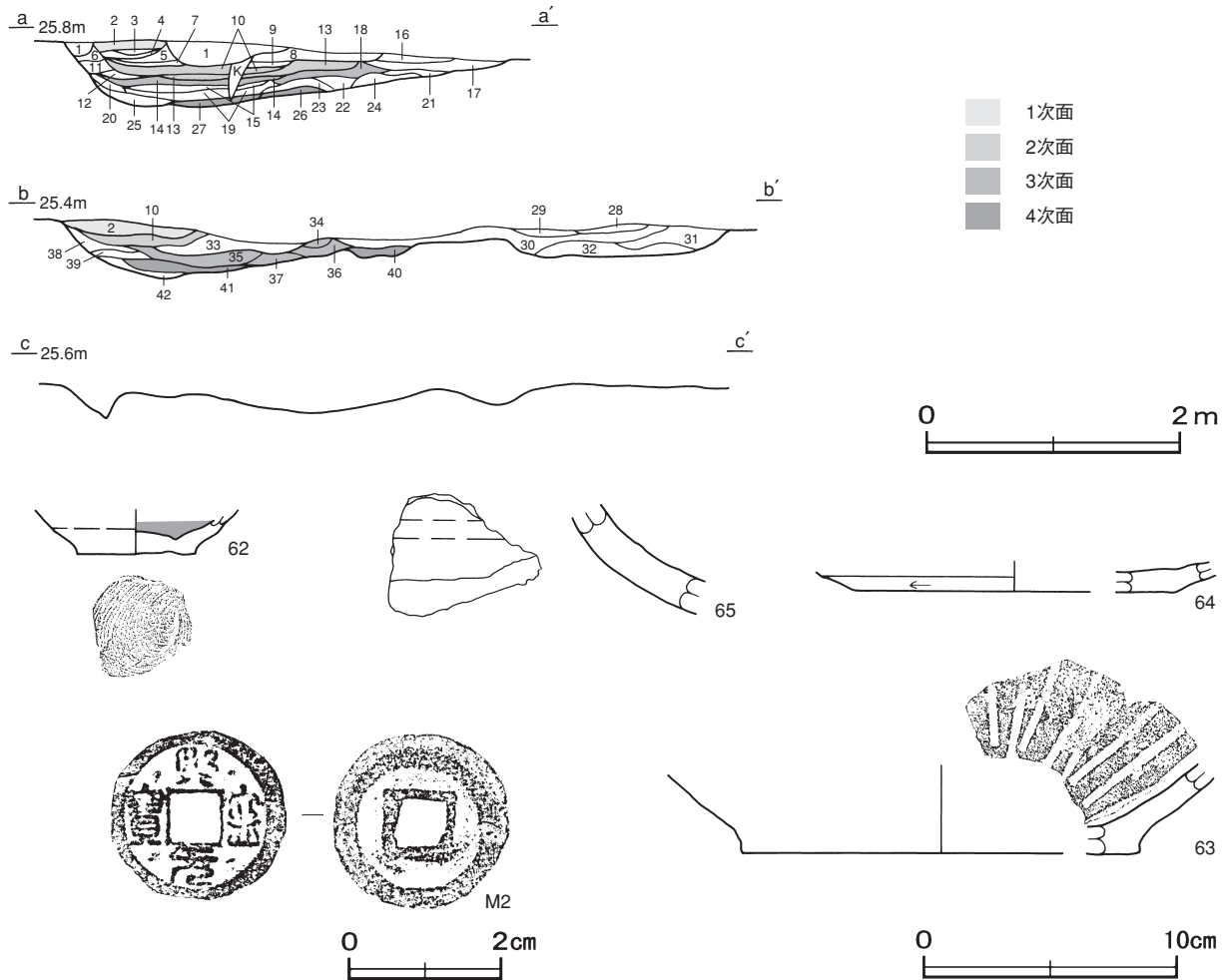
37 黒 色 ロームブロック少量
 38 黒 褐 色 ロームブロック少量 (29層より明)
 39 褐 灰 色 赤褐色粒子中量, ローム粒子微量, 焼土粒子極微量

40 褐 灰 色 ロームブロック中量, 赤褐色粒子少量
 41 灰 黄 褐 色 ローム粒子中量
 42 黒 褐 色 ロームブロック少量 (38層より締まり強)

遺物出土状況 土師質土器片36点 (小皿13・内耳鍋20・播鉢2・不明1), 陶器片7点 (小皿1・大皿1・甕5), 磁器片1点 (碗), 瓦片1点 (平瓦), 銭貨1点 (熙寧元寶), 鉄滓1点のほか, 土師器片3点 (甕), 須恵器片1点 (甕) が覆土中から出土している。62・M2は第1次面, 65は第2次面, 64は第3次面から出土している。
所見 第383号溝が中層まで埋没してから道路として使われ始めたと思われる。1次面から4次面まで大きな時期差はなく, 遺物や重複関係から16世紀後葉に機能していたと考える。



第59図 第23号道路跡第3次面実測図



第60図 第23号道路跡・出土遺物実測図

第23号道路跡出土遺物観察表（第60図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
62	土師質土器	小皿	-	(1.8)	4.6	長石・赤色粒子	燈	普通	底部回転糸切り 内面煤付着	覆土中	20%
63	土師質土器	播鉢	-	(3.5)	[15.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	3条1単位の播り目	覆土中	5% PL15
64	陶器	大皿	-	(1.2)	[12.6]	緻密	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り 瀬戸	覆土中	5%
65	陶器	甕	-	(4.4)	-	石英	にぶい赤褐	良	常滑	覆土中	5%

番号	種別	銭名	径	孔幅	重量	材質	初铸年	特徴	出土位置	備考
M2	銭貨	熙寧元寶	2.40	0.66	3.16	銅	1068年	無背	覆土中	PL18

第24号道路跡（第61図，付図1）

位置 調査区中央部のN 4 a5～N 4 d7区で，標高25mの台地平坦部に位置している。

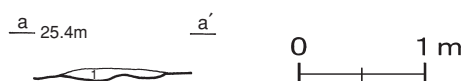
重複関係 第55号井戸跡，第1978号土坑，第143A・399号溝跡の覆土上面を通過している。

規模と構造 N 4 d7区付近から北西方向（N - 48° - W）へ直線的に伸び，N 4 a5区で調査区域外に至っている。確認された長さは13.5mで，幅0.61～0.92m，硬化面の厚さは4 cmである。

覆土 単一層である。第1層上面が路面として機能していたと考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量, 粘土ブロック・炭化粒子微量



第61図 第24号道路跡実測図

所見 掘り込みがほとんどなく、第143A号溝跡の覆土上面が硬化していることから、第143A号溝の廃絶後に道路として利用されたと考えられる。時期は、重複関係から16世紀後半と考えられる。

第25号道路跡 (第62図, 付図1)

位置 調査区中央部のN 4 a3~P 5 a0区で、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第143A・392・402号溝跡の覆土上面を通っている。

規模と構造 P 5 a0区付近から北西方向(N-43°-W)へ直線的に延び、調査区域外に至っている。O 5 d2区からN 4 i8区付近にかけては削平を受けている。確認された長さは59.2mで、幅0.66~0.88m、硬化面の厚さは2~8cmである。

覆土 単一層である。第1層上面が路面として機能していたと考えられる。

土層解説

1 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片6点(小皿4・鍋2)のほか、剥片1点が覆土中から出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 掘り込みがほとんどなく、第402号溝跡の覆土上面が硬化していることから、第402号溝の廃絶後に道路として利用されたと考えられる。時期は、重複関係から16世紀後半と考えられる。



第62図 第25号道路跡実測図

第26号道路跡 (第63図, 付図1)

位置 調査区中央部のN 5 g5~O 4 c0区で、標高26mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2029号土坑、第383号溝跡の覆土上面を通っている。

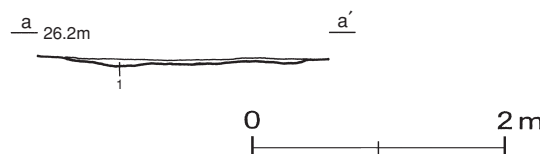
規模と構造 O 4 c0区付近から北東方向(N-33°-E)へ直線的に延びている。確認された長さは31.6mで、幅0.24~2.80m、硬化面の厚さは4cmである。

覆土 単一層である。第1層上面が路面として機能していたと考えられる。

土層解説

1 褐灰色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量

所見 掘り込みがほとんどなく、第383号溝跡の覆土上面が硬化していることから、第383号溝の廃絶後に道路として利用されたと考えられる。時期は、重複関係から16世紀後半と考えられる。



第63図 第26号道路跡実測図

表7 中世道路跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 (m, 深さはcm)				壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
				確認長	上幅	下幅	深さ					
23	N 5 f7~P 3 e8	N - 5° - E	Y字状	(97.2)	0.68~5.20	2.28~4.20	0~53	緩斜	平坦	人為	土師器・須恵器・土師質土器・陶器・磁器・瓦・銭貨	堀1・SK2029・2031・SD383・388・400・402・408・410→本跡→SK1906・1918・SD367, SK1914・1921・2019・PG78
24	N 4 a5~N 4 d7	N - 48° - W	直線状	(13.5)	0.61~0.92	-	4	緩斜	平坦	人為		SE55・SK1978・SD143A・399→本跡
25	N 4 a3~P 5 a0	N - 43° - W	直線状	(59.2)	0.66~0.88	-	2~8	緩斜	平坦	人為	土師質土器・剥片	SD143A・392・402→本跡
26	N 5 g5~O 4 c0	N - 33° - E	直線状	(31.6)	0.24~2.80	-	4	緩斜	平坦	人為		SK2029・SD383→本跡

(9) 柵跡

第4号柵跡 (第64図)

位置 調査区南部のP 4 j6~P 4 h7区で、標高24.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 7.80mの間に4か所のピットが確認された。方向はN - 40° - Eで、柱間寸法は2.20~2.50mである。

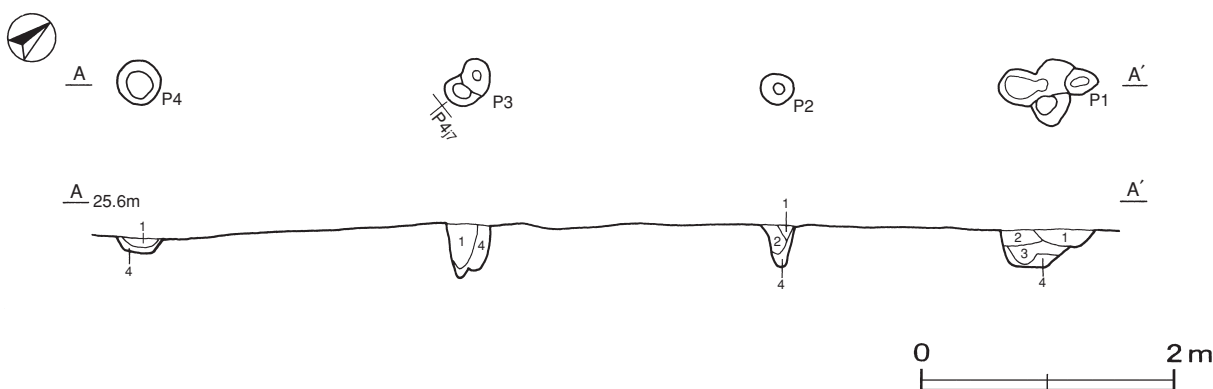
柱穴 4か所。平面形は長径27~78cm, 短径25~52cmの円形または楕円形である。断面はU字状で、深さは10~42cmである。

覆土 4層に分層できる。各層とも柱抜き取り後に流れ込んだものである。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

所見 時期は、遺物は出土していないが、第81号掘立柱建物跡と隣接し、それに伴う柵跡と想定できることから、16世紀代と考えられる。



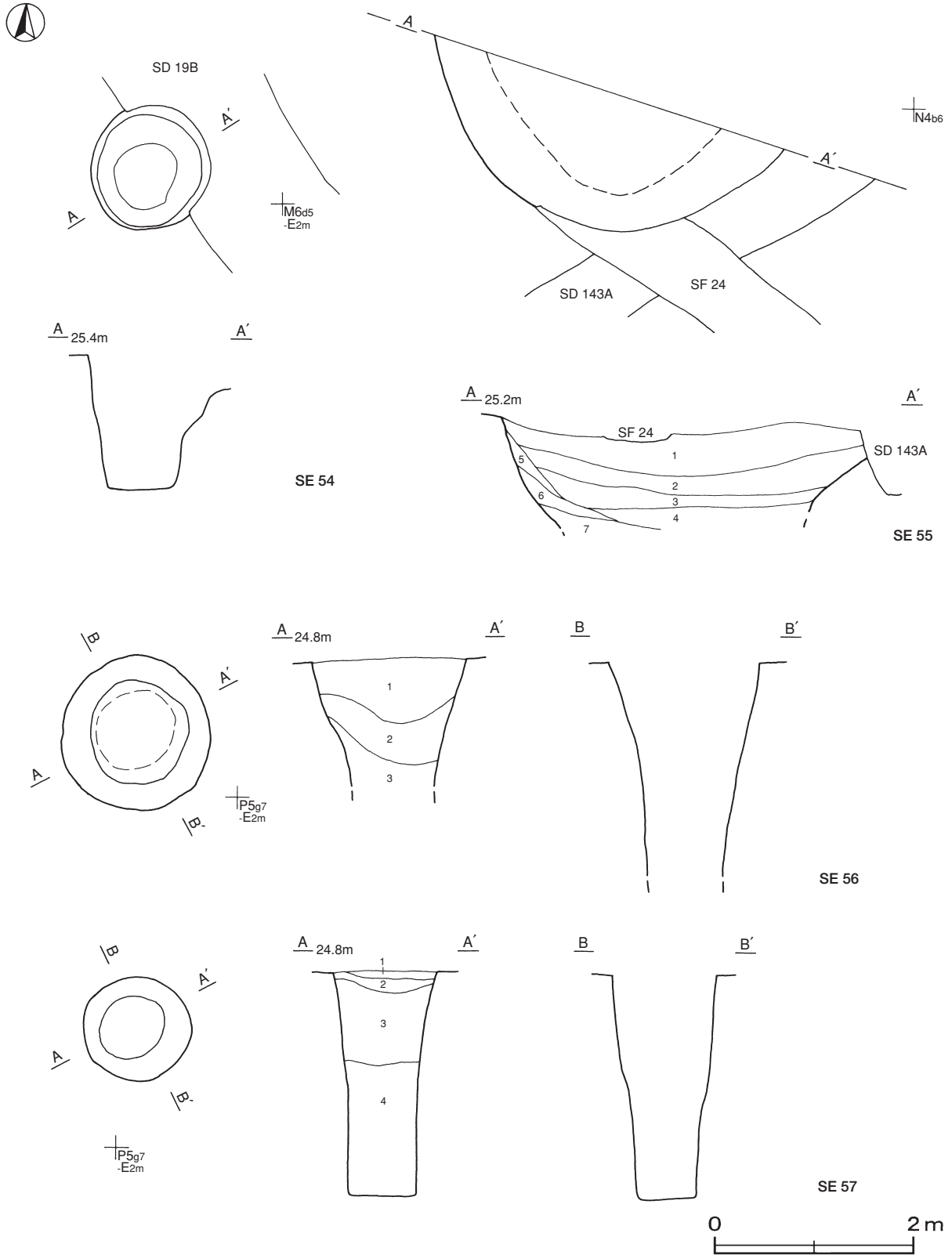
第64図 第4号柵跡実測図

3 その他の遺構と遺物

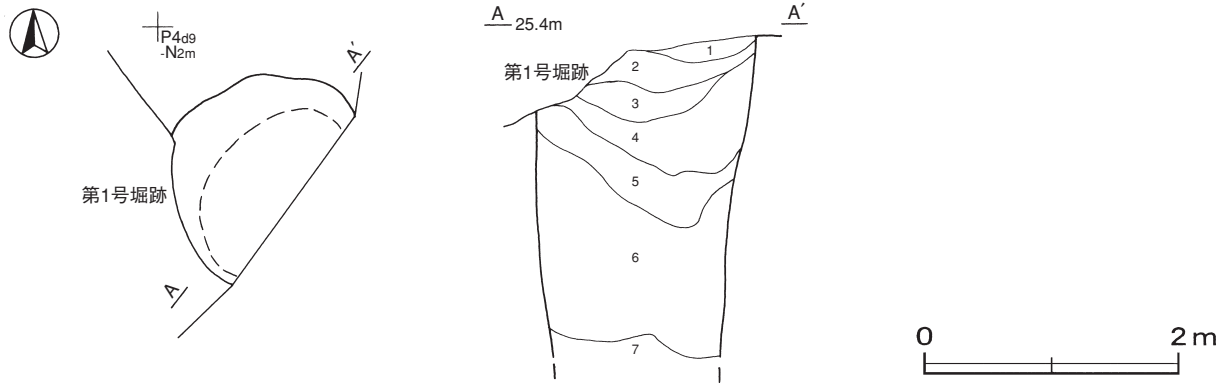
遺物が出土していないことなどから時期を決定できない遺構として、井戸跡5基, 土坑98基, 溝跡20条, ピット群10か所, 畝状遺構1か所, 埋没谷1か所が存在する。以下, それらの遺構については, 実測図と一覧表を掲載する。

(1) 井戸跡 (第65・66図)

今回の調査で、時期・性格ともに不明の井戸跡5基が確認されている。これらの井戸跡については、規模・形状等について一覧表と実測図を掲載するにとどめる。



第65図 第54・55・56・57号井戸跡実測図



第66図 第58号井戸跡実測図

第55号井戸跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 粘土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム粒子中量
- 7 褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック微量

第56号井戸跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 粘土ブロック・炭化粒子微量
- 3 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量, ローム粒子少量

第57号井戸跡土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量
- 3 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量
- 4 極暗褐色 粘土ブロック微量

第58号井戸跡土層解説

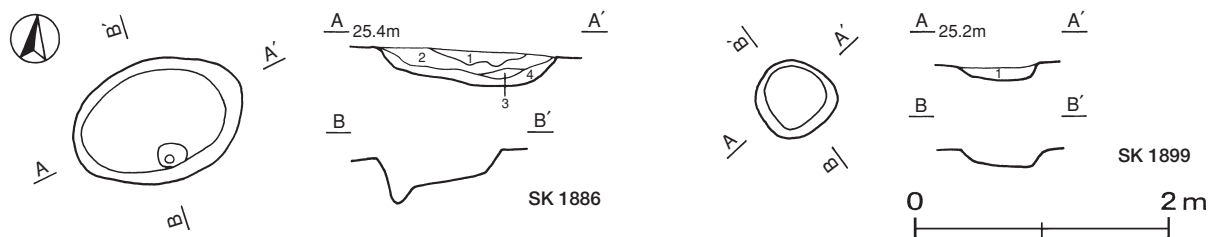
- 1 黒褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量, ロームブロック極微量
- 3 にぶい黄褐色 ローム粒子・粘土粒子中量
- 4 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 5 褐色 粘土ブロック・ローム粒子中量
- 6 黒褐色 ローム粒子多量, 粘土ブロック中量
- 7 褐色 ローム粒子中量, 粘土ブロック少量

表8 時期不明井戸跡一覧表

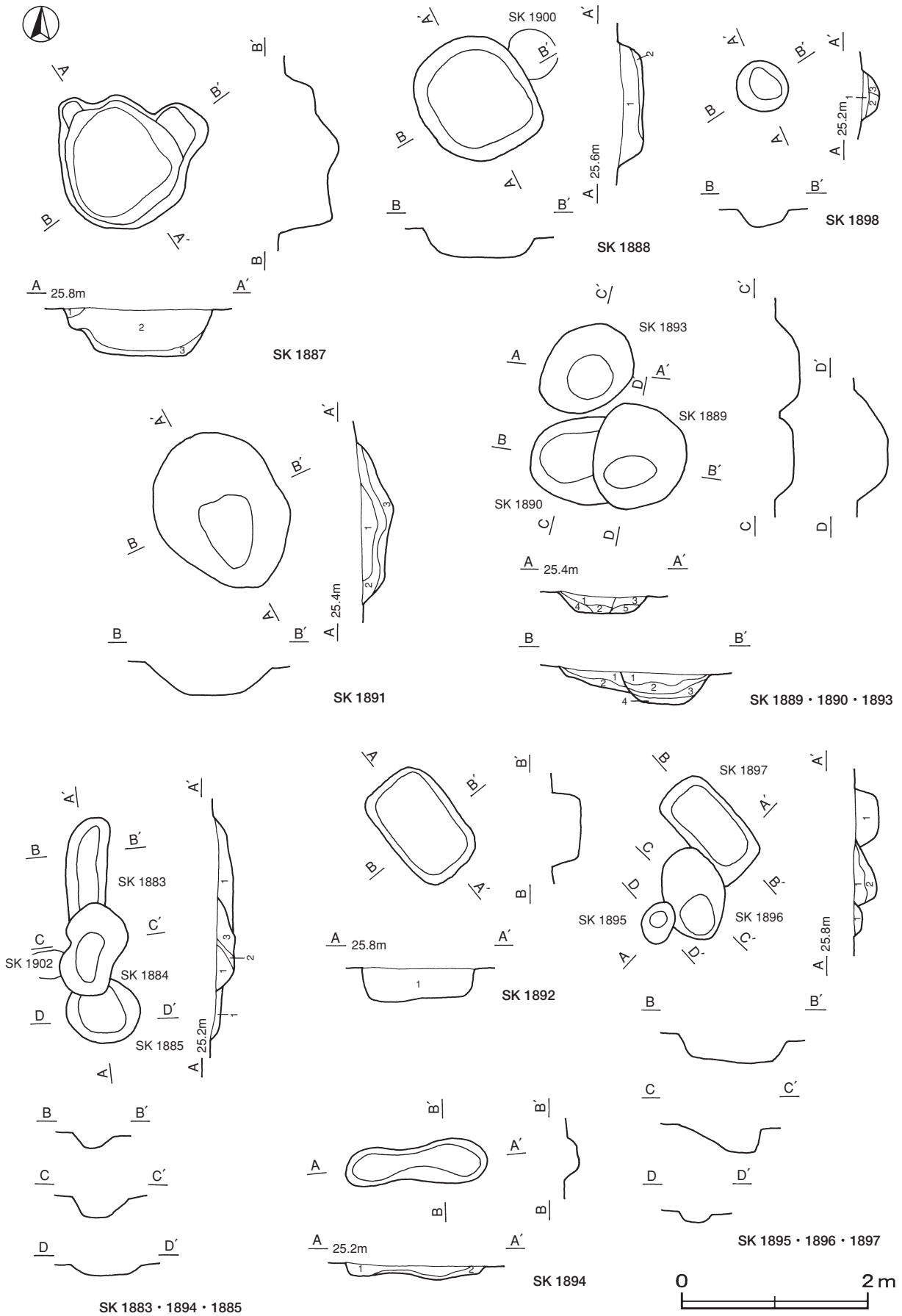
番号	位置	平面形	規模 (m) 長径 (軸) × 短径 (軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
54	M 6 b5	円形	1.30 × (1.20)	134	直立	平坦	-	土師器	本跡→SD19B
55	N 4 b5	[円形]	(3.77) × (1.35)	(90)	漏斗状	-	自然	須恵器	本跡→SD143A・399・SF24
56	P 5 f7	円形	1.56 × 1.52	(215)	直立	-	自然		
57	P 5 f7	円形	1.08 × 1.06	228	直立	平坦	自然		
58	P 4 c9	[円形]	(1.76) × (1.09)	(320)	直立	不明	自然		本跡→堀 1

(2) 土坑 (第67~75図)

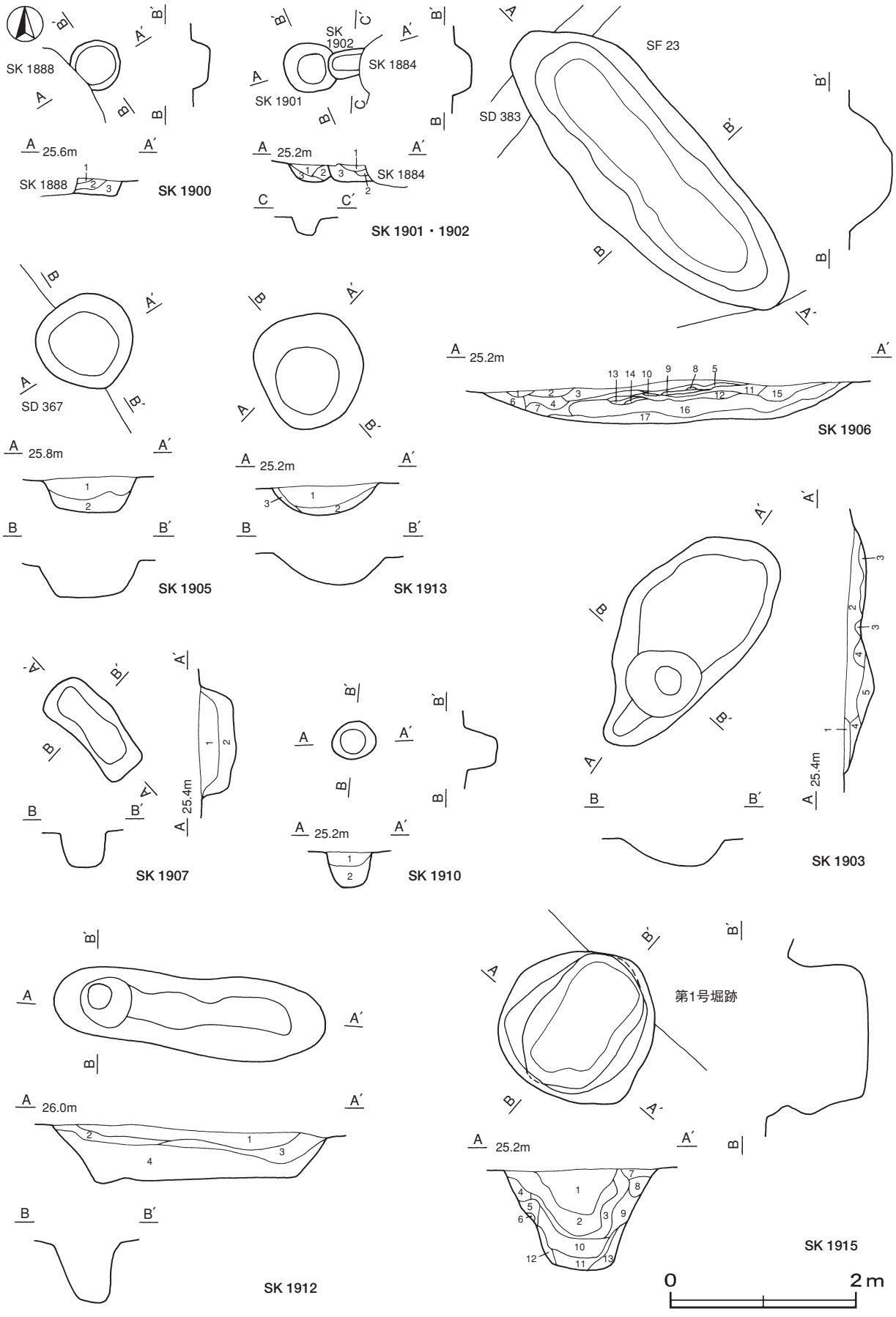
今回の調査で、時期・性格ともに不明の土坑98基が確認されている。これらの土坑については、規模・形状等について一覧表と実測図を掲載するにとどめる。



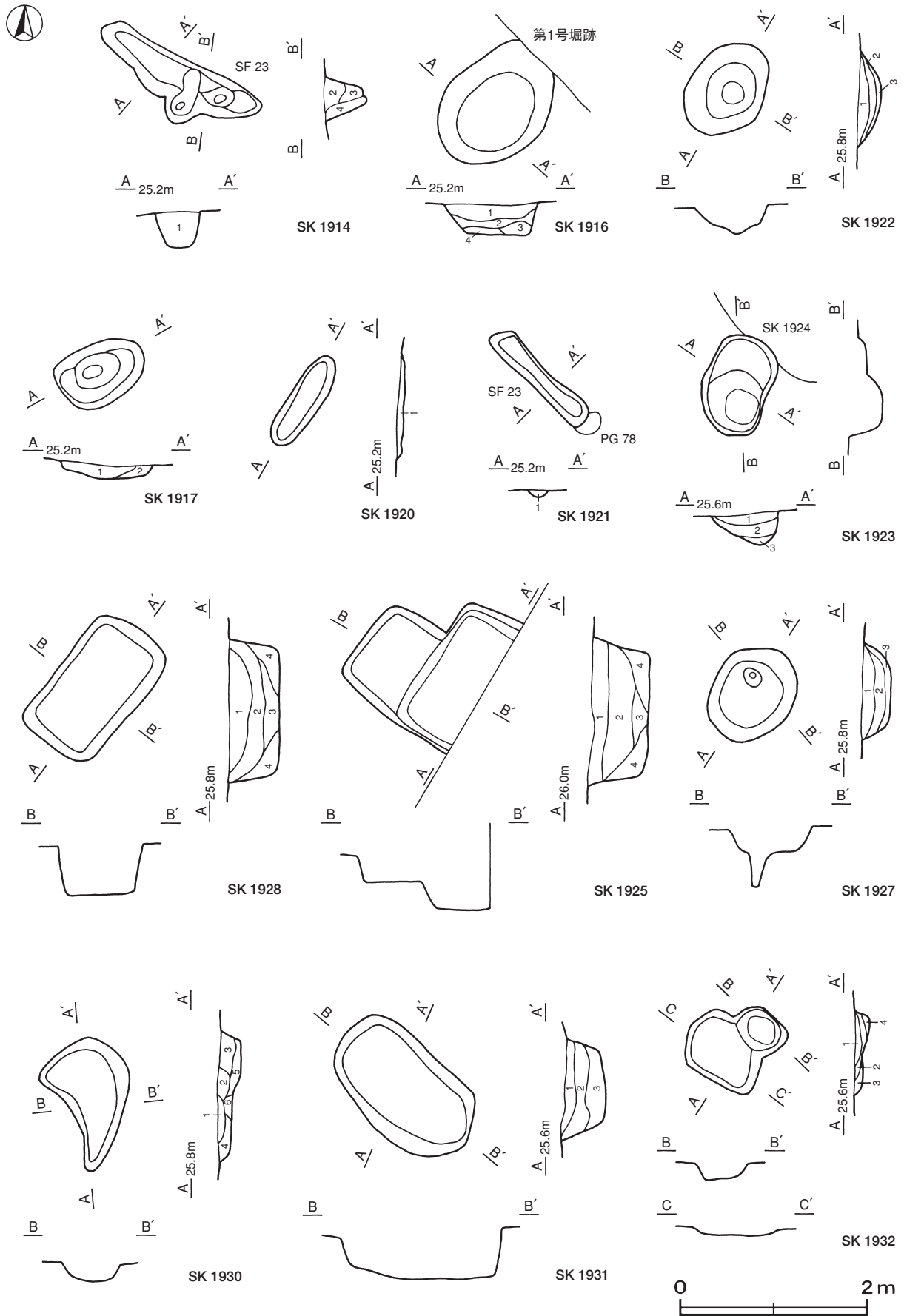
第67図 時期不明土坑実測図(1)



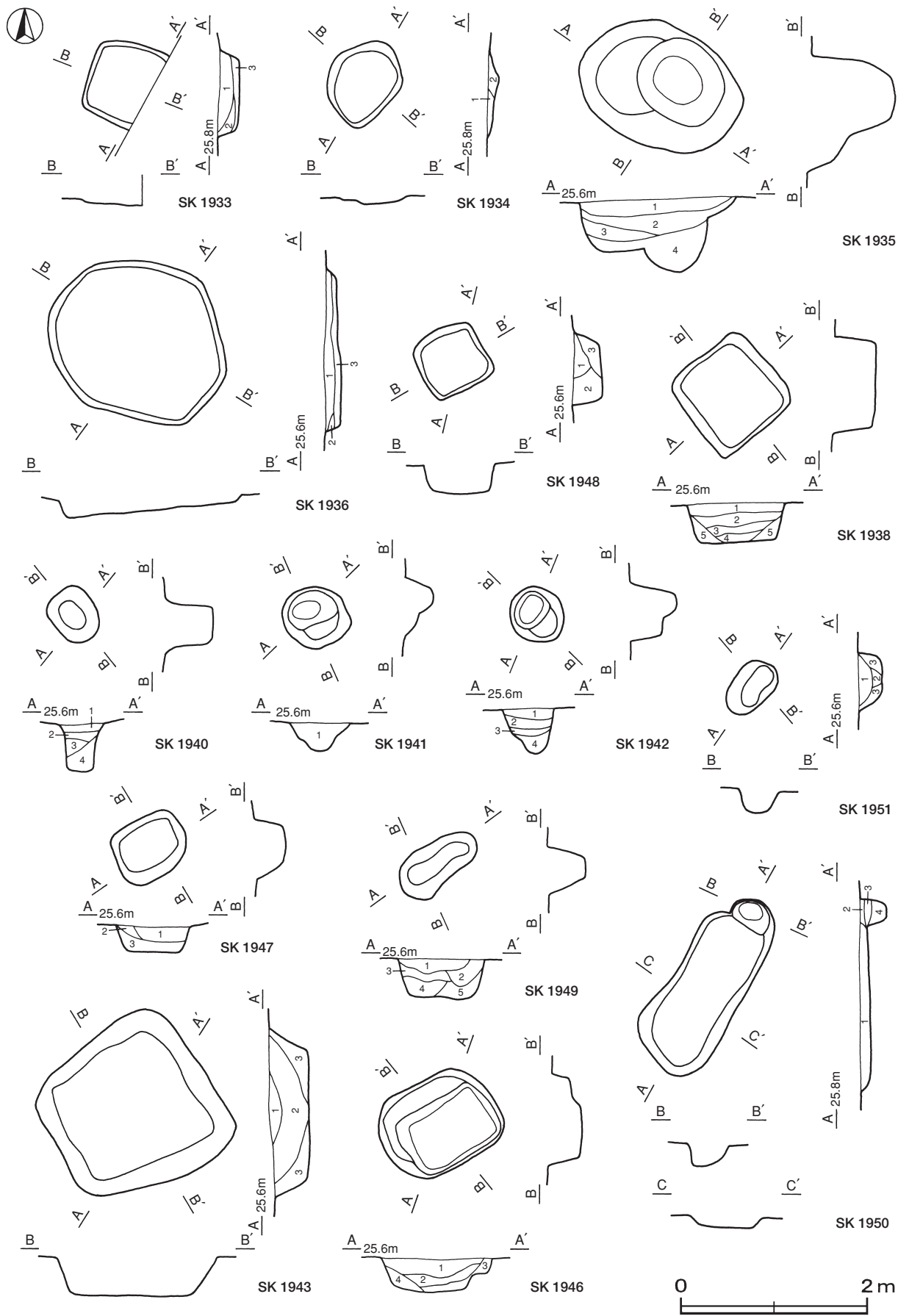
第68图 时期不明土坑实测图(2)



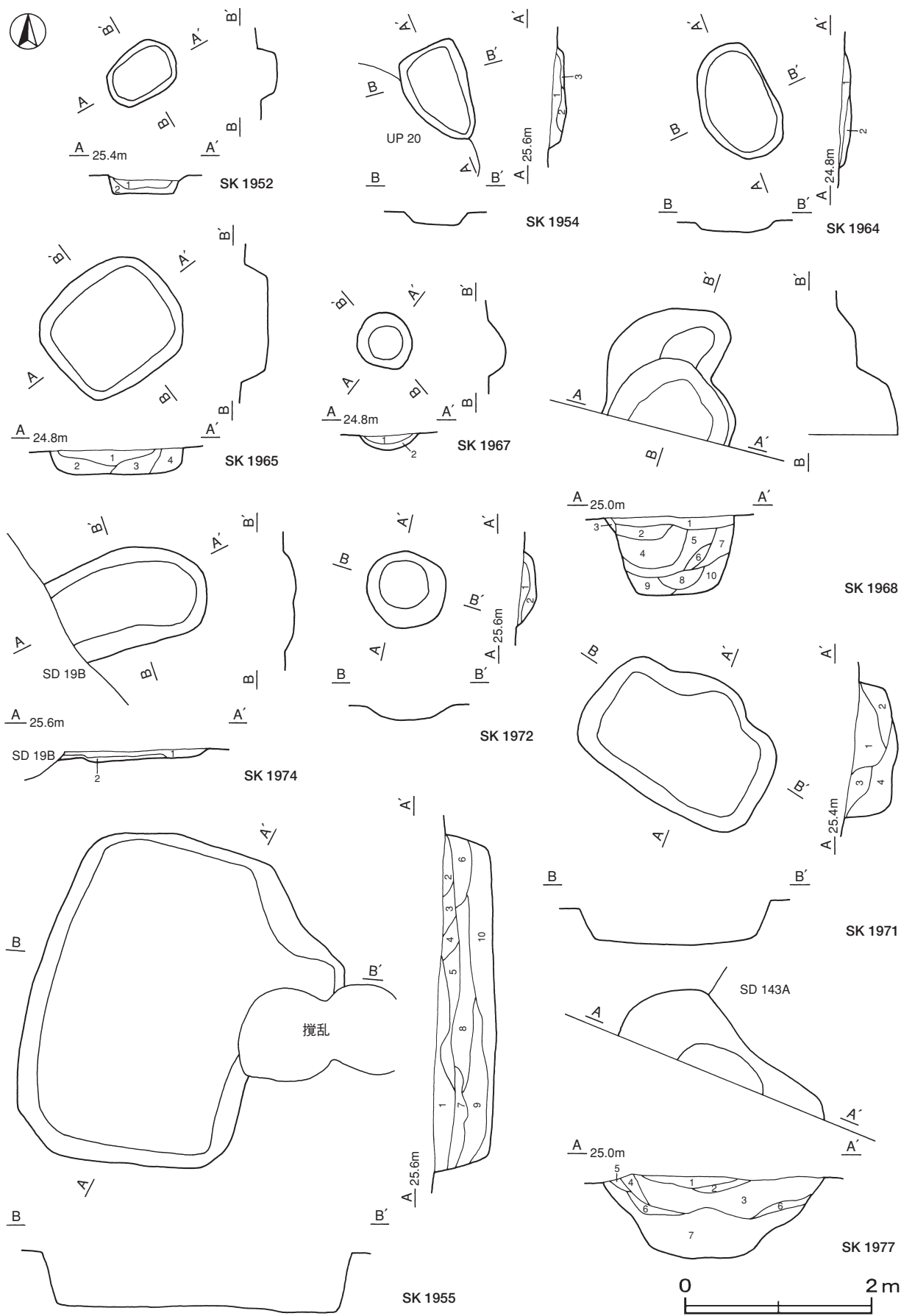
第69图 时期不明土坑实测图(3)



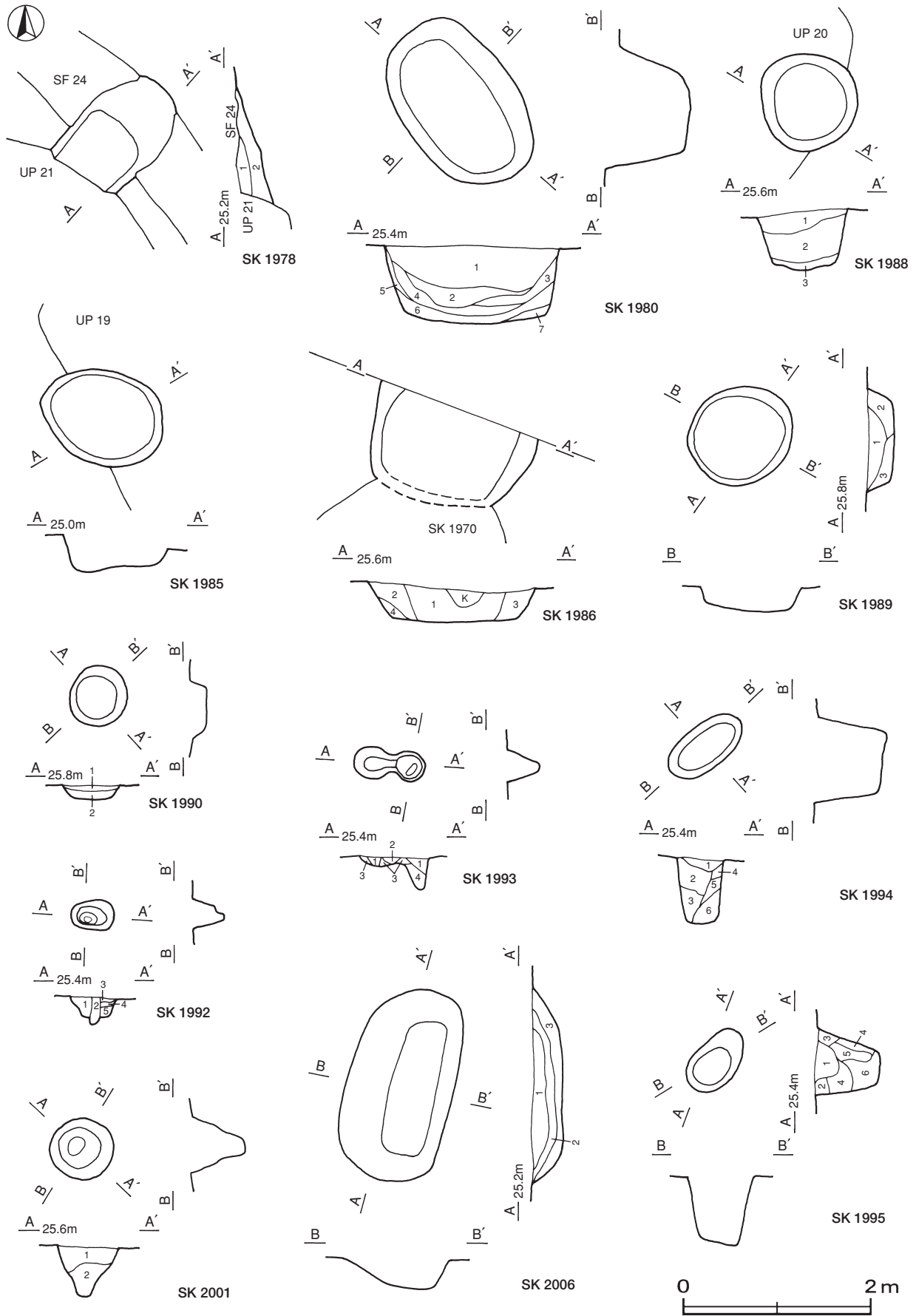
第70图 时期不明土坑实测图(4)



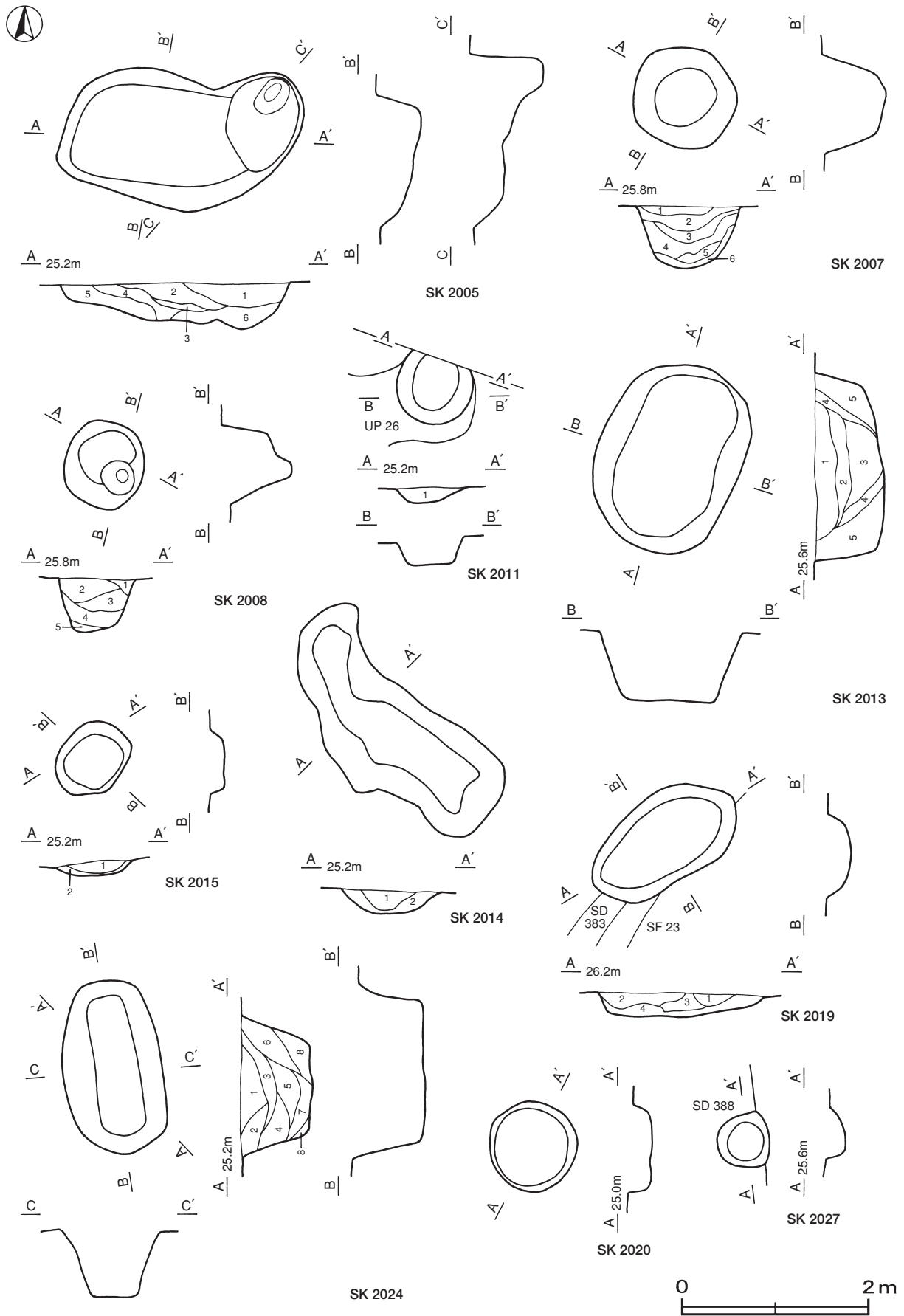
第71图 时期不明土坑实测图(5)



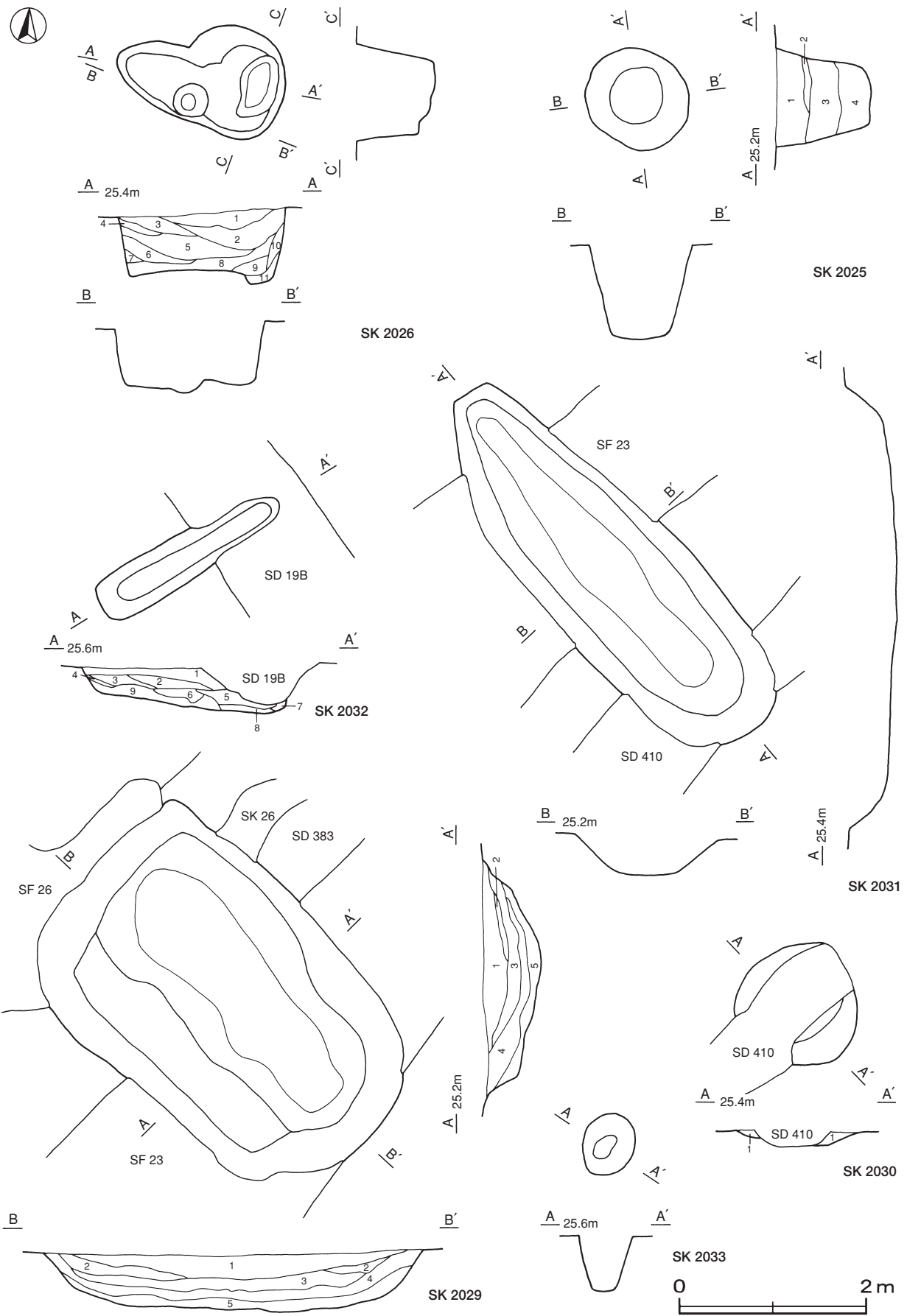
第72図 時期不明土坑実測図(6)



第73图 时期不明土坑实测图(7)



第74図 時期不明土坑実測図(8)



第75图 时期不明土坑实测图(9)

第1883号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第1884号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子中量

第1885号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量

第1886号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 3 褐 色 ローム粒子中量
- 4 褐 色 ローム粒子多量

第1887号土坑土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子多量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック中量
- 3 褐 色 ロームブロック中量

第1888号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 2 褐 色 ロームブロック中量

第1889号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子極微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 黒 褐 色 ロームブロック少量

第1890号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量

第1891号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子極微量

第1892号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子極微量

第1893号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量
- 4 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 5 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第1894号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量

第1895号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量

第1896号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量

第1897号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量

第1898号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量

第1899号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量

第1900号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第1901号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子少量

第1902号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第1903号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量, 炭化粒子極微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 5 黒 褐 色 ローム粒子微量, 炭化粒子極微量

第1905号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量 (締まり弱い)

第1906号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子少量 (7層より締まり強)
- 4 黒 褐 色 ローム粒子微量 (2層より締まり強)
- 5 黒 褐 色 ローム粒子少量 (3層より粘性強)
- 6 暗 褐 色 ローム粒子少量, 粘土粒子微量
- 7 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 8 黒 褐 色 ローム粒子微量 (2層より明)
- 9 黒 褐 色 ローム粒子少量 (7層より明)
- 10 黒 褐 色 ローム粒子微量 (8層より締まり強)
- 11 黒 褐 色 ローム粒子微量 (10層より締まり強)
- 12 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 13 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 14 暗 褐 色 ローム粒子微量 (13層より締まり弱)
- 15 黒 褐 色 ローム粒子微量 (8層より締まり弱)
- 16 暗 褐 色 ローム粒子微量 (13・14層より粘性強)
- 17 暗 褐 色 ローム粒子少量 (12層より締まり強)

第1907号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第1910号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック中量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子微量

第1912号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック微量, 白色粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック・白色粒子極微量
- 3 褐 色 ローム粒子微量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子微量

第1913号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子微量, 炭化粒子極微量
- 2 褐 色 ローム粒子中量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子少量

第1914号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック中量, 粘土粒子微量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック微量
- 4 黒 褐 色 ロームブロック中量

第1915号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量, 焼土粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子極微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子極微量
- 5 褐 色 ローム粒子少量, 粘土粒子微量, 炭化粒子極微量
- 6 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量, 炭化粒子少量
- 7 にぶい黄褐色 ローム粒子少量
- 8 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 9 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量, 粘土粒子極微量
- 10 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子・粘土粒子極微量
- 11 にぶい黄褐色 ローム粒子中量, 粘土粒子微量, 炭化粒子極微量
- 12 にぶい黄褐色 ローム粒子中量, 粘土ブロック少量, 炭化粒子極微量
- 13 黄 褐 色 粘土粒子多量, ローム粒子少量

第1916号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子極微量
- 2 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子極微量
- 3 黄 褐 色 ローム粒子多量
- 4 褐 色 ローム粒子中量

第1917号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子微量, 炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量

第1920号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量

第1921号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量

第1922号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 褐 色 ローム粒子中量

第1923号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量 (1層より粘性弱)
- 3 褐 色 ローム粒子中量

第1925号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量, 焼土粒子極微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック微量

第1927号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 褐 色 ローム粒子中量

第1928号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 4 黒 褐 色 ローム粒子少量

第1930号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 褐 色 ロームブロック少量
- 4 褐 色 ローム粒子中量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子中量
- 6 褐 色 ロームブロック中量

第1931号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 褐 色 ロームブロック微量

第1932号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量, 焼土粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 褐 色 ローム粒子少量, 焼土粒子極微量
- 4 褐 色 ローム粒子中量

第1933号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量, 炭化粒子極微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック微量

第1934号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 炭化物少量, ロームブロック微量, 焼土粒子極微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量

第1935号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック微量
- 4 黒 褐 色 ローム粒子少量

第1936号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 褐 色 ローム粒子中量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子微量

第1938号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 3 褐 色 粘土粒子中量, ローム粒子微量
- 4 褐 色 粘土粒子中量, ローム粒子少量
- 5 鈍 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック中量

第1940号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 2 褐 色 粘土粒子中量, ローム粒子微量
- 3 暗 褐 色 粘土ブロック中量, ローム粒子微量
- 4 極暗褐色 焼土粒子極微量

第1941号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量

第1942号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 極暗褐色 粘土ブロック少量, ローム粒子微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子極微量
- 4 暗 褐 色 粘土ブロック・ローム粒子少量

第1943号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 褐 色 粘土ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 3 暗 褐 色 粘土ブロック中量, ロームブロック少量

第1946号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 粘土ブロック少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 粘土ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐 色 粘土ブロック中量, ローム粒子微量
- 4 暗 褐 色 粘土ブロック少量, ローム粒子微量

第1947号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量

第1948号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック・粘土粒子少量, 炭化粒子極微量
- 3 褐 色 ローム粒子・粘土粒子中量

第1949号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子・粘土粒子微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック微量, 焼土粒子・粘土粒子極微量
- 3 褐 色 ローム粒子少量, 粘土粒子極微量
- 4 極暗褐色 粘土ブロック少量, ローム粒子微量
- 5 黒 褐 色 ロームブロック少量, 粘土ブロック・焼土粒子微量, 炭化粒子極微量

第1950号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量, 炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量, 焼土粒子・粘土粒子微量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子微量, 焼土粒子極微量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子微量

第1951号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 暗 褐 色 粘土粒子少量, ローム粒子微量
- 3 褐 色 ローム粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子微量, 炭化粒子極微量

第1952号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量, 炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量

第1954号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 褐 色 ローム粒子微量, 焼土粒子極微量
- 3 褐 色 ローム粒子中量

第1955号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 3 褐 色 ローム粒子中量
- 4 褐 色 ロームブロック中量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子中量
- 6 褐 色 ローム粒子多量
- 7 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 8 褐 色 ローム粒子中量 (3層より明)
- 9 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量 (7層より明)
- 10 褐 色 ローム粒子多量 (6層より明)

第1964号土坑土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子中量
- 2 褐 色 ロームブロック少量

第1965号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 粘土ブロック・焼土粒子微量, 炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 褐 色 ロームブロック少量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック少量

第1967号土坑土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量

第1968号土坑土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子極微量
- 5 褐 色 ローム粒子少量 (1層より明)
- 6 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 7 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 8 褐 色 ローム粒子中量
- 9 褐 色 ロームブロック少量
- 10 暗 褐 色 ロームブロック少量, 粘土粒子微量

第1971号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子多量, 焼土粒子微量

第1972号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック中量

第1974号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 炭化物・ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐 色 ローム粒子中量

第1977号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子中量, 粘土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量, 粘土粒子少量
- 3 褐 色 ローム粒子中量, 粘土ブロック少量
- 4 黒 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 6 褐 色 ロームブロック中量, 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 7 褐 色 ロームブロック中量, 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量 (6層より締まり・粘性とも強)

第1978号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量, 焼土粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子極微量

第1980号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 3 褐 色 ローム粒子少量
- 4 褐 色 ロームブロック少量
- 5 褐 色 ローム粒子中量
- 6 にぶい褐色 ローム粒子中量, 粘土粒子微量
- 7 褐 色 粘土ブロック中量, ローム粒子少量

第1986号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子中量
- 3 褐 色 ローム粒子多量
- 4 褐 色 ロームブロック中量

第1988号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック中量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 3 褐 色 ロームブロック多量

第1989号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック中量, 白色粘土ブロック微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック中量, ローム粒子微量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子中量

第1990号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック中量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック少量

第1992号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 5 褐 色 ロームブロック中量

第1993号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 褐 色 ロームブロック中量
- 4 黒 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第1994号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック中量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 5 黒 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 6 黒 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第1995号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子中量
- 3 褐 色 ローム粒子多量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量
- 6 黒 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第2001号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量

第2005号土坑土層解説

- 1 灰黄褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子中量
- 4 にぶい黄褐色 ロームブロック少量
- 5 黄 褐 色 ロームブロック中量
- 6 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

第2006号土坑土層解説

- 1 黒 色 ロームブロック微量
- 2 黒 色 ロームブロック少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック多量

第2007号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 2 黒 色 ロームブロック少量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック少量 (1層より明)
- 4 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 5 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 6 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

第2008号土坑土層解説

- 1 褐 色 ロームブロック中量, 黒色粒子少量
- 2 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 5 黒 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第2011号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第2013号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子微量
- 3 極暗褐色 ロームブロック極微量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック微量
- 5 褐 色 ローム粒子中量

第2014号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量

第2015号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子中量

第2019号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック中量

第2024号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子中量 (5層より明)
- 4 褐 色 ローム粒子中量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子中量
- 6 暗 褐 色 ローム粒子中量 (5層よりやや明)
- 7 褐 色 ロームブロック中量
- 8 褐 色 ローム粒子多量

第2025号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 4 黒 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 (1層より明)

第2026号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量 (2層より暗)
- 4 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量 (3層より明)
- 5 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量 (2層より明)
- 6 褐 色 ローム粒子中量
- 7 褐 色 ロームブロック少量
- 8 暗 褐 色 ローム粒子中量
- 9 褐 色 ローム粒子多量
- 10 褐 色 ローム粒子中量 (6層より明)
- 11 褐 色 ローム粒子多量 (9層より暗)

第2029号土坑土層解説

- 1 褐 色 ロームブロック少量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子・炭化物微量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子・炭化物微量 (2層より締まり強)
- 4 極暗褐色 ロームブロック微量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子少量

第2030号土坑土層解説

- 1 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第2032号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック微量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 4 黒 褐 色 ローム粒子中量
- 5 褐 色 ローム粒子多量
- 6 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 7 暗 褐 色 ロームブロック多量
- 8 黒 褐 色 ロームブロック多量
- 9 褐 色 ロームブロック中量

第2030号土坑土層解説

- 1 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第2032号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック微量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 4 黒 褐 色 ローム粒子中量
- 5 褐 色 ローム粒子多量
- 6 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 7 暗 褐 色 ロームブロック多量
- 8 黒 褐 色 ロームブロック多量
- 9 褐 色 ロームブロック中量

表9 時期不明土坑一覽表

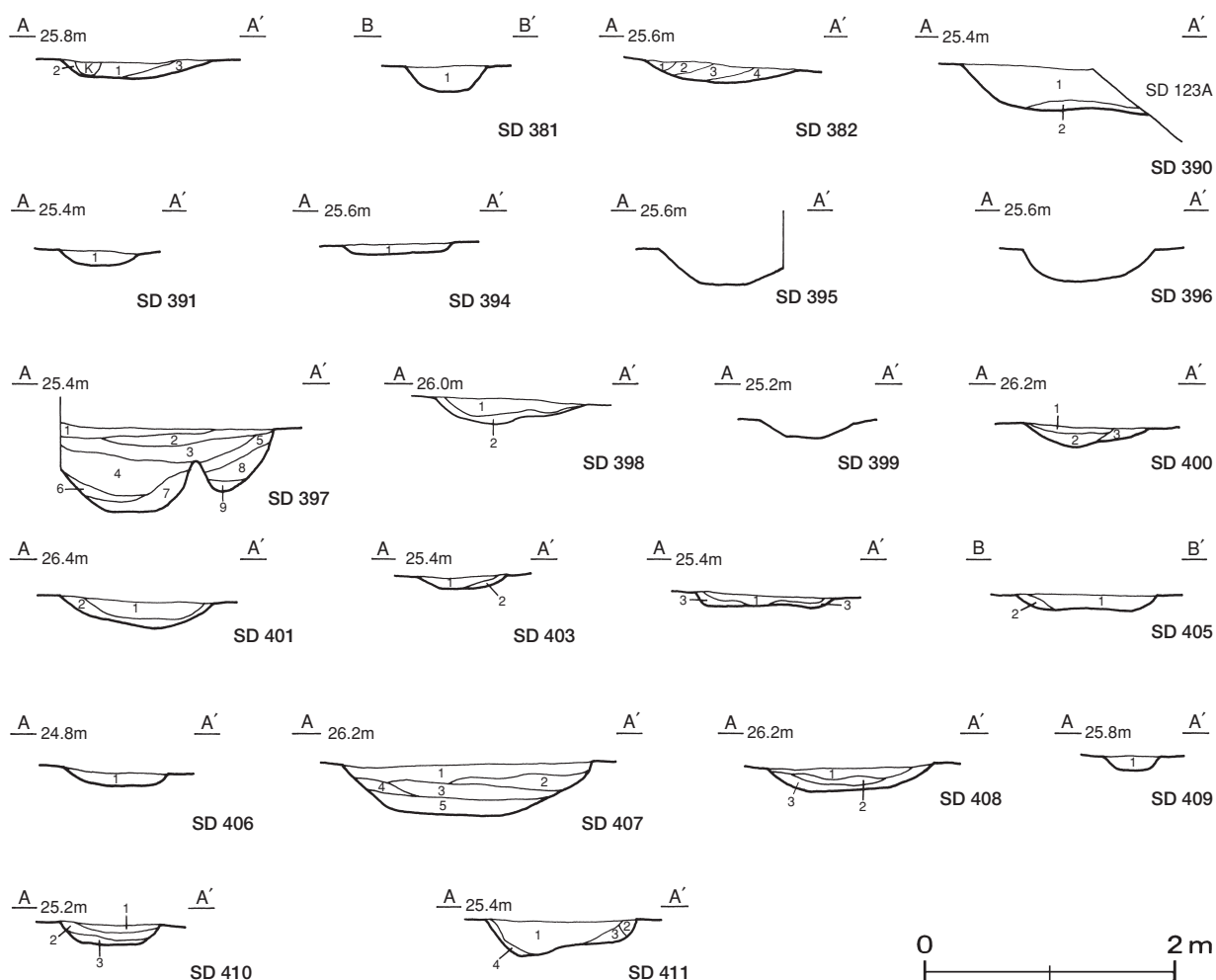
番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m) 長径×短径	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
1883	N 3 i 9	N - 8° - E	[長楕円形]	(0.93) × 0.45	17	緩斜	皿状	自然		本跡→SK1884
1884	N 3 i 9	N - 14° - E	不整楕円形	1.02 × 0.65	21	外傾・緩斜	平坦	自然		SK1883・1885・1902→本跡
1885	N 3 i 9	N - 70° - E	[楕円形]	0.79 × (0.54)	11	緩斜	平坦	自然		本跡→SK1884
1886	O 3 a 8	N - 64° - E	楕円形	1.42 × 0.97	27	外傾	傾斜	自然		
1887	O 3 c 6	-	不定形	1.69 × 1.60	60	外傾	凹凸	人為	陶器	
1888	N 3 i 7	N - 68° - W	隅丸長方形	1.46 × 1.29	27	外傾	平坦	人為	土師器・鉄滓	SK1900→本跡
1889	N 3 i 8	N - 18° - W	楕円形	1.14 × 1.02	35	緩斜	皿状	自然		SK1890→本跡
1890	N 3 i 8	N - 4° - E	[楕円形]	1.08 × (0.67)	21	緩斜	平坦	自然		本跡→SK1889
1891	O 3 a 8	N - 30° - W	楕円形	1.75 × 1.33	32	緩斜	皿状	自然		
1892	N 3 j 6	N - 40° - W	隅丸長方形	1.22 × 0.81	38	外傾	平坦	自然		
1893	N 3 i 8	N - 55° - E	楕円形	1.11 × 0.86	27	緩斜	皿状	自然	縄文土器	
1894	N 3 h 9	N - 84° - E	不整楕円形	1.50 × 0.48	15	外傾	凹凸	自然		
1895	N 3 j 6	N - 13° - E	楕円形	0.45 × 0.34	10	緩斜	皿状	自然		SK1896→本跡
1896	N 3 j 6	N - 11° - W	楕円形	1.02 × 0.67	27	外傾・緩斜	皿状	自然	須恵器	SK1897→本跡→SK1895
1897	N 3 j 6	N - 42° - W	隅丸長方形	1.18 × 0.62	24	緩斜	平坦	自然		本跡→SK1896
1898	N 3 i 9	-	円形	0.55 × 0.53	20	緩斜	皿状	人為		
1899	O 3 a 0	-	円形	0.63 × 0.58	12	緩斜	平坦	自然		
1900	N 3 i 8	-	円形	0.57 × 0.52	20	外傾	平坦	自然		本跡→SK1888
1901	N 3 i 9	-	円形	0.59 × 0.56	20	外傾	平坦	自然		本跡→SK1902
1902	N 3 i 9	N - 76° - E	[楕円形]	(0.35) × 0.30	17	外傾	皿状	人為		SK1901→本跡→SK1884
1903	O 3 a 9	N - 34° - E	不整楕円形	2.65 × 1.39	30	緩斜	皿状	自然		
1905	N 4 h 5	-	円形	1.04 × 1.02	35	外傾	平坦	自然		SD367→本跡
1906	O 4 j 3	N - 45° - W	長楕円形	3.97 × 1.32	45	緩斜	平坦	自然	須恵器	SD383・SF23→本跡
1907	N 4 f 4	N - 43° - W	長方形	1.22 × 0.53	40	外傾	皿状	自然	土師器・石鏃	
1910	O 4 i 2	-	円形	0.45 × 0.40	35	外傾	皿状	自然		
1912	O 3 c 4	N - 86° - W	長楕円形	2.94 × 0.86	65	外傾	平坦	自然		
1913	P 4 b 6	-	円形	1.26 × 1.19	32	緩斜	皿状	自然	須恵器・陶器・磁器	
1914	O 4 i 5	N - 63° - W	不整楕円形	1.90 × 0.65	38	外傾	凹凸	人為		SF23
1915	P 4 a 5	-	円形	1.75 × 1.68	111	外傾	平坦	人為		堀 1 →本跡
1916	P 4 c 7	N - 45° - E	[楕円形]	(1.35) × 1.06	57	外傾	平坦	人為		本跡→堀 1
1917	P 4 b 6	N - 58° - E	楕円形	0.95 × 0.64	13	外傾	皿状	人為		
1920	O 4 j 4	N - 28° - E	長楕円形	1.09 × 0.34	5	緩斜	平坦	自然		
1921	O 4 j 4	N - 46° - W	隅丸長方形	1.33 × 0.26	8	緩斜	皿状	自然		PG78→本跡, SF23
1922	N 5 d 8	N - 38° - E	楕円形	1.08 × 0.81	29	緩斜	皿状	自然		
1923	N 5 d 6	N - 22° - E	楕円形	1.06 × 0.70	34	外傾・緩斜	有段	自然		SK1924→本跡
1925	N 5 d 0	N - 54° - W	不定形	1.62 × 1.38	70	外傾	有段・平坦	自然	縄文土器・土師器	
1927	N 5 c 8	N - 41° - E	楕円形	1.08 × 0.88	30	緩斜	平坦	自然		
1928	N 5 c 9	N - 40° - E	隅丸長方形	1.56 × 0.90	52	外傾	平坦	自然	土師器・須恵器・鉄製品	
1930	N 5 a 9	-	不定形	1.42 × 0.96	18	外傾	有段	人為	土師質土器	
1931	N 5 a 9	N - 47° - W	楕円形	1.74 × 0.99	52	外傾	平坦	自然		
1932	N 5 c 8	-	不定形	0.98 × 0.90	16	外傾・緩斜	有段	自然		
1933	N 6 b 1	N - 19° - E	[長方形]	0.90 × (0.64)	20	外傾	皿状	人為		
1934	N 6 b 1	N - 29° - E	楕円形	0.94 × 0.74	8	緩斜	凹凸	人為		
1935	N 5 c 8	N - 58° - W	楕円形	1.74 × 1.30	90	外傾	有段	自然	土師質土器・陶器・磁器	
1936	M 5 i 0	N - 58° - W	楕円形	1.96 × 1.74	18	外傾・緩斜	平坦	自然	須恵器・土師質土器	

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m) 長径×短径	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
1938	M 6 a6	-	隅丸方形	1.04×1.03	43	直立	平坦	自然		
1940	M 6 a7	N-42°-W	楕円形	0.59×0.48	52	外傾	平坦	人為		
1941	M 6 a7	-	円形	0.68×0.68	32	外傾・緩斜	皿状	人為		
1942	M 6 a6	-	円形	0.62×0.58	49	外傾	平坦	自然		
1943	M 6 a7	-	台形	1.80×1.76	42	外傾	平坦	自然	須恵器	SB82
1946	M 6 a8	N-60°-E	隅丸長方形	1.30×1.00	36	外傾	有段	自然		
1947	M 6 b8	N-60°-E	隅丸長方形	0.80×0.66	34	外傾	皿状	自然		
1948	M 6 b8	-	隅丸方形	0.72×0.72	30	外傾	平坦	人為	土師質土器	
1949	M 6 a9	N-54°-W	長楕円形	0.96×0.48	40	外傾	凹凸	人為	須恵器	
1950	L 6 j9	N-29°-E	不整隅丸長方形	2.08×0.80	13	外傾	平坦	自然		
1951	M 6 a0	N-43°-E	楕円形	0.64×0.43	24	外傾・緩斜	皿状	人為		
1952	M 6 b0	N-60°-E	楕円形	0.82×0.58	18	外傾	平坦	自然		
1954	N 4 e9	N-24°-W	不整楕円形	1.06×0.70	14	緩斜	皿状	自然	土師器・土師質土器	UP20→本跡
1955	N 4 e7	N-13°-E	不定形	3.62×[3.26]	59	外傾	平坦	人為	縄文土器・土師器・土師質土器	
1964	N 4 a7	N-21°-W	楕円形	1.26×0.82	10	緩斜	皿状	自然		
1965	M 4 j8	N-53°-E	隅丸長方形	1.46×1.28	26	緩斜	平坦	自然		
1967	M 4 i7	-	円形	0.60×0.60	18	緩斜	皿状	自然		
1968	N 4 a7	-	不定形	1.40×(1.34)	82	外傾・緩斜	有段	人為		
1971	N 5 e2	N-56°-W	隅丸長方形	2.13×1.47	49	外傾	平坦	人為		
1972	N 5 e3	-	円形	0.88×0.86	14	緩斜	平坦	自然		
1974	M 6 d6	N-75°-E	[楕円形]	(1.60)×1.10	12	緩斜	皿状	自然		本跡→SD19B
1977	N 4 a5	N-68°-E	[楕円形]	(2.40)×(0.80)	88	緩斜	皿状	人為		SD143A→本跡
1978	N 4 c7	N-40°-E	[楕円形]	(1.28)×(0.97)	(42)	緩斜	-	-		本跡→UP21・SF24
1980	P 4 d5	N-32°-W	楕円形	1.90×1.26	80	外傾	平坦	自然		
1985	N 4 d8	N-78°-W	[楕円形]	(1.30)×1.00	32	緩斜	皿状	-		UP19→本跡
1986	N 5 d2	-	[円形]	1.78×(1.06)	40	緩斜	皿状	人為		SK1970
1988	N 4 f9	-	円形	1.06×1.04	62	外傾	凹凸	自然		UP20→本跡
1989	O 4 a4	N-40°-E	楕円形	0.88×0.78	24	外傾・緩斜	平坦	自然		
1990	O 4 f6	-	円形	0.62×0.60	18	緩斜	平坦	自然		
1992	P 5 c1	N-84°-W	楕円形	0.44×0.30	28	外傾・緩斜	有段	人為		
1993	P 5 c2	N-80°-W	不定形	0.76×0.38	32	緩斜	有段	人為		
1994	P 5 b3	N-54°-E	楕円形	0.88×0.46	68	外傾	平坦	人為		
1995	P 5 b3	N-37°-E	楕円形	0.76×0.44	70	外傾	平坦	人為		
2001	O 4 h4	N-62°-W	楕円形	0.68×0.60	54	外傾	皿状	人為		
2005	O 3 c0	N-81°-E	不定形	2.62×1.50	78	直立・緩斜	有段	自然		
2006	O 3 b9	N-19°-E	隅丸長方形	2.08×1.12	30	緩斜	皿状	自然		
2007	O 4 g6	-	円形	1.12×1.08	62	外傾	皿状	自然	土師質土器	
2008	O 4 g5	N-2°-W	楕円形	0.94×0.84	68	外傾	有段	人為	縄文土器・土師質土器・瓦質土器	
2011	N 4 b6	-	[円形]	0.78×0.70	24	緩斜	平坦	自然		UP26→本跡
2013	N 3 i6	N-15°-E	楕円形	2.02×1.58	71	外傾	平坦	自然		
2014	N 3 f7	N-44°-W	不定形	2.80×1.20	24	緩斜	皿状	自然		
2015	N 4 d0	N-40°-E	楕円形	0.86×0.68	14	緩斜	平坦	自然	須恵器	
2019	N 5 j3	N-50°-E	楕円形	1.70×0.96	22	緩斜	皿状	人為		SD383→本跡, SF23
2020	N 4 g1	-	円形	0.98×0.94	22	外傾	平坦	-		
2024	P 4 c5	N-10°-W	隅丸長方形	1.88×1.04	70	外傾	平坦	自然	須恵器・土師質土器・陶器	
2025	Q 4 a9	-	円形	1.16×1.14	102	外傾	平坦	自然		

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m) 長径×短径	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
2026	Q 4 c 8	N - 76° - W	不定形	1.82×1.18	82	外傾	有段	人為		
2027	N 5 e 7	-	円形	0.57×0.56	20	外傾	皿状	-		SD388→本跡
2029	O 5 c 1	N - 48° - W	楕円形	4.15×2.64	57	緩斜	皿状	自然	須恵器・土師質土器・ 鉄滓	SD383→本跡→SF23・26
2030	P 4 a 4	-	[円形]	1.30×[1.30]	16	緩斜	平坦	自然		本跡→SD410
2031	P 4 a 3	N - 40° - W	楕円形	4.75×1.61	50	緩斜	皿状	-		本跡→SD410, SF23
2032	M 6 j 9	N - 62° - E	[隅丸長方形]	(1.28)×0.54	54	緩斜	平坦	人為		本跡→SD19B
2033	M 6 b 7	N - 25° - E	楕円形	0.70×0.57	60	外傾	皿状	-		

(3) 溝跡 (第76図, 付図1)

今回の調査で, 時期・性格ともに不明の溝跡20条が確認されている。これらの溝跡の規模については一覧表で, 土層断面図 (第76図) と土層解説については遺構順に掲載し, 平面図については遺構配置図 (付図1) で掲載するにとどめる。



第76図 時期不明溝跡実測図

第381号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子極微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

第382号溝跡土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量

第390号溝跡土層解説

- 1 にぶい橙色 鉄分多量, 粘土ブロック少量
- 2 灰褐色 粘土粒子多量

第391号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第394号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量

第397号溝跡土層解説

- 1 にぶい褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量 (3層より暗)
- 5 褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量
- 7 褐色 ローム粒子中量, 粘土ブロック少量
- 8 褐色 ロームブロック微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 9 暗褐色 ロームブロック微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量

第398号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第400号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第401号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量, 炭化粒子極微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量

第403号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第405号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第406号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第407号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量, 焼土粒子極微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 炭化粒子少量, ロームブロック微量

第408号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第409号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

第410号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量 (1層より締めり強)
- 3 暗褐色 ロームブロック微量

第411号溝跡土層解説

- 1 褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量

表10 時期不明溝跡一覧表

番号	位置	方向	断面形	規模 (m)				壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
				長さ	上幅	下幅	深さ (cm)					
381	N 3 j5~O 3 a6	N -53° - W	U字状	(6.8)	0.58~1.12	0.12~0.51	8~22	緩斜	皿状	自然	須恵器・土師質土器	堀1→本跡
382	O 3 a7~O 3 b8	N -34° - W	U字状	(6.7)	0.22~1.16	0.17~0.22	16	緩斜	皿状	自然	須恵器・不明鉄製品	PG77
390	M 6 f5~M 6 g5	N -10° - E	逆台形状	(2.3)	1.20~1.28	0.62~0.80	34	緩斜	平坦	人為		本跡→SD123A, SD135
391	N 4 b8~N 4 c8	N -35° - W	U字状	(4.2)	0.40~0.70	0.12~0.22	7~13	緩斜	皿状	自然		UP19・SD150→本跡
394	L 6 j6~M 6 b6	N -15° - W	U字状	(10.4)	0.64~0.98	0.44~0.78	7	緩斜	皿状	自然		本跡→SB83, SD120
395	M 6 f6~M 6 f8	N -65° - E	U字状	(7.4)	0.66~0.80	0.22~0.32	30	緩斜	皿状	-		SD19B・123A
396	M 6 f6~M 6 e9	N -80° - E	U字状	(9.6)	0.64~1.02	0.20~0.30	27	緩斜	皿状	-	土師質土器・瓦	SD19B→本跡, SD123A
397	N 4 a4~N 4 b4	N -18° - W	逆台形状	(1.8)	0.52~0.77	0.08~0.22	24~63	緩斜	凹凸	自然		
398	P 3 d8~P 3 f0	N -40° - W N -63° - E	U字状	(9.5)	0.64~1.35	0.25~0.46	21	緩斜	皿状	自然	土師質土器・五輪塔	
399	N 4 b5~N 4 b6	N -50° - W	U字状	(1.8)	0.68~0.72	0.24~0.32	12	緩斜	平坦	-	土師質土器	UP26→本跡→SD143A・SF24
400	P 3 c8~P 4 f1	N -46° - W	U字状	16.0	0.49~1.17	0.25~0.55	9~17	緩斜	皿状	自然	土師質土器	本跡→SF23
401	O 2 d0~O 3 g2	N -37° - W N -44° - E	U字状	(16.9)	0.60~1.32	0.20~0.44	16~23	緩斜	皿状	自然	土師質土器・陶器・磁器・瓦・砥石	
403	Q 4 c8~Q 4 e0	N -55° - W	U字状	(10.5)	0.45~0.70	0.13~0.32	4~9	緩斜	皿状	自然		
405	P 5 j4~Q 4 c0	N -54° - E	逆台形状	(13.2)	0.79~1.30	0.57~0.80	7~10	緩斜	皿状	自然	土師器	PG84
406	M 4 j9~N 4 a8	N -43° - E	U字状	(5.9)	0.65~0.90	0.60~0.78	7~13	緩斜	平坦	自然	土師質土器	

番号	位置	方向	断面形	規模 (m)				壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
				長さ	上幅	下幅	深さ (cm)					
407	O 5 c2~O 5 d5	N-56°-W	逆台形状	(10.6)	0.44~1.90	0.15~1.47	6~42	緩斜	皿状	自然	土師質土器	SD388→本跡
408	O 5 c2	N-50°-E	U字状	(1.4)	1.31	0.77	20	緩斜	皿状	自然		本跡→SD388・SF23
409	N 4 c4~N 4 j9	N-38°-W	逆台形状	33.7	0.32~0.59	0.19~0.28	16~65	緩斜	皿状	自然		
410	O 4 j4~P 4 c2	N-45°-E	U字状	12.4	0.37~1.23	0.09~0.50	18	緩斜	皿状	自然	須恵器	SK2030・2031→本跡→SF23
411	M 6 h7~M 6 h8	N-70°-W	逆台形状	6.4	0.94~1.30	0.62~0.98	30	緩斜	平坦	自然		PG86

(4) ピット群

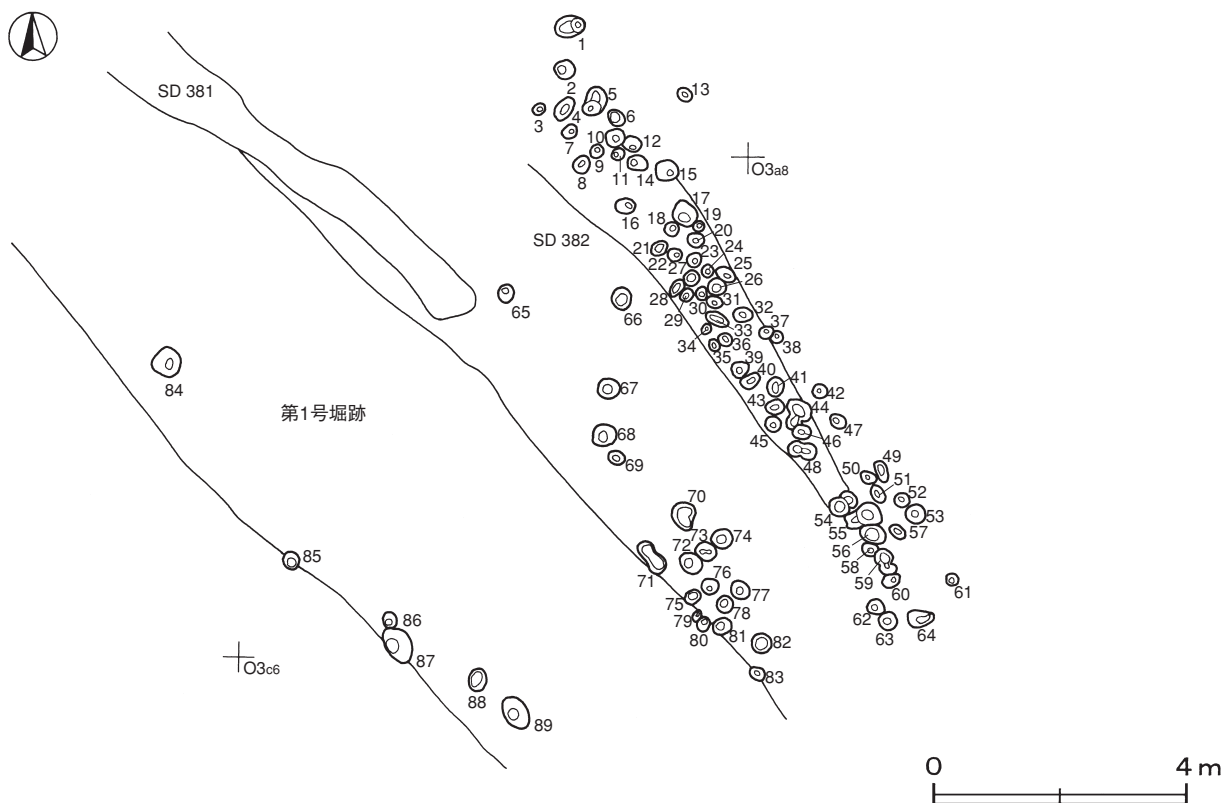
今回の調査で、10か所のピット群が確認された。いずれも建物跡を想定できるような配置ではなく、時期も不明である。ここでは、ピット群ごとにピット計測表と平面図を掲載する。

第77号ピット群 (第77図)

位置 調査区西部のN 3 j5~O 3 c8区にかけての東西13m、南北12mの範囲から、柱穴状のピット89か所が確認された。

重複関係 P 1~P 12・P 14~P 41・P 43~P 46・P 48・P 54は第382号溝跡と、P 75・P 79~P 81・P 83~P 89は第1号堀跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模 平面形は長径16~58cm、短径11~41cmの円形あるいは楕円形で、深さは6~48cmである。



第77図 第77号ピット群実測図

所見 分布状況から建物は想定できないが、第1号堀跡と併行していることから、堀脇に積み上げられた土が堀に流れ出さないよう土留めの施設を設けていた可能性も考えられる。覆土中から縄文土器片や土師質土器片が出土しているピットもあるが、時期・性格ともに不明である。

第77号ピット群計測表

単位：cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
1	43	33	46	31	26	18	24	61	21	19	28
2	32	29	13	32	29	24	35	62	25	20	38
3	19	18	6	33	37	20	37	63	25	25	32
4	41	36	31	34	16	13	31	64	44	25	23
5	47	31	36	35	21	17	28	65	25	23	26
6	28	24	23	36	25	21	34	66	33	30	14
7	23	20	42	37	21	18	13	67	34	30	16
8	28	26	20	38	20	18	18	68	42	33	20
9	21	20	25	39	29	27	15	69	25	20	19
10	29	30	31	40	32	24	9	70	39	35	10
11	23	19	28	41	31	22	15	71	56	22	14
12	25	24	28	42	25	22	28	72	35	28	34
13	23	20	21	43	28	26	14	73	33	29	30
14	32	25	28	44	41	36	25	74	32	30	9
15	33	32	23	45	23	22	21	75	27	21	17
16	29	25	27	46	27	21	23	76	26	25	26
17	44	37	32	47	26	21	25	77	28	27	32
18	22	22	23	48	44	25	26	78	26	24	31
19	19	16	19	49	28	18	24	79	19	11	14
20	25	22	27	50	27	21	22	80	21	19	26
21	26	23	24	51	30	21	20	81	31	23	30
22	22	20	21	52	24	23	30	82	28	27	10
23	21	18	13	53	30	30	36	83	22	16	18
24	17	17	25	54	44	38	29	84	44	40	47
25	31	20	16	55	56	42	27	85	25	24	31
26	30	26	29	56	37	28	10	86	24	22	39
27	24	23	25	57	27	18	15	87	58	41	48
28	24	16	29	58	25	21	17	88	34	26	22
29	24	15	25	59	44	31	23	89	58	38	37
30	22	18	28	60	29	20	27				

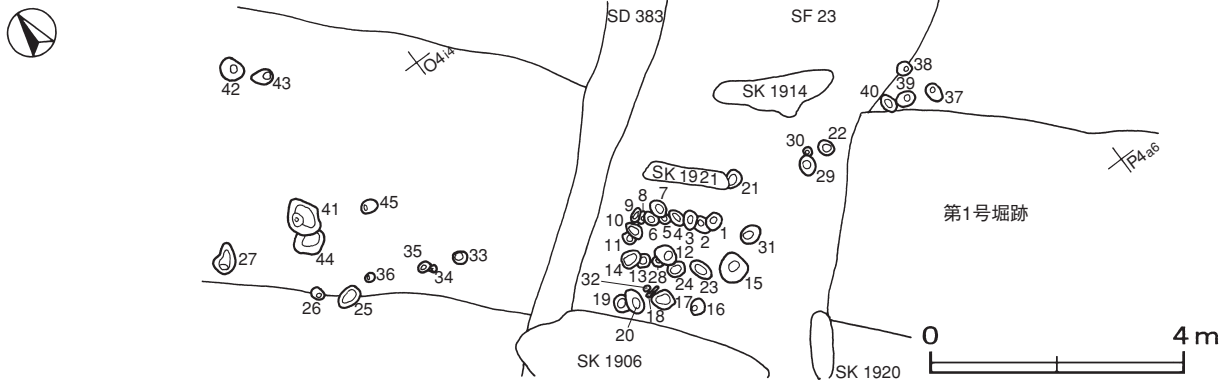
第78号ピット群（第78図）

位置 調査区南部のO4h2～O4j5区にかけての東西12m、南北8mの範囲から、柱穴状のピット45か所が確認された。

重複関係 ピットの大部分は第1号堀跡、及び第23号道路跡付近に分布しているが、新旧関係は不明である。

規模 平面形は長径12～65cm、短径7～50cmの円形あるいは楕円形で、深さは2～45cmである。

所見 分布状況から建物は想定できない。覆土中から縄文土器片や土師質土器片が出土しているピットもあるが、時期・性格ともに不明である。



第78図 第78号ピット群実測図

第78号ピット群計測表

単位：cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
1	25	19	4	16	25	20	17	31	32	26	10
2	(27)	25	6	17	38	28	9	32	12	10	2
3	27	23	4	18	16	7	8	33	24	20	6
4	30	18	4	19	27	(19)	9	34	(15)	12	5
5	20	14	5	20	39	26	12	35	21	15	10
6	26	17	3	21	28	(17)	10	36	15	14	9
7	25	21	9	22	24	22	17	37	28	21	32
8	23	(10)	3	23	35	20	8	38	23	22	45
9	24	12	14	24	28	21	4	39	30	21	12
10	24	16	10	25	40	25	26	40	31	20	42
11	19	13	8	26	19	16	13	41	65	50	33
12	34	26	10	27	45	32	20	42	38	32	16
13	23	18	14	28	21	(9)	6	43	34	25	19
14	31	23	13	29	33	25	14	44	40	(31)	26
15	45	40	23	30	15	14	7	45	28	20	7

第79号ピット群 (第79図)

位置 調査区北東部のM 5 g9～N 6 c4区にかけての東西20m、南北26mの範囲から、柱穴状のピット48か所が確認された。

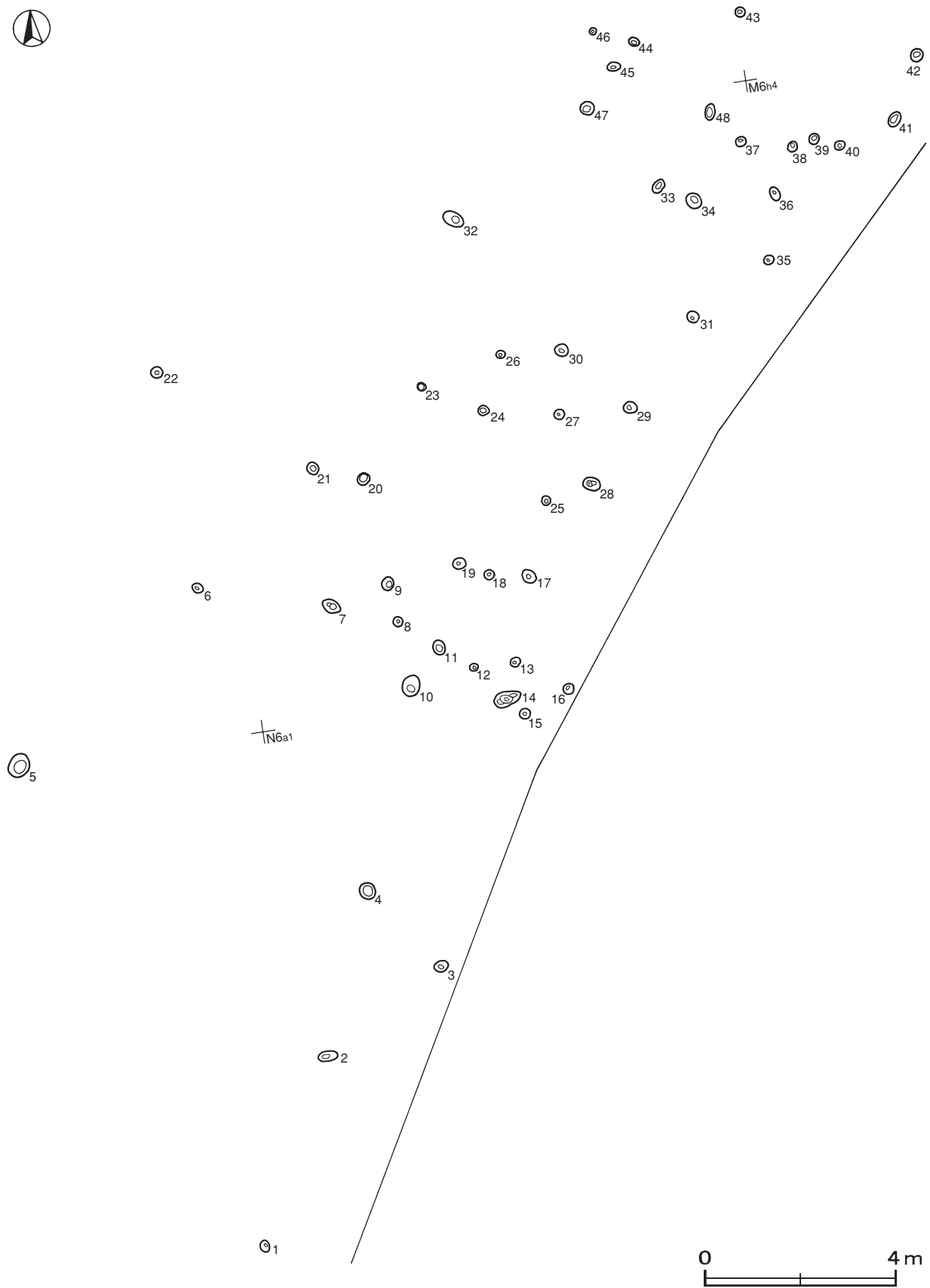
規模 平面形は長径16～57cm、短径14～46cmの円形あるいは楕円形で、深さは6～52cmである。

所見 分布状況から建物は想定できない。覆土中から縄文土器片や土師質土器片が出土しているピットもあるが、時期・性格ともに不明である。

第79号ピット群計測表

単位：cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
1	24	19	32	4	35	30	44	7	38	24	16
2	38	23	34	5	55	46	19	8	21	20	12
3	28	25	49	6	20	19	15	9	25	19	8



第79図 第79号ピット群実測図

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
10	41	34	12	23	20	17	11	36	30	18	21
11	30	25	52	24	22	20	9	37	22	22	11
12	18	17	8	25	20	18	15	38	20	18	18
13	22	20	20	26	19	19	14	39	22	20	21
14	57	31	21	27	20	18	17	40	22	20	35
15	22	22	18	28	40	26	17	41	30	22	44
16	22	19	19	29	24	22	31	42	22	22	18
17	33	26	22	30	26	24	20	43	20	20	29
18	24	23	23	31	28	20	7	44	24	20	38
19	25	25	30	32	42	27	13	45	26	18	14
20	25	24	15	33	30	24	22	46	16	14	19
21	25	22	10	34	32	28	20	47	24	23	36
22	23	21	12	35	24	17	38	48	32	20	6

第80号ピット群 (第80図)

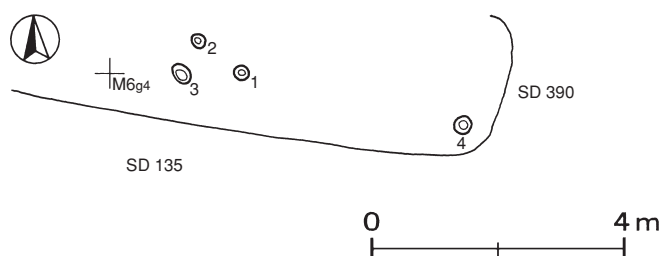
位置 調査区北東部のM 6 f4～M 6 g5区にかけての東西5 m, 南北2 mの範囲から, 柱穴状のピット4か所が確認された。

規模 平面形は長径21～30cm, 短径20～26cmの円形あるいは楕円形で, 深さは5～19cmである。

所見 分布状況から建物は想定できない。覆土中から縄文土器片や土師質土器片が出土しているピットもあるが, 時期・性格ともに不明である。

第80号ピット群計測表 単位: cm

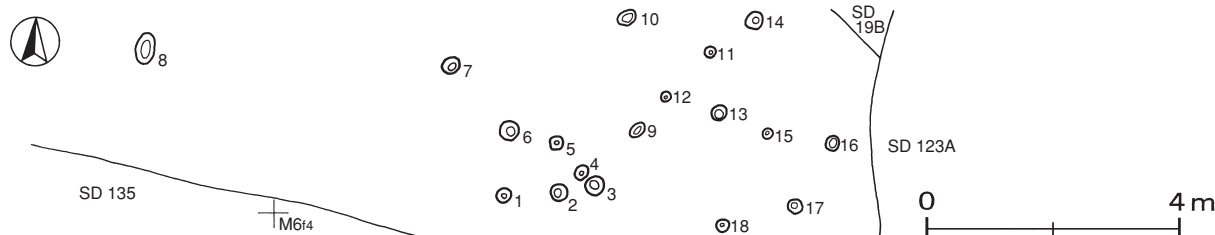
番号	長径	短径	深さ
1	21	20	5
2	21	20	15
3	30	25	19
4	26	26	12



第80図 第80号ピット群実測図

第81号ピット群 (第81図)

位置 調査区北東部のM 6 e3～M 6 f6区にかけての東西12m, 南北4 mの範囲から, 柱穴状のピット18か所が確認された。



第81図 第81号ピット群実測図

規模 平面形は長径15～40cm，短径14～30cmの円形あるいは楕円形で，深さは4～24cmである。

所見 分布状況から建物は想定できない。覆土中から縄文土器片や土師質土器片が出土しているピットもあるが，時期・性格ともに不明である。

第81号ピット群計測表

単位：cm

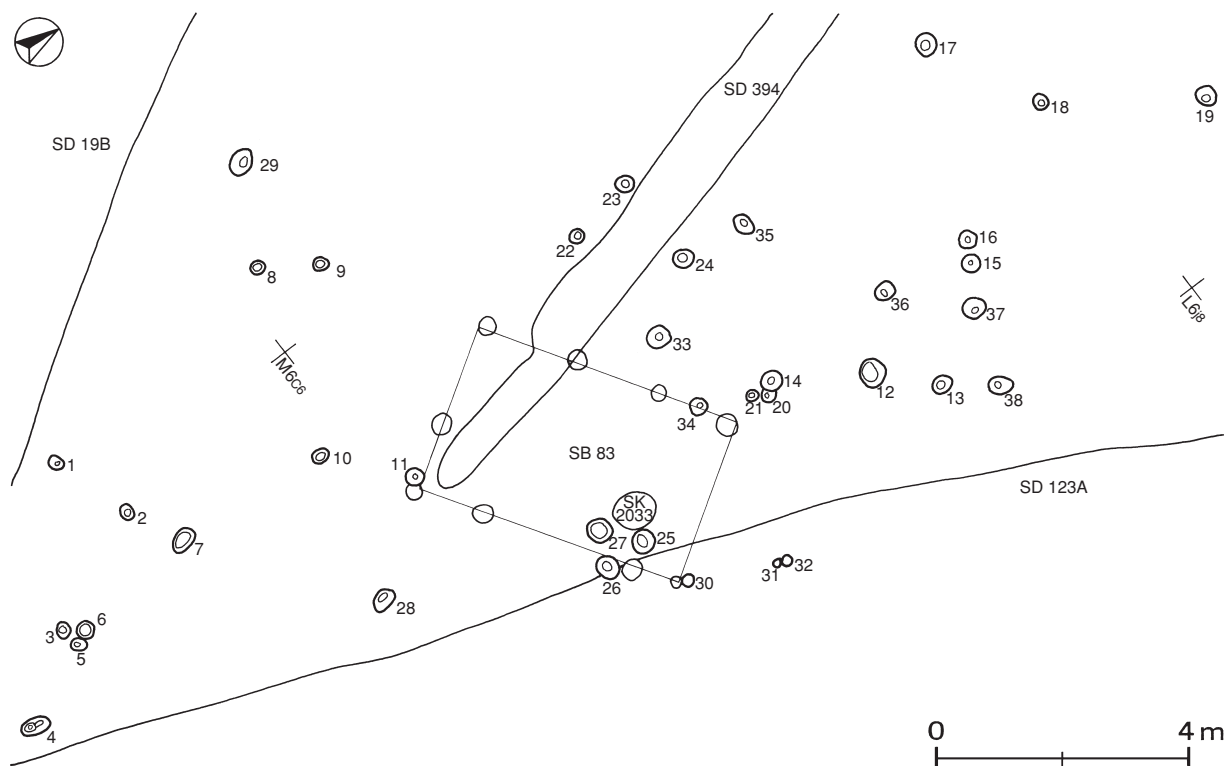
番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
1	20	19	13	7	26	23	21	13	21	21	14
2	28	24	12	8	40	30	8	14	27	27	12
3	28	26	13	9	24	17	11	15	15	15	7
4	20	18	7	10	28	22	3	16	22	21	10
5	22	21	24	11	17	16	16	17	21	19	13
6	29	27	24	12	15	14	4	18	17	17	10

第82号ピット群（第82図）

位置 調査区北東部のL 6 i5～M 6 d7区にかけての東西12m，南北22mの範囲から，柱穴状のピット38か所が確認された。

重複関係 P 11は第83号掘立柱建物跡と，P 26・P 30～P 32は第123A号溝跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模 平面形は長径16～44cm，短径12～35cmの円形あるいは楕円形で，深さは10～55cmである。



第82図 第82号ピット群実測図

所見 分布状況から建物は想定できない。覆土中から縄文土器片や土師質土器片が出土しているピットもあるが、時期・性格ともに不明である。

第82号ピット群計測表

単位：cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
1	22	21	23	14	31	29	37	27	40	35	52
2	24	21	15	15	27	26	22	28	40	26	29
3	22	21	16	16	25	24	35	29	43	32	48
4	44	23	22	17	33	32	40	30	(18)	(18)	[45]
5	24	18	23	18	24	20	17	31	(12)	(12)	[54]
6	28	27	12	19	28	28	45	32	(18)	(18)	[52]
7	40	27	10	20	26	(18)	28	33	34	33	34
8	23	22	12	21	16	16	12	34	28	28	26
9	23	19	-	22	20	19	25	35	36	24	35
10	26	21	17	23	26	24	28	36	33	28	44
11	25	23	26	24	30	28	43	37	33	30	49
12	41	36	20	25	37	33	-	38	38	26	38
13	29	12	30	26	35	31	55				

第83号ピット群（第83図）

位置 調査区北東部のL 6 j6～M 7 e2区にかけての東西20m、南北22mの範囲から、柱穴状のピット90か所が確認された。

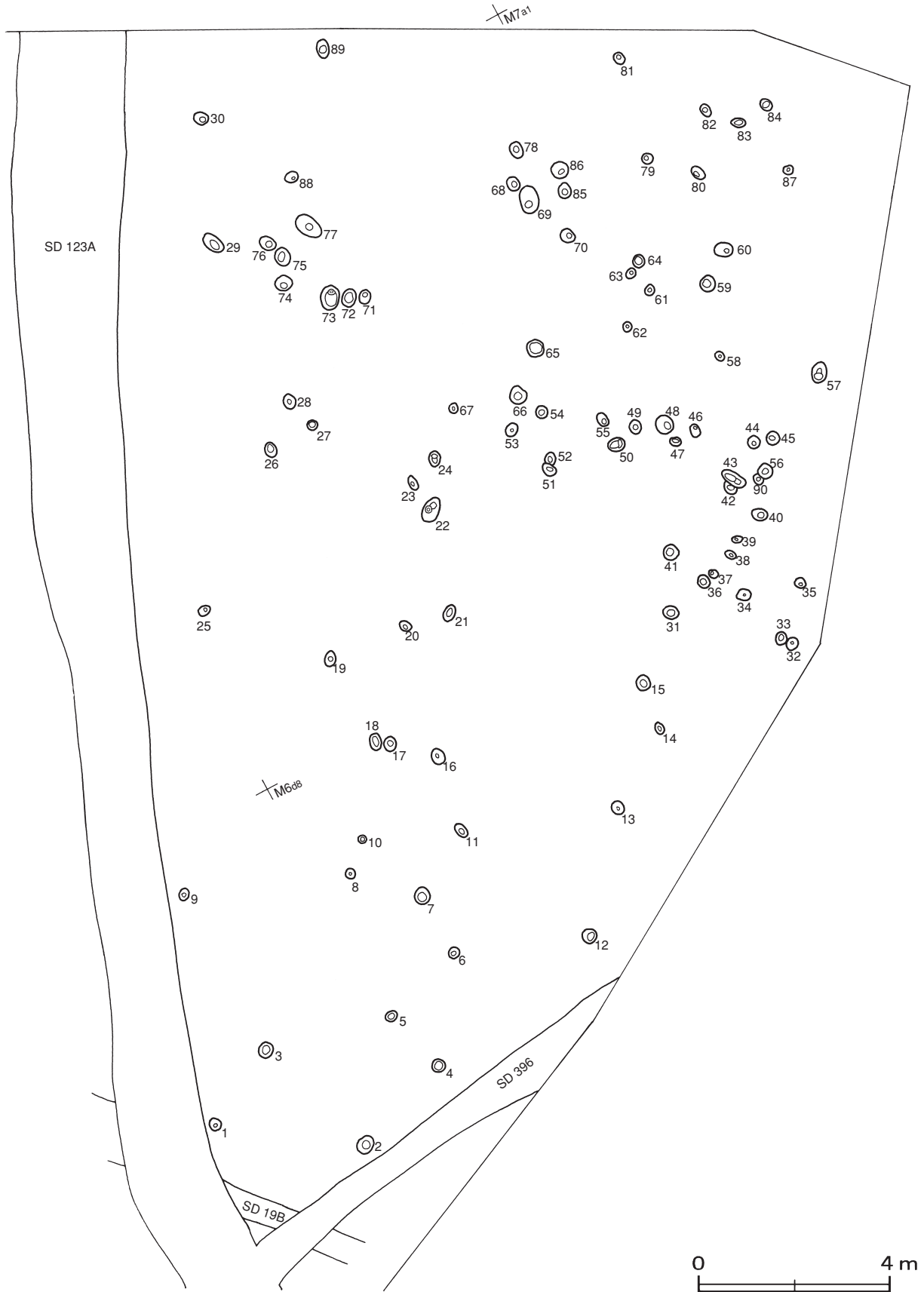
規模 平面形は長径18～55cm、短径14～37cmの円形あるいは楕円形で、深さは5～69cmである。

所見 分布状況から建物は想定できない。覆土中から縄文土器片や土師質土器片が出土しているピットもあるが、時期・性格ともに不明である。

第83号ピット群計測表

単位：cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
1	24	21	15	15	28	28	26	29	41	22	33
2	34	31	34	16	28	24	34	30	30	23	44
3	28	27	29	17	30	22	18	31	30	25	42
4	24	24	22	18	32	20	16	32	28	23	30
5	25	22	13	19	29	20	27	33	25	22	7
6	22	21	46	20	26	18	20	34	30	25	22
7	33	28	31	21	34	20	13	35	24	20	14
8	21	18	30	22	46	26	60	36	27	26	50
9	24	18	16	23	28	16	34	37	20	16	25
10	18	17	16	24	28	20	19	38	23	14	5
11	27	19	28	25	22	15	33	39	21	15	13
12	27	26	25	26	28	22	14	40	32	22	32
13	24	22	28	27	20	18	7	41	31	29	52
14	22	18	17	28	27	25	17	42	30	(22)	17



第83図 第83号ピット群実測図

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
43	54	24	63	59	34	28	69	75	36	31	10
44	26	23	26	60	36	28	23	76	33	24	55
45	27	24	39	61	22	18	8	77	57	38	39
46	23	18	37	62	19	17	30	78	31	27	13
47	22	19	11	63	23	18	16	79	22	21	30
48	35	33	38	64	27	24	32	80	32	23	32
49	27	22	38	65	39	32	10	81	22	18	16
50	33	26	31	66	38	34	30	82	26	18	22
51	31	26	17	67	20	16	16	83	28	20	30
52	(22)	24	18	68	28	27	27	84	26	21	25
53	28	24	14	69	55	30	24	85	28	26	52
54	26	22	25	70	32	26	18	86	36	30	40
55	28	20	40	71	30	20	24	87	20	16	-
56	30	30	46	72	38	28	23	88	28	20	31
57	40	27	36	73	48	37	29	89	36	23	25
58	18	16	21	74	32	27	41	90	21	21	35

第84号ピット群（第84図）

位置 調査区南部のP 4 i6～Q 5 c1区にかけての東西22m，南北20mの範囲から，柱穴状のピット103か所が確認された。

重複関係 P 7は第81号掘立柱建物跡の範囲内に分布している。また，P 98～P 100は第405号溝跡と重複しているが，いずれも新旧関係は不明である。

規模 平面形は長径16～62cm，短径16～50cmの円形あるいは楕円形で，深さは10～65cmである。

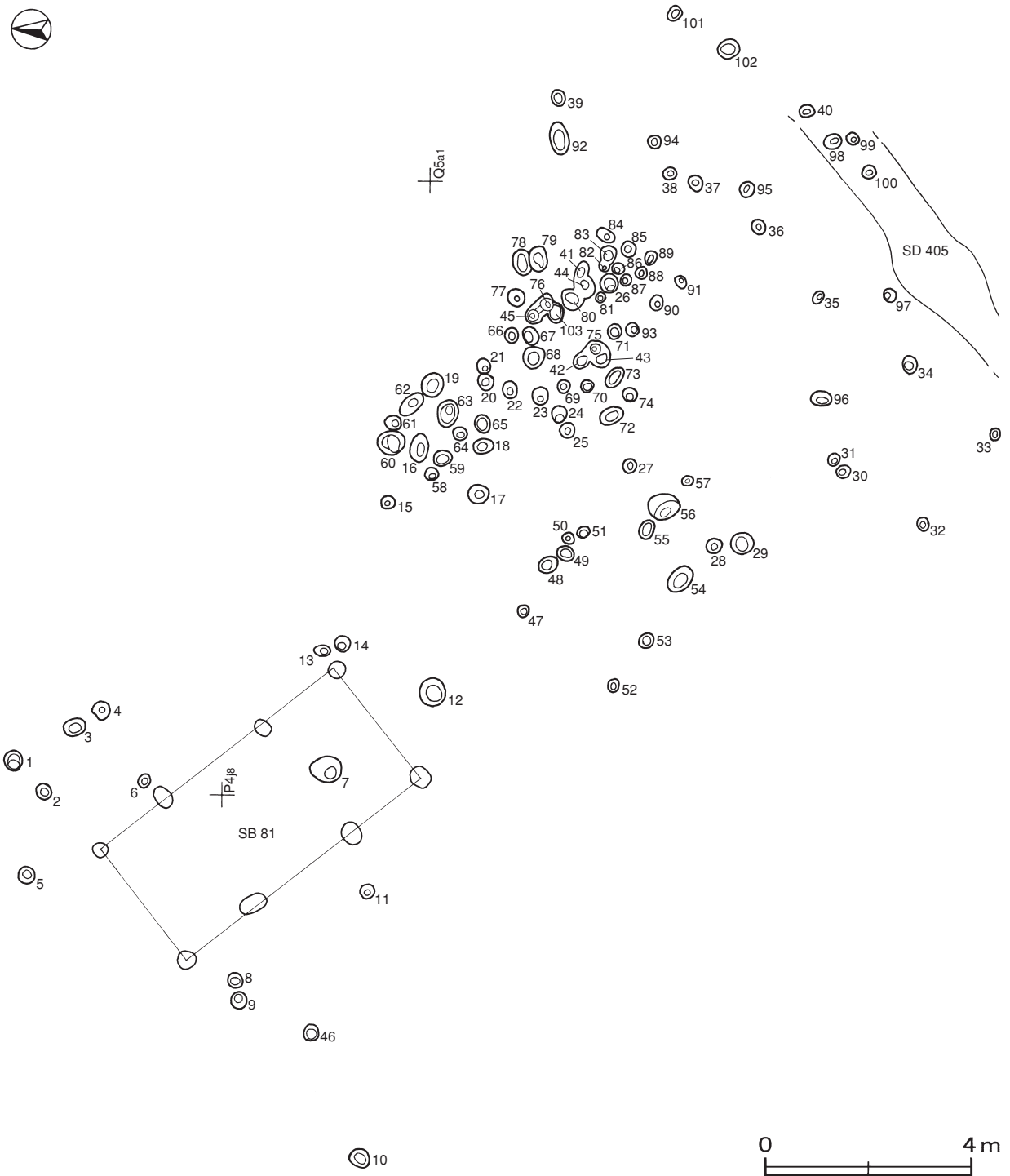
所見 分布状況から建物は想定できない。覆土中から縄文土器片や土師質土器片が出土しているピットもあるが，時期・性格ともに不明である。

第84号ピット群計測表

単位：cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
1	37	33	18	16	53	34	37	31	21	21	41
2	31	29	15	17	40	36	65	32	22	20	25
3	44	31	29	18	34	29	43	33	25	19	20
4	33	28	41	19	44	41	27	34	31	26	32
5	31	31	19	20	30	30	58	35	26	19	41
6	23	21	10	21	30	24	38	36	27	25	36
7	58	50	33	22	31	26	23	37	29	25	37
8	26	25	31	23	32	30	53	38	26	23	36
9	30	30	32	24	30	29	51	39	30	25	24
10	37	(25)	10	25	26	26	37	40	27	22	27
11	25	24	37	26	38	35	21	41	(31)	28	20
12	51	46	23	27	25	25	37	42	(27)	26	18
13	30	20	40	28	28	27	50	43	38	(25)	29
14	30	29	31	29	47	42	45	44	54	(36)	32
15	25	24	34	30	27	23	21	45	35	(25)	25

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
46	29	29	10	52	21	20	29	58	25	25	39
47	20	20	18	53	29	26	46	59	34	30	25
48	40	31	28	54	54	48	25	60	47	47	31
49	35	31	24	55	45	28	24	61	27	26	26
50	27	24	20	56	60	50	32	62	52	30	42
51	24	21	23	57	20	19	48	63	50	39	50



第84図 第84号ピット群実測図

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
64	25	23	19	78	49	31	29	92	62	35	34
65	34	28	24	79	50	35	34	93	25	23	24
66	28	24	28	80	45	(32)	34	94	24	23	26
67	30	28	20	81	16	16	22	95	30	27	35
68	43	38	34	82	23	(22)	21	96	40	28	30
69	25	22	26	83	(32)	29	20	97	22	22	63
70	23	22	21	84	35	23	30	98	34	29	37
71	28	27	28	85	27	27	36	99	24	23	22
72	47	31	23	86	25	21	19	100	25	24	32
73	46	26	25	87	22	21	24	101	27	24	28
74	27	25	28	88	23	20	20	102	40	35	17
75	(25)	(25)	42	89	28	22	24	103	40	(30)	23
76	35	(27)	25	90	26	23	30				
77	32	29	40	91	24	18	30				

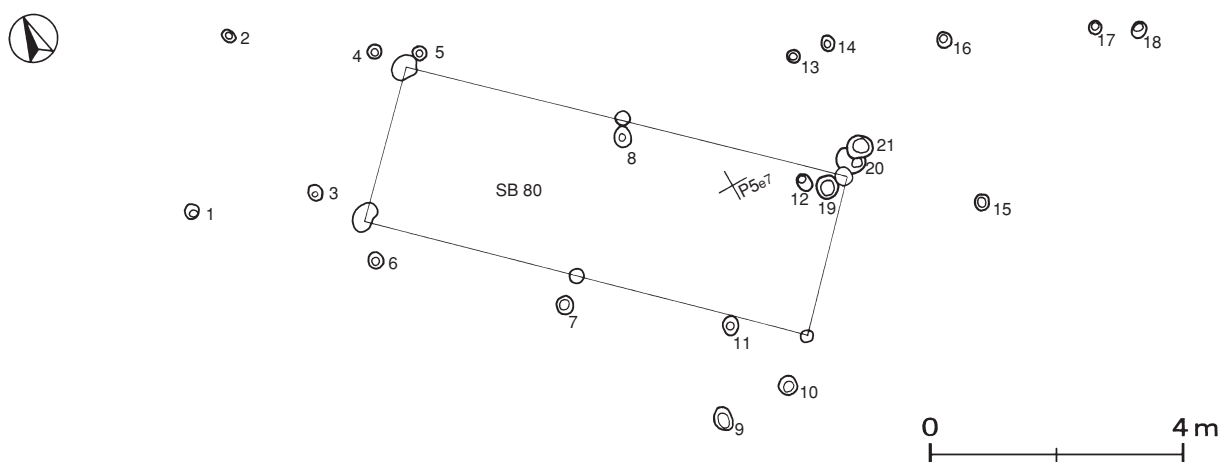
第85号ピット群 (第85図)

位置 調査区南部のP 5 c5～P 5 e8区にかけての東西15m，南北10mの範囲から，柱穴状のピット21か所が確認された。

重複関係 P 5・P 8・P 19・P 20は第80号掘立柱建物跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模 平面形は長径19～46cm，短径17～39cmの円形あるいは楕円形で，深さは9～48cmである。

所見 分布状況から建物は想定できない。覆土中から縄文土器片や土師質土器片が出土しているピットもあるが，時期・性格ともに不明である。



第85図 第85号ピット群実測図

第85号ピット群計測表

単位：cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
1	22	22	40	3	24	20	19	5	20	20	13
2	21	17	14	4	19	19	9	6	23	20	11

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
7	27	26	34	12	29	21	37	17	20	20	34
8	31	26	15	13	20	18	30	18	25	22	32
9	39	28	35	14	20	19	70	19	46	34	28
10	30	28	48	15	21	21	33	20	45	(19)	31
11	30	25	29	16	25	22	30	21	40	39	46

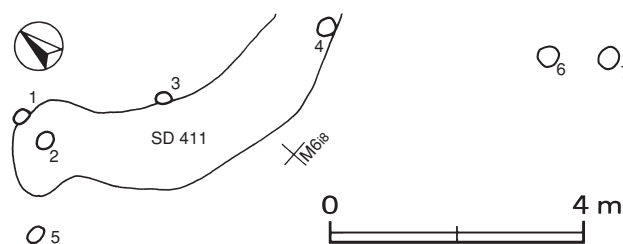
第86号ピット群（第86図）

位置 調査区北東部のM6h7～M6i9区にかけての東西8m、南北7mの範囲から、柱穴状のピット7か所が確認された。

重複関係 P2～P4は第411号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模 平面形は長径22～34cm、短径20～32cmの円形あるいは楕円形で、深さは40cmほどである。

所見 分布状況から建物は想定できない。覆土中から縄文土器片や土師質土器片が出土しているピットもあるが、時期・性格ともに不明である。



第86図 第86号ピット群実測図

第86号ピット群計測表

単位：cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
1	22	22	-	4	28	26	-	7	34	32	-
2	28	24	-	5	28	24	40				
3	24	20	-	6	32	32	-				

表11 時期不明ピット群一覧表

番号	位置	範囲 (m)		ピット数	ピット平面形	規模 (cm)			主な出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
		南北	東西			長径	短径	深さ		
77	N3j5～O3c8	12.0	13.0	89	円・楕円	16～58	11～41	6～48	-	堀1・SD382
78	O4h2～O4j5	8.0	12.0	45	円・楕円	12～65	7～50	2～45	-	堀1・SF23
79	M5g9～N6c4	26.0	20.0	48	円・楕円	16～57	14～46	6～52	-	
80	M6f4～M6g5	2.0	5.0	4	円・楕円	21～30	20～26	5～19	-	
81	M6e3～M6f6	4.0	12.0	18	円・楕円	15～40	14～30	4～24	-	
82	L6i5～M6d7	22.0	12.0	38	円・楕円	16～44	12～35	10～55	-	SB83・SD123A
83	L6j6～M7e2	22.0	20.0	90	円・楕円	18～55	14～37	5～69	-	
84	P4i6～Q5c1	20.0	22.0	103	円・楕円	16～62	16～50	10～65	-	SB81・SD405
85	P5c5～P5e8	10.0	15.0	21	円・楕円	19～46	17～39	9～48	-	SB80
86	M6h7～M6i9	7.0	8.0	7	円・楕円	22～34	20～32	40	-	SD411

(5) 畝状遺構

第1号畝状遺構 (第87図, 付図1)

位置 調査区南部のP 5c1～P 5a2区にかけてのエリア際土層断面で確認した。

確認状況 今回の調査で、1か所の畝状遺構が確認された。調査期間が短期間であったことと遺構の遺存状況が悪いことから、土層断面のみの調査となった。ここでは、エリア際での土層断面図を掲載する。

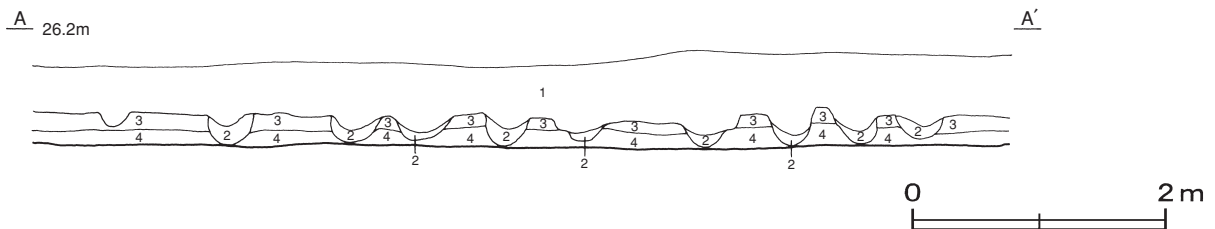
規模と形状 断面で確認できた遺構の全長は5.95mで、畝の幅は19～68cm、畝間は16～32cmである。

覆土 4層に分層できる。第1層は表土で、第2層は鋤等で掘り込んだ窪みに流れ込んだ層と考える。第3・4層は立てられた畝と推測できる。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | 炭化粒子少量, ロームブロック微量 |

所見 遺物は出土していないので時期や性格は不明であるが、耕作地であった可能性が高い。



第87図 第1号畝状遺構実測図

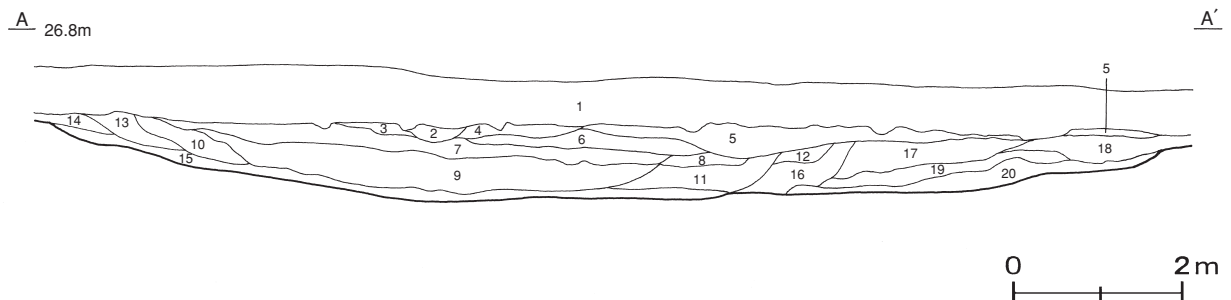
(6) 埋没谷

第1号埋没谷 (第88図, 付図1)

位置 調査区南部のP 4・P 5・Q 4区にかけての標高26.5mの台地東側に位置している。

確認状況 P 4・P 5・Q 4区地点は標高26.5mで、東に入り込んでいる谷津に延びていくように黒色土が堆積している。今回、黒色土の堆積状況から自然地形を把握するとともに、その地積の時期を考察するためにエリア際にトレンチを設定し、確認調査を行った。

覆土 20層に分層できる。第1層は表土であり、第2層は埋め戻された層である。第3～20層は流れ込んで堆積した層である。



第88図 第1号埋没谷実測図

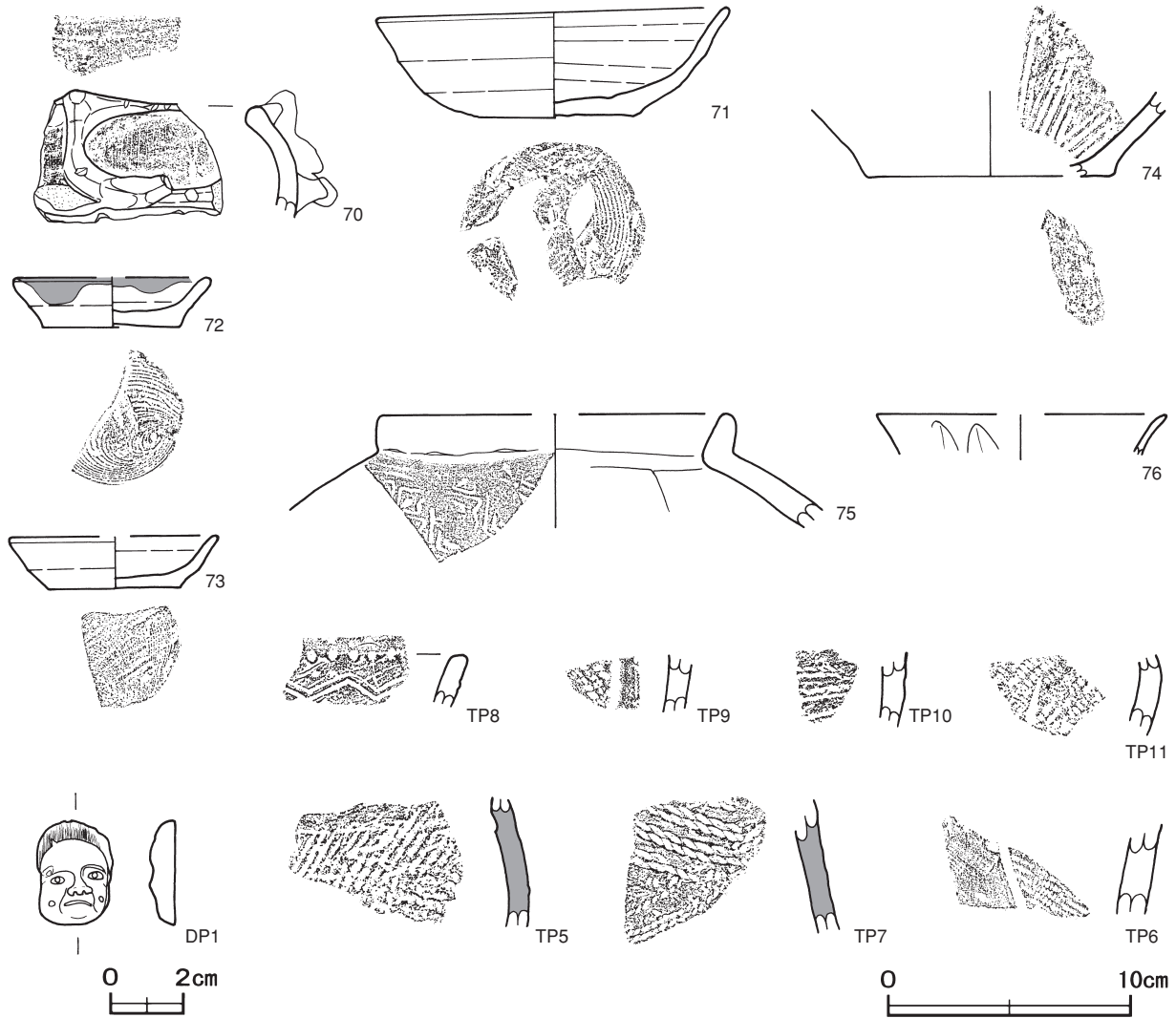
土層解説

1 黒 褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	11 黒 褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
2 黒 褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	12 暗 褐色	ローム粒子少量
3 黒 褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	13 黒 褐色	ローム粒子少量
4 黒 褐色	ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土ブロック微量	14 黒 褐色	ローム粒子微量 (7層より暗)
5 黒 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	15 黒 褐色	ロームブロック中量
6 黒 褐色	ローム粒子少量	16 黒 褐色	ローム粒子微量 (14層より締まり強)
7 黒 褐色	ローム粒子微量	17 極暗 褐色	ローム粒子微量
8 黒 褐色	ローム粒子微量 (7層よりやや明)	18 暗 褐色	ローム粒子少量 (12層より粘性弱)
9 黒 褐色	ローム粒子微量	19 暗 褐色	ローム粒子少量 (18層より明)
10 黒 褐色	ローム粒子微量 (7層より明)	20 褐色	ローム粒子多量

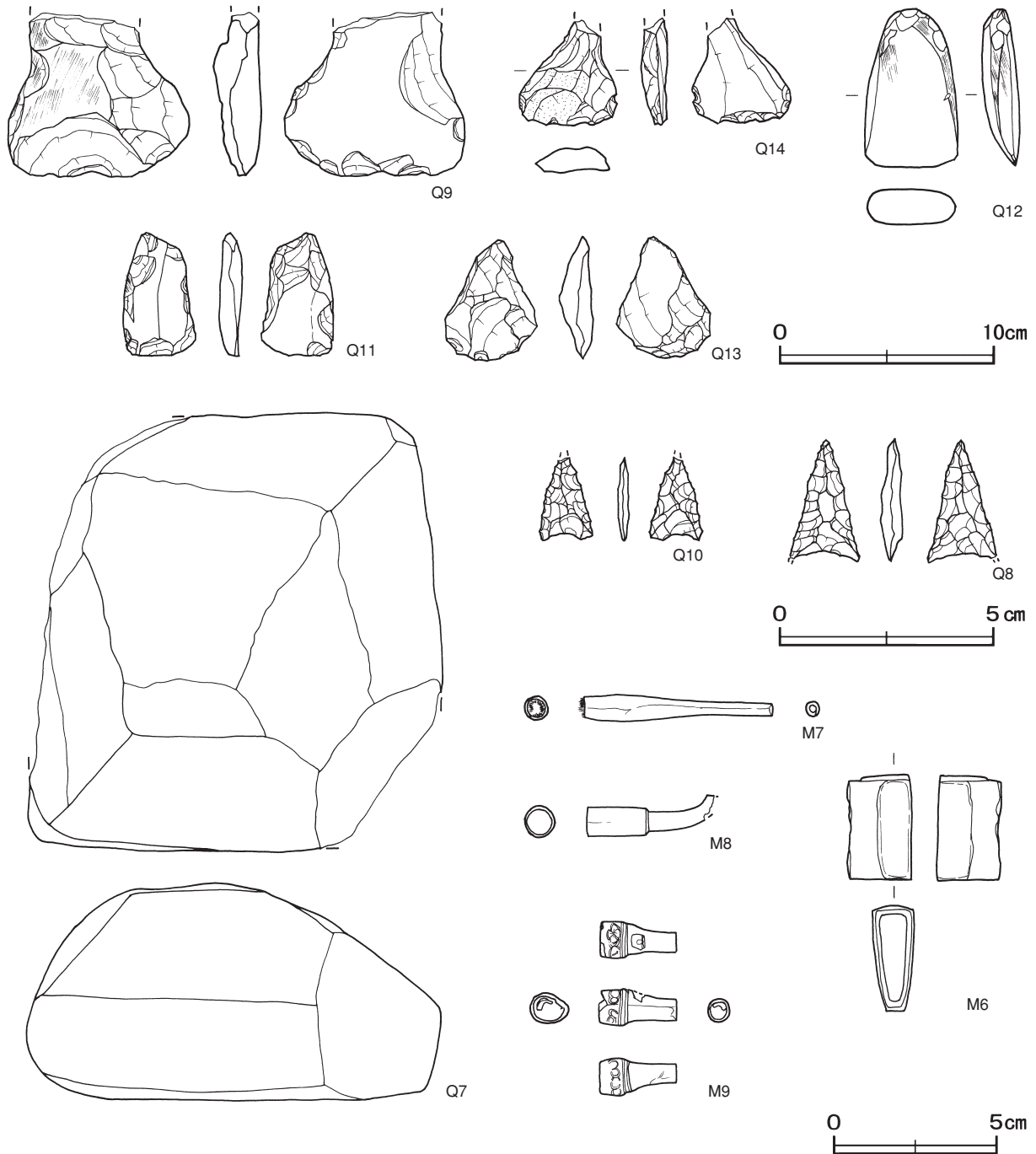
所見 同エリアの標高25mで第8号陥し穴, 標高24.5mで第81号掘立柱建物跡が確認できていることや, 埋没谷から遺物が出土していないことなどから, 第9~20層はすでに縄文時代には埋没していたものと考えられる。

(7) 遺構外出土遺物 (第89・90図)

遺構に伴わない主な遺物について, 実測図及び観察表で掲載する。



第89図 遺構外出土遺物実測図(1)



第90図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表 (第89・90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴など	出土位置	備考
70	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	楕円形区画文内櫛歯状工具による条線	表土	5%
71	土師器	坏	[14.5]	4.5	[7.2]	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	底部回転糸切り	SK2008	55% PL14
72	土師質土器	小皿	[7.8]	2.0	5.7	長石・石英	橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り 口縁部油煙付着	表土	50% PL13
73	土師質土器	小皿	[8.4]	2.1	[5.4]	長石・石英・雲母	橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り後スタレ状圧痕	表土	35% PL13
74	土師質土器	播鉢	-	(3.5)	[10.0]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	5条一単位の播り目	表土	5% PL15
75	土師質土器	短頸壺	[14.4]	(4.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部上半に渦巻状のスタンプ文	表土	5% PL16
76	青磁	碗	[12.0]	(1.6)	-	緻密	オリブ灰	良好	鎚蓮弁文	表土	5% PL18

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴など	出土位置	備考
TP5	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	普通	含繊維 無節の羽状縄文	SK1936	
TP6	縄文土器	深鉢	長石	明黄褐	普通	L R縄文施文後区画内磨り消し	SK2001	PL16
TP7	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰黄褐	普通	含繊維 単軸絡条体	表土	
TP8	縄文土器	深鉢	長石	にぶい橙	普通	地文無節R施文後半裁竹管によるジグザグ文	第1号堀	PL16
TP9	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	L R L縄文施文後縦位の磨り消し	SD367	
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	単軸絡条体	SD367	
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	普通	L R縄文	SD367	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴など	出土位置	備考
DP1	泥面子	2.8	2.1	0.7	3.26	粘土	円盤状 人面	表土	PL16

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴など	出土位置	備考
Q7	五輪塔	27.3	25.6	13.6	(12050)	花崗岩	火輪部	SD398	PL17
Q8	石鏃	2.8	(1.6)	0.5	1.38	安山岩	押圧剥離	SK1907	PL16
Q9	打製石斧	(7.7)	8.4	2.2	(160.7)	安山岩	表裏に原石面残す 括れ部に磨痕	SK1924	PL16
Q10	石鏃	(1.9)	1.3	0.3	(0.61)	チャート	押圧剥離	表土	PL16
Q11	打製石斧	5.8	3.4	1.1	26.1	ホルンフェルス	表裏面とも剥離成形後研磨	表土	PL16
Q12	磨製石斧	7.4	4.3	1.7	89.0	蛇紋岩	片刃 側面部に研磨痕	表土	PL16
Q13	スクレイパー	5.7	4.4	1.6	28.3	チャート	剥離成形 裏面に風化剥離痕	SF23	PL16
Q14	スクレイパー	(5.0)	4.6	1.3	(25.2)	頁岩	剥離成形	SD367	PL16

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴など	出土位置	備考
M6	切羽	(2.1)	3.3	1.3	(15.1)	鉄	柄部 断面三角形 左側折り返し	表土	PL18
M7	煙管	(5.9)	径0.7	口付径0.4	(4.46)	銅	吸い口部 軸部部材残存	表土	PL18
M8	煙管	(4.0)	0.9	-	(3.90)	銅	雁首部	表土	PL18
M9	煙管	(2.3)	1.1	口付径0.6	(4.26)	銅	雁首部 花卉文 括れ部に貫通孔	表土	PL18

第4節 ま と め

上野古屋敷遺跡は、平成12・13年度の調査（以下、第1・2次調査と略す）で明らかにされているように旧石器時代から近世までの複合遺跡であり、今回の調査で、遺跡がさらに南東部へ広がっていることを確認した。各時代ごとのあり方については、『茨城県教育財団文化財調査報告第285集』¹⁾（以下、『285集』と略す）において詳細に記載されているので、ここでは今回の調査によって得られた事実関係と上野古屋敷遺跡全体の性格を考察し、まとめとする。なお、上野古屋敷遺跡全体の性格を考察するにあたり、上野古屋敷遺跡6区遺構配置図ならびに上野古屋敷遺跡全体図を付図として添付したので参照されたい。

1 縄文時代

当時代の遺構は、標高25mの台地平坦部から縁辺部にかけて陥し穴5基が確認された。陥し穴の時期は、伴う出土遺物がないため詳細は不明である。第7号陥し穴が調査区中央部で確認された以外は、いずれも調査区西部から南部にかけて確認された。今回の調査で、住居跡は確認されなかったが、これまでの調査で、竪穴住居跡20軒（前期19軒・中期1軒）が北東部の台地縁辺部で確認されている。当遺跡周辺で縄文時代の遺構が確認されたり、土器が表面採集できたりした遺跡として、柴崎遺跡（早・前期、後期）、上野陣馬遺跡（前期～後期）、柴崎南遺跡（中期）、中根不葉抜遺跡（中期）、上境滝ノ臺遺跡（中期）、上野天神遺跡（中期）、大角豆遺跡（中期）、栗原才十郎遺跡（中期）、上境旭台貝塚（後期～晩期）、花室遺跡（中期～後期）、金田西坪B遺跡（中期～後期）、中根中谷津遺跡（後期～晩期）などがあげられる²⁾ことから、台地縁辺部を中心に、移転と廃絶をくり返しながら長期間にわたって集落が展開していたことが窺える。陥し穴は、この地が集落と前後する時期に狩猟の場であったことを物語っている³⁾。

2 中世

当時代の遺構は、標高25～26mの台地平坦部から掘立柱建物跡5棟、地下式坑9基、井戸跡1基、火葬土坑1基、土坑15基、溝跡13条、堀跡1条、道路跡4条、柵跡1列が確認されている。第1～3次調査の成果から、墓域を伴う集落が15世紀末には成立したと考えられている。また、集落は16世紀代に入り拡大し、17世紀初頭には現在の上野地区の集落が位置している桜川寄りの緩斜面部に移動したと推測されている⁴⁾。今回の調査では、時期・性格ともに明らかな遺構は少ない。特に15世紀から16世紀代の遺構は明確でなく、中世において今回の調査区は集落の外周部にあたっていたとみられる。

掘立柱建物跡は、調査区北部から2棟（第82・83号）、南部から3棟（第79～81号）が確認されている。今回の調査で確認された5棟はいずれも、規模や形状、桁行方向から、倉庫としての機能が想定されるものである。第1・2次調査では、44棟確認されており、居宅として機能していた建物が16棟、納屋などの倉庫的な機能をもっていた建物が28棟と報告されている⁵⁾。

地下式坑は、調査区北西部の60m×45mの範囲に集中して9基（第19～27号）が確認されている。時期は、埋め戻された遺物の中に近世の陶磁器が含まれていないため中世に大別できる。なお、16世紀後半の溝が周囲に廻っていることから、地下式坑群の区画と想定でき、地下式坑群は、16世紀代に機能していた可能性が高い。

溝跡は、33条確認されており、南東部から北西方向へ延びているものと、南西部から北東方向に延びているものの二者に大別できる。第367号溝跡は前者にあたり、第392号溝跡と平行しながら延び、調査区域外に

至っている。第367号溝跡の北東には地下式坑群が広がり、更に北東に集落が展開している。また、第367号溝跡の南西側には耕作地が存在することから、集落及び墓域と耕作地を区画していた溝と考えられる。第19～27号地下式坑群は第138・143A・388号溝跡によって区画されていた可能性が高い。更に、第19B・120・143A・367・388・392号溝跡は、東部の谷津に雨水等を排水するとともに、集落及び墓域、耕作地を区画する機能も有していたことが確認できた。第367・388号溝跡は、雨水等を東の谷津に排水する機能がなくなつてからは、道路として使用されていたものと推定できる。

堀跡については、『茨城県教育財団文化財調査報告第324集』で、北西部について「全体が確認できないことから性格は明らかではないが、遺跡の北西側が支谷の谷頭であることから、堀の北東側を区画したものである」と報告されている。第3～5次調査の結果、堀跡は南東方向に更に伸び、総延長240.6mまでは確認することができたが、更に南東に伸びているため、全容は明らかでない。今回の調査で、第1号堀跡より南側では中世の掘立柱建物跡が1棟と火葬土坑が1基確認されただけで、遺構の分布が希薄になることから、集落の南限を区画していたものと想定できる。

道路跡は、今回の調査で4条確認されている。溝跡と同様に南東部から北西方向へ伸びているものと、南西部から北東方向に伸びるものの二者に大別できる。第23・26号道路跡は、第388号溝跡と併行していることから、区画溝である第388号溝跡を意識し、溝に隣接して敷設されたと考えられる。また、第23号道路跡は、遺跡南東部の耕作域や集落南限の堀跡が確認された区域を、南西から北東方向に向かって敷設されていることから、人々が集落から墓域、更には耕作地、集落の外に向かうための道路として利用されていたと推測できる。

調査区南部で、畝状遺構が確認できた。第367号溝より南西付近には倉庫的な機能をもっていたと考えられる掘立柱建物跡2棟（第79・81号掘立柱建物跡）が確認されているが、遺構はまばらであることから、耕作地として利用されていた可能性が高い。台地上のこの辺りは畑作に利用され、台地に入り込んだ谷津は、谷頭からの湧水を利用した水田であったと思われる。

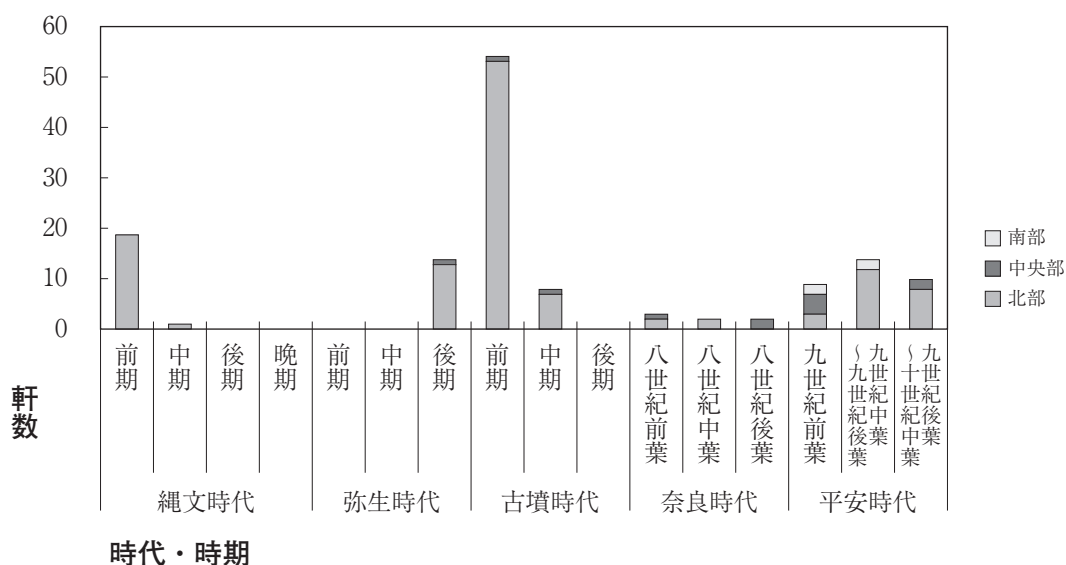
今回の調査で、中世の集落周辺部が、墓域や耕作地として利用されていたことが明らかになった。集落南部は、9基の地下式坑や火葬土坑（第7号火葬土坑）が確認できたことから、墓域である可能性が高い。調査区域の小字名に「堂ノ前」や「勢至前」という小字名が残っていることから、仏堂が存在したことも想定できる。墓域や仏堂の存在は、今回の調査で出土している遺物からも窺うことができる。陶器の瓶や煤の付着した土師質土器の小皿・陶器の灯明受皿、土師質土器の香炉などは、花を供え、火をともし、香を焚くという仏教とのかかわりが推測できる。

当集落の性格については、第1・2次調査において威信財と考えられる鉄釉の瓶子、青磁碗、青磁皿、青磁壺、白磁皿、白磁杯、天目茶碗、茶釜、茶臼などが出土していることや、これまでの調査で確認された鉄製品類の数は極少数ではあるが、出土した砥石の数は溝跡からだけでも134点と極めて多く、鍛冶を想定できる羽口や鉄滓も出土しており、鉄製品を豊富に保持していたと考えられる⁶⁾ことから、有力農民層の存在が推定できる。当集落の性格について『285集』で「当集落を一般農民層の集落と想定するよりは、国人層（在地領主）よりやや身分が下で、小田城主と関係する武力を有した半武士・半農民の土豪層（有力農民層）を中心とした集落跡」と報告されており、更に可能性が高まったと想定できる。

3 上野古屋敷遺跡の性格

はじめに、各時代の様相について概観していく。

上野古屋敷遺跡区域・時期別住居跡分布表



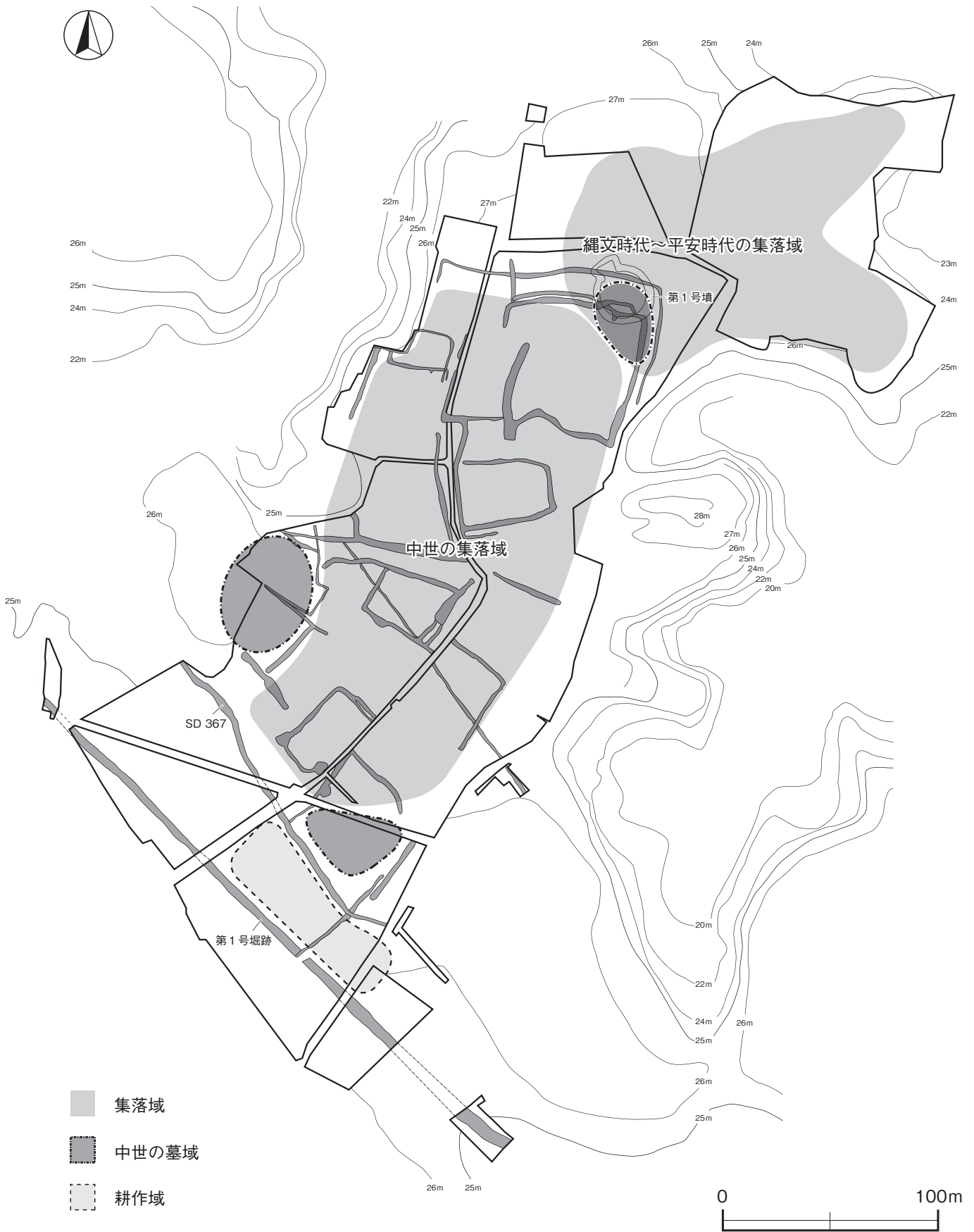
旧石器時代の遺物は、遺跡の北東部及び東部で確認されている。石材は硬質安山岩と頁岩が中心で、石材の特徴は、谷を挟んで北西100mほどの地点に位置している上野陣場遺跡で確認されている石材の様相と同様である。こうしたことから両台地上では、この時代の生活の痕跡が確認されていることが『285集』で報告されている。

縄文時代の遺構は、今回までの調査で、竪穴住居跡20軒、土坑55基、陥し穴8基が確認されており、竪穴住居跡は、北東部の台地縁辺部に広がっている。これまで出土した遺物は、早期中葉から中期中葉までの土器である。このことから当遺跡でも、周辺の上野天神塚遺跡や上野陣場遺跡、上境作ノ内遺跡、上境旭台貝塚、中根中谷津遺跡と合わせて、長期間に台地縁辺部を中心として集落が展開していた様子が分かる⁹⁾。

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡14軒が確認された。これらの竪穴住居跡は、北東部の台地縁辺部に2～3軒の住居からなる単位集団を形成し、点在している状況である。第3次調査で確認した第145号住居跡の規模が床面積43㎡と最大で、次いで第135号住居跡の38㎡であることから、これらの住居が集落の中心であった可能性がある。住居間における重複もみられず、出土土器もおおむね同一時期であることから、1世代程度の短期の集落であったと考えられている¹⁰⁾。

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡63軒、掘立柱建物跡1棟、古墳1基、古墳周溝内土壙2基、土坑6基、溝跡1条が確認されている。これらの竪穴住居跡は、北東部の台地縁辺部に広がっている。住居跡の時期は、前期前半が8軒、前期中葉が7軒、前期後葉が20軒、前期後葉から中期前葉が14軒、中期前半が7軒、中期後葉が1軒、のほか、前期とみられるもの5軒、前期または中期と考えられるもの1軒である。このことから、上野古屋敷遺跡における集落は、軒数から古墳時代前期が盛期と言える。

奈良時代の遺構は、竪穴住居跡7軒が確認されており、8世紀前葉3軒、中葉2軒、後葉2軒と小規模の集落が継続的に展開していたことが看取できる。当時代になると、中央部寄りの台地縁辺部から平坦部を居住区としている。支谷を挟んで西側に所在する上野陣場遺跡における奈良時代の遺構は、竪穴住居跡15軒、大形円形土坑3基が確認されている。住居跡の規模は、一辺が4m前後が主体で、当遺跡との差はそれほどでもない。また、主軸方向も8世紀前葉は北西方向に傾き、中葉以降は北から北東方向に傾くものが多いが、規格性は認められず、当遺跡や柴崎遺跡と共通する傾向である。上野陣場遺跡における遺物では、8世紀前



第91図 上野古屋敷遺跡土地利用略図

葉に比定される住居から円面硯1点、8世紀中葉に比定される第1号大型土坑から50点を超す灰釉陶器と10点の緑釉陶器が出土しており、出土遺物から遺跡の中心は、上野陣場遺跡または柴崎遺跡周辺に移っていると推測される¹¹⁾。

平安時代の遺構は、竪穴住居跡33軒、掘立柱建物跡2棟、井戸跡1基、溝跡2条、土坑2基が確認されている。東部の台地平坦部に2軒、南西部の台地平坦部に2軒確認されおり、前時代に竪穴住居跡が多く確認できた北東部の台地縁辺部に集中している。竪穴住居跡の時期は、9世紀前葉が9軒、9世紀中葉が5軒、9世紀後葉が9軒、9世紀後葉から10世紀前葉にかけては4軒、10世紀中葉は3軒のほか、9～10世紀と推測できる住居跡が3軒である。集落構造としては、2、3軒の住居からなる単位集団が、ある程度の間隔をもって存在する散在型の集落であり、核となるような単位集団の存在は認められない。上野陣場遺跡でも同様の傾向が見られる¹²⁾。

中世の遺構は、掘立柱建物跡52棟、地下式坑27基、柵跡4列、井戸跡52基、火葬土坑7基、土坑150基、水溜遺構21基、廃棄土坑1基、方形竪穴遺構19基、墓坑29基、溝跡229条、堀跡1条、道路跡15条、ピット群58か所が確認されている。舌状台地の平坦部に北東方向から、南西方向にかけて380×200mの範囲に広がっている。溝による区画域に屋敷を形成し、集落の北部・南西部・南部には墓域を有していることから、計画的な土地利用の様子を窺うことができる。立地の観点から見ると、当集落は、小田城まで6kmほどであり、金田城と小田城を直線に結ぶ線上に位置し、小田家配下の田土部館や斗利出（元は砦）城が桜川を挟んだ対岸に所在している。また、当遺跡は、桜川の低地に面する台地上に位置しており、同じ台地の縁辺部の南方約2kmに位置している小田家の有力家臣沼尻家の金田城との関連も想定される¹³⁾。

次に、上野古屋敷遺跡全体を大きく、北部・中央部・南部の3つのエリアに分けて概観していく。第91図は、上野古屋敷遺跡の全調査区と地形、屋敷域や集落を区画する溝を取り上げ、遺構の主な分布を示した略図である。

北部は、縄文時代から平安時代にかけての集落跡で、集落の変遷において古墳時代前期が軒数と規模から盛期と報告されている⁷⁾。中世の遺構は北部では希で、当遺跡で集落が再び営まれたとされる室町時代後半（戦国時代）に入ってから、集落の外周部であったと想定できる。中世集落の北部にあたる第1・2次調査で確認された第1号墳付近は、墓域として利用されている。

中央部は溝によって区画され、内部に中世の居宅や倉庫としていた掘立柱跡建物が密集している。溝による区画を手がかりに井戸を備えた居宅の数を数えると、建て替えを除いておおよそ13単位のみが確認できる。このことから、この区域が「古屋敷」の小字名が残るこの集落の中心域である⁸⁾。また、集落の南西側には地下式坑群と墓坑群が確認でき、居住地と墓地を分けて土地利用している様相が窺える。

南部は、南東から北東に向かって緩やかに蛇行しながら調査区域外に延びている第367号溝を境に中世と考えられる遺構が希薄になる。中央部から続く中世の集落の南端には今回確認された地下式坑群が存在していることから、集落の縁辺部を墓域としている様子が確認できる。また、第367号溝から南西側は、中央部に住む人々の耕作地であることが想定できる。更に耕作地の南西には、第367号溝とほぼ併行して第1号堀が存在し、耕作地を含めた谷頭に面する台地上に展開する集落の南側を区画する可能性が高い。

以上のように、当該期の集落は居住施設のみならず、墓域や耕作地を含めた広い範囲をその敷地としていることが明らかとなった。13単位の各居宅は地縁によって密接に結び付いていたことも分かる。先に検討した遺物から、単なる農村とは言い切れないことは明らかで、当集落が単位武士団の一つを形成していたことも想定される。

今回の調査で、あまり明確にされていない中世集落の一部を調査したことは、稀少な事例となった。この成果が、今後の中世集落研究の手がかりとなり、さらに当地域の様相を明らかにする上での一助となることを期待したい。

註

- 1) 三谷正・大塚雅昭・桑村裕「上野古屋敷遺跡－中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第285集 2007年3月
- 2) 柴山正広・須賀川正一・小野政美・小川貴行・越川欣和「旭台貝塚－中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第325集 2009年3月
- 3) 川井正一「上野古屋敷遺跡2－中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅺ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第307集 2008年3月
- 4) 前掲1)と同じ
- 5) 齋藤和浩・川井正一「上野古屋敷遺跡3－中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅻ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第324集 2009年3月
- 6) 前掲1)と同じ
- 7) 前掲1)と同じ
- 8) 前掲1)と同じ
- 9) 前掲1)と同じ
- 10) 前掲3)と同じ
- 11) 前掲1)と同じ
- 12) 前掲3)と同じ
- 13) 前掲1)と同じ

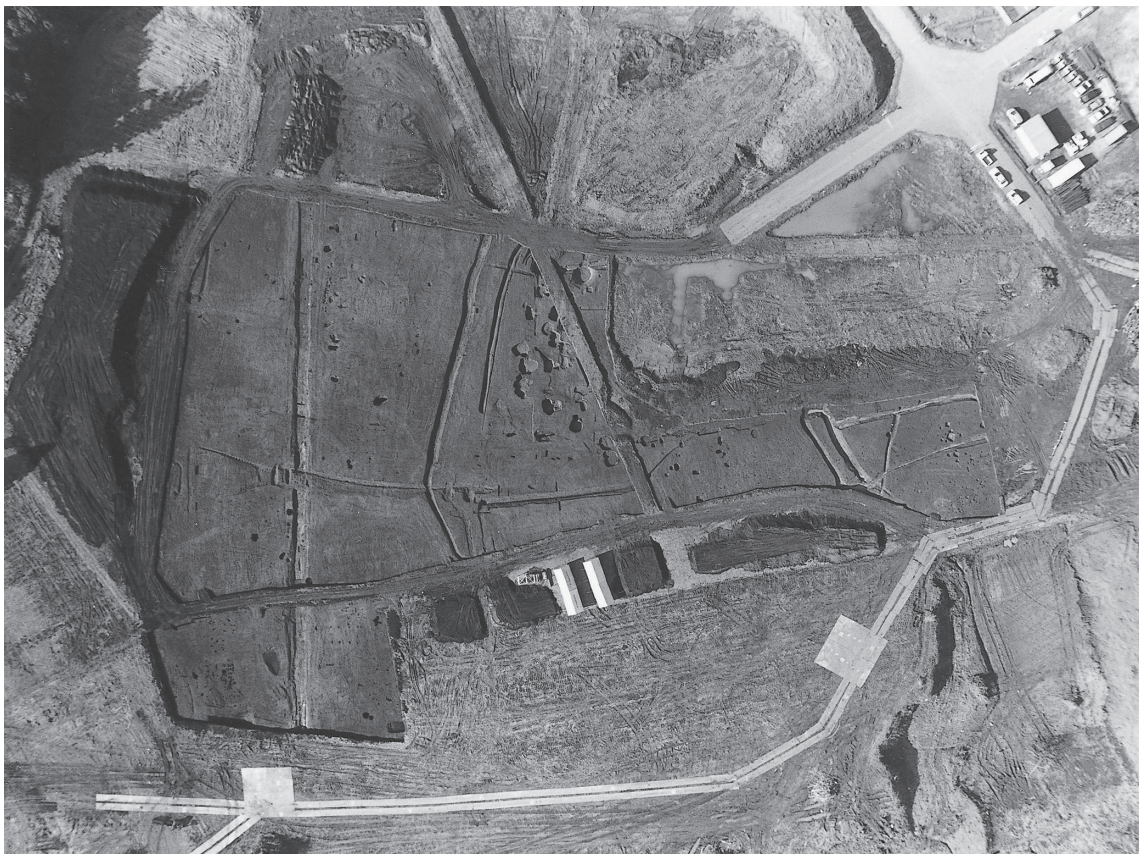
参考文献

- ・東国中世考古学研究会研究集会「関東の地下式坑を考える」東国中世考古学研究会 2006年11月
- ・松本直人「島名熊の山遺跡－島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅻ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第236集 2005年3月

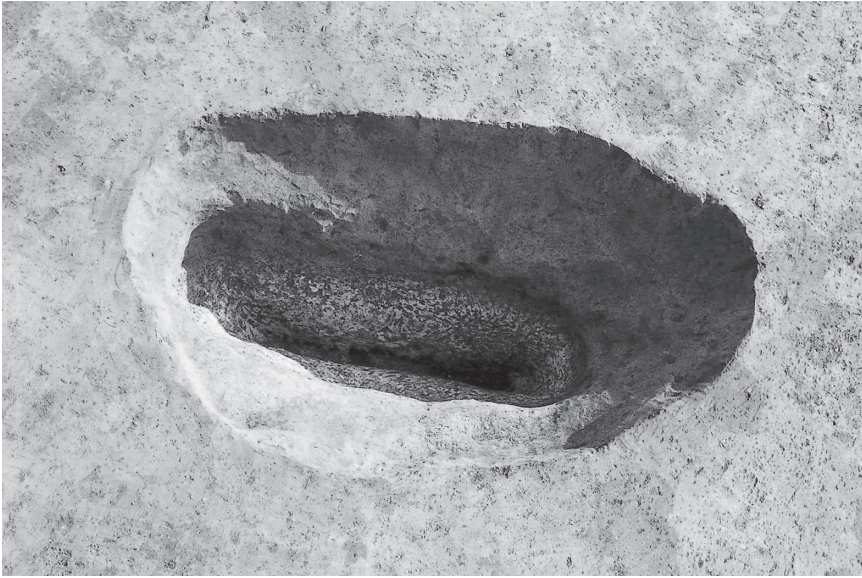
写 真 图 版



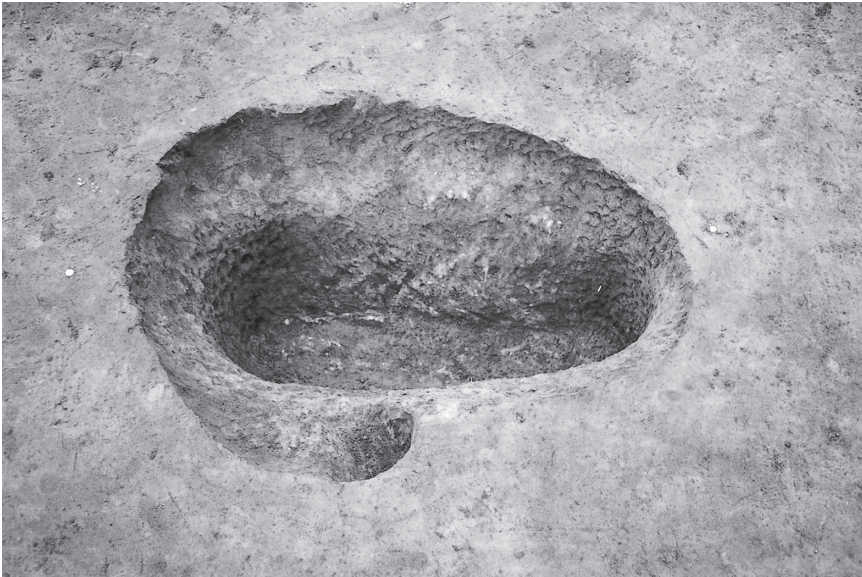
遺跡遠景（南東から）



調査区全景



第 4 号 陥 し 穴
完 掘 状 況

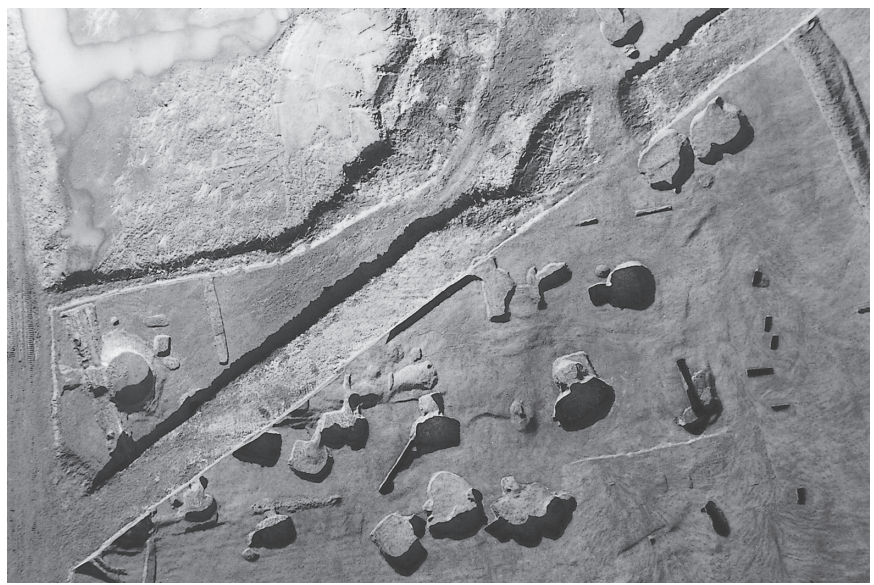


第 5 号 陥 し 穴
完 掘 状 況

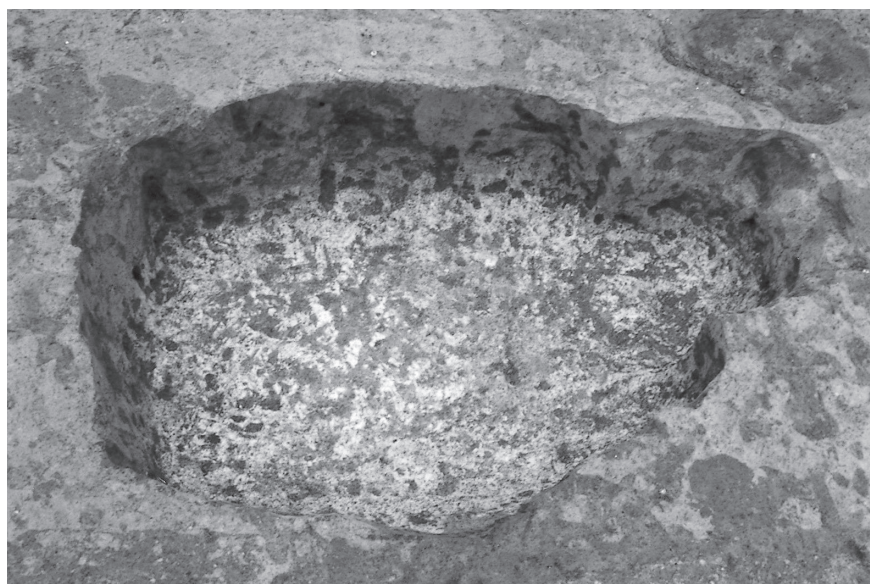


第 6 号 陥 し 穴
完 掘 状 況

地下式坑群
完掘狀況



第21号地下式坑
完掘狀況



第22号地下式坑
完掘狀況





第23号地下式坑
完掘狀況



第25号地下式坑
完掘狀況



第53号井戸跡
完掘狀況



第56号井戸跡
完掘状況



第57号井戸跡
完掘状況



第7号火葬土坑
完掘状況

PL 6



第1924号土坑
遺物出土狀況



第1928号土坑
完掘狀況



第1938号土坑
完掘狀況



第2025号土坑
完掘状况



第123A号溝跡
完掘状况



第135号溝跡
完掘状况



第135号溝跡
遺物出土状況



第367号溝跡
完掘状況(北東から)



第367号溝跡
遺物出土状況

第388号溝跡
硬化面検出状況



第388・141号溝跡
完掘状況



第392・409号溝跡
完掘状況



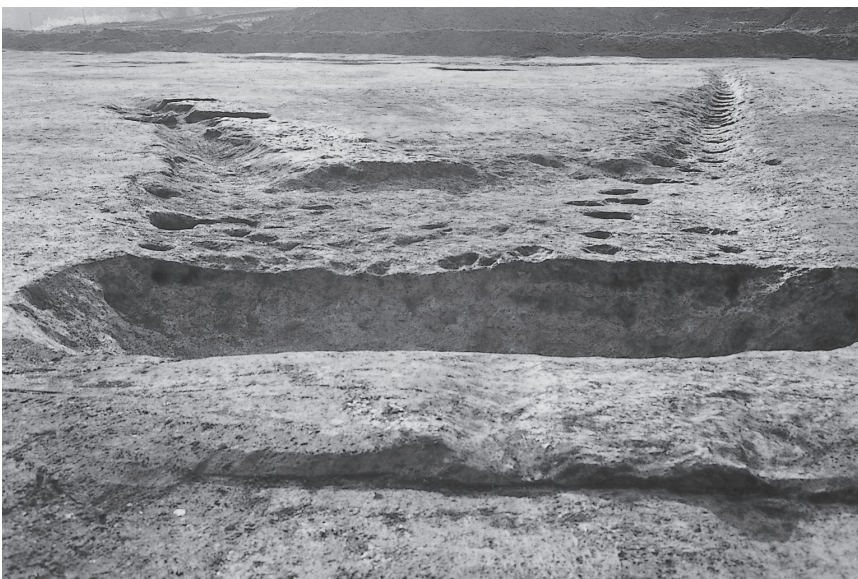
PL 10



第 1 号 堀 跡
完 掘 状 況 (東 か ら)



第 2 3 号 道 路 跡
完 掘 状 況 (3 次 面)



第 2 3 号 道 路 跡
完 掘 状 況 (3 次 面)

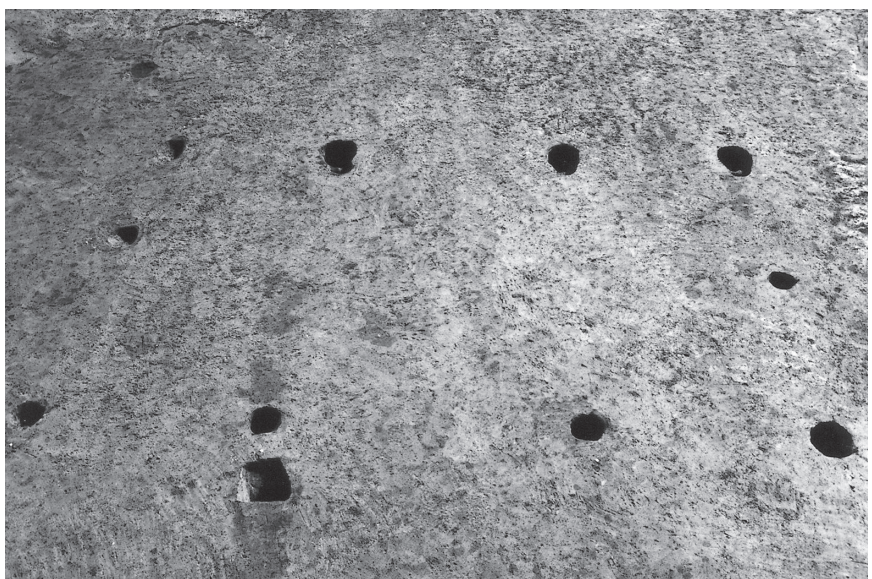
第23号道路跡
完掘狀況(4次面)



第24号道路跡
完掘狀況

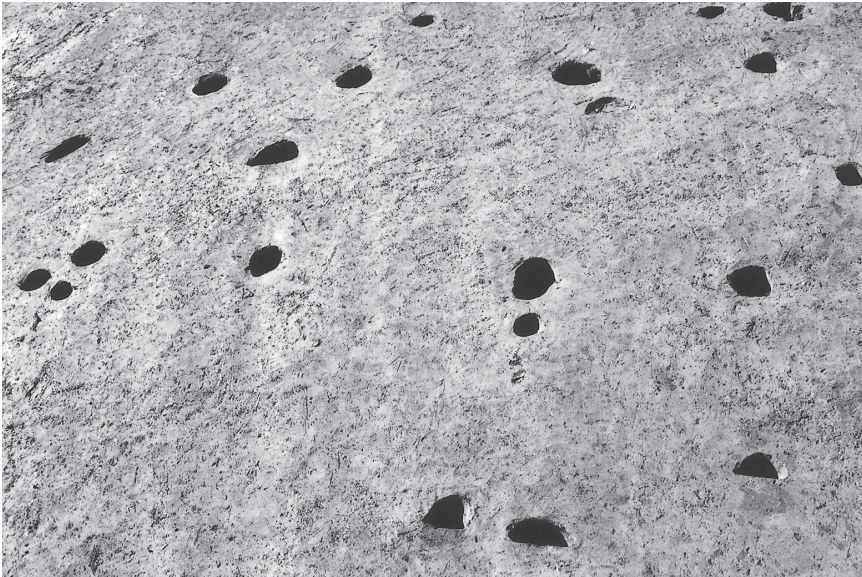


第79号掘立柱建物跡
完掘狀況





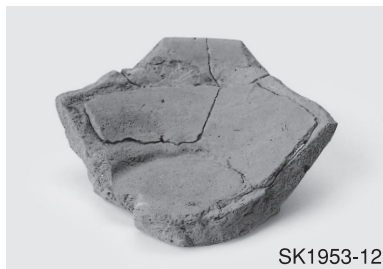
第80号掘立柱建物跡
完掘狀況



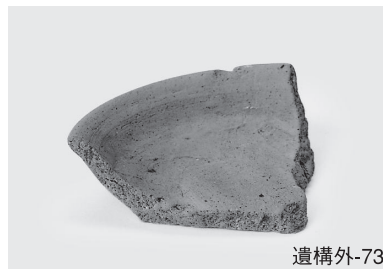
第81号掘立柱建物跡
完掘狀況



第82号掘立柱建物跡・
第123A号溝跡
完掘狀況



SK1953-12



遺構外-73



SD19B-19



SD135-25



SD135-26



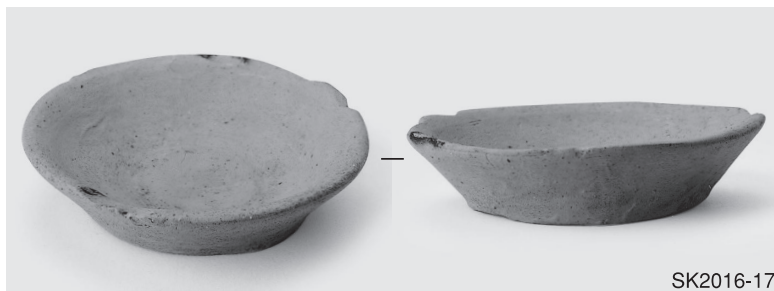
SD135-22



SD135-23



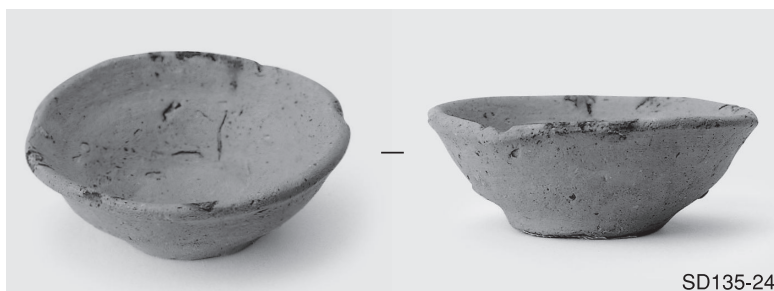
遺構外-72



SK2016-17



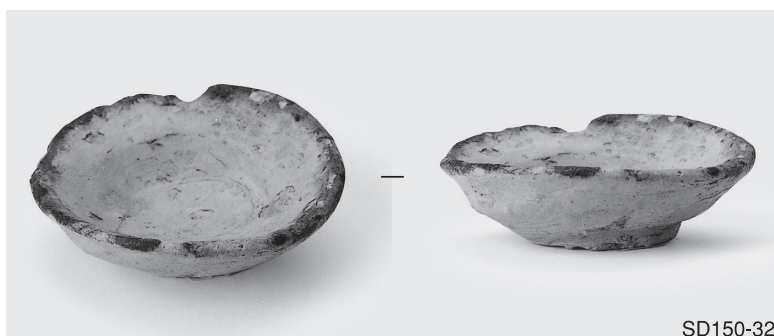
SD143A-31



SD135-24



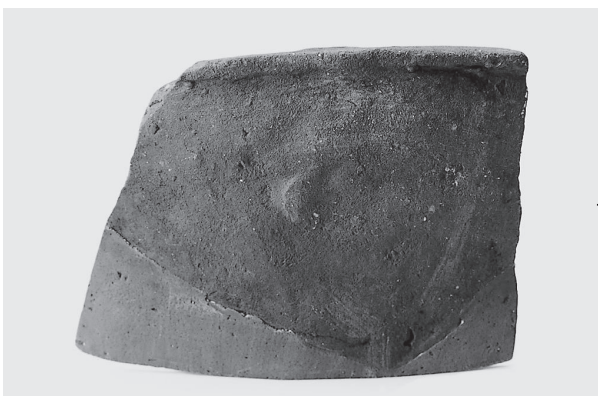
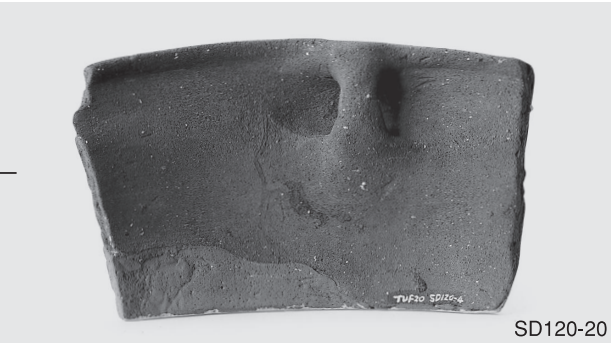
SD392-50



SD150-32



UP26-1





SD141-47



SK1970-14



SK1924-11



SK1976-15



遺構外-74



SD135-30



SF23-63



SD135-28



SD404-54



SD392-51



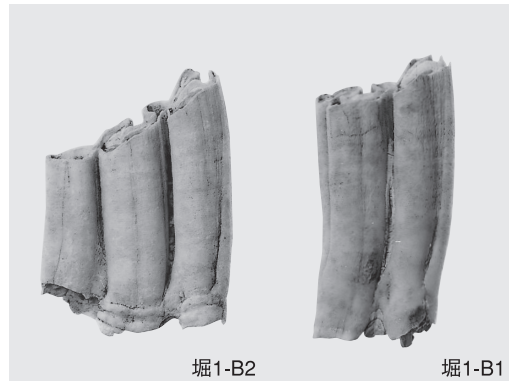
遺構外-75



遺構外-TP8

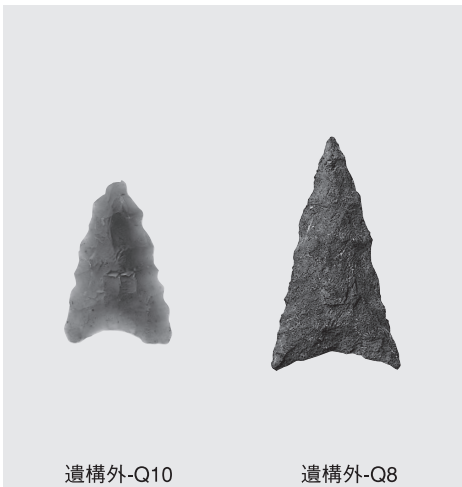


遺構外-DP1



堀1-B2

堀1-B1



遺構外-Q10

遺構外-Q8



遺構外-Q12



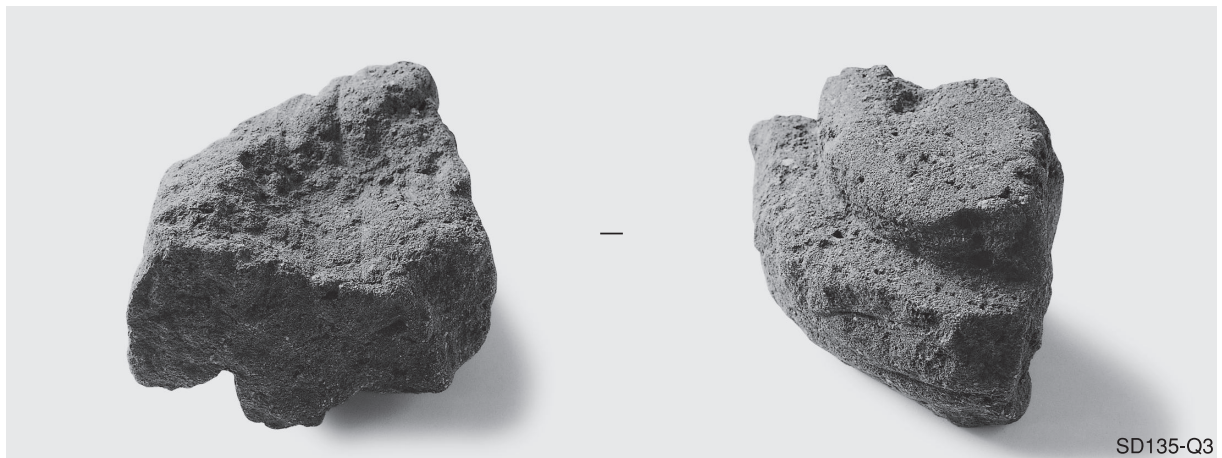
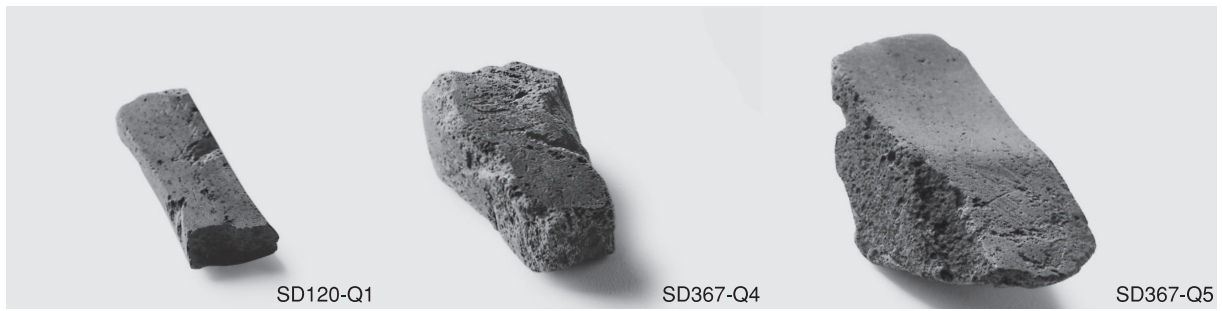
遺構外-Q14



遺構外-Q9

遺構外-Q11

遺構外-Q13





遺構外-M7



遺構外-M9



遺構外-M8



遺構外-M6

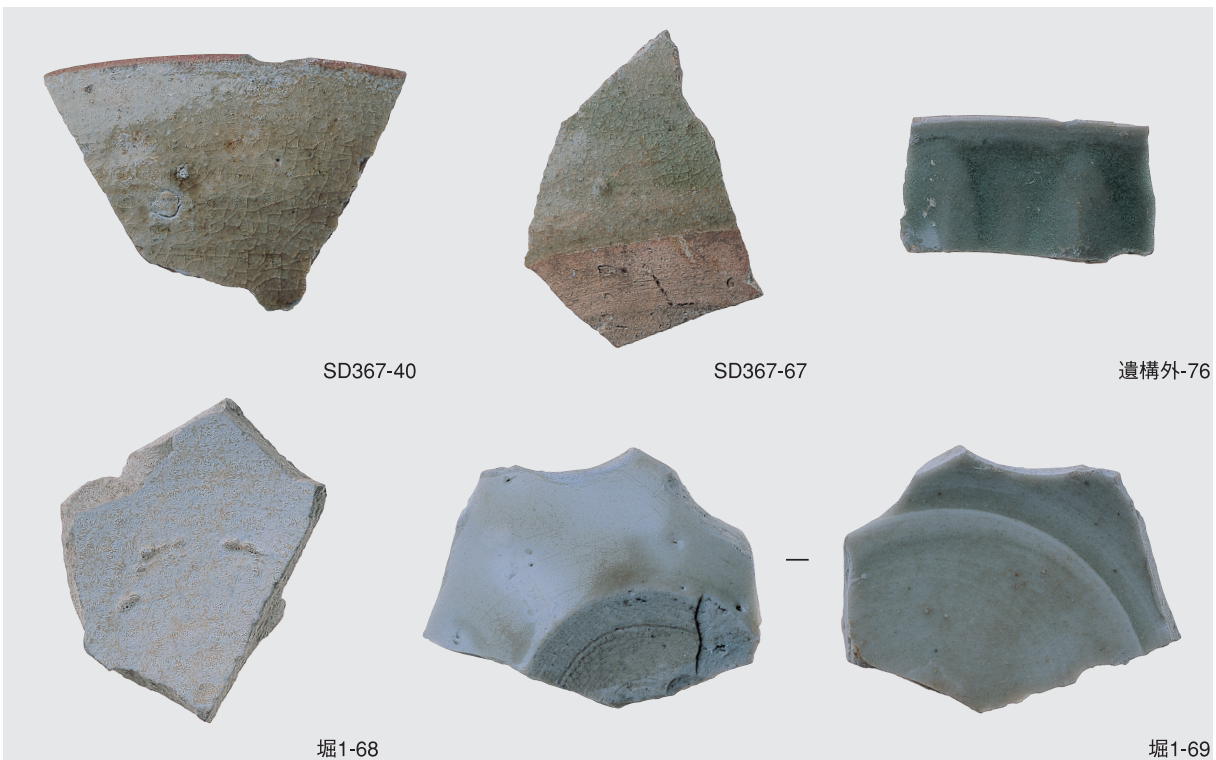


UP22-M1

SD367-M4

SD388-M5

SF23-M2



SD367-40

SD367-67

遺構外-76

堀1-68

堀1-69

抄 録

ふりがな	うえのふるやしきいせき							
書名	上野古屋敷遺跡4							
副書名	中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	XIII							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第334集							
編著者名	櫻井完介 江原美奈子							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行年月日	2010(平成22)年3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
うえのふるやしきいせき 上野古屋敷遺跡	茨城県つくば市 大字上野字西久保 439番地ほか	08220 510	36度 6分 48秒 36度 7分 00秒	140度 7分 33秒 140度 7分 21秒	25 ~ 28m	20070901 ~ 20071231 20081101 ~ 20081231	1,862㎡ 8,958㎡	中根・金 田台特定 土地区画 整理事業 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上野古屋敷遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物跡	5棟	土師器(坏・甕), 須 恵器(坏・甕), 土師 質土器(小皿・内耳鍋・ 香炉), 陶器(碗・甕), 磁器(碗・皿・瓶), 石製品(砥石・石臼・ 五輪塔), 金属製品(銭 貨)			
		時期不明	井戸跡	5基				
		墓域	中世	火葬土坑	1基			
	その他	縄文	陥し穴	5基	石器(鏃)			
時期不明		土坑	98基					
			溝跡	20条				
			ピット群	10か所				
			畝状遺構	1か所				
			埋没谷	1か所				
要約	前回までの調査で、当遺跡は縄文時代早・前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・中期、奈良・平安時代、中世後半と断続的に集落が営まれた旧石器時代から江戸時代までの複合遺跡であることが判明している。今回の調査の結果、その南部は耕作地や墓域に使われていた区域であることが確認できた。							

茨城県教育財団文化財調査報告第334集

上野古屋敷遺跡 4

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅻ

平成22（2010）年3月19日 印刷
平成22（2010）年3月24日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
T E L 029-225-6587

印刷 株式会社高野高速印刷
〒310-0853 茨城県水戸市平須町1822-122
T E L 029-305-5588